

博士学位論文

台湾人日本語学習者による日本語のアスペクト形式「テ
イル」の習得について

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

陳建瑋

平成28年5月

目次

第1章 序論.....	1
1.1 本研究の目的.....	1
1.2 本論文の構成.....	7
第2章 先行研究と本研究の位置づけ.....	10
2.1 はじめに.....	10
2.2 日本語のテンス・アスペクト形式.....	11
2.3 「テイル」の用法の分類.....	14
2.4 語彙的アスペクトによる動詞タイプの分類.....	23
2.5 アスペクト仮説の検証に関する研究.....	27
2.5.1 アスペクト仮説.....	27
2.5.2 日本語におけるアスペクト仮説の検証.....	29
2.5.2.1 動詞タイプ別のテンス・アスペクトの使用状況.....	29
2.5.2.2 「テイル」の特定の用法における動詞タイプ別の使用状況.....	38
2.5.3 まとめとアスペクト仮説の検証に関する研究の問題点.....	42
2.6 「テイル」の用法の習得に関する研究.....	44
2.6.1 「動作の持続」と「結果の状態」の比較検討.....	44
2.6.2 「テイル」の用法別の習得難易度.....	54
2.6.2.1 用法の名称の整理.....	54
2.6.2.2 用法別の習得難易度.....	62
2.6.3 まとめと「テイル」の用法の習得に関する研究の問題点.....	71
2.7 「テイル」に関する習得研究の問題点と本研究の課題.....	74

第3章 日本語母語話者における「テイル」の使用状況	78
3.1 研究の目的.....	78
3.2 調査方法.....	78
3.2.1 分析データ.....	78
3.2.2 分析手順.....	79
3.3 結果と考察.....	81
3.3.1 ステップ1:「テイル」の各用法における動詞タイプの使用頻度.....	81
3.3.2 ステップ2:文末と連体修飾節における「テイル」の使用状況.....	87
3.3.2.1 「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用頻度.....	88
3.3.2.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度.....	93
3.3.3 ステップ3:「テイル形」と「テイタ形」の使用状況.....	100
3.3.3.1 「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用頻度.....	101
3.3.3.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度.....	105
3.3.3.3 文末と連体修飾節における「テイル」の各用法での動詞タイプ別の使 用頻度.....	113
3.4 まとめ.....	124
第4章 学習者の調査の概要	127
4.1 はじめに.....	127
4.2 調査項目.....	127
4.3 調査対象者.....	127
4.4 「台湾人日本語学習者コーパス」.....	129
4.5 検索手順.....	130
4.6 調査方法.....	134
4.6.1 分析手順.....	134

4.6.2	分析手法.....	136
第5章	「テイル」の習得に影響する要因.....	138
5.1	はじめに.....	138
5.2	分析結果.....	140
5.2.1	「テイル」の習得への影響.....	140
5.2.2	「テイル」の誤用の種類と5つの要因の関係.....	145
5.3	考察.....	149
5.3.1	「テイル」の習得について.....	149
5.3.2	「テイル」の誤用について.....	154
5.4	まとめ.....	158
第6章	日本語学習期間による「テイル」の習得状況.....	160
6.1	はじめに.....	160
6.2	調査の概要.....	161
6.2.1	調査対象者.....	161
6.2.2	分析手順.....	161
6.3	分析結果.....	162
6.3.1	「テイル」の用法別の習得状況.....	162
6.3.1.1	日本語学習期間による「テイル」の用法別の使用率.....	163
6.3.1.2	日本語学習期間による「テイル」の用法別の正用率の変化.....	165
6.3.1.3	日本語学習期間による「テイル」の用法間の正用率の差異.....	172
6.3.2	動詞タイプ別の「テイル」の習得状況.....	177
6.3.2.1	日本語学習期間による動詞タイプ別の「テイル」の使用率.....	178
6.3.2.2	日本語学習期間による動詞タイプ別の「テイル」の正用率の変化..	181

6.3.2.3	日本語学習期間による動詞タイプ間の「テイル」の正用率の差異..	187
6.3.3	日本語学習期間による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響.....	190
6.3.3.1	「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率.....	190
6.3.3.2	「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率.....	191
6.4	考察.....	194
6.4.1	「テイル」の習得状況について.....	194
6.4.2	「テイル」の用法別の習得状況について.....	195
6.4.3	動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について.....	199
6.4.4	日本語学習期間による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の関係.....	201
6.5	まとめ.....	203
第7章	「構文的位置」による「テイル」の習得状況.....	205
7.1	はじめに.....	205
7.2	調査の概要.....	206
7.2.1	調査対象者.....	206
7.2.2	分析手順.....	206
7.3	分析結果.....	207
7.3.1	「テイル」の用法別の習得状況.....	207
7.3.1.1	文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の使用率.....	208
7.3.1.2	文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の正用率の差異.....	210
7.3.1.3	文末と連体修飾節における「テイル」の用法間の正用率の差異.....	216
7.3.2	動詞タイプ別の「テイル」の習得状況.....	219
7.3.2.1	文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の使用率.....	220
7.3.2.2	文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の正用率の差異.....	222

7.3.2.3	文末と連体修飾節における動詞タイプ間の「テイル」の正用率の差異	227
7.3.3	構文的位置による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響	230
7.3.3.1	「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率	230
7.3.3.2	「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率	234
7.4	文末と連体修飾節における「テイル」の誤用	237
7.5	考察	240
7.5.1	文末と連体修飾節における「テイル」の習得状況について	240
7.5.2	文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の習得状況について	241
7.5.3	文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について	242
7.5.4	文末と連体修飾節における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の関係	244
7.6	まとめ	245
第8章	「時制形式」による「テイル」の習得状況	247
8.1	はじめに	247
8.2	調査の概要	248
8.2.1	調査対象者	248
8.2.2	分析手順	248
8.3	分析結果	249
8.3.1	日本語学習期間による「テイル形」と「テイタ形」の習得状況	249
8.3.2	「テイル」の用法別の習得状況	251
8.3.2.1	「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用率	251
8.3.2.2	「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正用率の差異	254

8.3.2.3	「テイル形」と「テイタ形」の用法間の正用率の差異.....	259
8.3.3	動詞タイプ別の「テイル」の習得状況.....	263
8.3.3.1	「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ別の使用率.....	263
8.3.3.2	「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ別の正用率の差異	265
8.3.3.3	「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ間の正用率の差異	269
8.3.4	時制形式による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響.....	272
8.3.4.1	「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率.....	272
8.3.4.2	「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率.....	276
8.4	考察.....	280
8.4.1	「テイル形」と「テイタ形」の習得状況について.....	280
8.4.2	時制形式による「テイル」の用法別の習得状況について.....	281
8.4.3	時制形式による動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について.....	284
8.4.4	時制形式による「テイル」の用法と動詞タイプの関係.....	287
8.5	まとめ.....	289
第9章	結論.....	291
9.1	はじめに.....	291
9.2	研究結果のまとめ.....	293
9.2.1	日本語母語話者と日本語学習者の「テイル」の使用の比較.....	293
9.2.2	「テイル」の習得における5つの要因の強さ.....	299
9.2.3	「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の習得状況.....	302
9.2.4	「構文的位置」の違いによる「テイル」の習得状況.....	311
9.2.5	「時制形式」の違いによる「テイル」の習得状況.....	320

9.3 今後の課題.....	328
参考文献.....	332

第1章 序論

1.1 本研究の目的

一連の出来事を描写する際、どの出来事が先に起こったか、どの出来事が後に起こったか、或いは複数の出来事が同時に存在しているかを相手に正しく伝えるため、個々の出来事が時間の流れの中でどのように展開されるか、および他の出来事との時間的な関係の中にどのように配置されるかを正確に把握する必要がある。こうした出来事間の時間関係を認識・伝達するうえでは、時間的なあり方を表すテンスとアスペクトは重要な役割を担っている。アスペクトとは、動詞の指し示す出来事を特定の時点（基本的に発話時）を基準にして時間軸上に位置付けるテンスとは異なり、出来事の時間的な展開（開始、過程、終結など）の捉え方を表す文法カテゴリーである。日本語のアスペクトの主要な表現手段として「テイル」が挙げられる¹。日本語の教育現場でも初級段階で導入される重要な学習項目である（木村 1994；許 1997；菅谷 2005b）。しかし、初級段階の日本語学習者のみならず、中・上級段階の学習者の「テイル」の使用にも誤用が多く見られる。例えば、(1) は旧日本語能力試験 1 級合格者の書いた作文である²。このうち、「テイル」の誤用は①～④の 4 箇所見られた。

- (1) 国内の教育制度によって、小・中学校の義務教育の 9 年に加えて、義務教育ではないが、進学率がほぼ 90% 以上の高校・大学の 7 年、および 16 年間かそれ以上の長い期間に教育を①受けていた(→受ける)ことが常態になってきたようです。ですが、学校にいた時間より、私たちは学校を離れている時間はずっ

¹ 以下、特に注記しない限り、本論文では「ル形」と「タ形」を合わせて「スル」と呼び、「テイル形」と「テイタ形」を合わせて「テイル」と呼ぶことにする。

² この作文は「台湾人日本語学習者コーパス」(The Corpus of Taiwanese Learner of Japanese、以下 CTLJ と略称)から取り上げられたものである。文中にある二重下線部分は「テイル」の誤用であり、括弧内は筆者による訂正である。また、作文の最後についた「SCU-A-3-475-1-T5」は「CTLJ」における作者番号を示すものである。

と長いと思います。学校にいたときは、主に②利用している(→利用していた)のがもちろん学校の図書館です。(中略)以前、公立図書館についての記事を読んだことがあります。管理をよくしていないようで、きたないし、うるさいと③書かれました(→書かれていました)。私が図書館に④持っている(→持っていた)印象は壊されました。(SCU-A-3-475-1-T5)

このうち、①は「テイル」を使用すべきではないところに使用した過剰使用の例である。また、③は「テイル」を使用すべきところに使っていない非使用の例である。最後に、②と④は「テイタ形」を使用すべきところに「テイル形」を使用したテンスの誤りの例である。このように、上級段階の学習者の「テイル」の使用でも、上記のような過剰使用、非使用、テンスの誤りなどの誤用が見られることから、日本語学習者にとって「テイル」を正確に使いこなすのは必ずしも容易ではない。よって、学習者の「テイル」の習得過程と困難点を明らかにすることは、教育現場に生かす指導方法を考えるうえで有意義である。

これまで「テイル」の習得に関する研究は少なからずなされてきた。これらの研究は、大別して「テイル」の前に来る動詞の語彙的意味と、動詞と「テイル」との結び付きで表す文の意味の2つの意味的側面から論じられている。このうち、前者は「アスペクト仮説」³の普遍性を検証するため、動詞を「限界性(telecity)」の有無、或は「瞬間性(punctuality)」の有無といった動詞(句)に内在する語彙的アスペクトによって、「活動動詞」(例えば、「走る」「歩く」)、「達成動詞」(例えば、「作る」「壊す」)、「到達動詞」(例えば、「落ちる」「死ぬ」)、「状態動詞」(例えば、「ある」「いる」)などといった動詞タイプに分類し、「テイル」の習得と動詞に内在するアスペクト的な意味特徴との関係について考察している。

³ 「アスペクト仮説」とは、動詞の語彙的アスペクトがテンス・アスペクトの習得にいかなる影響を与えるかを予測したものである。詳細は第2章2.5.1節を参照。

一方、後者は、「テイル」の表す文の意味を下記の(2)～(6)のように「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」などの用法に分類し、各用法の習得難易度について考察を行っている。

- (2) 太郎は今昼ご飯を食べている。(動作の持続)
- (3) 窓が開いている。(結果の状態)
- (4) 太郎はすでにうどんを三杯も食べている。(パーフェクト)
- (5) 太郎は毎日うどんを食べている。(繰り返し)
- (6) 彼の作品が優れている。(単なる状態)

しかし、「テイル」の表す意味は基本的に動詞の語彙的アスペクトによって決定され(奥田 1977、1978ab ; 工藤 1982ab、1995 ; 鷲尾・三原 1997)、「テイル」の諸用法の中でどの用法の習得が困難であるかは動詞そのものの持つアスペクト的な意味とも深く関わっている。そのため、日本語学習者の「テイル」の習得を検討するうえでは、従来のように「テイル」の用法の習得難易度と動詞の語彙的アスペクトのいずれかの側面からのみ分析を行うのではなく、両者とも考慮に入れておく必要がある。さらに、同じ動詞タイプに「テイル」がついても、文脈や文中に現れる時間副詞などの構文的な条件によって常に同じ意味になるわけではない。例えば、「到達動詞」の「落ちる」に「テイル」と結び付くと、多くの場合(7)のような「結果の状態」の意味を表すが、その他に「動作の持続」(例(8))、「パーフェクト」(例(9))、「繰り返し」(例(10))、「単なる状態」(例(11))の意味を表す場合もある。

- (7) 財布が落ちている。(結果の状態)
- (8) 目から涙が落ちている。(動作の持続)
- (9) 彼は入学試験にすでに落ちている。(パーフェクト)

(10) 彼は入学試験に何回も落ちている。(繰り返し)

(11) 兄は弟より成績が落ちている。(単なる状態)

そのため、従来のように「テイルの用法」と「動詞タイプ」を分けて個別に検討すると、具体的にどの用法でのどの動詞タイプがどのように「テイル」の習得に影響しているかは把握できず、「テイルの用法」と「動詞タイプ」との関連性が見られない。よって、本研究では「テイル」の習得における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の関連性に焦点を当てて調査を行うこととする。

また、日本語のアスペクトにおいて、文末と連体修飾節では「スル」と「テイル」の使用は必ずしも同じではない。例えば、下記の(12a)～(14a)において、文末ではいずれも「テイル形」のみが容認されているが、連体修飾節の場合(12b)では「ル形」も「テイル形」も、(13b)では「タ形」のみが、(14b)では「テイル形」のみが容認されるという違いがある。

(12) a. 現在、両親はニューヨークに {*住む／住んでいる} ⁴。

b. 現在、ニューヨークに {住む／住んでいる} 両親。

(13) a. あの子の行動はいつも {*馬鹿げた／馬鹿げている}。

b. あの子はいつも {馬鹿げた／*馬鹿げている} 行動。

(14) a. 今その人は私のコートを {*着た／着ている}。

b. 今その人が {*着た／着ている} コートは私のものだ。

((12)～(14) はいずれも陳 2014 : 125)

このように、連体修飾節におけるテンス・アスペクト形式の振舞は文末の場合とは異なり、より複雑であるため、日本語学習者にとって混乱しやすく「テイル」の習得に

⁴ アステリスク (*) は非文法的な文を示す。以下同様。

影響を与える可能性がある。しかし、これまでの「テイル」の習得研究では主に文末の習得状況に焦点が置かれており、文末と連体修飾節の違いについては論じられたものには、塩川(2007)と許(2009)がある。ただし、塩川(2007)では文末と連体修飾節における「活動動詞」と「達成・到達動詞」の「タ形」、「テイル形」の選択率しか明示されていない。一方、許(2009)の6人のデータに「運動の持続(±長期)」⁵以外の使用はあまり出現しておらず、各用法の比較検討が欠如しているため、得られた結果を検証する必要がある。このように、いずれの調査結果も文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の習得状況を反映できるとは言いがたい。

さらに、従来「テイル」の習得に関する調査では、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて議論したものに Shirai & Kurono (1998)、Shirai (2002b)、小山(2004)、崔(2009、2011)、簡(2012)がある。しかし、Shirai (2002b)では動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用率しか明示されていない。それ以外の調査ではいずれも「テイル」の特定の用法の議論に限られているため⁶、他の用法との比較検討が欠如している。このように、「テイル」の習得における時制形式の影響についての議論はまだ不十分で更なる検討が必要である。

「テイル」の習得過程において、「動作の持続」の用法のような習得が早いものと、「パーフェクト」の用法のような長い期間が経っても誤用のまま習得が進まないものがある。このような習得状況の違いと変化を観察するために、異なるレベルの学習者の習得状況の比較検討、それとも同一調査対象者に対する長期間の縦断的な考察が必要である。しかし、これまでの「テイル」の習得に関する調査では、同じレベルの

⁵ 許(2009)の言う「運動の持続(±長期)」とは例文(i)のように長期的動作を表すもの、「運動の持続(一長期)」とは例文(ii)のように一時的動作を表すものを指す。

(i) 母子家庭のうち、働いている親で転職を希望しているのは25%である。

(ii) 店に立ち読みをしている人がたくさんいる。

⁶ Shirai & Kurono (1998)、小山(2004)、崔(2009)では「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の比較検討を行い、簡(2012)で「パーフェクト」の用法のみを検討している。

学習者を対象に習得環境と母語などの要因による影響を検討したものが多く、一方、縦断的な調査では、主に少人数を対象としたケーススタディについての調査であるため、対象者間の個人差などの影響で得られた結果を一般化することは難しい。このように、「テイル」の習得における学習者の日本語レベルによる影響についての検討はまだ不十分と言える。

最後に、これまでの「テイル」の習得研究では、「テイル」の用法、動詞の語彙的アスペクト、学習者の習得環境と母語などの様々な要因から、「テイル」の習得過程における普遍性と個別性を考察し、アスペクトの習得のメカニズムの解明を試みている。しかし、菅谷 (2005ab) では、学習者のテンス・アスペクトの習得過程では動詞の語彙的アスペクト、「テイル」の用法、学習者の日本語レベルといった要因が複合的に影響し、共通した習得パターンが形成されていく可能性が指摘されている。このように、従来のような単一の要因（例えば、習得環境）による「テイルの用法」の習得難易度、或は「動詞タイプ」の使用状況（三村 1999b ; Shirai 2002b ; 小山 2004 ; 塩川 2007 ; 孫ほか 2010 ; 簡・中村 2010 ; 簡 2012）の検討では、取り上げられた特定の要因のみに注目し、それ以外の要因による影響との比較検討が欠如しているため、「テイル」の習得に関わる諸要因がどのように絡み合っ互に影響しているかを検証することはできていない。さらに、簡・中村 (2010) が指摘しているように、「テイル」の習得過程には様々な要因が関与しているため、1 つの要因のみに注目して考察すると、その要因を過大評価または過小評価しかねない。従って、「テイル」の習得に影響する諸要因の関連性と影響度合いを解明するためには、「テイル」の習得に関わる複数の要因を同時に考慮に入れて比較検討する必要がある。

そこで、以上の問題意識を踏まえ、本研究では台湾人日本語学習者を対象に、「テイル」の習得に影響する要因を検証することとする。「テイル」の習得に関わる要因として、①「テイルの用法」（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）、②「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）、③「時

制形式」(テイル形とテイタ形)、④「構文的位置」(文末と連体修飾節)の4つの要因を取り上げ、「テイル」の習得に影響する要因を詳細に分析する。また、学習者の「テイル」の習得状況がどのように変化していくのかを考察するため、⑤学習者の「日本語学習期間」(1年、1年半、2年、2年半)を5つ目の要因として設定した。「テイル」の習得過程で上記5つの要因がどのように絡み合っ互に影響しているのかを明らかにすることを目的とする。以上の①～⑤の5つの要因の関係について図示すると、図1-1のようになる。

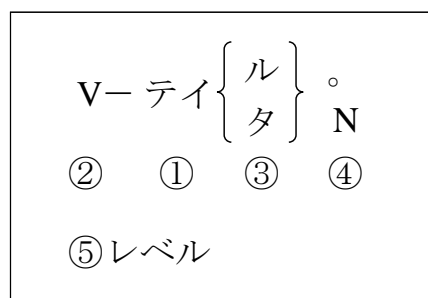


図1-1 本研究で見る「テイル」の習得に関わる5つの要因の関係

1.2 本論文の構成

本論文は序論から結論までを含め、全部で9章で構成されている。その構成は図1-1に示したとおりである。

まず、本章では本論文の研究目的と構成について述べた。第2章では「テイル」に関する先行研究を概観し、先行研究で浮き彫りになった問題点を取り上げ、本研究の研究課題を提示する。第3章では日本語学習者の「テイル」の使用実態を比較検討するための基準とし、日本語母語話者の「テイル」の使用状況を調査する。第4章では学習者の「テイル」の習得状況を調査するにあたり、用いられた研究方法について説明する。続く第5章から第8章までは学習者の「テイル」の習得状況に関する調査の内容と結果を報告する。このうち、第5章では「テイル」の習得における①「テイル

の用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因による影響の仕方について考察する。また、第5章で取り上げた各要因の影響をより詳細に分析するために、第6章では「日本語学習期間」を、第7章では「構文的位置」を、第8章では「時制形式」を中心に学習者の「テイル」の習得状況を考察していく。最後に、第9章では各章の調査結果で明らかになったことをまとめ、残された課題を提示する。

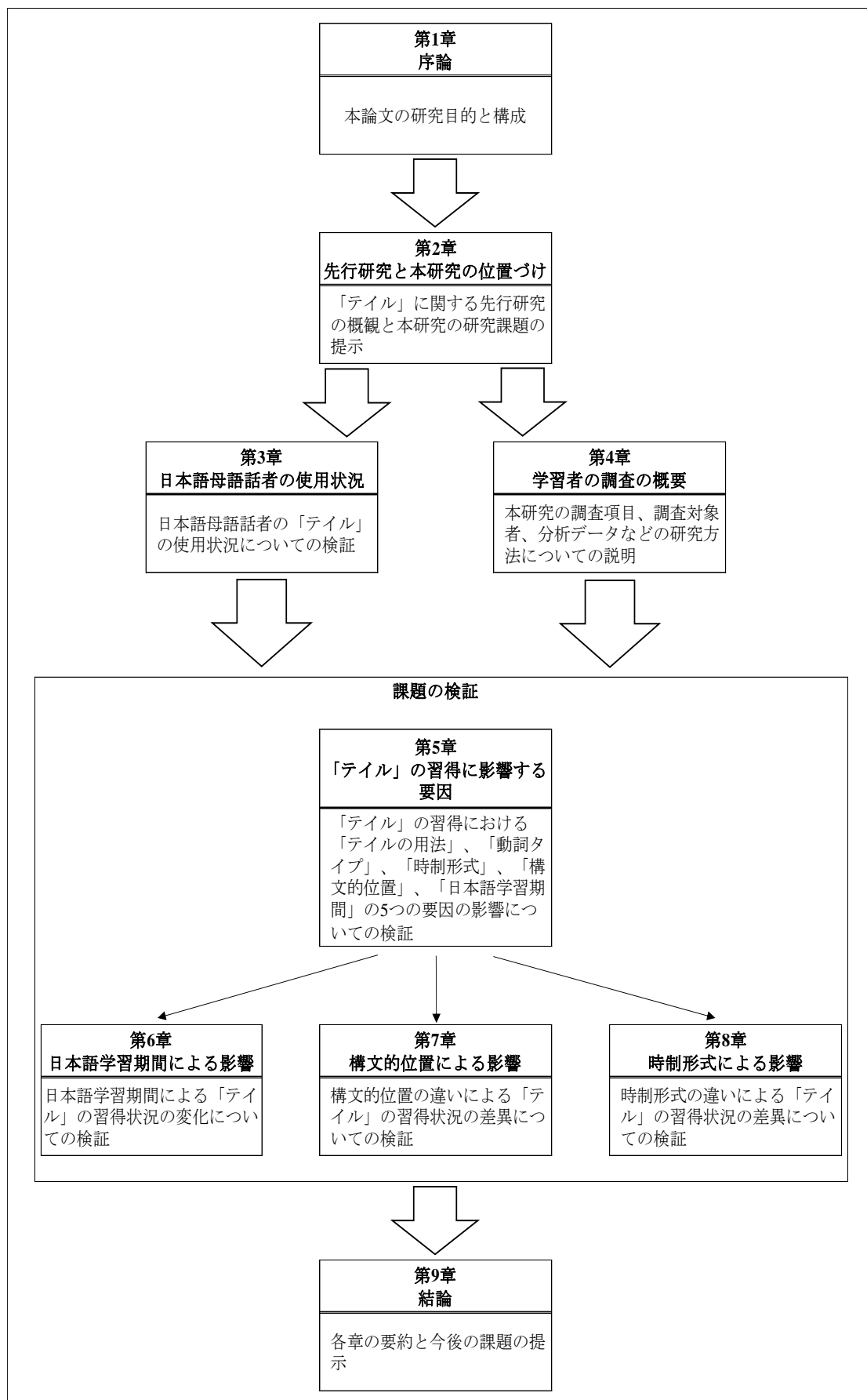


図 1-2 本論文の構成

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

2.1 はじめに

本章では「テイル」に関する先行研究を概観し、先行研究で浮き彫りになった問題点を取り上げ、本研究の位置付けを示す。

第1章でも述べたように、これまでの「テイル」の習得研究には、大別して「テイル」の習得と動詞に内在するアスペクト的な意味特徴との関係を考察したもの (Shirai 1995、2002b ; Shirai & Kurono 1998 ; shibata 1999 ; 三村 1999ab ; 小山 2004 ; 塩川 2007 ; 簡・中村 2009 ; 孫ほか 2010 ; 簡 2012) と、「テイル」の様々な用法の習得難易度を検討したもの (黒野 1995 ; 許 1997、2000、2002、2009 ; 魚住 1998 ; Shirai & Kurono 1998 ; 菅谷 2002、2003、2004ab ; 小山 2004 ; Sugaya & Shirai 2007 ; 崔 2009、2011) との2つがある。前者は、「アスペクト仮説」¹の普遍性を検証するため、動詞を「限界性 (telicity)」があるかどうか、或は「瞬間性 (punctuality)」があるかどうかといった動詞 (句) に内在する語彙的アスペクトによって「活動動詞」 (例えば、「走る」「歩く」)、「達成動詞」 (例えば、「作る」「壊す」)、「到達動詞」 (例えば、「落ちる」「死ぬ」)、「状態動詞」 (例えば、「ある」「いる」) などといった動詞タイプに分類し、「テイル」の使用される動詞タイプの使用状況について考察している。

一方、後者は「テイル」の表す意味を下記 (1) ~ (5) のように「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」などの用法に分類し、各用法の習得難易度について比較検討を行っている。

- (1) 太郎は今昼ご飯を食べている。(動作の持続)
- (2) 窓が開いている。(結果の状態)

¹ アスペクト仮説とは、動詞の語彙的アスペクトがテンス・アスペクトの習得にいかなる影響を与えるかを予測したものである。詳細は本章の2.5.1節を参照。

- (3) 太郎はすでにうどんを三杯も食べている。(パーフェクト)
- (4) 太郎は毎日うどんを食べている。(繰り返し)
- (5) 彼の作品が優れている。(単なる状態)

従って、本研究では先行研究を「アスペクト仮説の検証に関する研究」と「テイルの用法の習得に関する研究」の2つに区分し、順次この2つの観点における各研究の調査内容と結果を概観していく。以下、2.2節ではまず日本語の動詞のテンス・アスペクト形式について考察した後、本研究における「テイルの用法」の分類基準について2.3節で論じる。次に「動詞タイプ」の分類基準について2.4節で論じる。そして、2.5節で「アスペクト仮説」の検証に関する研究を検討し、2.6節で「テイル」の用法の習得に関する研究について検討する。最後に、2.7節で先行研究から浮き彫りになった問題点を取り上げ、本研究の研究課題を示す。

2.2 日本語のテンス・アスペクト形式

本節では日本語の動詞のテンス・アスペクト形式について説明する。テンスとアスペクトは、共に出来事（動作、変化、状態）の時間的なあり方を表す文法カテゴリーである。テンスとは、動詞の指し示す出来事を特定の時点を基準にして時間軸上に位置付ける文法的カテゴリーであり、アスペクトとは出来事の時間的な展開（開始、過程、終結など）の捉え方を表す文法的カテゴリーである。

テンスには発話時を基準とした絶対テンスと、他の出来事を基準とした相対テンスがある。両者とも過去形（タ形）と非過去形（ル形）の2つの形式で対立している。まず、絶対テンスの場合、動詞の種類によって過去形（タ形）と非過去形（ル形）のテンス的対立が異なる。このうち、「食べる」「走る」「作る」「築く」「行く」「落ちる」のように動作を表す動詞の場合、過去形は(6a)の「行った」のように発話時以前（過去）に起こった出来事を、非過去形は(6c)の「行く」のように発話時以後（未来）

に起こる出来事を述べる。ただし、現在を表す場合には (6b) のように「テイル形」を用いる必要がある。一方、「ある」「いる」「できる」「違う」「異なる」「思う」のような存在、能力、関係、思考などの状態を表す動詞の場合、過去形は (7a) の「いた」のように発話時以前（過去）に起こった状態を表し、非過去形は (7c) の「いる」のように発話時以後（未来）に起こる状態を表す、という点で動作を表す動詞と共通している。しかし、状態を表す動詞の非過去形の場合、(7c) のように未来を表す他に (7b) のように発話時を跨いだ状態（現在）を表すこともできる点で動作を表す動詞と異なる。このように、絶対テンスは出来事時と発話時との時間関係による以前（過去）、同時（現在）、以後（未来）というテンス的意味を表している。

動作を表す動詞：

- (6) a. 彼は昨日名古屋に {*行く／行った}。(過去)
- b. 彼は現在名古屋に {*行く/*行った／行っている}。(現在)
- c. 彼は明日名古屋に {行く/*行った}。(未来)

状態を表す動詞：

- (7) a. 彼は昨日名古屋に {*いる／いた}。(過去)
- b. 彼は今名古屋に {いる/*いた}。(現在)
- c. 彼は明日名古屋に {いる/*いた}。(未来)

一方、相対テンスとは発話時ではなく、時間軸上のある出来事を基準とするものである。例えば、下記の (8) の従属節のテンスはいずれも主節事態の成立時を基準とする例である²。このうち、発話時を基準とした主節事態は過去の出来事を表しても、未

² ただし、従属節のテンスは必ずしも主節時を基準として決定されるわけではない。例えば、(i) では従属節に「夕」が現れるが、それは従属節事態が主節事態の前に起こるのではなく、発話時を基準として主節事態が従属節事態に先立って起こるという順序関係を表している。

(i) 越前海岸で自殺した女性はそこへ行くのにタクシーを使った。(三原 1991；下線は筆者)

来の出来事を表しても、相対テンスの非過去形は (8a) (8b) の「行く」のように従属節事態が主節事態の成立以後に起こることを表し、過去形は (8c) (8d) の「行った」のように従属節事態が主節事態の成立以前に起こっていることを表す。このように、相対テンスは複数の出来事間の時間的順序関係というテンス的意味を表す。

- (8) a. 彼は名古屋に {行く／*行った} 前に、京都に寄った。(過去)
 b. 彼は名古屋に {行く／*行った} 前に、京都に寄る。(未来)
 c. 彼は名古屋に {*行く／行った} 後で、京都に寄った。(過去)
 d. 彼は名古屋に {*行く／行った} 後で、京都に寄る。(未来)

一方、アスペクトとは、出来事の時間的な展開（開始、過程、終結など）の捉え方を表す文法的カテゴリーで、日本語では「完成相」と「非完成相」の対立で捉えられている。このうち、完成相とは動詞の指し示す出来事を始まりから終わりまでひとまとまりで捉えるもので、日本語では「スル」で表される。一方、非完成相とは動詞の指し示す出来事が持続の過程の中にあることを表すもので、日本語では「テイル」で表される。すなわち、(9a) のように完成相「スル」は未来の出来事を表し、「食べる」という動作の始まりから終わりまでを全体的に捉えるのに対し、非完成相「テイル」は「食べる」という動作が始まっているが、発話時にまだ終わらずに持続していることを表す。また、(9b) のようにある出来事が繰り返し行われていることを表す場合、完成相「スル」と非完成相「テイル」で表される内容に差はないが、完成相「スル」が恒常的な状態を表すのに対し、非完成相「テイル」は一時的な状態を表す。

- (9) a. 彼は今朝食を {食べる／食べている}。
 b. 彼は毎朝6時に朝食を {食べる／食べている}。

このように、テンスとアスペクトは共に時間に関わる文法的カテゴリーであるが、その関わり方は異なっている。テンスが基本的に基準時との時間的前後関係を表すのに対し、アスペクトは他の時点との時間的位置づけとは関わりなく1つの出来事の内面的な時間構造に関心を払うものである。要するに、テンスは発話時との「外的時間」の関係で過去形と非過去形で対立するのに対し、アスペクトは出来事の「内的時間」の様態で完成相と非完成相で対立している。このようにテンス的意味とアスペクト的意味は与えられた出来事の「外的時間」と「内的時間」の2つの側面から出来事の時間的なあり方を表現しており、両者は切り離すことのできない関係にある。その体系は表2-1のように表せる。

表2-1 日本語のテンス・アスペクト形式

		アスペクト	
		完成相	非完成相
テ ン ス	非過去形	ル形	テイル形
	過去形	タ形	テイタ形

2.3 「テイル」の用法の分類

前節で見たように、日本語のアスペクト形式は、大別して出来事をひとまとまりのものとして捉える「完成相」と、出来事が持続の過程の中にあることを表す「非完成相」に分けられる。「テイル」はこのうちの「非完成相」を表す文法形式で、本研究では文末と連体修飾節での「テイル」の表す意味について、次の5つの用法に分けることとする（吉川 1976；工藤 1982ab、1995；寺村 1984；副島 2007）。

基本的意味：

- a. 動作の持続
 - (10) 彼は英語を学んでいる。
 - (11) 英語を学んでいる小学生が多い。

- b. 結果の状態 (12) 服が汚れている。
(13) 汚れている服は水につけておきなさい。

派生的意味：

- c. パーフェクト (14) 彼はすでに日本語能力試験1級に合格している。
(15) 日本語能力試験1級に合格している人のみ応募できる。
d. 繰り返し (16) 彼は毎日コーヒーを飲んでいる。
(17) 毎日コーヒーを飲んでいる人は脳卒中のリスクが低下する。
e. 単なる状態 (18) 彼の書いた論文は優れている。
(19) 軽油よりもバイオ燃料の方が優れている点が多い。

以下、この5つの用法について例を挙げて説明する。

a. 「動作の持続」

「動作の持続」とは、ある基準時において動作・出来事が進行していることを表すものである。例えば(20)のように、発話時以前に太郎が昼ご飯を食べ始め、発話時においても「食べる」という動作がまだ終わらずに続いていることを表したものである。

- (20) 太郎は今昼ご飯を食べている。

また、「動作の持続」を表すのは、主に動詞のアスペクト的意味の中に「瞬間性」のない「活動動詞」(例えば(21))と「達成動詞」(例えば(22))の2つの動詞タイプに集中しているが、「瞬間性」を持つ「到達動詞」でも「動作の持続」を表現することができる。この場合、(23b)のように「徐々に」、「次第に」、「だんだんに」などの

変化の進行過程を捉えた副詞的な成分などの構文的な条件が必要である。また、「状態動詞」でも (24) のような心理動詞では「動作の持続」を表現することができる³。

- (21) 子供たちは公園で遊んでいる。(活動動詞)
- (22) 彼はご飯を作っている。(達成動詞)
- (23) a. この噂は校内に広まっている。(結果の状態)
b. この噂は徐々に校内に広まっている。(動作の持続)
- (24) 彼は太郎が賢いと思っている。(状態動詞)

b. 「結果の状態」

「結果の状態」とは、ある動作・出来事が基準時以前に起こり、その結果がある状態として基準時まで残っていることを表すものである。例えば、(25) のように「木が倒れる」という出来事は発話時以前のある時点ですでに起こっており、その結果「倒れた」状態が発話時まで存在していることを表す。

- (25) 木が倒れている。

「結果の状態」を表すのは、主に (26) のように動詞の持つアスペクト的意味の中に「瞬間性」のある「到達動詞」に限られる。ただし、「到達動詞」と同様に「限界性」を持つ「達成動詞」でも「結果の状態」の意味を表すことができる。この場合、(27) のように、受身などの構文的条件が必要である。一方、非限界動詞である「活動動詞」と「状態動詞」は「結果の状態」を表すことができない。

³ 「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの分類基準については2.4節で説明する。

(26) 隣の庭に花が植わっている。(到達動詞)

(27) 隣の庭に花が植えられている。(達成動詞)

以上、a. 「動作の持続」と b. 「結果の状態」の2用法を見てきた。「テイル」は基本的にこの2つのアスペク的な意味を表している。この2用法は出来事が持続の過程の中にあることを表すという点で共通しているが、取り出された出来事の時間的な局面は異なっている。a. 「動作の持続」がある動作や現象が持続していることを表すのに対し、b. 「結果の状態」は変化の結果として生じた状態の持続を表す。「テイル」が a. 「動作の持続」を表すか、b. 「結果の状態」を表すかを決定する主な要因は、動詞に内在するアスペク的な意味であるとされている(奥田 1977、1978ab ; 工藤 1982ab、1995 ; 金水・工藤・沼田 2000)。

次に「テイル」の派生的用法とされる c. 「パーフェクト」、d. 「繰り返し」、e. 「単なる状態」の3用法について説明する。

c. 「パーフェクト」

「パーフェクト」とは、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っている」(工藤 1995 : 99) ことを表すものである。例えば、(28) のように「台湾で勉強する」という出来事の効力が設定時(この場合、発話時と一致している)においても持続していることが表される。

(28) 彼は高校3年間台湾で勉強している。だから、中国語が上手である。

基準時以前のある時点に動作(変化)がすでに起こっており、それがもたらした結果が何らかの形式で基準時と関連付けられている、という先行の動作(変化)と後続の結果との2つの時間的段階を複合的に捉えている点で、「結果の状態」と「パーフェ

クト」は共通している。そのため、「パーフェクト」は、「テイル」の基本的意味の「結果の状態」から派生したものだとされている。工藤(1995)では、「結果の状態」を「状態パーフェクト」、「パーフェクト」を「動作パーフェクト」とも呼んでおり、この2用法は次の3点で異なると指摘している。

- ① 結果をもたらす先行した運動を直接とらえているか否か
- ② 運動の必然的な直接的な結果か、偶然的な間接的な結果か
- ③ 結果の継続＝顕在性を前面にだしてとらえているか否か

(工藤1995 : 118)

まず、①について工藤(1995)では「結果継続⁴=状態パーフェクトは、確かに既に(以前に)変化が起こったことを前提としているとはいえ、そのことは、含み(含意)としてしめすにとどめ、直接的にはその結果の段階のみを捉えていることをしめす。この含みとしてある、以前の変化そのものをも直接的に捉えたとき、動作パーフェクトというアスペクト的意味がでてくるのである」(p.120)と説明されている。すなわち、「結果の状態」と「パーフェクト」は先行の動作(変化)と後続の結果の2つの時間的段階のいずれかに焦点を置くという点で異なっている。例えば、同じ「結婚している」でも、「結果の状態」は(29)のように「結婚した」状態のみを捉えているため、「スイスの教会で」という結婚式を挙げた場所と共起できないのに対し、「パーフェクト」は(30)のように「結婚する」という動作そのものに焦点を置いているため、「スイスの教会で」という結婚式を挙げた場所と共起できるとしている。

(29) 彼女はもう独身ではなく、(*スイスの教会で) 結婚している。

(30) 彼女はスイスの教会で結婚している。(工藤1995 : 119)

⁴ 本研究での「結果の状態」に相当するものである。

次に、②については、動詞に内在するアスペクト的意味に関わる。既述のとおり、「結果の状態」は基本的に限界動詞である「到達動詞」（例えば (31)）と「達成動詞」（例えば (32)）のみで表され、非限界動詞では表されない。一方、「パーフェクト」は動詞に内在するアスペクト的意味に依存することなく、限界動詞である「到達動詞」（例えば、(33)）と「達成動詞」（例えば、(34)）のみならず、非限界動詞である「活動動詞」（例えば、(35)）と「状態動詞」（例えば、(36)）でも表すことができる。

「結果の状態」:

(31) 窓が開いている。(到達動詞)

(32) 窓が開けられている。(達成動詞)

「パーフェクト」:

(33) 太郎は2年前にガンで死んでいる。(到達動詞)

(34) 彼は世界新記録を作っている。(達成動詞)

(35) 彼はすでにラーメンを三杯も食べている。(活動動詞)

(36) 今度こそは勝てると思っていたが、また彼女に負けてしまった。(状態動詞)

このうち、「開く、倒れる、結婚する」などのような限界動詞は、その変化が実現すれば、「開いた、倒れた、結婚した」状態になるという必然的な結果を生じるものである。これに対し、「歩く、食べる、思う」などのような非限界動詞は、限界動詞のような必然的な結果が生じるわけではなく、偶然的な、間接的な結果しか表さない。そのため、限界動詞でしか表されない「結果の状態」が捉える結果が必然的な結果でしかありえないのに対し、限界動詞でも非限界動詞でも表現できる「パーフェクト」の捉える結果は必然的な結果とは限らないとしている。

最後に③について、工藤（1995）では「〈結果継続〉は、「シンデイル」のような、

もはや別（元）の状態になりえない永続的結果の場合を除けば、「しばらく、2時間、3年間、～まで、～の間」など、持続期間を示す副詞、従属文と共起することができる。しかし、〈動作パーフェクト〉は不可能である。変化結果があらわに（actualに）残存していて、それがいつかなくなるものであるとすれば、その持続期間を限定できるが、効力の持続期間は、その間接性ゆえに限定しにくいであろう」（p.122）と解釈している。例えば、「結果の状態」は（37）のように「結婚した」状態の持続期間を表すため「3年間」という時間副詞と共起できるのに対し、「パーフェクト」は（38）のように効力の持続期間を限定することができないため「2時間」という時間副詞との共起ができない⁵。

(37) 彼女は太郎とは2000年から3年間結婚していた。（結果の状態）

(38) *彼女は太郎とはスイスの教会で2時間結婚している。（パーフェクト）

d. 「繰り返し」

「繰り返し」とは、同一の動作・出来事が反復的に起こることを表すものである。これは（39）のように「ジョギングする」という動作が「毎朝」のような頻度を表す語句（時間副詞）との共起によって、繰り返し行われることを表す。このうち、（39）の「太郎」のような同一主体による場合もあれば、（40）の「多くの子供」のような複数の主体による場合もある。寺村（1984）が指摘しているように、いずれの場合でも1つ1つの動作・出来事の「点」が連続して「線」として捉えられるという点は共通しており、両者を区別する必要はない。

(39) 太郎は健康のために毎朝ジョギングしている。

(40) 世界では毎日多くの子供が疫病や飢餓などで命を落としている。

⁵ 工藤（1995）では、③の点について例文が載っていないため、ここでは筆者の作例を載せた。

また、「太郎がジョギングしている」、「子供が命を落としている」という個々の出来事が幾つか集まったものの全体を1つの出来事の進行過程として捉えられる点から見ると、「繰り返し」は「動作の持続」から派生した用法である。ただし、「動作の持続」は、(41)のように現在を表す場合、発話時における1回の動作を表すのに対し、「繰り返し」は(42)のように現在を表すが、「読む」という動作が発話時以前のある時点ですでに(何回も)起こっており、発話時以後でも実現する可能性があるという複数の動作を表す。

(41) 太郎は今新聞を読んでいる。(動作の持続)

(42) 太郎は毎日新聞を読んでいる。(繰り返し)

さらに、「繰り返し」は「動作の持続」のように動詞に内在するアスペクトの意味に依存することはなく、(43)～(46)のようにいかなる動詞タイプでも表現することが可能である⁶。

(43) 太郎は毎日ラーメンを食べている。(活動動詞)

(44) 太郎は毎日家で晩ごはんを作っている。(達成動詞)

(45) 太郎は毎朝7時に起きている。(到達動詞)

(46) 太郎はここで働けて本当に幸せだと毎日思っている。(状態動詞)

e. 「単なる状態」

「単なる状態」は、ものの属性や状態、空間的な配置関係などをとらえるもので、その状態を引き起こした動作・作用の過程が問題にされず、形容詞と同じ働きをする

⁶ ただし、「状態動詞」のうち、「ある」「いる」などのように「テイル」と結び付くことができないものがある。

ものである。例えば、(47)のように「母親によく似ている」は主体である「花子」の性質を表している。

(47) 花子は母親によく似ている。

この用法は「結果の状態」から派生したものである。「単なる状態」は静的な状態を表す点では「結果の状態」と共通するが、その状態を引き起こした動作（変化）の過程が問題にならない点では「結果の状態」と異なっている。つまり、「結果の状態」には(48)のように今眼前にある故郷の様子が以前の様子と違う、という時間的な変化の意味が含まれている。これに対し、「単なる状態」は(49)のように主体の行為や常識などが他の人と比較して違うという特徴を表しているもので、時間的な変化の意味が含まれない。

(48) 暫く帰らない間に、故郷の様子はすっかり変わっていた。(結果の状態)

(49) あの人は昔から相当変わっている。(単なる状態)

また、「単なる状態」は「結果の状態」と異なり、(50)～(53)のようにいかなる動詞タイプでも表現することが可能である。

(50) 赤道は南アメリカ大陸の北部を通っている。(活動動詞)

(51) 赤道は地球を上下真つ二つに割っている。(達成動詞)

(52) 私の家は駅から結構離れている。(到達動詞)

(53) 学校の北側に高い山がそびえている。(状態動詞)

以上、本研究における「テイル」の用法の分類基準について検討してきた。本節で

取り上げた5つの用法のうち、「テイル」の基本的意味とされる「動作の持続」と「結果の状態」の2用法は、出来事が持続の過程にあることを表す点で共通しているが、取り出された出来事の時間的な局面（進行の過程、或は終結後の状態）が異なる。この違いをもたらすのは動詞に内在するアスペクト的意味である。このうち、「動作の持続」の意味を実現するのが「走る、遊ぶ、食べる」のような「瞬間性」を持たない動詞であるのに対し、「結果の状態」の意味を実現するのは「落ちる、死ぬ、倒れる」のような「瞬間性」を持つ動詞である。このように、動詞の語彙的アスペクトは「テイル」の表す意味と緊密に関わっている。本節で取り上げた5つの用法と次節で説明する動詞タイプとの関係を表2-2にまとめる。

表2-2 「テイル」の用法と動詞タイプとの対応関係

	活動動詞	達成動詞	到達動詞	状態動詞
a. 動作の持続	◎	◎	○	○
b. 結果の状態	×	○	◎	×
c. パーフェクト	○	○	○	○
d. 繰り返し	○	○	○	○
e. 単なる状態	○	○	○	○

注：◎は文脈と構文的条件なしにその用法を優先的に表現すること、○は文脈と構文的条件によってその用法を表すことが可能であること、×は不可能であることを示す。

2.4 語彙的アスペクトによる動詞タイプの分類

次に、本研究における動詞の語彙的アスペクトの分類基準について説明する。語彙的アスペクトは、「内在アスペクト (inherent aspect)」、「状況アスペクト (situation aspect)」とも呼ばれ、動詞自体の語彙的意味の中に「限界性 (telicity)」があるかどうか、「瞬間性 (punctuality)」があるかどうかといった動詞 (句) の語彙的意味の中に存在するアスペクト的意味特徴である。「テイル」の表す文法的意味は、基本的に動詞のアスペクト的意味特徴によって決定されるため、語彙的アスペクトは「テイル」の表す文法的意味と緊密に相関しており、「テイル」の習得を検討するうえで極めて重要な要因である。

Vendler (1957) は語彙的アスペクトの違いによって動詞(句)を「状態(State)動詞」、「活動(Activity)動詞」、「達成(Accomplishment)動詞」、「到達(Achievement)動詞」の4つのタイプに分類した⁷。この4つの動詞タイプは、表2-3に示すように、さらに「動的(dynamic)」、「限界的(telic)」、「瞬間的(punctual)」の3つの意味要素の有無によって詳細に分類される (Andersen 1991)。

表2-3 Vendlerの動詞4分類による英語と日本語の例⁸

動詞タイプ	意味要素			例	
	動的	限界的	瞬間的	英語	日本語
状態動詞	—	—	—	love, contain, know	ある、いる、思う
活動動詞	+	—	—	run, walk, play	走る、歩く、遊ぶ
達成動詞	+	+	—	make a chair, walk to school	椅子を作る、風呂を沸かす
到達動詞	+	+	+	die, drop, win the race	死ぬ、落ちる、勝つ

まず「動的」、「限界的」、「瞬間的」の3つの意味要素の判別基準について説明する。

「動的(dynamic)」:

動詞はその指し示す出来事が時間経過による変化、或は動作を伴うかどうかという「状態性 (stativity)」により、「ある」「いる」「思う」「信じる」などのように変化・動作が伴わない「状态的(stative)」なもの(状態動詞)と、「歩く」「作る」「死ぬ」「落ちる」などのように動作主の変化・動作が伴う「動的」なもの(動態動詞)に分けられる。このうち、動態動詞には開始、進行、終結、結果という時間的展開性があるため、「スル」と「テイル」のアスペクト的対立で出来事の異なる時間的局面を表すことができる。一方、状態動詞には「ある」「いる」のように、時間的展開性を捉えておらず常に恒常的状态を表し、「テイル」と結び付くことができないものと、「思う」「信じ

⁷ 日本語の訳語は影山 (1996) に従う。

⁸ 表2-2は西・白井 (2001) の図1と図2に基づいて作られたものである。さらに、西・白井 (2001) の図1はAndersen (1990)、図2はAndersen (1989, 1991) に基づいて作成されたものである。

る」のように時間的展開性があり、「テイル」と結び付くことができるものがある。

「限界的(telic)」:

動詞はその指し示す出来事に終結点があるかどうかという「限界性(telicity)」により「死ぬ」「落ちる」「作る」「沸かす」のような「限界的」なもの(限界動詞)と、「歩く」「走る」「歌う」「遊ぶ」のような「非限界的(atelic)」なもの(非限界動詞)⁹に分類される。このうち、限界動詞は出来事の時間的展開の終結点を持つため、その終結点に達した時点で動作の展開が完遂され、それ以上その動作を続けることができない。例えば、「椅子を作る」の場合、椅子が出来上がった時点で初めて「椅子を作る」という動作を成し遂げたと言える。その時点で、「作る」という動きも完遂されそれ以上作り続けることができない。一方、「歌う」のような非限界動詞の場合、あらかじめ定まった終結点がないため、何曲も歌っても、または1曲を終わりまで歌わなくても、いずれの場合においても歌い始めた時点で「歌う」という動作が完成したと言える。

「瞬間的(punctual)」:

動詞はその指し示す出来事の開始点と終結点の間に明確な時間的幅を持つかどうかという「瞬間性(punctuality)」により、「走る」「遊ぶ」「笑う」「見る」のように動作を行うのにある程度の時間的な幅を有する「持続的(durative)」なもの(継続動詞)と、「死ぬ」「消える」「変わる」「勝つ」のように動作の開始点と終結点がほぼ同時に捉えられ、「瞬間的」に遂行されるもの(瞬間動詞)に分けられる。このうち、継続動詞では開始点と終結点の間に明確な時間的幅があるため、「テイル」と結び付くと、「彼は笑っている」のように動作の進行中(つまり、「動作の持続」)を表す。一方、瞬間

⁹ ただし、非限界動詞は、「駅まで走る」のように動詞以外の文の要素によって「駅まで」といった終結点を設定することができる。工藤(1995)ではこのような文中に現れた他の要素によって設定された終結点を「外的時間的限界」と呼び、動詞の語彙的意味自身の中にある「内的時間的限界」と区別している。

動詞では始点と終結点がほぼ一致しているため、「テイル」と結び付くと、動作の進行過程を捉えることができず、「電気が消えている」のように変化で生じた結果の持続、つまり、「結果の状態」を表す。

上述した「動的」、「限界的」、「瞬間的」という3つの意味要素の判別基準に基づき、「状態動詞」は「机の上に紙とペンがある」のように開始点と終結点に関心を持たないため、「限界的」が「-」である。周囲からの外力による変化が加わらない限り、恒常的な静的状態を表すため、「動的」と「瞬間的」の2つの要素も「-」となる。ここで、Vendler (1957) の動詞4分類は英語に関して行われたものであるが、英語と日本語の「状態動詞」は一対一に対応しているわけではない。例えば、表 2-3 に示すように、英語の「状態動詞」には *love*、*contain*、*know* がある。このうち、英語の *know* は何かについての知識が備わっていることを意味し、いつそれを知ったのか（開始）とか、いつ忘れてしまうのか（終了）といった時間的な境界に関心を持たない（影山 1996 : 42）。これに対し、日本語の「知る」には知識・経験の獲得という変化の意味があるため、英語の *know* とは異なり「到達動詞」に分類される。一方、「到達動詞」は「犬が死ぬ」のように開始点と終結点がほぼ同時に捉えられるという瞬間的な変化を表すため、「動的」と「瞬間的」の2つの要素がともに「+」で、犬が死んだ瞬間に動作が終わるという必然的な終結点があるため、「限界的」の要素も「+」となる。英語の「到達動詞」には *die*、*drop*、*win the race* などがあり、日本語の「到達動詞」には「死ぬ」「落ちる」「勝つ」などがある。また、「活動動詞」と「達成動詞」は共に持続的な動きを表すため、「動的」が「+」で、「瞬間的」が「-」となるが、「限界的」の点で異なる。すなわち、「活動動詞」は「走る」のようにどの段階で動作主が動作を止めてもその動作が成立すると言える任意的な終結点を持っているため「限界的」が「-」であるのに対し、「達成動詞」は「いすを作る」のように必然的な終結点を持っており、その終結点に達した時点で動きが尽きるため、「限界的」が「+」となる。このうち、表 2-3 に示すように、英語の「活動動詞」には *run*、*walk*、*play* などがあり、日本語の

「活動動詞」には「走る」「歩く」「遊ぶ」などがある。一方、「達成動詞」の場合、英語には *make a chair*、*walk to school* などがあり、日本語には「椅子を作る」「風呂を沸かす」などがある。

2.5 アスペクト仮説の検証に関する研究

これまで語彙的アスペクトの側面から行われてきた「テイル」の習得に関する研究は、「習慣」¹⁰や「パーフェクト」といった「テイル」の特定の用法での動詞タイプの使用に着目したものと、用法を区別せずに「テイル」を使用している動詞タイプの使用状況を調査したものに大別できるが、概ね「アスペクト仮説 (Aspect Hypothesis)」の普遍性を検証したものである。従って、以下ではまず、アスペクト仮説を取り上げ、日本語のテンス・アスペクトの習得と動詞の語彙的アスペクトとの相関性についていかに予測しているのかについて考察する。次に、日本語でアスペクト仮説の検証を行った研究を上記2種類の調査方法で分けて検討していく。

2.5.1 アスペクト仮説

アスペクト仮説とは、動詞の語彙的アスペクトがテンス・アスペクトの習得にいかなる影響を与えるかを予測したもので、はじめはフランス語やイタリア語などの第一言語習得中の幼児のテンス・アスペクトの使用に対する一連の研究において観察されたものである (Shirai 1993, 2002a ; 白井 1998 ; 稲垣 2011) 。その一連の研究から第一言語としてのテンス・アスペクトの習得に見られる普遍性は以下の4点にまとめられている。

1. (完成相)¹¹過去形は、まず主に「到達動詞」と「達成動詞」に付加され、後

¹⁰ これは前掲した「繰り返し」の用法に相当するものである。

¹¹ 白井 (1998) では、「完結相」と「非完結相」。

に「活動動詞」、「状態動詞」にも使われるようになる。

2. 完成相過去と、非完成相過去の区別をする言語¹²においては、非完成相過去の習得は完成相過去より遅れ、主として「状態動詞」と「活動動詞」から始まる。
3. 進行形は、主として「活動動詞」から始まる
4. 進行形は、誤って「状態動詞」につけることは、ほとんどない。

(白井 1998 : 79-80)

後に英語やスペイン語などの第二言語習得研究においても共通する習得パターンが見られた。このうち、日本語のテンス・アスペクトの習得を論じるうえで重要となるのは仮説1と仮説3である。この2点を日本語に当てはめると、以下のようになる。

- 1'. 完成相過去形「タ」の習得は、「達成動詞」と「到達動詞」から始まり、その後「活動動詞」と「状態動詞」へ進む。
- 2'. 「動作の持続」の「テイル」の習得は、「活動動詞」から始まり、その後「達成動詞」と「到達動詞」へ進む。

しかし、既述したように日本語の非完成相形式「テイル」は「動作の持続」と「結果の状態」の2つの基本的な意味を表すが、「アスペクト仮説」の予測では「結果の状態」の習得について言及されていない。そのため、非完成相形式「テイル」の習得が「活動動詞」と「到達動詞」のいずれから始まるのかは判断できない。Shirai (2002a)では、この問題点について「一対一の原理 (One to One Principle, Andersen 1984)」¹³に基づき、上記の仮説1'と2'に示したように、完成相過去形「タ」が「到達動詞」に、

¹² 例えば、フランス語やスペイン語など

¹³ 「一対一の原則」とも呼ばれ(菅谷 2005a)、第二言語の習得過程には学習者が1つの形式に1つの意味をマッピングさせながら言語を習得していく傾向があるというものである(Andersen 1984)。そのため、1つの形式に複数の意味がある場合、最初にその中の1つの意味のみで使用され、他の意味の使用が遅れる傾向がある。

「動作の持続」の「テイル」が「活動動詞」に結び付きやすいので、学習者は「テイル」という形式と「動作の持続」という意味をマッピングさせやすく、非完成相形式「テイル」の習得は「活動動詞」が「到達動詞」に先行すると予測している (Shirai 1993, 2002a ; 稲垣 2011)。さらに「テイル」の多義的な意味と動詞に内在するアスペクト的意味との緊密な関係から日本語のアスペクトの習得について上記の仮説 1' と 2' の 2 点の他に、稲垣 (2011) ではさらに仮説 3' が提案されている。

- 3'. 非完成相¹⁴形式「テイル」は、まず「活動動詞」と共に「動作の持続」の意味で使用され、その後、「到達動詞」と共に「結果の状態」の意味で使用されるようになる。

(稲垣 2011 : 19)

このように、「アスペクト仮説」は、第二言語としての日本語のテンス・アスペクトの習得で完成相過去形「タ」は限界動詞である「到達動詞」と「達成動詞」に、非完成相形式「テイル」は非限界動詞である「活動動詞」に結びつきやすい、という動詞に内在する限界性の有無による影響を提示している。

2.5.2 日本語におけるアスペクト仮説の検証

2.5.2.1 動詞タイプ別のテンス・アスペクトの使用状況

Shirai (1995)、Shirai & Kurono (1998) の調査 1 では、日本の大学で 8 ヶ月のインテンシブ日本語プログラムを受講した中国語人学習者 3 名を対象に、日本語母語話者と一対一のインタビューを行っている。さらにその結果を日本語母語話者の発話データ (インタビューとコーパス資料¹⁵) と照らし合わせ、日本語学習者と母語話者と

¹⁴ 稲垣 (2011) では、「非完結相」。

¹⁵ コーパス資料は井出他編 (1984) 『主婦の一週間の談話資料』という会話コーパスを用いたものである。

の動詞タイプ別の「タ形」と「テイル」の使用傾向の異同を考察している。その結果、日本語母語話者の動詞タイプ別の使用頻度（延べ語数）の割合について、「タ形」の使用（インタビューでは「活動動詞」：「到達動詞」が11%：54%、コーパス資料では「活動動詞」：「到達動詞」が8%：52%）においても「テイル」の使用（インタビューでは「活動動詞」：「到達動詞」が37%：59%、コーパス資料では「活動動詞」：「到達動詞」が32%：64%）においても、いずれも「到達動詞」の割合は「活動動詞」より高かった、という一致した結果が得られた。一方、学習者の場合、「タ形」の使用は「活動動詞」：「到達動詞」が11%：78%となっているが、「テイル」の使用は「活動動詞」：「到達動詞」が55%：37%である、という異なる使用傾向が見られた。つまり、日本語学習者の「テイル」の使用は日本語母語話者と異なり、「活動動詞」との結び付きが強いのに対し、「タ形」の使用は日本語母語話者と同様に「到達動詞」に共起しやすい。

また、Shibata (1999) では、英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者各4名を対象に、Mayer (1969) の絵本（*Frog, where are you?*）を用いて口頭でのストーリーテリングを行い、物語の中で使われるテンス・アスペクト形式（ル形、タ形、テイル形）が動詞の持つ語彙的アスペクトに影響されるかどうかを考察し、さらに Shirai & Kurono (1998) の結果と比較検討した。その結果、母語話者の「テイル」の使用は、延べ語数(token count)では「活動動詞」：「到達動詞」が56%：44%で「活動動詞」により多く用いられたが、異なり語数 (type count) では「活動動詞」：「到達動詞」が45%：55%で、逆に「到達動詞」の割合が高かった。また、学習者の場合でも、「テイル」の使用率は延べ語数（「活動動詞」：「到達動詞」が55%：37%）では「活動動詞」のほうが高かったが、異なり語数（「活動動詞」：「到達動詞」が41%：48%）では逆の結果が得られた、という母語話者と一致した使用傾向が見られた。換言すれば、「テイル」の使用では日本語学習者と母語話者はともに「活動動詞」を最も多く用いたが、「到達動詞」のほうがより生産的に使われていることが示されていると言える。

このように、延べ語数と異なり語数では異なる結果が得られたことから、「アスペクト仮説」の普遍性を検証するうえでこの2種類の数値とも提示して動詞タイプ別の使用頻度と生産性を検討する必要性が示唆される。また、Shirai & Kurono (1998) の調査結果と比較した結果、Shibata (1999) では日本語母語話者の「テイル」の使用は「到達動詞」よりも「活動動詞」のほうが多いという異なる結果が出ている。これについて Shirai & Kurono (1998) ではインタビューでの会話資料と主婦の談話資料との会話内容とを用いて分析しているのに対し、Shibata (1999) では口頭でのストーリーテリングで取られた発話内容を分析データとしているため、タスクの違いによって分析結果に影響が与えられた可能性があるかと推測される。

Shirai (1995)、Shirai & Kurono (1998)、Shibata (1999) のいずれの調査においても、日本語学習者のテンス・アスペクトの習得において「アスペクト仮説」を支持する結果が得られた。しかし、同じく発話データを用いてテンス・アスペクト形式の使用と語彙的アスペクトとの関係を検討した菅谷 (2002) では、これらの調査とは異なる結果が報告されている。菅谷 (2002) の調査1では自然環境で日本語を習得してきたロシア語、英語、フランス語母語話者各1名(3人ともACTFL-OPIで初級の上という判定)を対象に、OPI発話データを分析した。その結果、3名とも「タ形」を「到達動詞」に多く使用していた。「テイル」に関しては母語に進行形のないロシア語母語話者の場合(「活動動詞」:「到達動詞」が71%:29%)は「活動動詞」に多く用いられているが、母語に進行形のある英語母語話者(「活動動詞」:「到達動詞」が20%:80%)とフランス語母語話者(「活動動詞」:「到達動詞」が19%:81%)の場合は「到達動詞」に多く使用されている¹⁶、という異なる使用傾向が報告されている。このように、自然習得者(英語とフランス語母語話者)の「テイル」の使用には「アスペクト仮説」の予測と異なる結果が見られた。ただし、菅谷(2002)はShirai(1995)とShirai & Kurono(1998)の調査1、Shibata(1999)と同様に調査人数がわずか数名しかない事例調査

¹⁶ ここで提示した数値はすべて延べ語数によって計算されたものである。

であり、対象者間の個人差が大きく一般化しにくいいため、異なる結果が出ている可能性があるとしている。

これらの少人数による事例調査に対し、三村(1999a)では初級から上級までの日本語学習者121名(約9割が韓国語母語話者)¹⁷を対象に四肢択一形式の文法テストを行い、「タ形」と「テイル形」の習得における語彙的アスペクトの影響を考察した。その結果、「タ形」の習得では同じく限界動詞である「到達動詞」と「達成動詞」との間に差異は見られなかったが、「テイル形」の習得ではいずれのレベルにおいても「到達動詞」より「活動動詞」での正答率が高かった。さらに、「到達動詞」には「テイル形」を選択すべきところで「テイル形」の代わりに「タ形」が付与された誤用傾向があると提示している。このように、学習者には「到達動詞」と「タ形」、「活動動詞」と「テイル形」との強い結び付きが見られ、「アスペクト仮説」の予測を支持する結果が出ている。

また、同じく四肢選択式(複数回答可)の文法テスト¹⁸を用いた小山(2004)では、テンス・アスペクトの習得における母語の役割と影響に着目し、中国語母語話者、韓国語母語話者、非漢字圏母語話者の留学生各25名¹⁹を対象に、動詞タイプとテンス・アスペクト形式の結びつきについて調査を行っている。その結果、「テイル形」の習得では、学習者の母語と日本語の熟達度の違いに関係なく、学習者は「活動動詞」よりも「到達動詞」のほうがテイル形式を付与しにくいことが示されている。しかし、3つのグループのうち、中国語母語話者の「到達動詞」の正答率が極めて低かった。「到達動詞」における誤答の選択を見ると、いずれのグループにおいても「タ形」の誤答が選択される割合が高かったが、この誤用傾向は韓国語母語話者(「タ形」の選択率は

¹⁷ 三村(1999a)では、学習者のレベル判定基準について、学習時間が350時間以下は初級レベル、日本語能力試験1級合格か、またはクローズテストで60問中40問以上が正答だった場合は上級レベル、上述した条件に該当しない場合は中級レベルとした。

¹⁸ 小山(2004)では、学習者が「動作の持続」と「結果の状態」の文脈で、「活動動詞」(=「動作の持続」)と「到達動詞」(=「結果の状態」)の「テイル」をどの程度正確に選択できるかを検討した。

¹⁹ 小山(2004)では、各グループは日本語コースのグラス分けテストの成績をもとに、さらに初級後半9名ずつ、中級前半8名ずつ、中級後半各9名ずつに分けられた。

初級後半が 13.9% ; 中級前半が 28.1% ; 中級後半が 12.5%) と非漢字圏母語話者 (「タ形」の選択率は初級後半が 16.7% ; 中級前半が 37.5% ; 中級後半が 21.9%) に比べると、中国語母語話者 (「タ形」の選択率は初級後半が 41.7% ; 中級前半が 31.1% ; 中級後半が 37.5%) の場合には特に顕著であり、中級後半に至っても依然として高い選択率を維持している。一方、「テイタ形」の習得でも全体的に「到達動詞」より「活動動詞」との結び付きが強いという「テイル形」の習得と同じ結果が得られたが、両者間の正答率の差 (「テイタ形」では中国語母語話者が 11.1% ; 韓国語母語話者が 7.4% ; 非漢字圏母語話者が 14.9%) は「テイル形」(中国語母語話者が 40.1% ; 韓国語母語話者が 21.4% ; 非漢字圏母語話者が 32.5%) の場合と比べて明らかに減少している。小山 (2004) では「テイル」と「活動動詞」との結び付きはテンスの影響を受けて弱くなるものの、過去時制においても基本的には変わらないと指摘している。

小山 (2004) では「テイル形」の習得について三村 (1999a) とほぼ一致した結果と誤用傾向が得られたが、三村 (1999a) では母語の影響について議論されていないのに対し、小山 (2004) では複数の母語話者を比較することにより、学習者の母語はテンス・アスペクトの習得順序ではなく、習得の速度に影響することを示した点は興味深い。

そして、小山 (2004) では「結果の状態」(「到達動詞」と「テイル」の結び付き) の習得は韓国語母語話者と非漢字圏母語話者より遅れているとされる、中国語母語話者を対象とした研究に簡・中村 (2010) と孫・小泉・玉岡・宮岡 (2010) がある。

まず、簡・中村 (2010) では、台湾の大学の日本語科に在籍する 2 年生と 4 年各 35 名を対象に、ストーリーテリング作文を用いて①動詞の語彙的アスペクト、②文法的アスペクト、③統語的環境、④時間副詞との共起の有無、⑤日本語学習者年数の 5 つの要因が「テイル」の正用/誤用にどれだけ影響を与えるかを検討した。その結果、「テイル」の習得の難易度は「動詞の語彙的アスペクト」と「日本語学習者年数」の 2 要因に左右されていることが判明した。このうち、「動詞の語彙的アスペクト」の分

析結果、全体的に「到達動詞」の使用は「活動動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプに比べて誤用率が高かった。また、「日本語学習者年数」については2年生よりも4年生の「テイル」の正用率が高く、学習年数が長いほど「テイル」の正用が多いことが報告されている。さらに、「動詞の語彙的アスペクト」と「日本語学習者年数」の2要因の関係について、日本語学習年数に関係なく、いずれも「到達動詞」による誤用が多く見られ、学習者の「テイル」の習得において「到達動詞」からの強い影響が見られたと指摘している。簡・中村(2010)は、従来の単一の要因による調査とは異なり、「テイル」の習得に関わる複数の要因を取り上げてそのメカニズムを検討している点は興味深い。しかし、「テイル」の習得に関する5つの要因を取り上げたにもかかわらず、その分析方法と結果を見ると、主に各要因内の比較検討に止まっている。例えば、「文法的アスペクト」の習得については「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」の3用法の正用率の比較検討が行われたが、それは文末と連体修飾節の構文的位置の違いによっていかなる変化があるか、或は各用法における動詞タイプ別の使用状況にいかなる差異があるか、といった各要因間の関連性について、更なる検討は見られない。

また、孫・小泉・玉岡・宮岡(2010)では、中国語母語話者251名(中国で日本語を学習している大学1年生90名、2年生79名、3年生82名)と日本語母語話者76名を対象に、テンス・アスペクト形式「タ」「テイル」に関する意味判断課題を実施した。テストは「活動動詞(動作の持続)」と「到達動詞(結果の状態)」各8問で構成されており、課題文は「タ」文と「テイル」文のどちらが提示された文脈と意味的に一致するかを判断してもらうという二肢択一形式にした²⁰。分析の結果、「到達動詞」の場合、中国語母語話者(各グループにおける「テイル」の選択率は1年生が8.19%、

²⁰ 孫・小泉・玉岡・宮岡(2010)で用いられた課題文の一部は下記のように挙げる。

文脈：東京ゆきの飛行機は午後3時に仙台空港を出発する予定だった。天気が悪くなったため、出発時刻が1時間延期された。いま、午後5時だ。

- a. 飛行機は仙台空港を出発した。
- b. 飛行機は仙台空港を出発している。

2年生が12.66%、3年生が11.89%)は「テイル」より「タ」を選択する傾向があるが、日本語母語話者は「テイル」(54.44%)と「タ」(45.56%)を同程度で選択する傾向があった。一方、「活動動詞」の場合、中国語母語話者(各グループにおける「テイル」の選択率は1年生が90.14%、2年生が84.18%、3年生が90.24%)でも日本語母語話者(「テイル」の選択率が93.26%)でもいずれも「タ」よりも「テイル」を選択する傾向があった。中国語母語話者は、日本語のAspect形式「テイル」を先に「活動動詞」に付加して「動作の持続」の意味で習得し、その後「到達動詞」に付加し「結果の状態」の意味で使用するようになるという「Aspect仮説」を支持する結果が得られた。

以上の研究をまとめると、菅谷(2002)を除けば、この一連の研究では、調査方法(インタビュー、文法性判断テスト、作文など)、調査対象(JSL、JFL; 教室学習者、自然習得者; 中国語、韓国語母語話者など)、日本語レベルなどが異なっているものの、いずれも完成相過去形「タ」は「到達動詞」、非完成相形式「テイル」は「活動動詞」と結び付きやすい、という動詞に内在する語彙的Aspectの影響が見られた。この結果から、インド・ヨーロッパ語族のみならず、日本語のテンス・Aspectの第二言語習得においても「Aspect仮説」の普遍性を検証できることが示唆されている。しかしながら、ここで注意すべきなのは、以上の習得研究では、主として文末におけるテンス・Aspectの習得状況について調査を行っている点である。文末では完成相過去形「タ」は「到達動詞」、非完成相形式「テイル」は「活動動詞」との結び付きが強いが、だからといって、文末よりテンス・Aspect形式の振る舞いが複雑である連体修飾節では、必ずしも文末と同じ使用傾向が見られるわけではない。文末と連体修飾節におけるテンス・Aspect形式と語彙的Aspectとの結び付きについての比較検討が更に必要である。実際、文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「タ形」と「テイル形」の使用傾向を検討した研究に塩川(2007)がある。

塩川(2007)では、下記の(56)に示すように、文末では「テイル形」のみが容認

される場合でも、連体修飾節では「テイル形」と「タ形」のいずれも容認可能である場合がある、という連体修飾節における「テイル形」と「タ形」の交替現象に目を向け、連体修飾節でも文末と同様に、「活動動詞」と「テイル形」、「到達・達成動詞」と「タ形」の結びつきが見られるかについて、日本の大学で日本語を学ぶ初中級、中級、上級レベルの学習者各21名と日本語母語話者54名を対象に、四肢選択式の文法性判断テスト²¹を実施し、文末と連体修飾節における学習者の選択傾向を分析した。

(56) 服が汚れている。→ {汚れている/汚れた} 服。

その結果、文末と連体修飾節のいずれの位置においても「テイル形」は「活動動詞」、「タ形」は「到達・達成動詞」と結びつきやすく、従来文末において指摘された「アスペクト仮説」と一致する現象が、連体修飾節でも見られることが判明した。また、動詞タイプ別の学習者の選択傾向を見ると、「活動動詞」の場合、「テイル形」と「タ形」の選択は、文末と連体修飾節の両位置において学習者の日本語レベルの違いに関係なく概ね似た傾向を示し、さらに母語話者の選択とも非常に似通っている。一方、「到達・達成動詞」の場合には「活動動詞」とは異なり、文末と連体修飾節では中級までは「テイル形」と「タ形」の選択の傾向が似通っており、学習者の選択の傾向が母語話者の傾向に近づくのは上級者になってからであることが報告されている。文末と連体修飾節との比較により、文末の調査で多く支持の得られた「アスペクト仮説」は、連体修飾節でも検討できる点が意義深いと言える。しかしながら、塩川(2007)では文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル形」と「タ形」の選択傾向しか提示されておらず、正用と誤用について更なる検討は見られない。そのため、文末と連体修飾節の構文的位置の違いが学習者のテンス・アスペクトの習得にいかなる影響

²¹ 回答としては「自然だと思われるもの」、「不自然ではないが、使用しないもの」、「少し不自然なもの」、「完全に不自然なもの」の4段階が設けられ、各問題における動詞のル形、タ形、テイル形、テイタ形の4つの選択肢の容認性を判断してもらう。

を与えるかについては明らかにされていない。さらに、両位置におけるテンス・アスペクトの習得には動詞の語彙的アスペクトの違いによっていかなる差異があるのかも明らかにされていない。

以上、「テイル」の用法を区別せずに、日本語における「アスペクト仮説」の普遍性を検証した習得研究を概括し、この一連の研究の概要を表2-4のようにまとめる。

表2-4 動詞タイプ別のテンス・アスペクトの使用状況を検討した研究

研究者	調査対象	調査方法	判断基準	調査結果
Shirai (1995)、 Shirai & Kurono (1998)	JSL3名 (中国語)	横断的・発話データ (インタビュー)	使用率	①「タ形」は「到達動詞」と結び付きやすい。 ②「テイル」は「活動動詞」と結び付きやすい。
Shibata (1999)	JFL4名 (英語)	横断的・発話データ (ストーリーテリング)	使用率	「テイル」は延べ語数では「活動動詞」に、異なり語数では「到達動詞」に多く用いられている。
三村 (1999a)	初級～上級 JSL121名 (約9割が韓国語)	横断的・文法性判断テスト (四肢択一)	正答率	「テイル形」は「活動動詞」と結び付きやすい。
菅谷 (2002)	OPI 初級上自然習得者3名 (ロシア、英、フランス語)	横断的・発話データ (インタビュー)	使用率	①ロシア語話者:「テイル」は「活動動詞」に多く用いられている。 ②英・フランス語話者:「テイル」は「到達動詞」に多く用いられている。
小山 (2004)	初級後半～中級後半 JSL75名 (中国語、韓国語、非漢字圏各25名)	横断的・文法性判断テスト (四肢選択式)	正答率	母語にかかわらず、「テイル形」と「テイタ形」はともに「活動動詞」と結び付きやすい。

塩川 (2007)	初中級～上級 JSL63名	横断的・文法性 判断テスト (四 段階の容認性判 断)	選択率	連体修飾節では文末と同様に、 「テイル形」は「活動動詞」、 「タ形」は「到達・達成動詞」 と結び付きやすい。
簡・中村 (2010)	JFL70名 (中国 語)	横断的・作文デ ータ (ストーリ ーテリング)	正用率	「テイル」の正用率は「到達動 詞」よりも「活動動詞」のほう が高かった。
孫・小泉・玉岡・ 宮岡 (2010)	JFL251名 (中 国語)	横断的・文法性 判断テスト (二 肢択一)	選択率	「テイル」は「活動動詞」に多 く用いられている。

2.5.2.2 「テイル」の特定の用法における動詞タイプ別の使用状況

「テイル」の特定の用法の習得に着目し、その使用される動詞タイプ別の使用状況を検討した研究に三村 (1999b)、Shirai (2002b)、簡 (2012) がある。

三村 (1999b) では、三村 (1999a) と同様に初級 33 名、中級 50 名、上級 38 名計 121 名の日本語学習者 (約 9 割が韓国語母語話者) を対象に、四肢択一形式の文法テストを行い、「未来パーフェクト」と「現在パーフェクト」における「活動動詞」 (各時制形式に 1 問) と「到達動詞」 (各時制形式に 2 問) の習得状況を考察した²²。その結果、「未来パーフェクト」と「現在パーフェクト」のいずれにおいても、「活動動詞」の場合ほどのレベルでも「テイル形」の選択割合が最も高かったのに対し、「到達動詞」の場合は「活動動詞」と比べて学習者は「テイル形」を選択する割合が比較的 low、
「テイル形」の代わりに「タ形」を選択した割合が高いことが示されている。これらのことから、「パーフェクト」の用法は「到達動詞」よりも「活動動詞」でのほうが習得されやすいことが示されている。しかし、三村 (1999b) では「パーフェクト」の用法で使用された動詞タイプの習得について「未来」と「現在」の 2 つのテンスの検討

²² 三村 (1999b) では「継続動詞」 (働く、使う) と「瞬間動詞」 (帰る、始まる、決まる、止む) の 2 つを用いて調査を行ったが、調査文の内容を見ると、それぞれ「活動動詞」と「到達動詞」に相当するものである。

に止まっており、「過去」の習得については議論されていない。この点について、同じく「パーフェクト」の習得に注目した簡 (2012) は三村 (1999b) で取り上げられた「未来」と「現在」の2つのテンスに加えて、「過去」の習得も考察して更なる検討を行っている。

簡 (2012) では、台湾の大学の日本語科に在籍する中国語母語話者 103 名 (日本語能力試験 1 級合格者 36 名、2 級合格者 52 名、3 級合格者 15 名) と日本語母語話者 52 名を対象に、「パーフェクト」の表す意味を「現実性」と「非現実性」の2つ²³を区別し、このうちの「非現実性」の「パーフェクト」の習得に焦点を置き、複数回答式の文法性判断テスト²⁴を用いて分析を行った。その結果、「未来パーフェクト」の習得において、どの日本語レベルでも「活動動詞」よりも「到達動詞」のほうが「テイル形」の容認度は低かった²⁵。また、「テイル形」の容認度については「現在パーフェクト」の習得においても「未来パーフェクト」と同様に、各レベルでも「活動動詞」よりも「到達動詞」のほうが低かった。さらに、「到達動詞」で「テイル形」以外に選択された語形を見ると、日本語母語話者は「ル形」を選択する傾向があるのに対し、学習者は「タ形」を選択する傾向が見られた。ただし、「到達動詞」における「テイル形」の容認度は学習者の日本語レベルの向上と共に上がっていく傾向が見られた。ここまで

²³ 簡 (2012) の言う「パーフェクト」の現実性は (i) のように発話時において出来事は現実として存在していることを指す。一方、非現実性には (ii) のような実現が不可能なことと、(iii) のような実現が可能なことがあり、つまり発話時において出来事は現実として (まだ) 存在していないことを指す。

(i) 私の父は、ガンで、もう死んでいる。

(ii) もしあの電車に乗ることができたら、もう東京に着いている。

(iii) あなたが家庭を持つ頃には、私はもう死んでいるわよ。

²⁴ 簡 (2012) で用いられた各テンスにおける調査文の一部 (pp.26-30) は下記のように挙げる。

「未来」：こんな厳しい社会で生まれたこの子の将来はどう _____ (なる) のか、心配です。

() なる () なった () なっている () なっていた

「現在」：君が注意してくれなかったら、私は _____ (忘れる)。

() 忘れる () 忘れた () 忘れていて () 忘れていた

「過去」：第2次世界大戦で小倉に原爆が _____ (落ちる)、僕は今ここにはいないだろう。

() 落ちたら () 落ちている () 落ちれば () 落ちていれば

²⁵ 簡 (2012) では、「動作動詞」(働く、抱える、走るなど) と「変化動詞」(終わる、着く、落ちるなど) の2つを用いて調査を行ったが、調査文の内容を見ると、それぞれ「活動動詞」と「到達動詞」に相当するものである。

はほぼ三村 (1999b) の調査に一致した結果が得られ、「パーフェクト」の習得は動詞の語彙的アスペクトの違いによる影響があり、「到達動詞」より「活動動詞」の習得の方が早く進むことが示されている。一方、「過去パーフェクト」の習得において、日本語母語話者における「テイル」形式の高い容認度に対し、学習者では「活動動詞」と「到達動詞」のいずれにおいても「テイル」形式の容認度が低かった。非現実性の「パーフェクト」の用法の中で、学習者にとって「過去パーフェクト」は最も習得しにくいものであることが判明した。しかし、「テイル」形式の容認度が低くなる原因を考察してみると、「過去パーフェクト」の習得調査で用いられた調査文に起因する可能性があると考えられる。「過去パーフェクト」の調査文は「未来パーフェクト」及び「現在パーフェクト」とは異なり、従属節における条件文形式「～たら／～ば」と共起するため、学習者はテンスと「パーフェクト」の意味の他に、さらに条件文の用法の理解も求められるので判断の難易度はより一層高くなる。そのため、いずれの動詞タイプにおいても「テイル」形式の容認度が下がっていると推測できる。この点について簡 (2012) 自身も指摘している。このように、「過去パーフェクト」が非現実性の「パーフェクト」の用法の中で最も習得が困難なのは、単にテンスからの影響なのか、それとも従属節における条件文による影響もあるかは未だ明らかにされていない。

また、三村 (1999b) と簡 (2012) と異なり、Shirai (2002b) は Shirai (1995) と Shirai & Kurono (1998) の調査 1 と同じデータを用い、「習慣」の用法において「タ形」、「テイル形」、「テイタ形」における動詞タイプ別の使用傾向について調査を行った。中国語を母語とする学習者 (インタビュー) と日本語母語話者 (インタビュアー) の両方の発話データを比較した結果 (延べ語数で)、「習慣」における「タ形」では、学習者の場合、「活動動詞」(30%) よりも「到達動詞」(70%) のほうがより多く用いられたのに対し、母語話者の「タ形」の使用は逆に「活動動詞」(54%) の使用割合が高かった。このことから、「習慣」の用法においても学習者の完成相過去形「タ」の使用は「到達動詞」に共起しやすいことがわかった。一方、「習慣」における非完成相「テイル」

の使用に対する調査では、日本語母語話者（「活動動詞」：「到達動詞」が66%：34%）でも学習者（「活動動詞」：「到達動詞」が74%：20%）でも、いずれも「活動動詞」に多く用いられた傾向があるが、テンス別の使用頻度では異なる使用傾向が見られた。

「テイル形」の場合、日本語母語話者（「活動動詞」：「到達動詞」が71%：29%）と学習者（「活動動詞」：「到達動詞」が66%：24%）の使用はともに、「到達動詞」よりも「活動動詞」のほうがより多く用いられた、という一致した使用傾向が見られた。しかし、「テイタ形」の場合、日本語母語話者の使用は「活動動詞」（50%）と「到達動詞」（50%）が半々の比率となっているのに対し、学習者の場合はほぼ「活動動詞」（95%）に限られていた。

以上、「パーフェクト」と「習慣」の2つの用法における動詞タイプ別のテンス・アスペクト形式の使用状況について考察した研究を見てきた。各研究の概要を表2-5のようにまとめる。これらの研究では、いずれも「テイル」は「活動動詞」に共起しやすいという一致した結果が出ており、同じ「テイル」の用法でも動詞の語彙的アスペクトが学習者の「テイル」の使用に影響を与えることが示されている。

表2-5 特定の用法における動詞タイプ別の使用状況

研究者	用法	調査対象	調査方法	判断基準	調査結果
三村 (1999b)	パーフェクト (未来と現在)	初級～上級 JSL121名 (約9割が韓国語)	横断的・文法性判断テスト (四肢択一)	正答率	「未来形」、「現在形」とともに「活動動詞」の方が習得されやすい。
Shirai (2002b)	習慣	JFL3名 (中国語)	横断的・発話データ (インタビュー)	使用率	① 「タ形」は「到達動詞」に共起しやすい。 ② 「テイル形」、「テイタ形」とともに「活動動詞」に共起しやすい。

簡 (2012)	パーフェクト (非現実性)	JLPT3級～1級合格のJSL103名(中国語)	横断的・文法性判断テスト(複数回答式)	選択率	①「未来形」、「現在形」とともに「活動動詞」の方が習得されやすい。 ②「過去形」では「活動動詞」と「到達動詞」に差はない。
----------	---------------	--------------------------	---------------------	-----	--

2.5.3 まとめとアスペクト仮説の検証に関する研究の問題点

本節では、「習慣」や「パーフェクト」といった「テイル」の特定の用法における動詞タイプの使用に着目したものと、「テイル」の用法を区別せずに「テイル」の使用された動詞タイプの使用状況を調査したものの2つの側面から、「アスペクト仮説」の普遍性を検証した研究を概観してきた。これらの研究は動詞自体の語彙的意味特徴の中に「動的」、「限界的」、「瞬間的」の3つの意味要素があるかどうかによって動詞を「活動動詞」(例えば、「走る」「歩く」)、「達成動詞」(例えば、「作る」「壊す」)、「到達動詞」(例えば、「落ちる」「死ぬ」)、「状態動詞」(例えば、「ある」「いる」)といった動詞タイプに分類し、日本語のテンス・アスペクトの習得と動詞の語彙的アスペクトとの相関性について検討している。菅谷(2002)を除く殆どの研究では、「活動動詞」のほうが「到達動詞」よりも「テイル」と結びつきやすいという一致した結果が出ている(Shirai 1995, 2002b; Shirai & Kurono 1998; shibata 1999; 三村 1999ab; 小山 2004; 塩川 2007; 簡・中村 2009; 孫ほか 2010; 簡 2012)。さらに、文末と連体修飾節のいずれの位置においても「テイル」と「活動動詞」、「タ形」と「到達動詞」との結び付きが強い、という「アスペクト仮説」の普遍性を検証できることが報告されている(塩川 2007)。ただし、「テイル」と「活動動詞」との結び付きの強さはテンスの影響を受け、現在を表す「テイル形」に比べると、過去を表す「テイタ形」の場合には「活動動詞」と「到達動詞」の間に正答率の差異が縮まっていることが提示され

ている(小山2004)。一方、「習慣」や「パーフェクト」といった特定の用法についての調査結果では、同じ用法でも学習者の「テイル」の使用は動詞の語彙的アスペクトに影響されることが指摘されている(三村1999b; Shirai 2002b; 簡2012)。

これらのことからわかるように、「アスペクト仮説」の普遍性について数多くの研究により詳細に検証されている。しかし、これまでの「アスペクト仮説」の検証に関する研究には以下の5つの問題点がある。第一に、三村(1999ab)、小山(2004)、塩川(2007)、簡(2012)以外の研究では、初級レベルの日本語学習者のみを対象とした場合が多く、異なるレベルの学習者の習得状況の比較検討が欠如しているために、「テイル」の習得過程における学習者の日本語レベルの違いによる影響は判断できていない。第二に、Shirai(2002b)、菅谷(2002)、簡・中村(2010)以外の研究では、「活動動詞」と「到達動詞」の2動詞の比較のみに注目しているために、「テイル」の全体的な使用状況が反映されていない。第三に、学習者の使用した動詞タイプ別のテンス・アスペクト形式(タ形、テイル形、テイタ形)の割合のみを調査したものが多く、動詞タイプ別の正誤用の使用状況、および誤用パターンについて論じられたのは三村(1999a)、菅谷(2002)、小山(2004)、簡・中村(2010)のみである。第四に、主に文末の習得状況に焦点が置かれ、文末と連体修飾節の違いについて殆ど論じられておらず、文末と連体修飾節における動詞の語彙的アスペクトの影響を論じたのは、塩川(2007)しか見当たらない。しかし、2.5.2.1節で述べたように、塩川(2007)では文末と連体修飾節の両位置における動詞タイプ別の「テイル形」と「タ形」の選択傾向の考察に止まっており、両位置における正・誤用について更なる検討が見られない。そのため、文末と連体修飾節における語彙的アスペクトの影響についての議論はまだ不十分である。第五に、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる影響を検討したものはまだ少なく、Shirai(2002b)、小山(2004)、簡(2012)のみである。ただし、このうちShirai(2002b)と簡(2012)では動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用

率（選択率）しか提示されておらず、正・誤用について言及されていない。一方、小山（2004）では「活動動詞」と「到達動詞」の2つしか検討されておらず、得られた結果は他の動詞タイプにも適応できるかには疑問を持つ。このように、「テイル」の習得過程における動詞の語彙的アスペクトの影響に対する調査はまだ不十分であるため、更なる検討をする必要がある。

2.6 「テイル」の用法の習得に関する研究

次に、「テイルの」諸用法の習得難易度を検討した研究を概観する。「テイル」の用法を検討する研究は大別としては、基本的用法とされている「動作の持続」と「結果の状態」に焦点を置き、この2用法の習得難易度を比較したものと、基本的用法に加えて派生的用法も検討したものがある。従って、以下ではまず、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の比較を行った研究を検討する。次は「テイル」の様々な用法の習得難易度を検討した研究を取り上げる。

2.6.1 「動作の持続」と「結果の状態」の比較検討

黒野（1995）では、中国語、ベンガル語、マラーティー語などの言語を母語とする初級日本語学習者17名を対象に、来日後3、6、9ヶ月目の3つの時点で文法性判断テスト²⁶を実施し、「テイル形」における「動作の持続」と「結果の状態」の習得について検討している。分析の結果、「結果の状態」（正答率が21.4%→28.6%→21.4%）の用法では3つの調査時点とも正用率が低く、3割さえ超えていないのに対し、「動作の持続」（正答率が26.2%→47.1%→52.4%）の用法では、学習者の滞日期間が長くなると共に正用率が上がっている。このことから、「結果の状態」は「動作の持続」の用法より習得が困難であることが判明した。さらに、各調査時点における「テイル形」

²⁶ 黒野（1995）での文法性判断テストの回答の仕方としては「適格」、「判断できない」、「不適格」の3つで、各問題における動詞のル形、タ形、テイル形、テイタ形の4つの形式の容認性を判断してもらう。

の正答率とそれ以外の選択肢の回答との比較により、学習者は「動作の持続」の用法について「ル形」→「ル形」と「テイル形」→「テイル形」、「結果の状態」の用法について「ル形」→「タ形」→「テイル形」の3つの段階を経て習得していくと推測している。

続いて、Shirai & Kurono (1998) の調査2では、黒野 (1995) と同じ対象者と調査方法で「テイル形」と「テイタ形」における「動作の持続」と「結果の状態」の習得難易度について更なる比較検討を行っている。その結果、「テイル形」でも「テイタ形」でも、いずれも「動作の持続」（「テイル形」の正用率が 55.9% → 75.3% → 69.4% ; 「テイタ形」の正答率が 29.4% → 40.2% → 52.9%）のほうが「結果の状態」（「テイル形」の正答率が 29.4% → 31.4% → 25.9% ; 「テイタ形」の正用率が 30.6% → 27.1% → 27.1%）よりも正確的に使用されたことが示されている。また、「動作の持続」では「テイタ形」よりも「テイル形」のほうが正答率が高い、というテンスの違いによる影響が見られたの対し、「結果の状態」では「テイル形」と「テイタ形」の間に明確な差異が見られない。

また、許 (1997) の調査1では、日本と台湾にいる中・上級²⁷台湾人日本語学習者各30名を対象に、口頭での絵の描写タスクを実施し、学習者の習得環境の違いが「動作の持続」と「結果の状態」の習得にいかなる影響を与えるのかについて検討した。分析の結果、学習者の習得環境 (JSL・JFL) にかかわらず、いずれも「結果の状態」よりも「動作の持続」のほうがより習得されやすい、という共通する結果が得られた。また、この2用法で使用された動詞別の正用率を見ると、「動作の持続」では全体的に正用率が高く、動詞別の違いが見られなかったが、「結果の状態」では使用された動詞は正用率の高いもの (80%~100%) と低いもの (60%以下) の2つのグループに分けられ、それは中国語の影響による可能性が示唆されている。「結果の状態」に対応

²⁷ 許 (1997) での学習者のレベル判断は、クローズテストで 60%以上正解した人を中級レベルに達していると判断している。

する中国語のアスペクト表現には、変化の結果の状態を表す非完成相の「著」（例：彼は座っている—他座「著」）と、変化そのものを表す完了の「了」（例：ガラスが割れている—玻璃破「了」）の2つがある。学習者は「著」が「結果の状態」の「テイル」、「了」が「タ形」と対応していると認識していたため、中国語で「了」と訳される動詞（例えば、「落ちる」、「死ぬ」など）に「テイル」を使わずに「タ形」を使ってしまった、という誤用が多く見られ、その誤用率も中国語で「著」と訳される動詞（例えば、「止まる」、「閉まる」など）よりも高かったと指摘している。

菅谷（2002）の調査2では、自然習得をしてきた学習者2名（英語とフランス語母語話者）を対象に、2枚の絵を見せて違っている箇所を口頭で指摘するタスクを行った。その結果、両者はともに「結果の状態」（英語母語話者が82%、フランス語母語話者が30%）より「動作の持続」（英語母語話者が100%、フランス語母語話者が42%）の正用率が高かった。このことから、「テイル」の習得については、「動作の持続」が「結果の状態」の用法より先行していると示されている。

以上の研究では、学習者の習得環境（JSL・JFL、自然習得・教室学習）に関係なく、「テイル」の習得についていずれも「結果の状態」より「動作の持続」のほうがより習得されやすい、という一致した結果が得られている。しかし、これらの研究ではいずれも母語に進行形のある学習者を調査対象としているため、「動作の持続」の用法が先に習得されるのは母語からの正の転移である可能性があるとも指摘されている

（Shirai & Kurono 1998 ; Shirai 2002a）。そこで、母語の影響を検証するため、菅谷（2003、2004a）と Sugaya & Shirai（2007）の一連の研究では、母語の進行形の有無が「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の習得難易度にいかなる影響を与えるのかについて更なる検討を行った。

まず、菅谷（2003）では、テルグ語母語話者（L1 進行形あり、教室学習中心）とロシア語母語話者（L1 進行形なし、自然習得中心）の2名を対象に、日本語母語話者との一対一のインタビューで得られた発話データを分析資料とし、「動作の持続」と「結

果の状態」の使用状況について縦断的（テルグ語母語話者：17ヶ月間で33回、ロシア語母語話者：10ヶ月間で27回）に考察した。その結果、テルグ語母語話者は、全体的に「テイル」の使用頻度が少なかったが、「動作の持続」のほうが動詞の異なり語数と正用率とも「結果の状態」より高く、出現も早かった。一方、自然習得してきたロシア語母語話者は、調査の開始時点から「動作の持続」と「結果の状態」の両方を様々な動詞で多く用いており正用率も高かった、というテルグ語母語話者と異なる使用状況が見られた。ただし、この結果についてロシア語に進行形はなく、「動作の持続」の習得に母語からの正の転移は得られないため、「動作の持続」と「結果の状態」の使用に差はないと言えるかどうか疑問が残る。なぜなら、この調査はわずか2名の学習者を対象としたケーススタディなので、対象者間の個人差が大きく一般化しにくい。また、菅谷（2003）自身で指摘したように、2名の対象者は母語のみならず習得環境（教室学習・自然習得）も異なっているため、母語の他に学習条件が影響した可能性もある。この点について、さらに日本語母語話者の会話における「テイル」の使用例を分析した西・白井（2004）²⁸の調査結果に基づき、教室学習中心であるテルグ語母語話者に比べて、自然習得してきたロシア語母語話者は日々より大量の「結果の状態」のインプットが得られ、習得が促進されたのではないかと推定されている。

菅谷（2003）を踏まえ、菅谷（2004a）と Sugaya & Shirai（2007）の調査1では、ACTFL-OPIで中上級と判断された、母語に進行形のない学習者（ドイツ語、ロシア語、ブルガリア語母語話者）35名と進行形のある学習者（英語母語話者）26名を対象に、母語に進行形の有無が「テイル」の習得にどう影響するかについて更なる検討を行った。また、学習条件の影響を統制するため、調査対象となる学習者は全員が教室学習経験を有する対象を選んだ。四肢選択式（複数回答）の文法テスト²⁹を行った結果は、

²⁸ 西・白井（2004）では『主婦の一週間の談話資料』（井出1984）を用いて日本語母語話者の会話における「テイル」の使用例を分析した結果、母語話者の「テイル」の使用については「動作の持続」（29.9%）よりも「結果の状態」（38.2%）の使用率が高かったと提示されている。

²⁹ 菅谷（2004a）と Sugaya & Shirai（2007）の調査1で実施された文法テストの問題文は計61問である。このうち、分析データとして用いられた「動作の持続」と「結果の状態」の問題文はそれぞれ9問で

表2-6 のようになった³⁰。

「動作の持続」と「結果の状態」の得点を比較した結果、全体的に「結果の状態」よりも「動作の持続」の得点が高かったことがわかった。2用法の得点には母語による差が見られなかったが、上下位群によって異なることが観察された。上下位群別の得点を見ると、下位群では「動作の持続」の得点が「結果の状態」よりも高くなっていった。上位群は両用法とも下位群よりも得点が高かったが、「動作の持続」と「結果の状態」の差は見られなかった³¹。これらの結果から、母語の進行形の有無にかかわらず、「動作の持続」の用法が「結果の状態」の用法より先に習得されることがわかり、菅谷（2003）と異なる結果が得られた。

表2-6 「動作の持続」と「結果の状態」における選択語形の割合（%）

グループ	動作の持続				結果の状態				
	ル	タ	テイル	テイタ	ル	タ	テイル	テイタ	
-L1進行	上位群 (n=15)	2.2	5.2	94.8	3.0	2.2	19.3	91.9	4.4
	下位群 (n=20)	8.3	6.7	85.0	3.9	2.8	30.0	67.8	8.3
+L1進行	上位群 (n=12)	1.9	8.3	97.2	2.8	6.5	25.0	93.5	2.8
	下位群 (n=14)	8.7	11.9	83.3	6.3	4.8	30.2	67.5	7.9

(菅谷2004a : 61 より)

また、用法別の選択語形を見ると、「動作の持続」の用法では「テイル形」以外の語形の選択割合は全体的にあまり高くないのに対し、「結果の状態」の用法では「タ形」の選択率が比較的高かったが、習得が進むと共に「タ形」が選択された比率は減少する傾向があると示されている。このうち、「結果の状態」の用法では「テイル形」だけではなく、「タ形」も多く選ばれたことから、学習者の形と意味とのマッピング

ある。残された問題の中で、完成相の用法に関する33問の問題文での得点を上・下位群分けの基準とし、このうちの29問以上を正答した学習者を上位群、それ以外の学習者を下位群に分けた。

³⁰ 「+L1進行」は母語に進行形があること、「-L1進行」は母語に進行形はないことを示す。

³¹ 上位群については天井効果によって分析の結果が正確ではない可能性がある指摘されている（菅谷2004 : 60）。

(from-meaning mapping)³²のメカニズムが「テイル」の習得に影響した可能性がある
と示唆されている。要するに、「動作の持続」は現在における進行中の動作を表す形
式として「テイル形」(例：彼は今本を読んでいる)に限られているのに対し、「結
果の状態」は現在における結果の持続を表す形式として「テイル形」(例：財布が落
ちている)と「タ形」(例：財布が落ちた)の両方とも可能である。そのため、学習
者は「動作の持続」と「結果の状態」を使用するにあたって、「テイル形」という「形」
を「動作の持続」の意味にマッピングしやすく、「結果の状態」にマッピングしにく
いと推定されている。また、形と意味とのマッピングの複雑さによる影響の他に、こ
の2用法の習得順序に関わる要因としてインストラクションの影響についても取り上
げられており、インストラクションの有無と教室での導入順序の2つの側面から詳細
に議論されている。このように、「動作の持続」の用法が「結果の状態」の用法より先
に習得されるという習得順序が母語の進行形の有無よりもむしろ形と意味とのマッピ
ングの複雑さやインストラクションなどの影響により形成されていくという可能性を
示した点は興味深い。

続いて、Sugaya & Shirai (2007) の調査2では、菅谷 (2004a) と Sugaya & Shirai (2007)
の調査1で文法テストを受けた59名³³の学習者(母語に進行形のない学習者33名と
進行形のある学習者26名)を対象に、口頭での絵の描写タスクを実施した。得られた
結果を菅谷 (2004a) と Sugaya & Shirai (2007) の調査1と照らし合わせ、「テイル」
の習得における母語の役割を検討した。その結果、発話データで使用された「動作の
持続」と「結果の状態」の延べ語数と異なり語数を比較すると、「結果の状態」の使
用には、母語と上下位群にかかわらず延べ語数と異なり語数の間に大きく差が出てい
るが、「動作の持続」の使用にはこのような差異は見られなかった。このことから、

³² 第二言語の習得過程には学習者が1つの形式に1つの意味をマッピングさせながら言語を習得してい
く傾向があるとされている(One to One Principle, Andersen 1984)。

³³ 菅谷 (2004a) と Sugaya & Shirai (2007) の調査1で文法性判断テストを受けた学習者数は61名である
が、このうちの2名(ドイツ語とロシア語母語話者、いずれも下位群)は録音の失敗で Sugaya & Shirai
(2007) の調査2での対象者から外した。

同じ動詞（例えば、立つ、座る）を頻繁に用いて「結果の状態」を表現する学習者が多いことがわかった。また、各グループにおける「動作の持続」と「結果の状態」の正用率（延べ語数で）は表2-7のようになった。

上下位群別の正用率を比較すると、下位群では「-L1 進行」の「テイル」使用には「動作の持続」と「結果の状態」の間に顕著な差はないのに対し、「+L1 進行」には、「結果の状態」よりも「動作の持続」の正用率が極めて高い、という母語による差異が見られた。換言すれば、「-L1 進行」に比べて「+L1 進行」の「動作の持続」の習得がより早く進むことがわかった。

表2-7 「動作の持続」と「結果の状態」の正用率

グループ	動作の持続		結果の状態		
	平均	SD	平均	SD	
-L1進行	上位群 (n=15)	97.9	6.6	91.7	11.3
	下位群 (n=18)	74.1	33.2	72.2	23.8
+L1進行	上位群 (n=12)	99.4	2.0	95.3	9.1
	下位群 (n=14)	91.1	24.4	71.8	27.7

(Sugaya & Shirai 2007 : 22 より)

一方、上位群では、どの母語話者グループでも両用法とも高い正用率となっているが、「動作の持続」のほうが「結果の状態」よりも有意に高かった。これらのことから、母語の進行形の有無は下位群の「テイル」の習得のみに影響を与え、上位群の習得には影響しないことが判明した。これは菅谷 (2004a) と Sugaya & Shirai (2007) の調査1と異なる結果である³⁴。この結果に基づき、母語に進行形がある学習者は、母語からの正の転移が働いているため、早い段階で「動作の持続」を使いこなすことができるが、母語に対応する形式のない「結果の状態」の習得が遅れている。一方、母語に進

³⁴ 菅谷 (2004a) と Sugaya & Shirai (2007) の調査1では、母語の進行形の有無に関係なく「動作の持続」の習得が「結果の状態」に先行しているという結果が得られた。

行形のない学習者は、母語に「動作の持続」と対応する形式がないため、「動作の持続」と「結果の状態」の習得が同時に発達していくと指摘されている。しかし、もしこの仮定が正しければ、母語に進行形のない上位群でも「動作の持続」と「結果の状態」の習得に差異はないはずだったが、実際に進行形のある学習者と同様に「動作の持続」より「結果の状態」の習得が遅れているのはなぜか、という問題が残る。

一方、これらの研究とはやや視点を変え、崔 (2009) では、ライヘンバッハの SRE 理論³⁵の観点から、現在・過去・未来テンスの「動作の持続」と「結果の状態」の 2 用法の習得状況を検討している。中国語母語話者 84 名 (上位群 28 名、中位群 25 名、下位群 25 名³⁶) を対象に、四肢選択一の文法テストを行い、正答率が 80%以上のものを習得したと見なし、それに基づいて上・中・下位群の「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況は、表 2-8 のように太線で区切られている。

表 2-8 SRE 表示から見た各用法の正答率

用法	SRE表示	形式	テンス	下位群	中位群	上位群
動作の持続	S=E=R	テイル	現在	32.0%	86.3%	100%
	E=R-S	テイタ	過去	14.0%	54.0%	84.8%
	S-E=R	テイル	未来	26.0%	40.3%	87.5%
結果の状態	E-S=R	テイル	現在	20.0%	39.8%	82.1%
	E-R-S	テイタ	過去	13.3%	31.2%	42.9%
	S-E-R	テイル	未来	24.0%	14.0%	48.8%

注：「-」は左側にあるものが右側にあるものに先行すること、「=」は両者が同時であることを表す。

(崔2009：86より)

³⁵ ライヘンバッハ (Reichenbach) は、Speech Time (S)、Event Time (E)、Reference Time (R) という 3 つの時の概念を使って、各言語のテンス・アスペクトを説明している。このうち、Speech Time とは文を発話する時点で、常に「現在」に置かれる。Event Time とは出来事が起こった時点であり、また Reference Time とは文で表されている出来事をいつ認識したかの時点である (崔 2009 : 81)。これを日本語に応用すると、「動作の持続」では「彼が走っている」のように E 時 (走る) は常に R 時 (現在テンスの場合、S 時と同時に) を跨ぐため、「E=R」で表され、「結果の状態」では「鍵が落ちている」ように E 時 (落ちる) は常に R 時 (現在テンスの場合、S 時と同時に) に先行するため、「E-R」で表されている。

³⁶ 崔 (2009) では、上・中・下位群の分けは文法性判断テストでの点数によって 13 点以下を下位群、18~20 点を中位群、25 点以上を上位群とした。

表2-8に示すように、中国語母語話者にとって、いずれのテンスにおいても、どの群でも「動作の持続」の用法は「結果の状態」よりも習得が容易であることが明らかとなっている。このうち、「動作の持続」の用法において、過去（全体的正答率が52.4%）と未来（全体的正答率が51.8.4%）テンスの正答率には大きな差が見られなかったが、両者とも現在テンス（全体的正答率が74.7%）よりも正答率が低かった、というテンスによる習得難易度の違いが見られた³⁷。さらに、表2-8で示す現在・過去・未来テンスにおける各用法の正答率を見ると、「現在テンスにおける動作の持続」(S=E=R)の習得は最も早く、中位群（正答率が86.3%）でも習得できた。次いで「過去テンスにおける動作の持続」(E=R-S)、「未来テンスにおける動作の持続」(S-E=R)、「現在テンスにおける結果の状態」(E-S=R)の3つであるが、習得できたのは上位群のみだった。これらの高い正答率に対し、「過去テンスにおける結果の状態」(E-R-S)と「未来テンスにおける結果の状態」(S-E-R)のいずれにおいても正答率は上位群でも極めて低かった。これらの結果を発話時(S時)、観察時(R時)、出来事時(E時)の3つの関係から考察すると、観察時(R時)は出来事時(E時)と発話時(S時)のどちらも一致していない場合の習得が遅れていることが判明した。「テイル」の習得の初期段階で、学習者は出来事を発話時(S時)と出来事時(E時)の関係でしか表現できないため、観察時(R時)は「結果の状態」(E-R)のように出来事時(E時)、或は過去テンス(R-S)のように発話時(S時)と一致していない場合、学習者にとってまだ処理が行き届いておらず、習得が困難であると指摘されている。このように、日本語のテンス・アスペクトの習得状況をSRE表示の手法でわかりやすく解釈した点は興味深い。

以上、「テイル」の基本的用法とされている「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の習得難易度を検討した研究を見てきた。各研究の概要を表2-9のようにまとめる。菅谷(2003)とSugaya & Shirai(2007)を除けば、これまでの研究では学習者の

³⁷ 崔(2009)では、「結果の状態」におけるテンスの影響について「動作の持続」のような比較検討が見られない。

日本語レベルと母語にかかわらず、いずれも「動作の持続」の用法が「結果の状態」より先に習得される、という一致した結果が出ている。一方、菅谷（2003）と Sugaya & Shirai（2007）の調査2では、母語に進行形のない学習者（下位群）の「動作の持続」と「結果の状態」の習得に明確な差はない、という異なる結果が得られた。

表2-9 「動作の持続」と「結果の状態」の習得難易度を比較した研究

研究者	調査対象	調査方法	判断基準	調査結果
黒野（1995）	初級JSL17名 （中国、ベンガル語など）	縦断的（来日3、6、9ヶ月目の3回）・文法性判断テスト（三段階の容認性判断）	正答率	「テイル形」は「動作の持続」のほうが習得されやすい。
許（1997）	中・上級JSLとJFL各30名（中国語）	横断的・発話データ（絵の描写タスク）	正用数	JSL、JFLともに「動作の持続」のほうが習得されやすい。
Shirai & Kurono（1998）	初級JSL17名 （中国、ベンガル語など）	縦断的（来日3、6、9ヶ月目の3回）・文法性判断テスト（三段階の容認性判断）	正答率	「テイル形」と「テイタ形」はともに「動作の持続」のほうが習得されやすい。
菅谷（2002）	OPI初級上自然習得者2名 （英語とフランス語）	横断的・発話データ（絵の描写タスク）	正用率	「動作の持続」のほうが先に習得される。
菅谷（2003）	JSL2名（「+L1進行」のテルグ語話者、「-L1進行」のロシア語話者）	縦断的（テルグ語：17ヶ月間33回、ロシア語：10ヶ月間27回）・発話データ（インタビュー）	出現順序と正用率	①テルグ語話者：「動作の持続」の方が習得されやすい。 ②ロシア語話者：2用法の習得に差はない。

菅谷 (2004a)、 Sugaya & Shirai (2007)	OPI 中上級 JSL61名 (「-L1 進行」が35名 と「+L1進行」 が26名)	横断的・文法性 判断テスト (複 数回答式)	正答数	母語にかかわらず、「テイル形」 は「動作の持続」のほうが習得 されやすい。
Sugaya & Shirai (2007)	OPI 中上級 JSL59名 (「-L1 進行」が33名 と「+L1進行」 が26名)	横断的・発話デ ータ (絵の描写 タスク)	正用率	① 上位群では母語に関係なく 「動作の持続」のほうが習 得されやすい。 ② 下位群では、「-L1進行」よ り「+L1進行」の「動作の持 続」の習得が早く進む。
崔 (2009)	JSL84名 (中国 語)	横断的・文法性 判断テスト (四 肢択一)	正答率	現在・過去・未来のいずれのテ ンスにおいても「動作の持続」 のほうが習得されやすい。

2.6.2. 「テイル」の用法別の習得難易度

次に、「テイル」の基本的用法とされている「動作の持続」と「結果の状態」に加えて派生的用法の習得難易度も検討した研究を取り上げる。ただし、これまでの「テイル」の用法別の習得難易度を検討した研究では、「テイル」の多様な用法について研究者によって用法の名称と分類方法が異なっているため、各研究の調査結果を比較する際、異なる用法の名称の使用で混乱しやすい。それを避けるため、先行研究における「テイル」の用法別の名称を整理する必要がある。従って、「テイル」の用法別の習得難易度の検討に関する先行研究に入る前に、これらの研究で用いられた「テイル」の用法の名称について整理して検討する。

2.6.2.1 用法の名称の整理

先行研究における各用法の名称と本研究で用いられた用法の対応を、表 2-10 のようにまとめておく。以下、各研究で用いられた用法の名称について例を挙げて説明する。

まず、「動作の持続」に対応する用法の確認から始める。表 2-10 に示すように、許 (2000、2002、2009) と菅谷 (2004b) では動作・出来事が継続する時間的長さによって進行中の動作 (「運動の持続」) を(53)のように長期的動作 (+長期) と、(54)のように一時的動作 (-長期) との2つの下位分類に分けている。ただし、後述するように、いずれの調査においてもこの2つの習得に明確な差は見られなかったため、本研究では継続時間の長さにかかわらず、一括して「動作の持続」とした。

(54) 弟は今香港に住んでいます。

(55) 大学院で政治を勉強しようと思っています。

((54) (55) のいずれも許 2000 : 22)

また、許 (1997) では、砂川 (1986) の分類を参考に「所属・職業」を設定している。調査文³⁸を見ると、(56) ~ (58) のように現在の所在、所属、職業などを表すもので、いずれも長期的な動作を表す「動作の持続」の用法に相当するものである。

(56) 父は地方銀行の支店長をしている。

(57) 「お住まいはどちらですか。」

「この近くのアパートに住んでいます。」

(58) 「お仕事は何ですか。」

「都内のデパートにつとめている。」

((56) ~ (58) のいずれも許 2005 : 49-50)

その他に「動作の持続」に相当する用法には、黒野 (1998) での「現在、ある現象

³⁸ 許 (1997) で用いられた調査文は各用法に3問ずつあるが、提示されたのは各用法に1問しかない。そのため、ここで挙げられた調査文は許 (1997、2000、2002 など) の一連の研究を再録した許 (2005) から引用したものである。以下同様。

が進行していることを表すもの」、許（2000、2009）と菅谷（2004b）での「状態の変化」がある。まず、許（2000、2009）と菅谷（2004b）で用いられた「状態の変化」は、「増えている」、「多くなっている」、「慣れてきている」のように動詞自身の語彙的意味や補助動詞の関係で、その状態が変化しつつあることを表す用法であることを指摘している（許 2000 : 22）。つまり、これは（59）のように事態の変化を表す補助動詞「テイク」・「テクル」と「テイル」との組み合わせ、或は（60）のように「だんだん」、「どんどん」、「徐々に」など変化の速度、変化の進み具合を表す副詞的成分との共起で、変化の進行過程を表し、いずれも「動作の持続」に相当するものである。

(59) 日本の生活にも一応慣れてきています。（許 2000 : 22）

(60) この問題がだんだん深刻になっています³⁹。（許 2005 : 77）

また、黒野（1998）ではいかなる「テイル」の用法を設定して調査を行ったかが明示されていないが、「現在、ある現象が進行していることを表すもの」として取り上げられた学習者の使用例⁴⁰から見ると、（61）のように前掲の「状態の変化」の用法と一致したもので、同じく「動作の持続」の用法として扱われている。

(61) そして熱帯の森はだんだんなくなっている。（黒野 1998 : 121）

次に、「結果の状態」に相当する用法には、許（1997）での「慣用法」、黒野（1998）での「何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法」、許（2002）での「状

³⁹ 許（2000）では「状態の変化」における学習者の使用例として「この問題が深刻になっています」が挙げられたが、この例は許（1997）を再録した許（2005）では「この問題がだんだん深刻になっています」のように訂正されている。そのため、ここでは許（2005）での例文を引用する。

⁴⁰ 黒野（1998）では各用法について学習者の誤用例しか提示されていないため、以下、黒野（1998）から引用する例文は、黒野による訂正文を用いて原意を損なわない程度に筆者が修正（平仮名を漢字にするなど）したものである。

態の変化の結果」の3つの用法がある。許（1997）では、「慣用法」は（62）のように「テイル」の形で使われている時は、動きのない状態を表す「持っている」「覚えている」「知っている」を指すと指摘されている。一方、黒野（1998）で「何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法」として挙げられている学習者の使用例を（63）に示す。いずれも現在における結果の持続を表す「結果の状態」の用法と同じだと考えられる。

(62) 彼は車を3台も持っている。(許1997:39)

(63) たぶん先生も覚えています。(黒野1998:119)

許（2002）では、相対的な限界性⁴¹を持つ動詞の「テイタ形」は、（64）（65）のように変化の過程を問題とせず、その変化後の状態が基準時（例（64）の「会ったら」、例（65）の「戻ってみると」という時点）まで続くことを表すと指摘しており、これらの動詞の「テイタ形」を「状態の変化の結果」の用法に分類している。ただし、変化の過程を問題とせず、変化で生じた結果の状態に焦点が置かれるという点から見ると、許（2002）の「状態の変化の結果」は許（1997）の「慣用法」と黒野（1998）の「何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法」と同様に、基本的に「結果の状態」と同質だと考えられる。

(64) 3年ぶりに姉の子供に会ったら見間違えるほど大きくなっていた。

(65) きとう多摩川に遊びに行った。忘れ物をしたので、一度家に帰り、また多摩川へ戻ってみると河の水位が上がっていた。

((64) (65) のいずれも許2002:43)

⁴¹ 「増える、増す、減る、上がる、高まる」など、相対的な量や程度の変化を指し示す動詞は、一定の量や程度の変化が限界となるが、さらに変化が進めば、その変化した量や程度がまた新たな限界となる。このような限界を相対的な限界と呼ぶ（須田2000:90）。

また、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法に跨るものに、魚住（1998）の「慣用的用法」、黒野（1998）「テイルの形で状態を表すもの」、許（2002）の「直前までの持続」がある。まず、魚住（1998）の「慣用的用法」と黒野（1998）「テイルの形で状態を表す用法」の2用法は、前述した許（1997）での「慣用法」と同様に特定の動詞が慣用的に「テイル」の形で使用されるものを指す。しかし、このうち「結果の状態」の用法に当たる「持っている」、「知っている」の他に、長期的な「動作の持続」の用法に当たる「住んでいる」も含めている点は許（1997）と異なる。いずれにせよ、菅谷（2005a）が指摘しているように、これらの動詞は実際には、(66)のように「テイル」以外の形式も用いられる場合があるため、慣用的に「テイル」の形で使用されるか否か、判断基準は決して厳密とは言えない。

(66) 荷物は全部持ちました。(菅谷 2005a : 51)

次に、許（2002）は「テイタ形」の独特の用法として「直前までの持続」を設定している。これは発言の直前まで(67)のような動作、(68)のような状態が持続していたことを表す用法である。それぞれ過去における「動作の持続」と「結果の状態」と同じものだと考えられる。

(67) (山下さんは道で偶然田中さんに会って)

山下：ちょうどよかった。山田さんに電話しようと思っていた。

(68) (電話で)

山下：早くからごめんね。もしかして寝ていた。

田中：ううん、大丈夫。

((67) (68) のいずれも許 2002 : 45)

続いて、「パーフェクト」に対応する用法には「経歴・経験」(許 1997、2000、2009 ; 魚住 1998)、「運動効力」(許 2002)、「反実仮想」(許 1997 ; 魚住 1998) の3つが見られる。このうち、「経歴・経験」(許 1997、2000、2009 ; 魚住 1998) と「運動効力」(許 2002) のいずれも (69) ~ (71) のように過去に起こった出来事が現在の状態に何らかの関わりを持っていることを表すものである。これらの用法は本研究で取り上げられた「後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存」(工藤 1995 : 39) という「パーフェクト」の意味と一致する。

(69) その話なら聞いています。(許 2000 : 22)

(70) 私は発表していないんですけど。(魚住 1998 : 102)

(71) きのう、会場についた時、講演会はまだ始まっていた。(許 2002 : 46)

また、許 (1997) と魚住 (1998) で取り上げている「反実仮想」とは、砂川 (1986) の言う「実際にはおこらなかったこと、或は将来おこらないことを、ある条件のもとではおこり得たと仮定する」(p.39) 用法である。工藤 (1997) では、(72) (73) のような事実 (現実) に反する仮定を表す条件文では、非完成相形式「テイル」は基本的意味としての継続性 (動作継続或は結果継続) の意味を表しておらず、完成的意味で使用されることが指摘されている。この点から見ると、「反実仮想」は「パーフェクト」と同質だと考えられる⁴²。

(72) もしあの飛行機に乗っていたら、みんな死んでいたね。(魚住 1998 : 102)

(73) もしあの電車に乗れたら、今頃はもうついている / ついていた。(許 2005 : 44)

⁴² ただし、工藤 (1997 : 63) でも反事実を表す「テイル」形式には、パーフェクト性を特徴づける「結果・効力の現存性」はなく、ひとえに、スル (シタ) 形式と同じく「完成性」だけを表していると指摘されている。

「繰り返し」の用法については「習慣・繰り返し」(許 1997 ; 魚住 1998)、「習慣的に継続している動作あるいは行為を表す用法」(黒野 1998)、「習慣」(菅谷 2004b)といった名称が見られるが、いずれの研究においても (74) (75) のように同一の動作・出来事が反復的に生起することを表すものである。

(74) 彼は最近毎日走っている。(許 1997 : 39)

(75) 毎日テレビを見ています。(菅谷 2004b : 171)

最後に、「単なる状態」に相当する用法には「形容詞的な働き」(許 1997)、「形容詞的働き」(魚住 1998)、「性状 (±可変性)」(許 2000、2002、2009 ; 菅谷 2004b)といった名称が見られる。これらの用法は (76) のように、ものの外見や性質、状態などを表す点で共通している。ただし、許 (2000、2002、2009) と菅谷 (2004b) で用いられている「性状」は、それが (77) のように恒常的状态を意味するものか、それとも (78) のように一時的状態を意味するものかにより、さらに「性状 (-可変性)」と「性状 (+可変性)」の2つに分けられる。ただし、後述する一連の調査においてこの2用法の習得に明確な差はないため、本研究では一括して「単なる状態」としておく。

(76) このナイフは先がとがっています。(魚住 1998 : 102)

(77) 学校と家はけっこう離れています。(許 2000 : 22)

(78) 空気が汚れています。(許 2000 : 22)

表2-10 先行研究における各用法の名称の整理

研究者	用法の分類				
	動作の持続	結果の状態	パフォーマンス	繰り返し	単なる状態
許 (1997)	動作の持続	結果の状態	経歴・経験 反実仮想	習慣・繰り返し	形容詞的な働き
	所属・職業	慣用法			
魚住 (1998)	動作の継続	結果の状態	経歴・経験 反実仮想	習慣・繰り返し	形容詞的働き
	慣用的用法	慣用的用法			
黒野 (1998)	現在ある現象が進行していることを表す用法	何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法		習慣的に継続している動作あるいは行為を表す用法	
	「テイル」の形で状態を表す用法				
許 (2000、2009)	運動の持続 (±長期)	結果の状態	経歴・経験	繰り返し	性状 (±可変性)
	状態の変化	結果の状態			
許 (2002)	運動の持続 (±長期)	結果の状態	運動効力	繰り返し	性状 (±可変性)
	状態の変化	状態の変化の結果			
	直前までの持続				
菅谷 (2004b)	運動の持続 (±長期)	結果の状態	パフォーマンス	習慣	性状 (±可変性)
	状態の変化	結果の状態			
崔 (2011)	動作の持続	結果の状態	パフォーマンス		

注：空白の部分は先行研究に本研究で取り上げたその用法に該当するものはない。

2.6.2.2 用法別の習得難易度

「テイル」の様々な用法の習得難易度について許（1997、2000、2002、2009）の一連の研究では、学習者の習得環境と母語、テンスといった要因の影響を詳細に検討している。まず、許（1997）の調査2では8種類の「テイル」の用法を設定し、日本と台湾の中・上級台湾人日本語学習者各30名を対象に、文末に動詞の形を正しく直して書き込み、文を完成させるクローズタスクを実施した。その結果、台湾で日本語を学ぶ学習者（JFL）よりも、日本で学ぶ学習者（JSL）の平均得点が高いという習得環境による違いが見られた。それにもかかわらず、「テイル」の用法別の習得については学習者の習得環境に関係なく共通した習得難易度が観察された。学習者にとって「テイル」の8種類の用法の難易度は、難しい順に「経歴・経験」、「反実仮想」、「結果の状態」、「動作の持続」、「習慣・繰り返し」、「形容詞的な働き」、「慣用法」、「所属・職業」であることが明らかになった。

しかし、許（1997）の調査2では各用法で調査文が3問ずつ設けられているが、すべての調査文のテンスが統一されていない。8つの用法のうち、「所属・職業」、「慣用法」、「形容詞的な働き」、「経歴・経験」の4つの用法では3問とも「テイル形」（現在テンス）が正答であったのに対し、「動作の持続」の用法では3問とも「テイタ形」が正答であった。また、「習慣・繰り返し」、「反実仮想」、「結果の状態」の3つの用法では「テイル形」が正答となる問題と「テイタ形」が正答となる問題が入り混じっている。「テイル」の習得について現在テンスよりも過去テンスのほうが習得困難であることは、Shirai & Kurono（1998）、小山（2004）、崔（2009）、簡（2012）の一連の調査で既に明示されている。このように、許（1997）で提示された習得順序は、調査文のテンスの要因を統制していないため、用法そのものの影響のみならず、テンスの違いによる影響も受けている可能性があると考えられる。

続いて、許（2000）では許（1997）の問題を踏まえ、現在テンスにおける「テイル形」の習得状況に焦点を当て、異なる母語話者の間に「テイル」の習得における普遍

性が見られるかどうかについて検討した。許 (1997) と異なる 8 つの用法を新たに設定し、KY コーパス⁴³を用いて中国語、韓国語、英語母語話者各 30 名の発話データを分析した。その結果、英語母語話者における「性状 (-可変性)」の習得順序は他の母語話者と違う傾向が見られたが、全体的に「運動の持続 (±長期)」、「性状(+可変性)」、「性状(-可変性)」、「繰返し」、「結果の状態」、「状態の変化」、「経歴・経験」という順序で正用が出現することが提示されている⁴⁴。この結果を基に、許 (2000) は最初に習得される「運動の持続 (±長期)」の意味要素を他の用法と比較することにより、「テイル」の典型的な意味は「現在性」「持続性」「運動性」の 3 つの要素によって形成されると指摘している。そして、「テイル」の用法はこの 3 つの要素が揃うほど習得が早い、というプロトタイプ⁴⁵の観点から各用法の習得難易度を考察した。つまり、この 3 つの要素がすべて揃った「運動の持続 (±長期)」はプロトタイプ性が最も高く、「テイル」の典型的な意味であるため、学習者は「テイル」の習得過程で「運動の持続 (±長期)」の用法から習得していくとする。一方、この 3 つの要素のうち、過去の「運動性」しか残っていない「経歴・経験」はプロトタイプ性が最も低い用法であるため、各用法の中で最も習得が遅いものであると示唆されている。しかし、許 (2000) の調査で得られた「テイル」の用法別の習得順序はプロトタイプ性の高さによる予測とは一致していないところはいくつか見られる。例えば、「性状 (-可変性)」の用法には「現在性」だけがあって「持続性」「運動性」が欠けているにもかかわらず、「運動性」はあるが「持続性」と「現在性」の弱い「繰返し」と、「現在性」「持続性」が揃っている「状態の変化」の 2 用法よりも習得順序がずっと早いという結果が見られた。これ

⁴³ 90 人分の OPI テープを文字化した言語資料である。90 人の被験者を母語別に見ると、中国語、英語、韓国語がそれぞれ 30 人ずつであり、さらに、その 30 人の OPI の判定結果別の内訳は、それぞれ、初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人ずつある。詳細は http://www.opi.jp/shiryu/ky_corp.html を参照。

⁴⁴ 許 (2000) では学習者の「テイル形」の使用の中で、正用率が 100%のもののみを取り出し、習得が早いものから遅いものへと習得順序を示した。

⁴⁵ プロトタイプ (prototype) とは、あるカテゴリーの中で典型的な例として挙げられたものである。人間が知覚、認知した事物について、ある観点から分類することをカテゴリー化 (categorization) と言うが、カテゴリー化によって構成された集合には、代表的なメンバーから周辺的なメンバーまで、典型性のある度合いが異なるメンバーが含まれる (三國・小森 2012 : 226)。

について、許(2000)では「繰返し」と「状態の変化」の2用法は前掲の3つの要素の他に、過去の要素⁴⁶を含むため、「テイル」のプロトタイプから離れており、習得が遅れるのであると説明している。だとすれば、「テイル」の用法別の習得難易度には「現在性」「持続性」「運動性」の3つの要素の有無というプロトタイプ性よりも、むしろそれ以外の要因(認知的負荷、過去の要素など)による影響のほうがより強く関わっているのではないかと思われる。

続いて、許(2002)では、「テイタ形」の習得に焦点を当てた調査を行った。日本と台湾で学ぶ台湾人日本語学習者それぞれ49名、67名を対象に、9つの「テイタ形」の用法に設定し、文末の空欄に適切な動詞の形を書き込んで文を完成させるクローズタスクを実行した。問題文は各用法につき2問ずつあり、2問とも正答すればその用法が習得されていると判断した。2問とも正答した人数の割合は表2-11のようになった。

表2-11 用法別の習得順位と習得順序

用法	習得環境				習得順序
	JSL		JFL		
	習得順位	正答者割合	習得順位	正答者割合	
性状(+可変性)	1	63%	1	24%	Sequence1
運動の持続(+長期)	2	43%	1	24%	
繰返し	3	39%	3	21%	Sequence2
運動の持続(-長期)	3	39%	6	3%	
性状(-可変性)	5	18%	4	6%	
直前までの持続	5	18%	4	6%	
運動効力	7	14%	7	1%	Sequence3
結果の状態	8	10%	8	0%	
状態の変化の結果	9	0%	8	0%	

(許2002:44より)

⁴⁶ 許(2000)はこの2用法の過去の要素について「テイルの「繰返し」は現在という時点に視点を置く「運動の持続」と「性状」と異なり、過去の時点の視点も必然的に含まれている」と「状態変化」を表すテイルは「現在性」「持続性」を揃えているが、過去における状態の変化の開始という過去の要素も含んでいる」(pp.26-27; 下線は筆者)と述べている。

日本での学習者 (JSL) を基準とした「テイタ形」の習得順位と照合すると、台湾での学習者 (JFL) は日本での学習者に比べ、全体的に2問とも正答した人数の割合が低かった。台湾での学習者よりも日本での学習者の正用率が高いことは、許 (1997) の調査と一致している。また、許 (2002) は日本と台湾での学習者の習得順位を、類似性が見られる3つの習得順序 (sequence) に括り両者の用法別の習得順位が多少異なっても、いずれも同じ習得順序を持つと指摘している。このうち、「運動効力」、「結果の状態」、「状態の変化の結果」の3用法が学習者にとって最も習得困難であることがわかった。しかし、同じ習得順序に含まれた用法であっても正答者数の割合 (例えば、Sequence 2における台湾での学習者の「繰返し」(21%) の用法と、「運動の持続 (-長期)」(3%)、「性状 (-可変性)」(6%)、「直前までの持続」(6%) の3用法) には明確な差が見られ、同じ習得順序に一括することができるかどうか、分類基準については更なる検討が必要である。

また、許 (2009) では前掲した一連の研究と視点を変え、連体修飾節における「テイル」の用法別の習得状況に注目して調査を行った。許 (2009) は LARP at SCU⁴⁷ を使用し、3年半にわたってすべての作文データが揃っている6名の台湾人日本語学習者⁴⁸を対象とした。「テイル」の用法を8種類に分け、文末の「テイル」の習得について論じた許 (2005) の結果と照らし合わせ、文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の習得順序が一致するか否かについて縦断的に考察した。その結果、各用法の正用の出現時期の早さと頻度に基づき、連体修飾節における「テイル」は「運動の持続 (±長期)」の用法が最も早く習得されるが、他の用法はあまり現れておらず、文末での「テイル」と一致した傾向は見られなかった、と報告している。しかしながら、許 (2009) の6人のデータに「運動の持続 (±長期)」以外の用法の使用はあまり出現

⁴⁷ LARP at SCU は “Language Acquisition Research Project at Soochow University” の略称で、台湾の東呉大学で作成された作文のコーパスである。詳細は許 (2009) を参照。

⁴⁸ 許 (2009 : 63) は「すべてのデータ揃っている学習者は他にもいるが、テイルのある連体修飾節を使用した文脈が少なく、分析不可能だと判断したため、本研究では取り上げないこととした」と述べている。

していないため、いったいそれらの用法が習得されていないのか、もしくは単に使用されるコンテキストがなかっただけなのか、が判断できない。このように、各用法の比較検討が欠如しているため、連体修飾節においては「運動の持続（±長期）」が最も早く習得される用法であるか否かを検証する必要がある。また、許（2009）では連体修飾節における「テイル」の用法別の正用しか提示されておらず、誤用については議論されていない。

以上、許（1997、2000、2002、2009）の一連の研究を見てきた。これらの研究では許（2009）を除けば、いずれも60人以上を対象とした量的な横断調査であった。次に、少人数を対象とした縦断的な事例調査（魚住1998；黒野1998；菅谷2004b）を中心に検討していく。

魚住（1998）は、7種類の用法を設定し、ロシア人留学生1名を対象に、6ヶ月間の日本語集中コースを修了してから3ヶ月おきに計6回、インタビュー、ストーリーテリング、ロールプレイでの検証を実施した。その結果、「テイル」の正用率は調査期間を通じて6～8割程度を維持しており、誤用率が低かった。また、7種類の用法のうち、「反実仮想」と「形容詞的働き」の2用法の使用は調査期間を通じて見られず、「経験・経歴」の使用は1例しかなかったことが報告されている。「反実仮想」と「形容詞的働き」の2用法以外の使用状況は表2-12であった。

表2-12 各調査時点における用法別の正用率

用法	調査時点						合計
	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	
動作の持続	50%	71.4%	100%	77.8%	100%	75%	79.3%
習慣・繰り返し	25%	88.9%	100%	92.9%	80%	100%	85.4%
結果の状態		0%	90.9%	100%	55.6%	83.3%	78.8%
経歴・経験				100%			100%
慣用的用法	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

注：空白はその用法の使用はなかったこと、0は誤用率が100%であることを示す。

（魚住1998：105より）

調査の結果、「動作の持続」、「習慣・繰り返し」、「慣用的用法」の3用法は、1回目から6回目まで通しての使用が見られた。このうち、「慣用的用法」は調査期間を通じて誤用例が1例も見られず、正用率が100%となっており、各用法の中で最も習得の容易な用法であると考えられる。一方、「動作の持続」、「習慣・繰り返し」、「結果の状態」の3用法の合計の正用率は8割程度で、用法間にあまり差は見られないが、「動作の持続」と「習慣・繰り返し」の2用法は「結果の状態」に比べて正用の出現が早く、使用頻度も高いことから、「動作の持続」と「習慣・繰り返し」の2用法は「結果の状態」よりも習得されやすいと指摘している。

続いて黒野（1998）は3名の留学生を対象に、6ヶ月間の日本語コース終了後の3ヶ月目と12ヶ月目の2回のインタビューデータを分析した。表2-13は黒野（1998）の調査結果を再集計したものである。

表2-13 黒野（1998）の調査結果の再集計

用法	3ヶ月目			12ヶ月目		
	正用	誤用	正用率(%)	正用	誤用	正用率(%)
現在ある現象が進行していることを表す用法	0	2	0	0	8	0
何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法	0	2	0	13	1	92.86
習慣的に継続している動作あるいは行為を表す用法	17	9	65.38	28	1	96.55
「テイル」の形で状態を表す用法	13	0	100	12	0	100

調査の結果、4つの用法のうち、最初の調査時点で正しく用いることができた用法は「習慣的に継続している動作あるいは行為を表す用法」と「住んでいる」、「知っている」、「持っている」の「テイルの形で状態を表す用法」の2つであった。このうち、「テイルの形で状態を表す用法」は調査期間を通じて誤用例が1例も見られないため、「習慣的に継続している動作あるいは行為を表す用法」よりも習得が容易であることが判明した。この用法で誤用が全く起きなかった理由として、学習者の使用した教科

書“A Course in Modern Japanese vol.2”に「住む」、「持つ」、「知る」が「テイル」という形式で用いられるという記述があるため、学習者はこれらの動詞が常に「テイル」と共に使われる単語として覚えているのではないかと推測されている。また、12ヶ月目の調査時点では、上記の2用法の他に「何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法」も使えるようになっていた。これに対し、「現在ある現象が進行していることを表す用法」は調査期間を通じて正用が1例も見られず、誤用も多かったことから、各用法の中で最も習得の困難な用法であると判明した。

菅谷 (2004b) は OPI 判定で初級上と判断された日本語学習者 2 名を対象に、インタビューを行い、許 (2000) の横断調査で提示された習得順序が縦断データにおいても観察されるかどうかを検証した。その結果、許 (2000) の調査とほぼ一致した出現順序が確認された。「運動の持続 (±長期)」は早くから正用が見られ、使用頻度も比較的高くなっており、各用法の中で最も習得されやすいものであった。このうち、「運動の持続 (-長期)」の用法が容易である理由として、2 名の対象者の母語にも進行形があるため母語からの正の転移が習得を促進していた可能性を指摘している。一方、「パーフェクト」では、調査期間を通じて正用が全く見られず、最も習得が難しい用法であると判明した。ただし、正用の出現順序が比較的早い「性状 (±可変性)」でも、使用された動詞は1種類ずつに過ぎなかった。この2用法に比べ、正用の出現順序が比較的遅れる「習慣」では使用された動詞の異なり語数が高かった。このことから、「性状 (±可変性)」はかたまりとして使用されていた可能性が高いとしている。

最後に、魚住 (1998)、黒野 (1998)、菅谷 (2004b) の縦断的な事例調査とは異なり、崔 (2011) では、中国語母語話者 127 名 (上位群 40 名、中位群 42 名、下位群 45 名) を対象に、イラストと説明文を参考に、空白の部分に適切な形の動詞を書き込んで文を完成させるクローズタスクを実行し、SRE 理論の観点から「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」の3つの用法の習得難易度を考察した。その結果は表 2-14 のようであった。

表2-14 現在・過去・未来テンスにおける用法別の正答率

用法	SRE表示	形式	テンス	下位群	中位群	上位群
動作の持続	S=E=R	テイル	現在	97.8%	100%	100%
	S-E=R	テイル	未来	68.9%	77.0%	93.3%
	E=R-S	テイタ	過去	41.5%	58.7%	80.0%
結果の状態	E-S=R	テイル	現在	49.6%	54.8%	76.7%
	S-E-R	テイル	未来	12.6%	11.1%	19.2%
	E-R-S	テイタ	過去	11.9%	13.5%	33.3%
パーフェクト	E-S=R	テイル	現在	22.2%	20.2%	70.0%
	S-E-R	テイル	未来	13.3%	19.0%	25.0%
	E-R-S	テイタ	過去	3.7%	6.3%	30.0%

注：「-」は左側にあるものが右側にあるものに先行すること、「=」は両者が同時であることを表す。

(崔 2011 : 59-61 より)

用法別の正答率を見ると、「テイル」の習得はいずれの用法においても、学習者の日本語レベルが上がるにつれ、正答率が上がることがわかる。3つの用法のうち、いずれのテンス、いずれの群でも「動作の持続」の用法は「結果の状態」と「パーフェクト」の2用法よりも習得が容易であることが判明した。また、現在・過去・未来テンスにおける用法別の習得状況を見ると、「現在テンスにおける動作の持続」(S=E=R)の習得は最も早く、下位群(正答率が97.8%)でも習得できていた⁴⁹。次いで、「未来テンスにおける動作の持続」(S-E=R)が習得される。続いて、「過去テンスにおける動作の持続」(E=R-S)と「現在テンスにおける結果の状態」(E-S=R)の2つの習得が示されたが、習得できたのは上位群だけであった。これらに対し、未来(S-E-R)・過去(E-R-S)テンスにおける「結果の状態」、現在(E-S=R)・過去(E-R-S)・未来(S-E-R)テンスにおける「パーフェクト」はいずれも、上位群でも習得できていなかった。このうち、観察時(R時)が出来事時(E時)と発話時(S時)のどちらにも一致していない場合の習得が遅れることについては、文法性判断テストを用いた崔(2009)と

⁴⁹ 崔(2011)では正答率が75%以上のものを習得と見なす。

一致した結果が得られた。ただし、SRE表示が同じである「結果の状態」と「パーフェクト」の2用法で一致した習得順序が見られなかったのはなぜなのか、という問題が残る。

以上、「テイル」の用法別の習得難易度を検討した研究を見てきた。これまでの研究では、概ね「結果の状態」は「動作の持続」よりも習得が難しく、「パーフェクト」は各用法の中で最も習得の困難なものであるという共通した結果が出ているが、それ以外の用法の習得難易度については各研究によって異なっている。各研究の概要を表2-15のようにまとめる。

表2-15 「テイル」の用法別の習得難易度を検討した研究

研究者	調査対象	調査方法	判断基準	調査結果
許 (1997)	中・上級JSLとJFL各30名(中国語)	横断的・文法テスト(クローズタスク)	正答率	「テイル」の習得順序： ①所属・職業、②慣用法、③形容詞的な働き、④習慣・繰り返し、⑤動作の持続、⑥結果の状態、⑦反実仮想、⑧経歴・経験
魚住 (1998)	JSL1名(ロシア語)	縦断的(18ヶ月間6回)・発話データ(インタビューなど)	正用の出現順序と正用率	「テイル」の習得順序： ①慣用的用法、②習慣・繰り返し、動作の持続、③結果の状態
黒野 (1998)	JSL3名(ハンガリー、タガログ、ロシア語)	縦断的(9ヶ月間2回)・発話データ(インタビュー)	正用率	「テイル」の習得順序： ①「テイル」の形で状態を表す用法、②習慣的に継続している動作あるいは行為を表す用法、③何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態を表す用法、④現在ある現象が進行していることを表す用法

許 (2000)	OPI初級～超級学習者90名 (中国、韓国、英語各30名)	横断的・発話データ (KYコーパス)	正用の出現順序	「テイル形」の習得順序： ① <u>運動の持続</u> (±長期)、②性状 (+可変性)、③性状 (-可変性)、④ <u>繰返し</u> 、⑤ <u>結果の状態</u> 、⑥ <u>状態の変化</u> 、⑦ <u>経歴・経験</u>
許 (2002)	JSL49名とJFL67名 (中国語)	横断的・文法テスト (クローズタスク)	正答率	「テイタ形」の習得順序： Sequence 1 : 性状 (+可変性)、 <u>運動の持続</u> (±長期) Sequence 2 : <u>繰返し</u> 、 <u>運動の持続</u> (-長期)、性状 (-可変性)、直前までの持続 Sequence 3 : <u>運動効力</u> 、 <u>結果の状態</u> 、 <u>状態の変化の結果</u>
菅谷 (2004b)	OPI初級上JSL2名 (マラティ、テルグ語)	縦断的 (マラティ語：9ヶ月間18回、テルグ語：17ヶ月間33回)・発話データ (インタビュー)	正用の出現順序	「テイル」の習得順序： ① <u>運動の持続</u> (±長期)、②性状 (+可変性)、③性状 (-可変性)、④ <u>習慣</u> 、⑤ <u>結果の状態</u> 、⑥ <u>状態の変化</u> 、⑦ <u>パーフェクト</u>
許 (2009)	JFL 6名 (中国語)	縦断的 (36ヶ月間33回)・作文データ (コーパス)	正用の出現順序	連体修飾節における「テイル」の習得は「 <u>運動の持続</u> (±長期)」が最も早い。
崔 (2011)	JFL 127名 (中国語)	横断的・文法テスト (クローズタスク)	正答率	「テイル」の習得順序： ① <u>動作の持続</u> 、② <u>結果の状態</u> 、③ <u>パーフェクト</u>

注：___は「動作の持続」、___は「結果の状態」、□は「パーフェクト」に相当する用法である。

2.6.3 まとめと「テイル」の用法の習得に関する研究の問題点

本節では「テイル」の用法の習得に関する研究を概観してきた。これらの研究は「テイル」の表す意味を下記 (79) ~ (83) のように「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰返し」、「単なる状態」などの用法に分類し、各用法の習得難易度

について比較検討を行っている。

- (79) 太郎は今昼ご飯を食べている。(= (1) 動作の持続)
- (80) 窓が開いている。(= (2) 結果の状態)
- (81) 太郎はすでにうどんを三杯も食べている。(= (3) パーフェクト)
- (82) 太郎は毎日うどんを食べている。(= (4) 繰り返し)
- (83) 彼の作品が優れている。(= (5) 単なる状態)

このうち、基本的用法とされている「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の比較検討については、概ね「動作の持続」よりも「結果の状態」のほうが習得困難であるとされている(黒野 1995 ; 許 1997 ; Shirai & Kurono 1998 ; 菅谷 2002、2003、2004a ; 小山 2004 ; Sugaya & Shirai 2007 ; 崔 2009)。また、学習者において、「結果の状態」を表す場合に「テイル形」を使うべきところで過去の「タ形」を用いてしまう「非使用」の傾向が報告されている(黒野 1995 ; 許 1997 ; 菅谷 2004a ; 小山 2004)。さらに、「結果の状態」より「動作の持続」が先に習得されるのは、学習者の母語に関係なく、普遍的な習得順序であることが指摘されている(小山 2004 ; 菅谷 2004a)。ただし、すべての調査がこれらの結果を強く支持しているわけではない。母語の役割を検討した菅谷(2003)とSugaya & Shirai(2007)の一部の調査は、母語に進行形のない学習者では、「動作の持続」と「結果の状態」の習得には明確な差がなく、理由として母語の影響を指摘している。母語に進行形がある学習者が「結果の状態」より「動作の持続」を早く使いこなすことができる理由として、母語からの正の転移の可能性を示唆している。また、基本的用法に加えて派生的用法も検討したものでは、各用法の習得難易度はそれぞれの研究によって異なっているものの、概ね「動作の持続」は「結果の状態」よりも習得されやすく、「パーフェクト」が各用法の中で最も習得困難であるという結果が得られている(許 1997、2000、2002 ; 魚住 1998 ; 菅谷 2004b ; 崔 2011)

50。

以上からわかるように、「テイル」の用法別の習得難易度について、多くの研究で詳細に論じられている。しかし、これまでの「テイル」の用法の習得に関する研究には4つの問題点がある。第一に、「テイル」の用法の分類基準が明示されていない場合が多く、各用法の相違点を判別することは難しい。例えば、許(1997)の「慣用法」は、「テイルの形で使われている時は、動きのない状態を表す「持っている」「覚えている」「知っている」(許1997:38)であると説明されているが、この用法が変化の結果の持続を表す「結果の状態」⁵¹の用法とどう違うかについて、詳細な説明は見られず、その説明だけでは両者は全く同じもののように考えられる。さらに、菅谷(2005a)が指摘しているように、これらの動詞では実際には「台湾の文化に興味を持った」のように「テイル」以外の形式も用いられる場合があるため、慣用的に「テイル」の形で使用されているかどうかを判断する基準が決して厳密であるとは言えない。第二に、崔(2009、2011)以外の横断的な調査は、いずれも同じレベルの学習者を対象としたものであるため、学習者の日本語レベルの違いによって、「テイル」の用法別の習得状況にいかなる変化があるかどうかは判断できない。第三に、これまでの研究では主に文末の習得状況に焦点が置かれており、文末と連体修飾節の違いについては殆ど論じられていない。連体修飾節の習得状況について検討しているのは許(2009)のみである。しかし、2.6.2.2節で述べたように、許(2009)の6人のデータには「運動の持続(±長期)」以外の使用はあまり出現しておらず、各用法の比較検討が欠如しているため、得られた結果を再度検証する必要がある。また、連体修飾節における「テイル」の用法別の正用しか提示されておらず、誤用については議論されていない。さらに、連体修飾節における議論に止まっており、文末と連体修飾節の違いについては言及されていない。第四に、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に考察が行われ

⁵⁰ 黒野(1998)では、「結果の状態」に相当する用法は、「動作の持続」に相当する用法よりも習得されやすいとされている。

⁵¹ 「結果の状態」の詳細は2.3節を参照。

ており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて論じられたもの (Shirai & Kurono 1998 ; 許 2002 ; 崔 2009, 2011) はまだ少ない。このうち、Shirai & Kurono (1998) と崔 (2009) は「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の検討に限られているため、得られた結果が他の用法にも適応できるかは不明である。一方、許 (2002) では「テイタ形」の用法別の正用しか提示されておらず、誤用について更なる検討が見られない。このように、「テイル」の習得過程における「テイル」の用法別の難易度の影響についての議論はまだ不十分であるため、更なる検討が必要である。

2.7 「テイル」に関する習得研究の問題点と本研究の課題

以上、2.5 節で「アスペクト仮説」の検証に関する研究を、2.6 節で「テイル」の用法の習得に関する研究を概観してきた。これまで「テイル」の習得に関する研究は少なからずなされてきた。しかし、これらの研究には下記の5つの問題点が残っている。

1. 「アスペクト仮説」の検証と「テイル」の用法の習得難易度のいずれか一方の側面からのみ分析が行われている。
2. 異なるレベルの学習者の習得状況の比較検討はまだ少ない。
3. 主に文末の習得状況に焦点が置かれ、文末と連体修飾節の違いについて殆ど論じられていない。
4. 主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて検討したものはまだ少ない。
5. 「テイル」の習得に関わる複数の要因による影響の比較検討が欠如している。

第一に、菅谷 (2002) 以外の研究は、いずれも「テイルの用法」と「動詞タイプ」のいずれかの側面からしか調査を行っていない。そのため、「テイル」の習得について用法別の難易度と動詞の語彙的アスペクトによる影響は詳細に論じられているが、

この2つの要因のいずれが「テイル」の習得により強く影響しているのかという議論は十分ではない。また、2.3節で示したように、同じ動詞タイプに「テイル」がついても、文脈や構文的な条件によって常に同じ意味を表すわけではない。例えば、「活動動詞」の「走る」に「テイル」がつくと、多くの場合「動作の持続」(例:彼は走っている)の意味を表すが、その他に「繰り返し」(例:彼は毎日公園で走っている)、「パーフェクト」(例:彼はすでに三年前に富士山マラソンを走っている)、「単なる状態」(例:この道路の下には水道管が走っている)の意味を表すこともある。そのため、従来のように「テイルの用法」と「動詞タイプ」を分けて個別に分析を行うと、具体的にどの用法でのどの動詞タイプがどのように「テイル」の習得に影響しているかが把握できず、2要因間の関連性が見られない。一方、菅谷(2002)では、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの情報がともに提示されているにもかかわらず、「テイル」の用法別による動詞タイプの使用状況の頻度の提示に止まっており、これまでの調査と同様に「テイル」の習得における上記2要因の影響度合いについて解明されていない。このように、学習者の「テイル」の習得過程における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2要因の関連性についての検討は未だに不十分である。

第二に、「テイル」の習得に関する横断的調査の多くは同じレベルの学習者を対象としたもので、異なるレベルの学習者の習得状況の比較検討はまだ少ない。一方、縦断的調査の場合、少人数を対象とした事例調査が多いため、個人差などの影響で得られた結果を一般化することは難しい。そのため、学習者の日本語レベルの違いによって、「テイル」の習得状況にいかなる変化があるのかについて更なる検討が必要である。

第三に、これまでの「テイル」の習得研究では、主に文末の習得状況に焦点が置かれ、文末と連体修飾節の違いについて論じられたものとしては、塩川(2007)と許(2009)しか見当たらない。しかし、この2つの研究とも文末と連体修飾節における「テイル」の誤用について言及していないため、「テイル」の習得における文末と連体修飾節の違いによる影響については未だに明らかになっていない。

第四に、これまでの研究は、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる影響を議論したものはまだ多くない。このうち、「アスペクト仮説」の検証に関する研究では、「テイル形」と「テイタ形」の使用された動詞タイプの割合しか明示されていないものが多い。一方、「テイル」の用法の習得に関する研究では、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の検討に限られているものが多い。そのため、「テイル」の習得における「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる影響について更なる検討を行う必要がある。

第五に、これまでの「テイル」の習得研究では、「テイル」の用法、動詞の語彙的アスペクト、学習者の母語と習得環境といった要因から、「テイル」の習得過程における普遍性と個別性を考察し、アスペクトの習得のメカニズムの解明が試みられている。しかし、菅谷 (2005ab) が指摘しているように、学習者のテンス・アスペクトの習得過程では動詞の語彙的アスペクト、「テイル」の用法、日本語レベルといった複数の要因が複合的に影響し、共通した習得パターンが形成されていく。このように、従来のような単一の要因 (例えば、習得環境) による「テイルの用法」の習得難易度、或は「動詞タイプ」の使用状況の検討は、取り上げられた特定の要因のみに注目しており、それ以外の要因による影響との比較検討が欠如しているため、「テイル」の習得に関わる諸要因がどのように絡み合って相互に影響しているのかについて検証することができない。簡・中村 (2010) が指摘しているように、「テイル」の習得過程には様々な要因が関与しているため、1つの要因のみに注目して考察すると、その要因を過大評価または過小評価しかねない。従って、「テイル」の習得を検討するうえで、「テイル」の習得に関わる複数の要因を同時に考慮に入れ、各要因の影響度合いと関連性を考察する必要がある。

以上、先行研究で浮き彫りとなった問題点を踏まえ、本研究では「テイル」の習得に関わる要因として①「テイルの用法」(動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態)、②「動詞タイプ」(活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態

動詞)、③「時制形式」(テイル形とテイタ形)、④「構文的位置」(文末と連体修飾節)の4つの要因を取り上げ、さらに学習者の「テイル」の習得状況がどのように変化していくのかを考察するため、⑤学習者の「日本語学習期間」(1年、1年半、2年、2年半)を5つ目の要因として設定した。研究課題として以下の5点を挙げ、学習者の「テイル」の習得過程で上記5つの要因がどのように絡み合って相互に影響しているかを検討する。

研究課題1: 「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率について日本語母語話者と日本語学習者の異同点を明らかにする。

研究課題2: 「テイル」の習得における5つの要因(「テイル」の用法、動詞タイプ、時制形式、構文的位置、日本語学習期間)の影響の強さを明らかにする。

研究課題3: 「日本語学習期間」の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

研究課題4: 「構文的位置」(文末と連体修飾節)の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

研究課題5: 「時制形式」(テイル形とテイタ形)の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

第3章 日本語母語話者における「テイル」の使用状況

3.1 研究の目的

日本語学習者の「テイル」の習得状況を検討する際には、学習者の「テイル」の使用が日本語母語話者にどの程度近いのか、つまり日本語母語話者と学習者における「テイル」の使用状況の類似点と相違点について検討する必要がある。そこで、本章では日本語母語話者の「テイル」の使用状況を調査し、文末と連体修飾節、及び「テイル形」と「テイタ形」における日本語母語話者の「テイル」の用法（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）と動詞タイプ（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）の使用状況にどのような差異があるのかを明らかにする。そのため、以下の3つのステップを設定して調査を進める。得られた結果に基づき、次章以降で論じる日本語学習者の「テイル」の使用実態と比較検討を行う。

日本語母語話者の「テイル」の使用に関する分析の観点：

1. 「テイル」の各用法においてどのような動詞タイプが使用されるかを明らかにする。
2. 1のことについて、文末の場合と連体修飾節の場合の違いを見る。
3. 2のことについて、「テイル形」の場合と「テイタ形」の場合の違いを見る。

3.2 調査方法

3.2.1 分析データ

本章では、国立国語研究所によって構築された「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、以下 BCCWJ と略す) の「少納言」を利用し、日本語母語話者の書き言葉データを収集して検討する。BCCWJ には書籍、雑誌、新聞、白書、教科書、Yahoo! ブログ、法律、韻文などの13種のジャンル別の書

き言葉データが含まれ、合計約1億500万語収録されている。このうち、本章で分析に用いたデータは書籍、雑誌、新聞、白書、教科書の5つのジャンルのものである。この中から「テイル形」と「テイタ形」の用例を500例ずつ抽出し、合計1000例を分析対象とした。

3.2.2 分析手順

分析の手順は下記のように書き箇条で整理する。

- ① 図3-1に示したように、BCCWJの「少納言」の検索画面で書籍、雑誌、新聞、白書、教科書の5つのジャンルを選択する。検索文字列に「ている」を入力し、検索をクリックすると、「ている」に関する用例を500例表示する。このように、「テイル形」と「テイタ形」の用例を500例ずつ合計1000例抽出した。

少納言
KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」

検索条件
検索文字列:

[こちら](#)をクリックすると正規表現を使用して前後の文脈を指定できます。
検索 キャンセル

メディア/ジャンル
(検索対象とするメディア/ジャンルを選択できます。+をクリックすると細かく指定できます。)
全てのチェックを外す 全てにチェックを入れる

- 書籍 (1971~2005)
- 雑誌 (2001~2005)
- 新聞 (2001~2005)
- 白書 (1976~2005)
- 教科書 (2005~2007)
- 広報紙 (2008)

図3-1 BCCWJ (少納言) のインタフェース

- ② ①を前後の文脈によって「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分類した（「テイル」の用法の分類基準は2.3節で提示した）。
- ③ ②の5つの用法で使用された動詞を「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプに分類した（動詞タイプの分類基準は2.4節で論じた）。
- ④ ③を文末の場合と連体修飾節の場合に分類し、さらに「テイル形」の場合と「テイタ形」の場合に分類した。
- ⑤ ④を延べ語数（token frequency）によって「テイル」の用法別および動詞タイプ別の使用頻度を集計した。

上記のように日本語母語話者の「テイル」の使用について、①各用法と動詞タイプの関係、②文末と連体修飾節の違い、③「テイル形」と「テイタ形」の違いを考察する。そのために、カイ二乗分布を用いた「適合度検定 (chi-square test of goodness-of-fit)」と「独立性の検定 (chi-square test of independence)」による検討を試みた¹。しかし、独立性の検定で大きなクロス集計表を分析する場合には、カイ二乗値が有意であっても2変数間に関連があることしか示せない。そのため、独立性の検定の結果、有意であった場合にはさらに「残差分析 (residuals analysis)」²を行い、どのセルに有意な偏りがあるのかを考察することとする。

¹ 「適合度検定」とは、観測された頻度分布が確率分布と一致するか否かを検定するものである。一方、「独立性の検定」とは、クロス集計表を用い、2つの質的変数間の関連性を調べるものである。両者ともカイ二乗 (χ^2) 分布と呼ばれる理論上の分布に漸近的に従う検定統計量を用いた統計的仮説検定の総称である、「カイ二乗検定 (chi-square tests)」に含まれる種々の検定の一つである (玉岡 2012:319)。

² 「残差分析」は「独立性の検定」で有意となつてから、複数のセルから偏りのあるセルを判定するための検定法である。

3.3 結果と考察

3.3.1 第1ステップ:「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度

本節では日本語母語話者の「テイル」の用法と動詞タイプの使用頻度、及び「テイル」の各用法で使用された動詞タイプの使用頻度について以下の手順で考察する。

- 1-① 「テイル」の用法別の使用頻度を見る。
- 1-② 「テイル」における動詞タイプ別の使用頻度を見る。
- 1-③ 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度を見る。

まず、日本語母語話者の「テイル」の用法別の使用頻度を集計すると、表 3-1 のようになる。

表 3-1 「テイル」の用法別の使用頻度

用法	頻度	比率	適合度検定の結果
動作の持続	282	0.282	$\chi^2(4)=350.490, p<.001$
結果の状態	390	0.390	
パーフェクト	135	0.135	
繰り返し	68	0.068	
単なる状態	125	0.125	
合計	1000	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

日本語母語話者の「テイル」の使用において、「テイル」の5つの用法が等確率に用いられるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果は有意となっている[$\chi^2(4)=350.490, p<.001$]。つまり、5つの用法のいずれかに偏って用いられていることがわかった。各用法を使用率が高い順に並べると、①「結果の状態」(39.0%)、②「動作の持続」(28.2%)、③「パーフェクト」(13.5%)、④「単なる状態」(12.5%)、⑤「繰り返し」(6.8%)となる。それぞれの例を(1)～(5)に

示す。

① 「結果の状態」(39.0%)³ :

- (1) 姉妹のひとりが悲鳴をあげはじめた。グアテマラ人の青年は妻を見つめ、手を握っている。(ケント・ハリントン(著)/田村義進(訳)『死者の日』扶桑社)

② 「動作の持続」(28.2%) :

- (2) 恐ろしさにすくんでいるようにも見えるし、ちょっとばかり喜んでいるみたいにも見える。でも亘はバルバローネの背中を見ており、彼らはバルバローネの顔を見ている。(宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー 上』角川書店)

③ 「パーフェクト」(13.5%) :

- (3) 児童虐待は被害者からの申告が少なく、潜在化しやすいことから、早期発見のためには、虐待を見破れる知識が不可欠と指摘している。(河北新報社『河北新報』河北新報)

④ 「単なる状態」(12.5%) :

- (4) ヒザラガイは日中はめったに動かないし、形が三葉虫に似ている。(西濱士郎『動物たちの気になる行動』裳華房)

⑤ 「繰り返し」(6.8%) :

- (5) 彼は、厳密には拘置所内の人間とはいえませんが、実質的にはほぼ毎日、ここを訪れている。(法月綸太郎『法月綸太郎の冒険』講談社)

次に、「テイル」における動詞タイプ別の使用頻度を集計すると、表 3-2 のようになる。

³ 括弧内の数値は各用法における該当動詞タイプの使用率を示したものである。以下同様。

表3-2 「テイル」における動詞タイプ別の使用頻度

動詞タイプ	頻度	比率	適合度検定の結果
活動動詞	314	0.314	$\chi^2(3)=159.400, p<.001$
達成動詞	222	0.222	
到達動詞	363	0.363	
状態動詞	101	0.101	
合計	1000	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

日本語母語話者の「テイル」の使用において、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプが等確率で用いられているか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果は有意となっている[$\chi^2(3)=159.400, p<.001$]。動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「到達動詞」(36.3%)、②「活動動詞」(31.4%)、③「達成動詞」(22.2%)、④「状態動詞」(10.1%)となる。それぞれの例を(6)～(9)に示す。

① 「到達動詞」(36.3%)

(6) 手すりの向こう、ぴかぴかの自転車のわきに父と母が立っている。(カロリーヌ・リンク(著)/平野卿子(訳)『ビヨンド・サイレンス』集英社)

② 「活動動詞」(31.4%)

(7) 我輩の眼は、高い空の上から、ファラスが説明したとおりの三人組をとらえていた。街道を北—我輩がやってきた方向—に向かって歩いている。(友野詳『天下無敵の冒険者』角川書店)

③ 「達成動詞」(22.2%)

(8) つまり製造や販売などそれぞれの現場の情報による相互作用が生まれている。(竹中平蔵『日本企業の底力』PHP 研究所)

④「状態動詞」(10.1%)

- (9) GEのCTスキャン装置自体は性能が非常にすぐれている。(ジャック・ウェルチ(著)/ジョン・A・バーン(著)/宮本喜一(訳)『ジャック・ウェルチわが経営上』日本経済新聞社)

最後に、表3-3における比率は、「動作の持続」などの各用法において「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの使用率を表すものである。

表3-3 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度

用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	183	0.649	43	0.152	5	0.018	51	0.181	282	1.000	$\chi^2(3)=256.496, p<.001$
結果の状態	0	0	82	0.210	308	0.790	0	0	390	1.000	$\chi^2(1)=130.964, p<.001$
パーフェクト	65	0.481	59	0.437	11	0.081	0	0	135	1.000	$\chi^2(2)=38.933, p<.001$
繰り返し	38	0.559	16	0.235	7	0.103	7	0.103	68	1.000	$\chi^2(3)=37.765, p<.001$
単なる状態	28	0.224	22	0.176	32	0.256	43	0.344	125	1.000	$\chi^2(3)=7.512, p=.057, ns$
合計	314	0.314	222	0.222	363	0.363	101	0.101	1000	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率で起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。その結果は、表3-3に示したように「動作の持続」 [$\chi^2(3)=256.496, p<.001$]、「結果の状態」 [$\chi^2(1)=130.964, p<.001$]、「パーフェクト」 [$\chi^2(2)=38.933, p<.001$]、「繰り返し」 [$\chi^2(3)=37.765, p<.001$]の4用法が有意となっている。つまり、5つの用法の中で「単なる状態」 [$\chi^2(3)=7.512, p=.057, ns$]のみでは、ある特定の動詞タイプに偏って用いられた傾向は見られなかった。「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」の4用法における動詞タイプ別の使用率を見ると、まず「動作の持続」の用法では使用率の高い順に、①「活動動詞」(例(10)、64.9%)、②「状態動詞」(例(11)、18.1%)、③「達成動詞」

(例 (12)、15.2%)、④「到達動詞」(例 (13)、1.8%) となっている。次に、「パーフェクト」の用法では「状態動詞」の用例が1例も見られず、他の3つの動詞タイプを使用率が高い順に並べると、①「活動動詞」(例 (14)、48.1%)、②「達成動詞」(例 (15)、43.7%)、③「到達動詞」(例 (16)、8.1%) となる。さらに、「繰り返し」の用法で使用された4つの動詞タイプを使用率が高い順に並べると、①「活動動詞」(例 (17)、55.9%)、②「達成動詞」(例 (18)、23.5%)、③「到達動詞」(例 (19)、10.3%) と「達成動詞」(例 (20)、10.3%) となる。以上から、この3用法ではいずれも「活動動詞」が最も多く用いられているということがわかる。これらに対し、「結果の状態」の用法で使われている動詞は「到達動詞」(例 (21)、使用率 79.0%) と「達成動詞」(例 (22)、使用率 21.0%) のみで、このうち「到達動詞」の使用率が圧倒的に高かった。このように、日本語母語話者の「テイル」の使用では用法の違いによって動詞タイプ別で使用傾向が異なることが観察された。

[動作の持続]

- (10) ①「活動動詞」(64.9%) : 琵琶湖にミシシッピのショウボートを模した船尾外輪船が走っている。(柳原良平『船旅を楽しむ本』講談社)
- (11) ②「状態動詞」(18.1%) : PA 自伝というより、自分を主人公として使って、いくつかの問いを考察したと思っている。(ポール・オースター(著)/畔柳和代(訳)『空腹の技法』新潮社)
- (12) ③「達成動詞」(15.2%) : 美千子は、窓辺で泣く泣く手荷物を作っていた。(五味川純平『人間の条件 上』岩波書店)
- (13) ④「到達動詞」(1.8%) : この証言は1982年に出版された書物に現れたものだが、同様の状況にある母親は、最近ではますます増えている。(大村敦志『生活のための制度を創る』有斐閣)

[パーフェクト]

- (14) ①「活動動詞」(48.1%)：ペドロ・マルティルはまた、同じく第七巻の第二章でつぎのように述べている。(バルトロメ・デ・ラス・カサス『大航海時代叢書』岩波書店)
- (15) ②「達成動詞」(43.7%)：このような情勢に励まされ、四月二十二日、父は汪東興に一通の手紙を出した。手紙にはこう書かれていた。(毛毛(著)/藤野彰・笠屋一(訳)『わが父・[トウ]小平 上』中央公論新社)
- (16) ③「到達動詞」(8.1%)：母とふたりの娘に囲まれた暮らし。夫とは十年前に離婚していた。世間から見れば、それはかわいそうな母子家庭。(矢口周美・黒坂黒太郎『まま母狂想曲』講談社)

[繰り返し]

- (17) ①「活動動詞」(55.9%)：わかりません、図書館の人に聞いてみたら月に二度ぐらい利用しているそうです。(スペンサー・ダンモア(著)/工藤政司(訳)『幻影空路』角川書店)
- (18) ②「達成動詞」(23.5%)：そして、釣部と蟹沢は、暇さえあれば、近くの多摩川で竿をならべているのである。(太田蘭三『被害者の刻印』講談社)
- (19) ③「到達動詞」(10.3%)：この地獄では、四六時中、殺人にいたる大ゲンカが起こっている。(実著者不明『仏教の知識百科』主婦と生活社)
- (20) ③「状態動詞」(10.3%)：水、すなわち酸化水素は豊富に存在していて、安いものと常に考えられていたが、人口が増加し、河川や湖沼の汚染が進むに連れて、…(後略)。(リンゼー・レビーン(著)/宝月章彦(訳)『水素』日刊工業新聞社)

[結果の状態]

- (21) ①「到達動詞」(79.0%) : 「十二時になったら、あんたに一度だけ手伝ってもらおう。それまでここにいてください」そう岩崎に頼まれて源は坐っている。(胡桃沢耕史『新・翔んでる警視』広済堂出版)
- (22) ②「達成動詞」(21.0%) : また、ハザリーは帽子をかぶらずに水圧機の中へ入ったのに、翌朝パディントンに現れた時にはちゃんと帽子をかぶっている。(松下了平『シャーロック・ホームズの鉄道学』JTB)

以上からわかるように、日本語母語話者の「テイル」の使用は「到達動詞」との結び付きで「結果の状態」を表す用例(使用率 30.8%)が最も多く観察された。次に、「活動動詞」に「テイル」がついて「動作の持続」を表すもの(使用率 18.3%)が続く。この2つを合わせると、全体の5割近く(49.1%)を占めていることがわかる。これに対し、「状態動詞」に「テイル」がついて「結果の状態」と「パーフェクト」の2用法を表す用例と、「活動動詞」に「テイル」がついて「結果の状態」を表す用例は1例も見られなかった。このうち、2.3節で言及したように、「限界性」を持たない「活動動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプは「結果の状態」を表すことができないため、この2つの動詞タイプで表される「結果の状態」の用例が出現しなかったと考えられる。一方、どのような動詞タイプでも表現できる「パーフェクト」の用法において、「状態動詞」の用例が1例も見られなかったことから、4つの動詞タイプと「テイル」の5つの用法との組み合わせのうち「状態動詞」が「パーフェクト」の用法を表すのは最も困難であることがわかる。

3.3.2 第2ステップ: 文末と連体修飾節における「テイル」の使用状況

次に、文末と連体修飾節における日本語母語話者の「テイル」の使用状況にはどのような差異があるのかについて以下の手順で考察する。

- 2-① 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の使用頻度を見る。
- 2-② 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の使用頻度を見る。
- 2-③ 文末における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度を見る。
- 2-④ 連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度を見る。

このうち、2-①と2-②については3.3.2.1節で検討する。また、2-③と2-④については3.3.2.2節で論じる。

3.3.2.1 「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用頻度

本研究のコーパス調査の結果では、文末の用例は669例で全体の66.9%、連体修飾節の用例は331例で全体の33.1%を占めていた。この文末と連体修飾節における「テイル」について、用法別に使用頻度を集計すると、表3-4のようになる。

表3-4 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の使用頻度

構文的位置	動作の持続		結果の状態		パーフェクト		繰り返し		単なる状態		合計	
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
文末	186	0.278	265	0.396	90	0.135	40	0.060	88	0.132	669	1.000
連体修飾節	96	0.290	125	0.378	45	0.136	28	0.085	37	0.112	331	1.000
合計	282	0.282	390	0.390	135	0.135	68	0.068	125	0.125	1000	1.000
適合度検定の結果			文末		$\chi^2(4)=244.789, p<.001$							
			連体修飾節		$\chi^2(4)=107.353, p<.001$							
独立性の検定の結果					$\chi^2(4)=3.005, p=.557, ns$							

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

まず、表3-4に示したように、文末と連体修飾節の両位置において5つの用法のいずれかに偏って用いられるか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。

その結果はいずれも有意となり、文末 [$\chi^2(4)=244.789, p<.001$]、連体修飾節 [$\chi^2(4)=107.353, p<.001$]の両方ともが、ある特定の用法に偏って用いられる傾向があることを示した。さらに、両位置における「テイル」の用法別の使用率を見ると、文末と連体修飾節のいずれの位置においても、「動作の持続」(例(23)(24))よりも「結果の状態」(例(25)(26))のほうがより多いことがわかった。換言すれば、連体修飾節における日本語母語話者の「テイル」の用法の使用で、文末の場合と同様に5つの用法の中で最も多く用いられているのは「結果の状態」の用法である。一方、「結果の状態」の高い使用率に対し、(27)(28)のような「繰り返し」の用法は両位置のいずれにおいても各用法の中で使用頻度が最も低かった。また、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって日本語母語話者の「テイル」の用法の使用頻度に差異があるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った。その結果には有意差が認められなかった [$\chi^2(4)=3.005, p=.557, ns$]。このことから、「テイル」の5つの用法では文末と連体修飾節における日本語母語話者の「テイル」の使用傾向は一致していることが判明した。

「動作の持続」:

- (23) 休んでいると、樹上でもずが高く鳴いている。(瀬戸内寂聴『手毬』新潮社)
- (24) 野太い声の主は松井十之進だった。十之進は驚いて黙っている志乃の手をさつと握ると、それまで潜んでいた木陰へ連れ込み、いきなり肩を抱いた。(乙川優三郎『五年の梅』新潮社)

「結果の状態」:

- (25) 守衛が、修に飛びつく。修ともみ合いになる。路地(夜)北たちの車が停まっている。(鎌田敏夫『会いたくて』立風書房)
- (26) 弾丸が豪雨のように海面に降り注ぎ、木造船に穴をあけ、海に浮いている人々

をとらえていく。(カーステン・ストラウド『キューバ海峡』文藝春秋)

「繰り返し」:

- (27) 前代表者の子供であるC氏は他社で就業後、B社で後継者として10年間勤務してから2003年に代表者となったが、後継者でいた時に代表者の補佐役として新しい取組をいくつか実施している。(中小企業庁(編)『中小企業白書』ぎょうせい)
- (28) これが分割表によるカイ二乗検定法と呼ばれている方法です。(本田克也・浅野昌充・神庭純子『統計学という名の魔法の杖』現代社)

次に、文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の使用頻度を整理すると、表3-5のようになる。

表3-5 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の使用頻度

構文的位置	活動動詞			達成動詞			到達動詞			状態動詞			合計		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	
文末	207	0.309	-0.4	135	0.202	-2.2	249	0.372	0.9	78	0.117	2.3	669	1.000	
連体修飾節	107	0.323	0.4	87	0.263	2.2	114	0.344	-0.9	23	0.069	-2.3	331	1.000	
合計	314	0.314	-	222	0.222	-	363	0.363	-	101	0.101	-	1000	1.000	
適合度検定の結果				文末	$x^2(3)=103.251, p<.001$										
				連体修飾節	$x^2(3)=62.269, p<.001$										
独立性の検定の結果					$x^2(3)=9.188, p<.05$										

注1:ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2:調整済み残差の絶対値が1.96よりも大きければ、5%の有意水準で使用頻度に有意な偏りがあると判断できる。

まず、文末と連体修飾節の両位置において、使用され動詞タイプに偏りはあるか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果はいずれも有意となり、文末[$x^2(3)=103.251, p<.001$]、連体修飾節[$x^2(3)=62.269, p<.001$]の両方ともがある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向を持つことがわかった。両位置における動詞

タイプ別の使用率を見ると、文末、連体修飾節のいずれにおいても、「到達動詞」（例 (29) (30)）のほうが「活動動詞」（例 (31) (32)）よりも使用率が高いことがわかる。しかし、文末の場合（「活動動詞」の使用率 30.9%；「到達動詞」の使用率 37.2%）と比べると、連体修飾節の場合には「活動動詞」（32.3%）と「到達動詞」（34.4%）の使用率はやや僅差であった。これに対し、「状態動詞」（例 (33) (34)）の使用率は4つの動詞タイプの中で最も低かった。

「到達動詞」：

- (29) シルクロードを旅行する者が増えているが、これはさしずめ温故知新の旅だね。（村松暎『「四字熟語」読む辞典』経済界）
- (30) 私はいつしか、この映画に自分の持っているものすべて出そうなどとは思わなくなった。（長崎俊一・黒沢清『映画監督 50 人』東京新聞出版局）

「活動動詞」：

- (31) つまり、親鸞は「本願ぼこり」でも立派に救われると言っている。これは親鸞の「本願ぼこり」に対する一般論である。（笠原一男『悪人正機を生きる』プレジデント社）
- (32) 朝食が済んだあと、そこの家の廊下にすわって伯母夫婦の庭仕事をぼんやりと見ているときだった。（岡光序治『官僚転落』廣濟堂出版）

「状態動詞」：

- (33) 太鼓楼は境内東北隅に現存、北集会所の跡地には参拝会館がたっているものの、北集会所自体は姫路市の亀山本徳寺の本堂として現存している。（横田淳『新選組』学習研究社）
- (34) また、病院、福祉施設等が近接していることなどから、障害者等に配慮した川

づくりの要望が高い地域については、平成5年度から、… (後略)。(総理府(編)『障害者白書』大蔵省印刷局)

また、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、日本語母語話者の「テイル」を使用した動詞タイプ別の使用頻度に差異があるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った結果、有意となった $[\chi^2(3)=9.188, p<.05]$ 。さらに、具体的にどの動詞タイプで文末と連体修飾節の使用頻度に有意な偏りがあるのかを考察するために、両位置における各動詞タイプの使用頻度を残差分析によって検討した。その結果、表3-5に示したように4つの動詞タイプのうち、調整済み残差の絶対値が1.96よりも大きいのは「達成動詞」($z=\pm 2.2$)と「状態動詞」($z=\pm 2.3$)の2動詞であった。このことから、「活動動詞」と「到達動詞」に比べて、この2つの動詞タイプでは文末と連体修飾節の使用頻度に有意な偏りがあることがわかった。このうち、「達成動詞」では(35)のような文末(使用率20.2%)よりも、(36)のように連体修飾節のほうが使用率(26.3%)が有意に高かった。一方、「状態動詞」では(37)のような文末連体修飾節(使用率6.9%)よりも、(38)のように文末のほうが使用率(11.7%)が高い、という有意差が示された。このように、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって日本語母語話者の動詞タイプ別の「テイル」の使用傾向は異なることが判明した。

「達成動詞」:

(35) 片手をついた机の上には鉛筆で無数のラクガキが残されていた。(島本理生『小説推理』双葉社)

(36) ディスクを追いかける犬に負担をかけて、彼らにストレスを与えていることもあるかもしれません。(高橋宏樹『ディスク&ドッグ』毎日新聞社)

「状態動詞」：

(37) しかし十八世紀や十九世紀は社会構造の基本が大いに違っていたと考える。

(小坂一平『大東亜戦争、日本は悪くない』健友館)

(38) 横にいる第三分科会の黒田副主査に聞くと、すぐれている子どもを五歳から入学できるようにするというのが真意で、そう書くと抵抗が強いので、… (後略)。(河上亮一『教育改革国民会議で何が論じられたか』草思社)

以上、文末と連体修飾節における日本語母語話者の「テイル」の用法と動詞タイプの使用頻度について検討した。その結果、日本語母語話者の「テイル」の用法の使用傾向は文末と連体修飾節という構文的位置の違いに関わらず似通っていることが明らかになった。さらに、両位置のいずれにおいても「結果の状態」の用法が最も多く用いられていることが観察された。一方、日本語母語話者が「テイル」を使用する際の動詞タイプの使用傾向は文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって異なる。4つの動詞タイプのうち、「達成動詞」は文末よりも連体修飾節に使われやすいのに対し、「状態動詞」は連体修飾節よりも文末に使われやすいという使用傾向が観察された。

3.3.2.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度

次に、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度にどのような差異があるのかを考察する。これについて、まず、文末における「テイル」の5つの用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度を集計すると、表3-6のようになる。

表3-6 文末における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度

用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	113	0.608	28	0.151	4	0.022	41	0.220	186	1.000	$\chi^2(3)=141.957, p<.001$
結果の状態	0	0	53	0.200	212	0.800	0	0	265	1.000	$\chi^2(1)=95.400, p<.001$
パーフェクト	51	0.567	33	0.367	6	0.067	0	0	90	1.000	$\chi^2(2)=34.200, p<.001$
繰り返し	20	0.500	11	0.275	4	0.100	5	0.125	40	1.000	$\chi^2(3)=16.200, p<.01$
単なる状態	23	0.261	10	0.114	23	0.261	32	0.364	88	1.000	$\chi^2(3)=11.182, p<.05$
合計	207	0.309	135	0.202	249	0.372	78	0.117	669	1.000	

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：「単なる状態」における動詞タイプ別の使用頻度は、適合度検定の結果では $p<.05$ であるが、ボンフェローニ (Bonferroni) の補正を行った有意水準(0.05/5=0.01)より高いために有意ではないことになる。

文末において「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率で起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。その結果は、表3-6に示したように「動作の持続」 [$\chi^2(3)=141.957, p<.001$]、「結果の状態」 [$\chi^2(1)=95.400, p<.001$]、「パーフェクト」 [$\chi^2(2)=34.200, p<.001$]、「繰り返し」 [$\chi^2(3)=16.200, p<.01$]の4用法が有意となった。つまり、この4つの用法ではある特定の動詞タイプに偏って用いられた傾向が見られた。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(39)、60.8%)、②「状態動詞」(例(40)、22.0%)、③「達成動詞」(例(41)、15.1%)、④「到達動詞」(例(42)、2.2%)となる。また、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(43)、56.7%)、②「達成動詞」(例(44)、36.7%)、③「到達動詞」(例(45)、6.7%)となる。そして、「繰り返し」の用法における動詞タイプ別の使用率が高い順に並べると、①「活動動詞」(例(46)、50.0%)、②「達成動詞」(例(47)、27.5%)、③「状態動詞」(例(48)、12.5%)、④「到達動詞」(例(49)、10.0%)となる。このうち、「状態動詞」と「到達動詞」の間にはあまり差が見られなかった。このように、「動作の持続」、「パーフェクト」、「繰り返し」の3用法ではいずれも「活動動詞」が最も多く用いられている。対して、「結果の状態」の用法で使われる動詞は「到達動詞」(例(50)、使用率80.0%)と「達成動詞」(例(51)、

使用率 20.0%) のみで、このうち「到達動詞」の使用率が圧倒的に高かった。

[動作の持続]

- (39) ①「活動動詞」(60.8%) : 若者はまだ黙って前を見ている。彼の言葉を聞いているのかどうかわからない。(池澤夏樹『バビロンに行きて歌え』新潮社)
- (40) ②「状態動詞」(22.0%) : 二本のマストの一つずつ燈を点した小さな貨物船が幾隻か泊っているのが見えている。(吉行淳之介『夕暮まで』新潮社)
- (41) ③「達成動詞」(15.1%) : 鉢植の花のまわりには農家の婦人たちがたかつて買っている。(武田百合子『富士日記』中央公論社)
- (42) ④「到達動詞」(2.2%) : 前述のように、遺伝学の発達とともに、小浜説によって有利な資料がますます増えてきているが、小浜説の特徴の一つであるアイヌ先住民説についてはまだ根強い反対意見がある。(石渡信一郎『応神陵の被葬者はだれか』三一書房)

[パーフェクト]

- (43) ①「活動動詞」(56.7%) : (前略) …、「第一条が天皇の象徴性を高く掲げ、又、第一条と第四条と相俟つて天皇が現実の国家主権、国家権力を超越される方向に赴いたこと」は天皇統治を純粹ならしめるのに大きな役割をはたすものと思っていることを述べている。(石田圭介『戦後天皇論の軌跡』日本教文社)
- (44) ②「達成動詞」(36.7%) : そのことが、前条につづいて、次のように記されている。百済の弔使の従者たちは、「去年十一月、大佐平智積が死にました。… (後略)。(黒須紀一郎『役小角』作品社)
- (45) ③「到達動詞」(6.7%) : 時計を見る。望が病院に入ってから六分が過ぎていた。彼は煙草を地面で消した後、吸い殻のフィルターをポケットに入れた。(東野圭吾『週刊新潮』新潮社)

[繰り返し]

- (46) ①「活動動詞」(50.0%) : iモードの契約が千四百万を超えたといわれているので、私のような大人の契約者ももちろんたくさんいるに違いないが、中学生、高校生の五〇%、七〇%がケータイを持っているとのことだ。(小此木啓吾『ケータイ・ネット人間』の精神分析』朝日新聞社)
- (47) ②「達成動詞」(27.5%) : 作りたてを提供できるよう、同設のキッチンでは1日数回に分け、こまめに焼いている。(実著者不明『ベーカリーパティスリーブック』旭屋出版)
- (48) ③「状態動詞」(12.5%) : しかし、一般に極地帯においては、極光、磁気嵐に伴う電離層の擾乱が頻繁に、しかも激しく起こっており、電離層の状況もその日その日によって著しく異なっている。(実著者不明『入門アンテナおよび電波の伝わり方』電気通信振興会)
- (49) ④「到達動詞」(10.0%) : 朝鮮人の大量虐殺事件も相次いで起こっていたが、もし大野刑務所長が憲兵隊の恫喝に屈していたら、われわれ二十六名の共産党事件の被告は、大杉栄氏夫妻と同じように震災テロの犠牲に供されていたのであった。(松尾尊兌『世界史としての関東大震災』日本経済評論社)

[結果の状態]

- (50) ①「到達動詞」(80.0%) : このうち補助事業費と単独事業費についてみると、都道府県では、単独事業費が補助事業費を初めて上回り、市町村では、単独事業費が補助事業費の2.6倍に達している。(『地方財政白書』大蔵省印刷局)
- (51) ②「達成動詞」(20.0%) : (前略) …、ひとりの女性がタバコを吸いに席を離れる。を離れる。五十三歳の工員、パットだ。選挙人名簿には、十八歳から共和党员と登録されている。(クリスチーナ・オックラン(著)/鳥取絹子(訳)『ヒラリーという生き方』ベストセラーズ)

また、連体修飾節における「テイル」の5つの用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度を集計すると、表3-7のようになる。

表3-7 連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度

用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	70	0.729	15	0.156	1	0.010	10	0.104	96	1.000	$\chi^2(3)=121.750, p<.001$
結果の状態	0	0	29	0.232	96	0.768	0	0	125	1.000	$\chi^2(1)=35.912, p<.001$
パーフェクト	14	0.311	26	0.578	5	0.111	0	0	45	1.000	$\chi^2(2)=14.800, p<.001$
繰り返し	18	0.643	5	0.179	3	0.107	2	0.071	28	1.000	$\chi^2(3)=23.714, p<.001$
単なる状態	5	0.135	12	0.324	9	0.243	11	0.297	37	1.000	$\chi^2(3)=3.108, p=.375, ns$
合計	107	0.323	87	0.263	114	0.344	23	0.069	331	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

連体修飾節においては「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率で起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。その結果は、表3-7に示したように「動作の持続」 [$\chi^2(3)=121.750, p<.001$]、「結果の状態」 [$\chi^2(1)=35.912, p<.001$]、「パーフェクト」 [$\chi^2(2)=14.800, p<.001$]、「繰り返し」 [$\chi^2(3)=23.714, p<.01$]の4用法が有意となった。つまり、「単なる状態」の用法のみでは、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向がないことが示唆されている [$\chi^2(3)=3.108, p=.375, ns$]。このうち、まず「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(52)、72.9%)、②「達成動詞」(例(53)、15.6%)、③「状態動詞」(例(54)、10.4%)、④「到達動詞」(例(55)、1.0%)の順になる。また、「繰り返し」の用法で使用された4つの動詞タイプの使用率が高い順に並べると、①「活動動詞」(例(56)、64.3%)、②「達成動詞」(例(57)、17.9%)、③「到達動詞」(例(58)、10.7%)、④「状態動詞」(例(59)、7.1%)となる。このうち、「到達動詞」と「状態動詞」の使用率にはあまり明確な差が見られなかった。よって「動作の持続」と「繰り返し」の2用法はいずれも「活動動詞」が最も多く用いられるということがわかる。そして、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動

詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「達成動詞」(例(60)、57.8%)、②「活動動詞」(例(61)、31.1%)、③「到達動詞」(例(62)、11.1%)となり、「達成動詞」の使用率が最も高かった。最後に、「結果の状態」の用法で使用された動詞は「到達動詞」(例(63)、使用率76.8%)と「達成動詞」(例(64)、使用率23.2%)のみで、このうち「到達動詞」の使用率が圧倒的に高かった。

[動作の持続]

- (52) ①「活動動詞」(72.9%) : たとえば、インターネット上で、フロッピーディスクに関する情報を探している人がいるとする。(木村訓子『アスクール』PHP 研究所)
- (53) ②「達成動詞」(15.6%) : これで一挙に広くなると思うとガイラさんの機嫌のいいのもわかって、ついでに風呂場を見たりトイレをのぞいて見たりして、それから階段の穴から首を出して下で踏み板を止めているガイラさんに、この畳の八畳がガイラさんの部屋になるのかと訊いてみると、... (後略)。(保坂和志『猫に時間の流れる』新潮社)
- (54) ③「状態動詞」(10.4%) : そこで、多くの人は殺虫剤に頼ることになるわけだが、年に数回遭遇するゴキブリごときに殺虫剤を買うなんてばかばかしい、お金のムダ、と思っている人もいるだろう。(実著者不明『その道のプロが教える「裏ワザ」(金)読本』青春出版社)
- (55) ④「到達動詞」(1.0%) : 煙突から出ている煙が、星明かりに青白く透ける。(柄刀一『レイニー・レイニー・ブルー』光文社)

[繰り返し]

- (56) ①「活動動詞」(64.3%) : ちなみに、欧米では教区記録をもとにして行われる人口史研究の最初の作業過程に、「家族復元法」(グベール、一九九二)と呼ば

れている手法がありますが、… (後略)。(長谷川まゆ帆『お産椅子への旅』岩波書店)

- (57) ②「達成動詞」(17.9%) : そんなことを繰り返すうちに、どんどん借りている額も大きくなってしまっ。 (貫井徳郎『光と影の誘惑』集英社)
- (58) ③「到達動詞」(10.7%) : その晩、いつもなら開店前には店に入っているはずの加代子が、開店後一時間たっても姿を見せなかった。(夢枕獏『闇狩り師』徳間書店)
- (59) ④「状態動詞」(7.1%) : 世界共通言語のように思われている英語ができたほうがいいだろう、と思うかもしれないが、僕にはそれよりも自分の知らないところに行くことが、「おもしろい」という気持のほうが先にある。(九里徳泰『冒険王への100の戦術』山と溪谷社)

[パーフェクト]

- (60) ①「達成動詞」(57.8%) : 成政は秀吉軍の進攻前に、西部の支城から守兵を撤収していることから、直接倶利伽羅峠を押さえる源氏ヶ嶺城も空城となり、そこへ秀吉軍が入城して、修築したのであろう。(高岡徹『小矢部市史』小矢部市)
- (61) ②「活動動詞」(31.1%) : しかし、これは、検定をパスさせるための形式的なまとめで、本文で詳しく紹介されているのは、極東裁判を国際法上不当だとする論点だけです。(不破哲三『ここに『歴史教科書』問題の核心がある』新日本出版社)
- (62) ③「到達動詞」(11.1%) : そこが、私にも、わからないんですよ。砂丘で死んでいた女は、所持品がなく、身元がわからなかった。(西村京太郎『鳥取・出雲殺人ルート』講談社)

[結果の状態]

(63) ①「到達動詞」(76.8%)：魚、魚、魚。こんなに魚が一同に集まっているのを見るのは初めてだ。(盛口満『骨の学校 3』木魂社)

(64) ②「達成動詞」(23.2%)：コートを着ているときは玄関でぬぎ、置く所は家の人にきくこと。(バーバラ寺岡『魅女ってみませんか』角川書店)

以上、文末と連体修飾節における「テイル」の5つの用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度について考察した。両位置における「テイル」の使用状況を比較すると、「テイル」の5つの用法のうち、「パーフェクト」の用法のみで構文的位置の違いによって動詞タイプ別の「テイル」の使用傾向が異なることが判明した。このうち、文末においては「活動動詞」のほうが「達成動詞」よりも使用率が高かったが、連体修飾節においては逆に「達成動詞」のほうが「活動動詞」よりも使用率が高いという異なる使用傾向が見られた。一方、「パーフェクト」の用法を除く他の4つの用法では、文末と連体修飾節の違いに関係なく、動詞タイプ別の「テイル」の使用傾向がほぼ一致している。このうち、「動作の持続」と「繰り返し」の2用法では、4つの動詞タイプ中「活動動詞」が最も多く用いられるのに対し、「結果の状態」の用法では「到達動詞」が最も多く使用されていた。対して、「単なる状態」の用法では文末と連体修飾節のいずれの位置においても4つの動詞タイプの使用頻度に明確な差異が見られなかった。

3.3.3 ステップ3：「テイル形」と「テイタ形」の使用状況

最後に、「テイル形」と「テイタ形」における日本語母語話者の「テイル」の使用にどのような差異があるのかについて考察する。これについて次の手順で行う。

3-① 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用頻度を見る。

3-② 「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ別の使用頻度を見る。

- 3-③ 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイル形」の使用頻度を見る。
- 3-④ 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイタ形」の使用頻度を見る。
- 3-⑤ 「テイル形」の使用において、文末と連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度を見る。
- 3-⑥ 「テイタ形」の使用において、文末と連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度を見る。

このうち、3-①と3-②については3.3.3.1節で論じる。また、3-③と3-④については3.3.3.2節で、そして3-⑤と3-⑥については3.3.3.3節で検討する。

3.3.3.1 「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用頻度

既述したように、BCCWJ から取り上げた「テイル形」と「テイタ形」の用例はそれぞれ500例である。用法別に使用頻度を集計すると、表3-8のようになる。

表3-8 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用頻度

時制形式	動作の持続			結果の状態			パーフェクト			繰り返し			単なる状態			合計		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	
テイル形	135	0.270	-0.8	182	0.364	-1.7	64	0.128	-0.6	38	0.076	1.0	81	0.162	3.5	500	1.000	
テイタ形	147	0.294	0.8	208	0.416	1.7	71	0.142	0.6	30	0.060	-1.0	44	0.088	-3.5	500	1.000	
合計	282	0.282	-	390	0.390	-	135	0.135	-	68	0.068	-	125	0.125	-	1000	1.000	
適合度検定の結果				テイル形	$\chi^2(4)=134.500, p<.001$													
				テイタ形	$\chi^2(4)=227.500, p<.001$													
独立性の検定の結果				$\chi^2(4)=14.500, p<.01$														

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96よりも大きければ、5%の有意水準で使用頻度に有意な偏りがあると判断できる。

「テイル形」と「テイタ形」の使用において、5つの用法のいずれかに偏って用いられるか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果はいずれも有意となった。つまり「テイル形」 $[\chi^2(4)=134.500, p<.001]$ 、「テイタ形」 $[\chi^2(4)=227.500,$

$p<.001$]両方の使用には、ともにある特定の用法に偏って用いられる傾向があることが示された。さら、「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用率を見てみると、「テイル形」と「テイタ形」のいずれにおいても、「動作の持続」(例(65)(66))よりも「結果の状態」(例(67)(68))の使用率がより高かった。換言すれば、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いにかかわらず、5つの用法の中で「結果の状態」が最も多く用いられていることがわかる。一方、「テイル形」と「テイタ形」のいずれにおいても「繰り返し」(例(69)(70))は各用法の中で使用率が最も低かった。

[動作の持続]

- (65) 「テイル形」：マリエールは、憤りと嘆きとで混乱しながら、自分の部屋に走り戻った。マノンは、まだジェームズを追い続けている。(藤本ひとみ『ブルボンの封印』新潮社)
- (66) 「テイタ形」：(なんと、虚しい…) 信明は歯ぎしりする思いで天井を見つめていた。(小野不由美『屍鬼 5』新潮社)

[結果の状態]

- (67) 「テイル形」：「シルヴァレード号っていうヨット。あそこに泊まっているわ。ほら、見て」女は眼下の港を指さした。(ルーシー・ゴードン『モンテカルロの宝石』ハーレクイン)
- (68) 「テイタ形」：街灯が白く光り、歩道に沿ってライトバンとピックアップ・トラックが前と同じように駐車していた。人影はなかった。日はすっかり暮れていた。(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス 下』講談社)

[繰り返し]

- (69) 「テイル形」：日本より規模の小さいイギリス、ドイツでも毎年一万～二万人

が司法試験に合格している。(竹中平蔵『構造改革でどうなる私たちの生活と日本経済』実業之日本社)

- (70) 「テイタ形」：中学の時の友達が月に二、三回は遊びに来てくれていたけど、彼女らも高校を卒業して大学に行っていなくなるわけだから、… (後略)。(安積純子『生の技法』藤原書店)

また、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによって日本語母語話者の「テイル」の用法別の使用頻度に差異があるか否かを、カイ二乗分布を使った独立性の検定で分析した。結果、表 3-8 に示したように有意となった $[x^2(4)=14.500, p<.01]$ 。つまり、時制形式の違いが日本語学習者の「テイル」の用法の使用に影響していることが示唆されている。さらに、具体的に「テイル」の5の用法の中でどの用法で「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度に有意な偏りがあるのかを残差分析によって検討した。その結果、「テイル」の5つの用法のうち、調整済み残差の絶対値が1.96よりも大きいのは「単なる状態」($z=\pm 3.5$)の用法のみであった。よって、この用法においては(71)のような「テイタ形」よりも、(72)のような「テイル形」の使用率が比較的高い、という「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度に有意な偏りがあることがわかった。

[単なる状態]

- (71) 「テイタ形」：あの頃は、携帯なんてほとんどなかった。でも、あまりにも彼の声に似ていた。(YUIKO『再恋』文芸社)
- (72) 「テイタ形」：次章で述べる永小作権も、他人の土地を利用する物権である点において、地上権と共通するが、永小作権は、耕作または牧畜を目的としている点で地上権と異なっている。(野村豊弘『民法』有斐閣)

次に、動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度を集計すると、表 3-9

のようになる。

表3-9 動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度

時制形式	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
テイル形	161	0.322	118	0.236	175	0.350	46	0.092	500	1.000	$\chi^2(3)=80.688, p<.001$
テイタ形	153	0.306	104	0.208	188	0.376	55	0.110	500	1.000	$\chi^2(3)=80.752, p<.001$
合計	314	0.314	222	0.222	363	0.363	101	0.101	1000	1.000	
独立性の検定の結果					$\chi^2(3)=2.354, p=.502, ns$						

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

まず、日本語母語話者の「テイル形」と「テイタ形」の使用が4つの動詞タイプのいずれかに偏って用いられるか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果はいずれも有意となった。つまり「テイル形」 [$\chi^2(3)=80.688, p<.001$] と「テイタ形」 [$\chi^2(3)=80.752, p<.001$] の両方ともに、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向があった。「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の使用率を見ると、「テイル形」における動詞タイプの使用は、「テイタ形」の場合と同様に4つの動詞タイプの中で「到達動詞」(例(73)(74))の使用率が最も高いのに対し、「状態動詞」(例(75)(76))の使用率が最も低いことがわかる。

〔到達動詞〕

(73) 「テイル形」：少しずつ変わって来ているみたい。女性客が増えているし、男性中心の旅館じゃ、女の幹事さんが絶対に選ばないから。(阿刀田高『空想列車 下』角川書店)

(74) 「テイタ形」：リビングルームの応接ソファーには、三人の男が座っていた。(城昌幸『若さま侍捕物手帖』光文社)

〔状態動詞〕

- (75) 「テイル形」：薬師堂は方五間・宝形造・本瓦葺きで、天竺様を基調としており、外見は浄土堂と似ているが、和様・唐様が加味されており、構造・様式の細部は随分違っている。(実著者不明『郷土資料事典』ゼンリン)
- (76) 「テイタ形」：それとまったく英語がわからないで孤立していたための苦悶と結びついて、からだの状態がまったく違っていたんです。(吉本隆明・河合隼雄・鶴見俊輔『学ぶとは何だろうか』晶文社)

また、「テイル形」と「テイタ形」の違いによって日本語母語話者の動詞タイプ別の使用頻度に差異があるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った。その結果、有意差は認められなかった[$\chi^2(3)=2.354, p=.502, ns$]。このことから、時制形式の違いは日本語母語話者の動詞タイプ別の「テイル」の使用に影響しないことが判明した。

以上、「テイル形」と「テイタ形」における日本語母語話者の「テイル」の用法と動詞タイプ別の使用状況について検討した。その結果、時制形式の違いは、母語話者の動詞タイプ別の「テイル」の使用傾向に影響しないが、「テイル」の用法の使用傾向には影響していることが判明した。また、「テイル」の5つの用法のうち、「単なる状態」の用法は「テイタ形」よりも「テイル形」でより使用されやすいという使用傾向が観察された。それにもかかわらず、「テイル形」と「テイタ形」のいずれにおいても「結果の状態」の用法は各用法の中で最も使用率が高い。一方、「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の使用頻度を考察した結果、時制形式の違いに関係なく、4つの動詞タイプの中で「到達動詞」の使用率が最も高いという一致した結果が得られた。

3.3.3.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度

次に、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによって「テイル」の各用法

における動詞タイプ別の使用頻度にどのような差異があるのかを考察する。これについて、まず、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイル形」の使用頻度を集計すると、表3-10のようになる。

表3-10 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイル形」の使用頻度

用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	86	0.637	27	0.200	5	0.037	17	0.126	135	1.000	$\chi^2(3)=115.044, p<.001$
結果の状態	0	0	37	0.203	145	0.797	0	0	182	1.000	$\chi^2(1)=64.088, p<.001$
パーフェクト	33	0.516	29	0.453	2	0.031	0	0	64	1.000	$\chi^2(2)=26.656, p<.001$
繰り返し	21	0.553	10	0.263	3	0.079	4	0.105	38	1.000	$\chi^2(3)=21.579, p<.001$
単なる状態	21	0.259	15	0.185	20	0.247	25	0.309	81	1.000	$\chi^2(3)=2.506, p=.474, ns$
合計	161	0.322	118	0.236	175	0.350	46	0.092	500	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

「テイル形」の使用において「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率で起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。結果、表3-6に示したように「動作の持続」 [$\chi^2(3)=115.044, p<.001$]、「結果の状態」 [$\chi^2(1)=64.088, p<.001$]、「パーフェクト」 [$\chi^2(2)=26.656, p<.001$]、「繰り返し」 [$\chi^2(3)=21.579, p<.001$]の4用法が有意となった。つまり、この4つの用法ではある特定の動詞タイプに偏って用いられている傾向が見られた。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(77)、63.7%)、②「達成動詞」(例(78)、20.0%)、③「状態動詞」(例(79)、12.6%)、④「到達動詞」(例(80)、3.7%)となる。また、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(81)、51.6%)、②「達成動詞」(例(82)、45.3%)、③「到達動詞」(例(83)、3.1%)となる。既述したように「パーフェクト」の用法における「状態動詞」の用例が出現していない。

さらに、「繰り返し」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(84)、55.3%)、②「達成動詞」(例(85)、26.3%)、③「状態動詞」

(例 (86)、10.5%)、④「到達動詞」(例 (87)、7.9%) となる。このうち、「状態動詞」と「到達動詞」の間にはあまり差が見られなかった。このように、「動作の持続」、「パーフェクト」、「繰り返し」の3用法のいずれにおいても「活動動詞」の使用率が全体の50%以上を超えており、4つの動詞タイプの中で最も使用頻度が高いことがわかる。対して、「結果の状態」の用法で使われている動詞は「到達動詞」(例 (88)、使用率79.7%)と「達成動詞」(例 (89)、使用率20.3%)のみで、このうち「到達動詞」の使用率が圧倒的に高かった。

[動作の持続]

- (77) ①「活動動詞」(63.7%) : 「男と女、どちらが優れていると思う？」—こんな質問をすると、反発を買うかもしれませんが、現実として、花業界では女性のほうが長く勤めているようです。(村正勇次郎『花屋が誰も書けなかった「花屋で成功するための本」』文芸社)
- (78) ②「達成動詞」(20.0%) : 「神谷さんには、ほんとに申し訳ないことをしてしまったみたい」「おじさんたちは、怒らないから、話してくれないかね」黒星は精一杯の笑顔を作っているが、目は笑っていなかった。(折原一『丹波家の殺人』光文社)
- (79) ③「状態動詞」(12.6%) : 渡辺さん、蘭子さん、そしてナビー、誰が今一番の幸せを感じているのだろう。(溝口恵美・秋葉文子『沖縄移住計画』学習研究社)
- (80) ④「到達動詞」(3.7%) : 「何で儲からへんのや。何で赤字のままなんや」毎月、徐々に売上げは上がっているのに、依然、会社は赤字のままだ。(福永正三『会社再建』出版文化社)

[パーフェクト]

- (81) ①「活動動詞」(51.6%)：フーコーに関しては、本書10章などでも言及している。(西原和久『自己と社会』新泉社)
- (82) ②「達成動詞」(45.3%)：半年間学んでもらい、コンペで気に入った建築士を選んで契約するシステムで、既に四十軒以上建っている。(吉村一哉・神戸新聞社『神戸新聞』神戸新聞社)
- (83) ③「到達動詞」(3.1%)：読者が既に知っている原作のストーリーやキャラクターをそのまま漫画にしたくなかった。(井上雄彦・板垣恵介・田中周治『sabra』小学館)

[繰り返し]

- (84) ①「活動動詞」(55.3%)：ほとんどの場合、聡史郎がつくる夕食を毎日食べているのだから遊んでいないとも言える。(桜坂洋『よくわかる現代魔法』集英社)
- (85) ②「達成動詞」(26.3%)：唐がらしとひと言で言っても種類は様々で、主人の畑でも3~4種類は毎年作っている。(鳩山エミリ『食べるのが大好き』講談社)
- (86) ③「状態動詞」(10.5%)：中国文学の学習は、戦前の初等教育以後の教育課程の大きな部分を占めていた (Roden 1980) し、漢文表現に通じていることは、今でも教養があるしるしだと思われている。(マーシャル・アンガー(著)/奥村睦世(訳)『占領下日本の表記改革』三元社)
- (87) ④「到達動詞」(7.9%)：まず、不正アクセス禁止法違反により検挙された人の数は、毎年10人程度増えていることとなります。(新井悠『ネットワークセキュリティ expert 3』技術評論社)

[結果の状態]

(88) ①「到達動詞」(79.7%)：そのような場を通じて誰もが道具の作り方や修理についてよく知っている。(西田正規『ヒトの自然誌』平凡社)

(89) ②「達成動詞」(20.3%)：そこは一面の平地で、どっしりとした家屋、手入れの届いた田んぼ、美しい用水池、その間に点々と桑や竹も植えられている。(楠山春樹『老子のことば』斯文会；明德出版社)

また、「テイル」の用法における動詞タイプ別の「テイタ形」の使用頻度を集計すると、表3-11のようになる。

表3-11 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイタ形」の使用頻度

用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	97	0.660	16	0.109	0	0	34	0.231	147	1.000	$\chi^2(2)=73.832, p<.001$
結果の状態	0	0	45	0.216	163	0.784	0	0	208	1.000	$\chi^2(1)=66.941, p<.001$
パーフェクト	32	0.451	30	0.423	9	0.127	0	0	71	1.000	$\chi^2(2)=13.718, p<.01$
繰り返し	17	0.567	6	0.200	4	0.133	3	0.100	30	1.000	$\chi^2(3)=16.667, p<.001$
単なる状態	7	0.159	7	0.159	12	0.273	18	0.409	44	1.000	$\chi^2(3)=7.455, p=.059, ns$
合計	153	0.306	104	0.208	188	0.376	55	0.110	500	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

「テイタ形」の使用においては「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率に起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。結果、表3-6に示したように「動作の持続」 $[\chi^2(2)=73.832, p<.001]$ 、「結果の状態」 $[\chi^2(1)=66.941, p<.001]$ 、「パーフェクト」 $[\chi^2(2)=13.718, p<.01]$ 、「繰り返し」 $[\chi^2(3)=16.667, p<.001]$ の4用法が有意となった。つまり、この4つの用法ではある特定の動詞タイプに偏って用いられている傾向が見られた。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(90)、66.0%)、②「状態動詞」(例(91)、23.1%)、③「達成動詞」(例(92)、10.9%)とな

り、ここでは「到達動詞」の用例が出現していない。また、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(93)、45.1%)、②「達成動詞」(例(94)、42.3%)、③「到達動詞」(例(95)、12.7%)となる。このうち、「活動動詞」と「達成動詞」の使用率にあまり差はなかった。そして、「繰り返し」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(96)、56.7%)、②「達成動詞」(例(97)、20.0%)、③「状態動詞」(例(98)、13.3%)、④「到達動詞」(例(99)、10.0%)となる。このうち、「状態動詞」と「到達動詞」の間にはあまり差が見られなかった。このように、「動作の持続」、「パーフェクト」、「繰り返し」の3用法ではいずれも「活動動詞」が最も多く用いられることがわかる。対して、「結果の状態」の用法で使われている動詞は「到達動詞」(例(100)、使用率78.4%)と「達成動詞」(例(101)、使用率21.6%)のみで、このうち「到達動詞」の使用率が極めて高かった。

[動作の持続]

- (90) ①「活動動詞」(66.0%) : ルートは玄関ロビーで保全係の男と話していたが、彼は学生に頼まれたからといって教職員の部屋の鍵を開けるわけにはいかないと言いつ張っていた。(レジナルド・ヒル(著)/秋津知子(訳)『死者との対話』早川書房)
- (91) ②「状態動詞」(23.1%) : そんなのだったら、喜んで訳そうという人間なんてあまりいないから、こちらに回してくれる可能性があるわけです。だから、そういうアルバイトをして生きようと思っていた。(溝口恵美・秋葉文子『沖縄移住計画』学習研究社)
- (92) ③「達成動詞」(10.9%) : 遺家族欄に梶美千子、続柄に妻、と。美千子は、窓辺で泣く泣く手荷物を作っていた。傍らに、奉公袋が何喰わぬ顔で転がっていた。(五味川純平『人間の条件 上』岩波書店)

[パーフェクト]

- (93) ①「活動動詞」(45.1%)：タイガースの四番を最も長く務めた掛布雅之は、かつてこんなことを言っていた。「田淵さんが抜けてから、自分がホームランを打たなければならないと思った」掛は三度本塁打王に輝いたが、それはチーム事情を考慮して打法を改造した結果得られたものだった。(北岡士典『星野仙一蘇る猛虎魂』ベストセラーズ)
- (94) ②「達成動詞」(42.3%)：その夕、あかねは魚半の大事な客をとっつきの四畳半に入れてしまった。おなつは奥の床の間つきの上等な六畳間を用意していたのだが、折あしく彼女が不在のときに、べつの客をあかねがその部屋へ案内していたのである。(南原幹雄『箱崎別れ船』ワンツーマガジン社)
- (95) ③「到達動詞」(12.7%)：パレスチナ問題、レバノン内戦、北アイルランド紛争、チベット問題などは、冷戦下ですでに起こっていた。(実著者不明『世界民族・宗教のすべて』日本文芸社)

[繰り返し]

- (96) ①「活動動詞」(56.7%)：アユバ・スレイマン・ジャッロ この幸運な奴隷は当時のイギリス人からはジョブ・ベン・ソロモンと呼ばれていた。本当の名をアユバ・スレイマン・ジャッロという。(小川了『奴隷商人ソニエ』山川出版社)
- (97) ②「達成動詞」(20.0%)：ぼくがネパールに滞在していたのは、87年と88年の2回で、滞在期間は延べ3か月に及ぶ。そのうち半分は山を歩き、半分はカトマンドゥとポカラで怠惰な日々を送っていた。(斉藤政喜『東方見便録』文藝春秋)
- (98) ③「状態動詞」(13.3%)：岩倉一行は、ロシアに来て、大いに認識を改めるにいたる。それまで日本の有識者の間で、世界最強の国といえば、ロシアだと思

われていた。(泉三郎『堂々たる日本人』祥伝社)

- (99) ④「到達動詞」(10.0%)：御三家や大名家が金に窮すると、幕府に借金を申し入れたが、幕府はとくに詮索することもなく、金を貸しあたえた。しかも、どうせ返還できないだろうとして、貸金を贈与金に切り替えたりしている。こうして家綱が在位した三十年間、年平均十万両が減っていた。(中江克己『金銀忠臣蔵』太陽企画出版)

[結果の状態]

- (100) ①「到達動詞」(78.4%)：彼女は先頭に立って表へ出て行った。彼女が足を止めた場所には、黒い車が一台止まっていた。(金正妍(著)/朴美淑・韓良心(訳)『北朝鮮女諜報員「ノメル08」上』ラインブックス)
- (101) ②「達成動詞」(21.6%)：ホテルの宿泊客のために、夜の十時過ぎまでバーは開けられていたが、暗いフェアウェイが見えるだけのクラブハウス内のバーに、わざわざやってくる客は少なかった。(高橋三千綱『オンザティ』講談社)

以上、「テイル」の用法における動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用傾向について考察した。その結果、「テイル形」の使用において、「動作の持続」、「パーフェクト」、「繰り返し」の3用法では「活動動詞」が最も多く用いられているのに対し、「結果の状態」の用法では「到達動詞」が最も多く用いられている、という点で「テイタ形」の場合と共通する使用傾向が見られた。しかし、「動作の持続」の用法では、「テイル形」の場合、「状態動詞」(12.6%)よりも「達成動詞」(20.0%)のほうがより多く用いられている一方で、「テイタ形」の場合では逆に「達成動詞」(10.9%)よりも「状態動詞」(23.1%)のほうがより多く用いられている、という異なる使用傾向が観察された。また、「パーフェクト」の用法では、「テイル形」の場合(「活動動詞」

の使用率 51.6% ; 「達成動詞」の使用率 45.3%) に比べると、「テイタ形」の場合には「活動動詞」(45.1%) と「達成動詞」(42.3%) の間に使用率の差異が縮まっていた。一方、「単なる状態」の用法では「テイル形」と「テイタ形」のいずれの時制形式においても4つの動詞タイプの使用頻度に明確な差異は見られなかった。

3.3.3.3 文末と連体修飾節における「テイル」の各用法での動詞タイプ別の使用頻度

最後に、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度にいかなる差異があるのかを考察する。これについて、まず、文末と連体修飾節の両位置において、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイル形」の使用頻度を集計すると、表3-12のようになる。

表3-12 文末と連体修飾節における「テイル形」の各用法での動詞タイプ別の使用頻度

構文的 位置	用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
文末	動作の持続	45	0.592	15	0.197	4	0.053	12	0.158	76	1.000	$\chi^2(3)=50.842, p<.001$
	結果の状態	0	0	21	0.188	91	0.813	0	0	112	1.000	$\chi^2(1)=43.750, p<.001$
	パーフェクト	29	0.617	17	0.362	1	0.021	0	0	47	1.000	$\chi^2(2)=25.191, p<.001$
	繰り返し	12	0.522	7	0.304	1	0.043	3	0.130	23	1.000	$\chi^2(3)=12.304, p<.01$
	単なる状態	17	0.327	5	0.096	13	0.250	17	0.327	52	1.000	$\chi^2(3)=7.385, p=.061, ns$
	合計	103	0.332	65	0.210	110	0.355	32	0.103	310	1.000	
連体修飾節	動作の持続	41	0.695	12	0.203	1	0.017	5	0.085	59	1.000	$\chi^2(3)=66.492, p<.001$
	結果の状態	0	0	16	0.229	54	0.771	0	0	70	1.000	$\chi^2(1)=20.629, p<.001$
	パーフェクト	4	0.235	12	0.706	1	0.059	0	0	17	1.000	$\chi^2(2)=11.142, p<.01$
	繰り返し	9	0.600	3	0.200	2	0.133	1	0.067	15	1.000	$\chi^2(3)=10.333, p<.05$
	単なる状態	4	0.138	10	0.345	7	0.241	8	0.276	29	1.000	$\chi^2(3)=2.586, p=.460, ns$
	合計	58	0.305	53	0.279	65	0.342	14	0.074	190	1.000	

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：連体修飾節における「繰り返し」の用法では、動詞タイプ別の使用頻度を適合度検定で分析した結果、 $p<.05$ であるが、ボンフェローニ (Bonferroni) の補正を行った有意水準 ($0.05/5=0.01$) より高いために有意ではないことになる。

文末における「テイル形」の使用においては「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率で起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。結果、表3-12に示したように「動作の持続」 [$\chi^2(3)=50.842$,

$p<.001$ 、「結果の状態」 $[x^2(1)=43.705, p<.001]$ 、「パーフェクト」 $[x^2(2)=25.191, p<.001]$ 、「繰り返し」 $[x^2(3)=12.304, p<.01]$ の4用法が有意となった。換言すれば、文末における「テイル形」の使用において、この4つの用法ではある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向があることが示されている。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(102)、59.2%)、②「達成動詞」(例(103)、19.7%)、③「状態動詞」(例(104)、15.8%)、④「到達動詞」(例(105)、5.3%)となる。このうち、「達成動詞」と「状態動詞」の間に使用率の差異はあまりなかった。また、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(106)、61.7%)、②「達成動詞」(例(107)、36.2%)、③「到達動詞」(例(108)、2.1%)となる。「繰り返し」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(109)、52.2%)、②「達成動詞」(例(110)、30.4%)、③「状態動詞」(例(111)、13.0%)、④「到達動詞」(例(112)=(19))、4.3%)となる。このように、「動作の持続」、「パーフェクト」、「繰り返し」の3用法ではいずれも「活動動詞」が最も多く用いられることがわかる。対して、「結果の状態」の用法で使われる動詞は「到達動詞」(例(113)、使用率81.3%)と「達成動詞」(例(114)、使用率18.8%)のみで、このうち「到達動詞」のほうがより多く用いられていることがわかった。

[動作の持続]

(102) ①「活動動詞」(59.2%)：映画が始まり、ちょっとのあいだうとうとして目が覚めた。と、さっきの女性客がもぞもぞと動きながら、何か小声で話している。(宮部みゆき『誰か』実業之日本社)

(103) ②「達成動詞」(19.7%)：砂漠にも、それぞれ異なる環境があるのよ。何しろ、人類は八千年前から森林を破壊しているんですものね。(佐竹一彦『人警視庁公安部』角川書店)

- (104) ③「状態動詞」(15.8%)：真相は分らないが、菊池が人の物を盗むような人間でないことを成瀬は固く信じている。(村松梢風『時代小説大全集 6』新潮社)
- (105) ④「到達動詞」(5.3%)：しかも、インターネットの普及や競争激化のおかげで、長距離電話回線料金も下がってきている。(押田努『あるある佐賀の底力』佐賀新聞社)

[パーフェクト]

- (106) ①「活動動詞」(61.7%)：これに対し、男性は「示談での解決を希望したことはなく、事件化を求めない発言をした覚えもない。納得できない結果で、国家賠償などの法的手段をとりたい」と言っている。(北海道新聞社『北海道新聞』北海道新聞社)
- (107) ②「達成動詞」(36.2%)：その翌年、三四六年には、「倭兵、猝かに風島に至り、辺戸を抄掠す。又、進みて金城を囲み、急しく攻む」と書かれている。(市井敏夫『邪馬台国論の新展開』歴研)
- (108) ③「到達動詞」(2.1%)：香る白百合、カサブランカのような可憐な美貌が出現した。鏡の中の母はすでに消えている。化粧をした里美の顔は千賀子とは似ていない。(和田はつ子『密通』角川書店)

[繰り返し]

- (109) ①「活動動詞」(52.2%)：毎朝BSテレビで時間の許すかぎり海外ニュースを見ているが、アメリカ、フランス、イギリスなど欧米先進地域の国々での子どもや若い女性の誘拐殺人事件報道があまりにも多いのに驚かされる。(長野晃子『日本人はなぜいつも「申し訳ない」と思うのか』草思社)
- (110) ②「達成動詞」(30.4%)：警察を甘く見ていたことに、その時気づいた。私は今に至るまで、何回も取り調べを受けている。(飛鳥部勝則『殉教カテリナ車

輪』東京創元社)

- (111) ③「状態動詞」(13.0%)：椅子の上で膝を抱えた姿は、どこか猫みたいでもある。実際、本当に猫の生まれ変わりなんじゃないかと、ちひろは時々疑っているのだが。(泉三郎『堂々たる日本人』祥伝社)
- (112) ④「到達動詞」(4.3%)：この地獄では、四六時中、殺人にいたる大ゲンカが起こっている。(実著者不明『仏教の知識百科』主婦と生活社)

[結果の状態]

- (113) ①「到達動詞」(81.3%)：ソウルの街では、まず駅や公園の自動販売機は、判で押したようにどこでも一か所は故障している。(増田辰弘『最新・アジアビジネス最前線』産能大学出版部)
- (114) ②「達成動詞」(18.8%)：挨拶も抜きでツヴァイク少佐が退室してゆくと、ほとんど間を置かずに、別の男が入室してきた。彼もやはり将校の制服を着用しているが、カラーは黒だった。(高橋三千綱『オンザティ』講談社)

また、連体修飾節における「テイル形」の使用において「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率に起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。結果は文末の場合とは異なり、動詞タイプ別の使用頻度に有意な偏りがあるのは「動作の持続」 $[x^2(3)=66.492, p<.001]$ 、「結果の状態」 $[x^2(1)=20.629, p<.001]$ 、「パーフェクト」 $[x^2(2)=11.142, p<.01]$ の3用法のみであった。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(115)、69.5%)、②「達成動詞」(例(116)、20.3%)、③「状態動詞」(例(117)、8.5%)、④「到達動詞」(例(118)=(55))、1.7%)となり、「活動動詞」が最も多く用いられていた。また、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「達成動詞」(例(119)、70.6%)、②「活

動動詞」(例(120)、23.5%)、③「到達動詞」(例(121)=(83))、5.9%)の順になり、「達成動詞」が最も多く用いられていた。最後に、「結果の状態」の用法では、「到達動詞」(例(122)、使用率77.1%)のほうが「達成動詞」(例(123)、使用率22.9%)よりも多く用いられていることがわかった。

[動作の持続]

- (115) ①「活動動詞」(69.5%) : 全員が東アジア系の顔だちをしているが、話している言葉は英語だった。それでもエリコは、彼らが日系人であることを疑わなかった。(谷甲州『エリコ』早川書房)
- (116) ②「達成動詞」(20.3%) : 卵が孵化するまで約30日かかるが、メスが卵を抱いて温めている間、オスはなんの手伝いもしないばかりか、メスに食物を運ぶことさえしないのだ。(実著者不明『本当はどうなのか!?「常識・通説」の大疑問』成美堂出版)
- (117) ③「状態動詞」(8.5%) : たとえば、あるコンプレックスを持っていて、そのせいで物事がうまくいかないと思っている人がいるとする。(レイモンド・カーヴァー(著)/村上春樹(訳)『必要になったら電話をかけて』中央公論新社)
- (118) ④「到達動詞」(1.7%) : 煙突から出ている煙が、星明かりに青白く透ける。(柄刀一『レイニー・レイニー・ブルー』光文社)

[パーフェクト]

- (119) ①「達成動詞」(70.6%) : ロンドン大学で応用化学を専攻し、博士号を取っているドクター・キアは、総裁に次ぐ実力者で、鉱区入札の実務は、キア一人に任されているといってもよかった。(山崎豊子『不毛地帯4』新潮社)
- (120) ②「活動動詞」(23.5%) : この直接的研究のみに埋没している限り、近い将来とても明治以前にすでに言及されている忌避方法と比べて抜本的に進んだ方

法が出現するとは思えない。(林知己夫『野うさぎを数える』勉誠出版)

- (121) ③「到達動詞」(5.9%)：読者が既に知っている原作のストーリーやキャラクターをそのまま漫画にしたくなかった。(井上雄彦・板垣恵介・田中周治『sabara』小学館)

[結果の状態]

- (122) ①「到達動詞」(77.1%)：コーチの持っている理論はもちろんだが、やはりコーチの選手時代の力量も重要なのだ。(一志治夫『狂気の左サイドバック』小学館)
- (123) ②「達成動詞」(22.9%)：私が想像していた大公報社は、高いビルディングで、中はそれぞれの部屋の入口に何々部といった札が掛けられているものだった。(蕭乾(著)/丸山昇・平石淑子(訳)『地図を持たない旅人 上』花伝社)

次に、文末と連体修飾節の両位置において、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイタ形」の使用頻度を集計すると、表3-13のようになる。

表3-13 文末と連体修飾節における「テイタ形」の各用法での動詞タイプ別の使用頻度

構文的 位置	用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		合計		適合度検定の結果
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
文末	動作の持続	68	0.618	13	0.118	0	0	29	0.264	110	1.000	$\chi^2(2)=43.655, p<.001$
	結果の状態	0	0	32	0.209	121	0.791	0	0	153	1.000	$\chi^2(1)=51.771, p<.001$
	パーフェクト	22	0.512	16	0.372	5	0.116	0	0	43	1.000	$\chi^2(2)=10.372, p<.01$
	繰り返し	8	0.471	4	0.235	3	0.176	2	0.118	17	1.000	$\chi^2(3)=4.822, p=.181, ns$
	単なる状態	6	0.167	5	0.139	10	0.278	15	0.417	36	1.000	$\chi^2(3)=6.889, p=.076, ns$
	合計	104	0.290	70	0.195	139	0.387	46	0.128	359	1.000	
連体修飾節	動作の持続	29	0.784	3	0.081	0	0	5	0.135	37	1.000	$\chi^2(2)=33.946, p<.001$
	結果の状態	0	0	13	0.236	42	0.764	0	0	55	1.000	$\chi^2(1)=15.291, p<.001$
	パーフェクト	10	0.357	14	0.500	4	0.143	0	0	28	1.000	$\chi^2(3)=5.429, p=.066, ns$
	繰り返し	9	0.692	2	0.154	1	0.077	1	0.077	13	1.000	$\chi^2(3)=13.769, p<.01$
	単なる状態	1	0.125	2	0.250	2	0.250	3	0.375	8	1.000	$\chi^2(3)=1.000, p=.801, ns$
	合計	49	0.348	34	0.241	49	0.348	9	0.064	141	1.000	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

文末における「テイタ形」の使用において「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率に起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。結果、表3-12に示したように「動作の持続」 $[x^2(2)=43.655, p<.001]$ 、「結果の状態」 $[x^2(1)=51.771, p<.001]$ 、「パーフェクト」 $[x^2(2)=10.327, p<.001]$ の3用法が有意となった。換言すれば、文末における「テイタ形」の使用において、この3つの用法ではある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向があることが示された。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(124)、61.8%)、②「状態動詞」(例(125)、26.4%)、③「達成動詞」(例(126)、11.8%)となり、「テイタ形」における「動作の持続」の用法に使用された「到達動詞」の用例が出現していない。また、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプの使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(127)、51.2%)、②「達成動詞」(例(128)、37.2%)、③「到達動詞」(例(129)、11.6%)となる。このように、「動作の持続」と「パーフェクト」の2用法ではいずれも「活動動詞」が最も多く用いられている。対して、「結果の状態」の用法で使われている動詞は「到達動詞」(例(130)、使用率79.1%)と「達成動詞」(例(131)、使用率20.9%)のみで、「到達動詞」のほうがより多く用いられている。

〔動作の持続〕

- (124) ①「活動動詞」(61.8%)：顔をあげると、克也が目を細めて、探るようにこちらを見ていた。(瀬川貴次『紅蓮の御霊姫』集英社)
- (125) ②「状態動詞」(26.4%)：ダッシュは、クラレンがほかにどんな話をするのだろうと思っていた。(ジョアン・ロス(著)/柴田礼子(訳)『ルールは無用』ハーレクイン)
- (126) ③「達成動詞」(11.8%)：そわそわしながら『リビングルーム』に入ってくる。中では光浩が肉と野菜をどんどんホットプレートに並べていた。(恩田陸『ネ

バーランド』集英社)

[パーフェクト]

- (127) ①「活動動詞」(51.2%) : 次男エマーヌエルも、兄について次のように語っていた。「我々皆が集まるよりも、兄一人の方が我々の父の代りをする事ができた」と。(久保田慶一『バッハの息子たち』音楽之友社)
- (128) ②「達成動詞」(37.2%) : 翌々日の九月四日パリに革命が起こり、共和政府樹立、しかしその六日前にランボーは鉄道運賃不足を理由にパリの帝政警察に逮捕されていた。(市井敏夫『邪馬台国論の新展開』歴研)
- (129) ③「到達動詞」(11.6%) : (前略)....、次第に一部の軍事専門家的な議員が起用されるようになっていた。元老院議員身分の政治参加における分化がすでに起こっていたのである。(南川高志『岩波講座世界歴史 4』岩波書店)

[結果の状態]

- (130) ①「到達動詞」(79.1%) : 列は店先の階段から、建物の他の半分にある宝石店のドア近くまで延びていた。(トマス・ペリー(著)/飯島宏(訳)『メツガーの犬』文芸春秋)
- (131) ②「達成動詞」(20.9%) : 私は相槌を打ってから、そろそろ行くと告げて立ち上がった。片手をついた机の上には鉛筆で無数のラクガキが残されていた。(島本理生『小説推理』双葉社)

また、連体修飾節における「テイタ形」の使用において「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度が等確率に起こるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を5回行った。結果、文末の場合とは異なり動詞タイプ別の使用頻度に有意な偏りがあるのは「動作の持続」 $[\chi^2(2)=33.946, p<.001]$ 、「結果の状態」

[$\chi^2(1)=15.291, p<.001$]、「繰り返し」 [$\chi^2(3)=13.769, p<.01$]の3用法であった。このうち、「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(132)、78.4%)、②「状態動詞」(例(133)、13.5%)、③「達成動詞」(例(134)、8.1%)となり、文末の場合と同様に「テイタ形」における「到達動詞」の用例が出現していない。また、「繰り返し」の用法における動詞タイプ別の使用率を高い順に並べると、①「活動動詞」(例(135)、69.2%)、②「達成動詞」(例(136)、15.4%)、③「到達動詞」(例(137)、7.7%)と「状態動詞」(例(138)、7.7%)となる。このうち、取り上げられたデータの中で「テイタ形」における「繰り返し」の用法に使用された「到達動詞」と「状態動詞」の用例はいずれも1例のみであった。このように、「動作の持続」と「繰り返し」の2用法ではいずれも「活動動詞」が最も多く用いられることがわかる。対して、「結果の状態」の用法で使われている動詞は「到達動詞」(例(139)、使用率76.4%)と「達成動詞」(例(140)、使用率23.6%)のみで、「到達動詞」のほうがより多く用いられることがわかった。

〔動作の持続〕

(132) ①「活動動詞」(78.4%)：「ふーん、きみは変わってるね。今の日本の学生じゃないみたいだ」 黙ってぼくの話が聞いていたヒッサツさんが言った。
(岳真也『風の祭礼』作品社)

(133) ②「達成動詞」(13.5%)：風景を描いていた頃は、人の顔など見なかった。(実著者不明『本当はどうなのか!?「常識・通説」の大疑問』成美堂出版)

(134) ③「状態動詞」(8.1%)：小出は、「芸術には困ったもんだ」と考えていた温気の世界に舞い戻り、これをうまく絵に取り込む方法を見いだした。(森村泰昌『時を駆ける美術』光文社)

[繰り返し]

- (135) ①「活動動詞」(69.2%)：私は鶏肉を口に入れて驚いた。すごく弾力があるのだ。すぐには噛み切れず、何度も口の中で咀嚼しなくてはいけなかった。今まで食べていた鶏肉とはまるっきり違う。(荻谷剛彦『教育改革の幻想』筑摩書房)
- (136) ②「達成動詞」(15.4%)：この期間はすべて未経験の人達がただ夢中になって番組を作っていた時代で、スタジオにしてもNHKはじめNTV、後発のTBS(当時KRT)もそれぞれ二つか三つしかなく、... (後略)。(林知己夫『野うさぎを数える』勉誠出版)
- (137) ③「到達動詞」(7.7%)：どうでもいいけどともかくつけておかなくてはと、焼き肉屋におけるゼミの教授とスンシンの会話のなかで頻繁に出ていた敦史の名前を持ちだし、かれとはとても仲がいいといった。(玄月『異物』講談社)
- (138) ③「状態動詞」(7.7%)：父の裕は、金大中拉致事件などが起き、軍事独裁の怖い国と思われていた70年代の韓国に留学した。(朝日新聞社『朝日新聞』朝日新聞社)

[結果の状態]

- (139) ①「到達動詞」(76.4%)：満一歳の私を二〇三高地の髪でだっこしてすまして立っていた着物姿のおばさんが写っていたアルバム帳のセピアの写真を想い浮かべながら、熱いタヌキうどんを食べた。(荒木経惟『東京情事』平凡社)
- (140) ②「達成動詞」(23.6%)：柊茂は、夕食を終えたと思ったら、尻の温まる暇もなく、膳の上に残されていた赤かぶ漬けの皿を手にして、そそくさと立ちあがった。(和久峻三『容疑者は赤かぶ検事夫人』実業之日本社)

以上、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度にいかなる差異があるかを考察した。まず、文末と連体修飾節における「テイル形」の使用を比較すると、5つの用法のうち、「動作の持続」、「結果の状態」、「単なる状態」の3用法で使用された動詞タイプ別の使用状況は、構文的位置の違いに関係なく共通していることが判明した。このうち、「動作の持続」の用法では文末と連体修飾節のいずれにおいても「活動動詞」が最も多く用いられているのに対し、「結果の状態」の用法ではいずれの位置においても「到達動詞」が最も多く使用されていた。また、「単なる状態」の用法では構文的位置に関係なく、いずれにおいても4つの動詞タイプの使用頻度に明確な差異は見られなかった。一方、「パーフェクト」と「繰り返し」の2用法では、動詞タイプ別の使用状況は構文的位置の違いによって異なることが明らかになった。このうち、「パーフェクト」の用法では文末の場合、「達成動詞」よりも「活動動詞」のほうがより多く用いられていたが、連体修飾節の場合には逆に「達成動詞」の使用率が高かった。また、「繰り返し」の用法では文末の場合、「活動動詞」のほうが他の動詞タイプよりも使用率が高かったが、連体修飾節の場合は4つの動詞タイプの使用率に明確な差異はない、という異なる使用状況が観察された。

また、文末と連体修飾節における「テイタ形」の使用を比較すると、「テイル形」の場合と同様に5つの用法の中で、「動作の持続」、「結果の状態」、「単なる状態」の3用法における動詞タイプ別の使用状況に構文的位置の違いによる影響は見られなかった。文末と連体修飾節の違いにかかわらず、「動作の持続」の用法では「活動動詞」が最も多く用いられているのに対し、「結果の状態」の用法では「到達動詞」が最も多く使用されている。また、「単なる状態」の用法では両位置のいずれにおいても、4つの動詞タイプの使用頻度に顕著かつ有意な差異は見られなかった。一方、「パーフェクト」と「繰り返し」の2用法における動詞タイプ別の使用状況は、文末と連体修飾節の違いによって異なることが判明した。「パーフェクト」の用法では文末の場合、各動詞タ

イプの中で「活動動詞」が最も多く用いられているが、連体修飾節の場合、4つの動詞タイプの間には使用率の差異は見られなかった。また、「繰り返し」の用法では、文末の場合には動詞タイプの間には使用率の差異が見られなかったが、連体修飾節の場合には「活動動詞」の使用率が他の動詞タイプよりも高かった。

3.4 まとめ

本章では、日本語母語話者の「テイル」の使用状況を検討した。分析にあたってはBCCWJから「テイル形」と「テイタ形」の用例を500例ずつ合計1000例取り上げ、日本語母語話者の「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況を調査し、さらにそれは構文的位置（文末と連体修飾節）や時制形式（「テイル形」と「テイタ形」）の違いによっていかなる差異があるかを考察した。結果を以下のように箇条書きで用法ごとに整理する。

1. 「結果の状態」:

日本語母語話者の「テイル」の使用では、「結果の状態」（表3-1, 39.0%）は5つの用法の中で使用率が最も高い。「結果の状態」における動詞タイプ別の使用状況を見ると、構文的位置と時制形式の違いに関係なく、「到達動詞」のほうが「達成動詞」よりも使用率が高いという一致する使用状況が見られた。

2. 「動作の持続」:

日本語母語話者の「テイル」の使用において、「動作の持続」の使用率（表3-1, 28.2%）は「結果の状態」に次ぐものである。「動作の持続」における動詞タイプ別使用状況を見ると、構文的位置と時制形式の違いにかかわらず、4つの動詞タイプの中で「活動動詞」が最も多く用いられているのに対し、「到達動詞」の使用率が最も低いという一致する使用傾向があった。しかし、「達成動詞」と「状態動詞」の使用状況は時制形式の違いによって異なる。「テイル形」の

使用では「達成動詞」のほうが「状態動詞」よりも多く用いられていたが、「テイタ」の使用では逆に「状態動詞」のほうが「達成動詞」よりも多く用いられていた。

3. 「パーフェクト」:

「パーフェクト」の使用率(表3-1, 13.5%)は5つの用法の中で3番目に高い。どのような動詞タイプでも表現できる「パーフェクト」の用法で「状態動詞」の用例が出現しないことから、4つの動詞タイプと「テイル」の5つの用法との組み合わせのうち「状態動詞」が「パーフェクト」の用法を表すのは最も困難であることがわかる。また、「状態動詞」を除けば、「パーフェクト」の用法で使用された3つの動詞タイプのうち、「到達動詞」の使用率は常に他の動詞タイプより低かったが、「活動動詞」と「達成動詞」の使用状況は構文的位置の違いによって異なった。文末では「活動動詞」のほうが「達成動詞」よりも多く用いられていたが、連体修飾節では逆の結果が得られた。

4. 「単なる状態」:

5つの用法のうち、「単なる状態」(表3-1, 12.5%)と「パーフェクト」(表3-1, 13.5%)の2用法の間に使用率の差異はあまりない。しかし、他の4つの用法とは異なり、日本語母語話者の「単なる状態」の用法の使用には時制形式の違いによる影響が見られた。「テイル形」と「テイタ形」との使用率の比較により、「単なる状態」は「テイタ形」よりも「テイル形」でより多く使用されることが観察された。このことから、「単なる状態」の用法では「テイタ形」よりも「テイル形」のほうがより使用されやすいことがわかる。それにもかかわらず、「単なる状態」における動詞タイプ別の使用頻度には、構文的位置と時制形式の違いに関係なく明確な差異が見られなかった。

5. 「繰り返し」:

日本語母語話者の「テイル」の使用において、「繰り返し」の使用率(表3-1,

6.8%) は調査全体の1割さえにも達しておらず、5つの用法の中で最も低い。

「繰り返し」における動詞タイプ別の使用状況を見ると、「テイル形」の使用において、文末では「活動動詞」が最も多く用いられていたのに対し、連体修飾節では4つの動詞タイプの使用頻度に明確な差異は見られなかった。一方、

「テイタ形」の使用は「テイル形」の場合とは異なり、文末では4つの動詞タイプの使用頻度に有意差がないのに対し、連体修飾節では「活動動詞」が最も多く用いられていた。このように、「繰り返し」における動詞タイプ別の使用状況は構文的位置と時制形式の違いによって変わることが判明した。

第4章 学習者の調査の概要

4.1 はじめに

前章では、日本語母語話者の「テイル」の使用状況について考察した。続いて、第5章から第8章までは日本語学習者の「テイル」の使用状況について考察する。本章では本研究の調査項目、調査対象者、分析データなどの研究方法について説明する。

4.2 調査項目

本研究では日本語学習者の「テイル」の正用と誤用について分析する。このうち、誤用は「非使用」、「過剰使用」、「テンスの誤り」の3つに分けて考えられる。これらの正用と誤用の定義と使用例を表4-1に示す。

表4-1 「テイル」の正用と誤用の種類の定義および使用例

正用	定義：「テイル」を正しく使えるもの
	例：そのとき、私は初めて家を離れて、外で <u>住んでいた</u> 。(SCU-A-2-58-1-T2) 例：寮に <u>すんでいる</u> 間はよく家族のみんなを思い出した。(SCU-A-2-58-1-T2)
非使用	定義：テイルを使用すべきところに使っていない誤用
	例：あのごろのこと、私は永遠に <u>覚える</u> （→覚えている）と思います。(SCU-A-2-97-1-T2) 例：その上、この「情報の爆発」な時代で、さまざまな、よく <u>管理されない</u> （→管理されていない）情報はテレビやネットに流れ込んでいる。(SCU-A-3-61-3-T7)
誤用	定義：テイルを使用すべきではないところに使用した誤用
	例：蜂たちがしろちゃんを追討する同時、目覚めたフクロウも木の洞から <u>出ていた</u> （→出てきた）。(NTU-A-2-116-2-T8) 例：角がつかまれたので、驚いて <u>怒っている</u> （→怒った）鹿は、突然立ちあがった。(NTU-A-2-117-2-T8)
テンスの誤り	定義：テンスが間違っているもの 例：むかしむかし、ある男の子が森の中に <u>住んでいます</u> （→住んでいました）。(SCU-A-2-81-2-T8)

注1：一重下線部分は「テイル」の正用，二重下線部分は「テイル」の誤用であり，括弧内は筆者による訂正である。

注2：「SCU-A-2-58-1-T2」は「CTLJ」における作者番号を示すものである。以下同様。

4.3 調査対象者

本研究では「台湾人日本語学習者コーパス」(The Corpus of Taiwanese Learner of

Japanese、以下 CTLJ¹と略称)に収録された作文データを利用し、CTLJにおいて2年間(2006学年度から2007学年度にかけて)4回分(半年ごとに1回)の作文が揃っている40名の学習者を調査対象とした。各調査時点における作文テーマと調査対象者の内訳は表4-2の通りである²。

表4-2 各調査時点における作文テーマと学習者の学習経歴

調査時点	テーマ	調査時点	学年	学習時間数	学習期間
一回目	思い出	2006学年度前期	2	600-900時間	1年
二回目	ナラティブ	2006学年度後期	2	600-900時間	1年半
三回目	〇〇は□□すべきだ	2007学年度前期	3	900-1200時間	2年
四回目	社会問題	2007学年度後期	3	1200-1500時間	2年半

40名の調査対象者はすべて大学に入ってから日本語を勉強し始めた日本語専攻の大学生である。作文データの収集は、合計4回で、それぞれ日本語を学習し始めてから2年目(2年生前期)、2年半目(2年生後期)、3年目(3年生前期)、3年半目(3年生後期)であり、辞書を使用せずにテーマに関する作文を1時間以内で書かせたものである。各調査時点における学習者の日本語学習期間はそれぞれ1年、1年半、2年、2年半であった。

4つの作文テーマのうち、一回目の「思い出」は、学習者に過去に自分が出会った事柄を思い出して書いてもらったものである。二回目の「ナラティブ(narrative)」は、ストーリーテリングを行ったものである。方法としてはMercer Mayer(1969)の文字のない絵本“Frog, where are you?”の一部(pp.13-24)を見せ、学習者にそのストーリーを考えて書いてもらった³。この絵本は24枚の絵によって構成されており、内容は

¹ CTLJは台湾成功大学外国語文学系の黄淑妙が作成した作文コーパスである。詳細は4.4節で説明する。

² 1回目と2回目の調査時点における学習者の実際の学習時間数はそれぞれ612時間ほど、828時間ほどである。しかし、CTLJで学習時間数は「300-600時間」、「600-900時間」、「900-1200時間」のように等間隔で分類されているため、表4-2ではいずれも「600-900時間」としている。

³ ストーリーテリングの該当箇所は絵本の中盤部分であるが、全体のストーリーがわかるように、作文を書き始める前に絵本全体を学習者に見てもらった。

一人の少年がペットの犬と一緒に、家の外に逃げたカエルを探す過程で遭う様々な場面（例えば、蜂に追いかけられるなど）である。

また、三回目の「〇〇は□□すべきだ」は、社会や学校で問題となっていることについて、自らテーマを設定して書いてもらったものである。なお、具体的なテーマが思い浮かばない場合は、(a) 台湾はビンロウの販売を禁止すべきだ、(b) 台湾は大学入試制度を変更すべきだ、(c) 警察は厳しく違法駐車を取り締まるべきだ、(d) 私たちの学校は卒業資格試験を行うべきだ、(e) 台湾は野良犬を駆除すべきだ、(f) 台湾は徴兵制度を廃止すべきだ、という6つのテーマの中から一つを選んで書いてもらっている。最後に、四回目の「社会問題」は、今の社会について不満に思うことを書いてもらったものである⁴。

4.4 「台湾人日本語学習者コーパス」

「台湾人日本語学習者コーパス」は台湾の大学で日本語を学ぶ学習者の作文を収集し、電子化および日本語教師による添削情報のタグ付けを行ったものである。CTLJには2003学年度から2008学年度までに、台湾の大学13校で集められた作文が全部で1563篇収録されている。CTLJに集められた作文のテーマは、2003学年度に収集された「自己紹介」、「夏休みの生活」、「私の好きな映画」、「私の実家」、「私のお気に入りの店」、「思い出の旅行」、「うわさ話」、「高校時代の私」、「私の宝物」、「おすすめの料理と作り方」、「ニュースを見て考えたこと」、「私の夢」、「勉強について」の13テーマ、2006学年度から2007学年度までに収集された「思い出」、「ナラティブ」、「〇〇は□□すべきだ」、「社会問題」の4テーマ、2008学年度に収集された「台湾と日本の違うところ」、「地球温暖化について考えたこと」、「自己紹介」、「冬休みの生活」、「家族の思い出」の5つで、全部で22テーマである。このうち、同一調査対象者に対して2年間（半年ごとに1回）続けて調査を行ったのは、2006学年度から2007学年

⁴ 作文テーマに関しては、黄（2009：38-41）に説明がある。

度まで集められたデータである。

CTLJ では学習者の日本語学習歴（学年、日本語学習時間数、日本在住経験など）、専攻（日本語専攻か否か）、日本語レベル（日本語能力試験の結果）などの条件を設定し、特定の学習者の作文データを検索することができる。検出された作文では、学習者による作文をテキスト化した「原文」の他、日本語教師による添削情報をタグとして付加した「修正文」や、タグを削除した「参考用正確文」の2種類を表示することもできる。

4.5 検索手順

CTLJ の検索の手順は次の通りである。

- ① 初めて CTLJ を利用する場合は登録する必要がある。まず、図 4-1 に示すように CTLJ のトップページ (<http://corpora.flld.ncku.edu.tw/>) の右上にある「登録」をクリックし、図 4-2 の画面へ移行してユーザー登録を行う。



圖 4-1 CTLJ のトップページ

- ② 図 4-2 の登録画面での使用者資料のところの名前、アカウント名、パスワード、

およびメールアドレスを入力して「送出／Send」というボタンを押すことにより登録完了できる。登録完了後には、一般ユーザーとして使用できる。

図4-2 登録画面

- ③ 登録完了後、自動的に CTLJ のトップページに戻る。その際に、図 4-3 に示すように画面の左上にある「日文」をクリックする。そうすると、図 4-4 の検索画面が現れる。



図4-3 CTLJのトップページ（登録完了後）

- ④ 図4-4の検索画面でキーワードに「ている」を入力する。一つ注意しておきたいのは、「ている」で検索すると、「ル形」の「ている」の用例しか検出されない点である。そのため、「ていた」の用例を抽出したい場合は、再度「ていた」を入力して検索する必要がある。

台湾日本語学習者語料庫
台湾人日本語学習者コーパス
The Corpus of Taiwanese Learner of Japanese (CTLJ)
以CTLJ為本之日語線上數位學習教材(Japanese e-Learning Based on CTLJ)
線上日語寫作輔助學習系統(Online Supporting System for Japanese Composition)
誤用辭典(Japanese Misuse Based on CTLJ)

日本語原文
 日本語修正文
 中国語
 品詞

学習時間数:
 学科:
 (学習時間数は「学習時間表」を参照してください。)

品詞限定: -2:
 -1:
 0:
 +1:
 +2:
 (機能を使用)

テーマ:

2003學年度data

<input type="checkbox"/> うわさ話	<input type="checkbox"/> おすすめの料理と作り方
<input type="checkbox"/> ニュースを見て考えたこと	<input type="checkbox"/> 勉強について
<input type="checkbox"/> 夏休みの生活	<input type="checkbox"/> 思い出の旅
<input type="checkbox"/> 私のお気に入りの店	<input type="checkbox"/> 私の夢
<input type="checkbox"/> 私の好きな映画	<input type="checkbox"/> 私の宝物
<input type="checkbox"/> 私の実家	<input type="checkbox"/> 自己紹介
<input type="checkbox"/> 高校時代の私	

2006-7學年度data

<input checked="" type="checkbox"/> ○○は□□すべきだ	<input checked="" type="checkbox"/> ナラティブ
<input checked="" type="checkbox"/> 思い出	<input checked="" type="checkbox"/> 社会問題

2008學年度data

作者資料:

学年:

出身学校の種類?

語学スクールや学習塾での学習経験の有無?
 不設限
 否
 是

日本での居住経験の有無?
 不設限
 否
 是

母語(複数選択可)?
 中文(國語)

図4-4 CTLJの検索画面

- ⑤ CTLJに収録された作文テーマは全部で22種類である。なお、本研究で分析に用いるのは、2006学年度から2007学年度にかけての4回分の作文データであるため、今回の場合ならば「テーマ」のところでは「2006-7学年度 data」における「思い出」、「ナラティブ」、「○○は□□すべきだ」、「社会問題」の4つを選択する。
- ⑥ 学習者の日本語学習歴を統一するため、「作者資料」のところでは「出身学校の種類」に「高中」を選択する。さらに、「語学スクールや学習塾での学習経験の有無」と「日本での居住経験の有無」の2つにいずれも「否」を選択する。

- ⑦ 以上の④～⑥の設定を完了したら、画面右上の「SEARCH」ボタンを押す。すると、図4-5のような検索結果画面が現れる。



図4-5 「ている」の検索結果

- ⑧ 図4-5において、検出結果はキーワードの「ている」が画面の中心に揃う形で表示され、作文のテーマと作者番号も同時に表示される。検索の結果には学習者が「ている」を使用した場合、つまり4.2節で述べた「正用」と「過剰使用」の用例しか出現しない点に注意しておきたい。そのため、「非使用」と「テンスの誤り」に関しては作文全体（作文の全文表示について⑨と⑩で説明する）を目で見てチェックする必要がある。
- ⑨ 検出された「ている」の用例の中には本章の調査対象者以外（例えば、4回分の作文データが揃っていない学習者）の作文も含まれているため、本研究の調査対象者となる40名の学習者の作文データを抽出する必要がある。よって、各作者番号に対応する文をクリックし、図4-6のような作文全文が表示される

画面へ移行する。

- ⑩ 図4-6では、同一の作者による複数の作文がある場合、全文表示の画面の下に自動的にその他の作文へのリンクが表示されている。4回分の作文データが揃っていない学習者はこの時点で調査対象者から除外する。リンクを通して同一作者による他の作文を閲覧することができるので、リンクを参考に同時に調査対象となる他の3つのテーマの作文データを収集する。

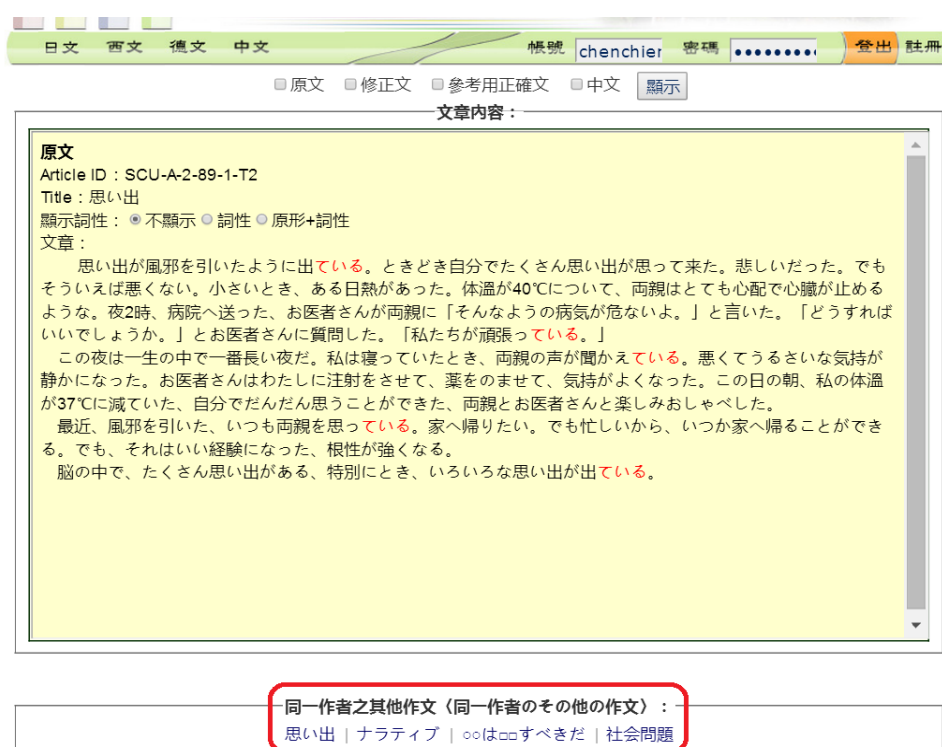


図4-6 全文表示インタフェース

上記のような手順で4回分の作文データが揃っている、40名の学習者による計160篇の作文データを収集した。

4.6 調査方法

4.6.1 分析手順

以下の手順で分析を行った。

- ① 収集された作文データの中で「テイル」が使用されたところ、及び使用すべきところを抽出した。
- ② ①を前後の文脈によって「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分類した（「テイル」の用法の分類基準は2.3節で説明しているとおりでである）。
- ③ ②の各用法で使用された動詞をさらに「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプに分類した（動詞タイプの分類基準は2.4節で提示しているとおりでである）。
- ④ ③を文末の場合と連体修飾節の場合に分類し、さらに「テイル形」の場合と「テイタ形」の場合に分けた。
- ⑤ 4つの調査時点に現れた②～④の「正用」、「非使用」、「過剰使用」、「テンスの誤り」の頻度を集計し、延べ語数（token frequency）によってそれらの比率を算出した。

なお、本研究で扱った作文データの中には、「テイル」の正用と誤用が合計 602 例出現していた。ただし、「～ていて」、「～ており」、「～ていれば」など時制形式の判断できない例（例えば (1) (2)）が 25 例見られた。本研究では時制の違いを統計的に処理する必要があるため、この 25 例を除いて、577 例を分析対象としている。

- (1) そんな様子を見ていて、鹿は笑いました。(SCU-A-2-80-2-T8)
- (2) 最後は、鹿は急に止っていて（→止まって）⁵、ハルトプルは崖から落しました。(SCU-A-2-77-2-T8)

⁵ 括弧内は筆者による訂正と加筆である。以下同様。

また、「テイル」の正誤用の判断、および「テイル」の用法と動詞タイプの分類は日本語母語話者3人によって決定した。なお、判断が異なる場合は、日本語母語話者の多数決に従った⁶。

4.6.2 分析手法

本研究では学習者の「テイル」の習得状況を検討するため、以下の2つの手法で分析を行った。第一に、①各調査時点、②文末と連体修飾節、③「テイル形」と「テイタ形」における学習者の「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用頻度、および④「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用頻度を考察するために、カイ二乗分布を用いた「適合度検定 (chi-square test of goodness-of-fit)」と「独立性の検定 (chi-square test of independence)」を行った⁷。さらに、独立性の検定の結果、有意であった場合にはどのセル (要因) に有意な偏りがあるのかを調べるために、「残差分析 (residuals analysis)」⁸を行った。第二に、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤学習者の「日本語学習期間」の5つの要因が学習者の「テイル」の習得にどのように影響しているのかを検討するために、「決定木分析 (decision tree analysis)」の一つである「分類木分析 (classification tree analysis)」を用いた。分類木分析は、複数の説明変数 (或いは独立変数) で質的データの目的変数 (或いは従属変数) を予測する多変量解析である。分析の結果は樹木状に描かれ、有意な影響を持つ複数の要因のうち強いものから順に現れるので、複数の要因の階層性を視覚的に検討できる。本研究のように、「テイル」の習得における上記5つの要因の影響度合いと相互作用を考察したい場合には、最も適切な分析手法である。また、分類木分析の有意

⁶ 筆者は中国語母語話者であるため、日本語母語話者に判断してもらった。また、3人の判断はすべてが異なる場合はなかった。

⁷ 「適合度検定」とは、観測された頻度分布が確率分布と一致するか否かを検定するものである。一方、「独立性の検定」とは、クロス集計表を用い、2つの質的変数間の関連性を調べるものである。両者ともカイ二乗 (χ^2) 分布と呼ばれる理論上の分布に漸近的に従う検定統計量を用いた統計的仮説検定の総称である、「カイ二乗検定 (chi-square tests)」に含まれる種々の検定の一つである (玉岡 2012:319)。

⁸ 「残差分析」は「独立性の検定」で有意となってから、複数のセルから偏りのあるセルを判定するための検定法である。

水準では、カイ二乗分布による独立性の検定の繰り返しによって正しい帰無仮説を誤って廃却してしまう「第1種の誤り (Type I error)」の確率の増加を補正するために、ボンフェローニ (Bonferroni) 法による調整された有意確率 (p 値) が参照される (玉岡 2012 : 322-323)。本研究では、上記5要因で「テイル」の正誤用と誤用の種類 (非使用、過剰使用、テンスの誤り) の頻度を予測する分類木分析を行った。

第5章 「テイル」の習得に影響する要因

5.1 はじめに

第2章でも論じたように、従来の「テイル」に関する習得研究には下記の5つの問題点がある。

1. 「テイル」の用法の習得難易度と動詞の語彙的アスペクトのいずれか一方の側面からのみ、分析が行われている。
2. 主に文末の習得状況に焦点が置かれ、文末と連体修飾節の違いについては殆ど論じられていない。
3. 主に現在時制の「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて検証したものがまだ少ない。
4. 異なるレベルの学習者の習得状況の比較検討がまだ少ない。
5. 「テイル」の習得に関わる複数の要因による影響の比較検討が欠如している。

第一に、これまでの「テイル」の習得研究では「テイルの用法」と「動詞タイプ」のいずれかの側面からしか調査を行っていない。しかし、第2章で指摘したように「テイル」の表す意味は基本的に動詞の語彙的アスペクトによって決定され、「テイル」の諸用法の中でどの用法の習得が難しいのかは動詞そのものの持つアスペクト的な意味とも密接に関わる。そのため、日本語学習者の「テイル」の習得を検討するうえでは、従来のように「テイル」の用法の習得難易度と動詞の語彙的アスペクトのいずれかの側面からのみ分析を行うのではなく、両者ともを同時に考慮に入れる必要がある。

第二に、これまでの「テイル」の習得研究では、主に文末の習得状況に焦点が置かれており、文末と連体修飾節の違いについて論じたものには、塩川(2007)と許(2009)がある。しかし、塩川(2007)では文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「タ形」

と「テイル形」の選択率しか示されていない。一方、許(2009)では「テイル」の用法別の正用の出現順序しか議論されていない。いずれも文末と連体修飾節における「テイル」の誤用について言及されていないため、「テイル」の習得における文末と連体修飾節の違いによる影響については未だに明らかにされていない。

第三に、これまでの研究は、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる影響を議論したものはまだ多くない。しかも、このうち「アスペクト仮説」の検証に関する研究では、動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用率しか提示されていないものが多い。一方、「テイル」の用法の習得に関する研究では、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の検討に限ったものが多い。このように、「テイル」の習得における「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる影響についての議論はまだ不十分であり、更なる検討が必要である。

第四に、「テイル」の習得に関する横断的調査の多くは同じレベルの学習者を対象としたもので、異なるレベルの学習者の習得状況を比較検討したものはまだ少ない。一方、縦断的調査の場合、少人数を対象とした事例調査が多いため、個人差などの影響で得られた結果を一般化することは難しい。そのため、学習者の日本語レベルが上がるに従って、「テイル」の習得状況にいかなる変化があるのかという点についても更なる検討が必要である。

第五に、これまでの「テイル」の習得研究では、「テイル」の用法、動詞の語彙的アスペクト、学習者の母語と習得環境といった諸要因から、「テイル」の習得過程における普遍性と個別性を考察している。しかし、「テイル」の習得に関わる、複数の要因による影響の比較検討が欠如しているため、「テイル」の習得過程で各要因がどのように絡み合って相互に影響し合っているか、及び「テイル」の習得にどの程度影響しているかについては未だに明らかになっていない。

以上の点を踏まえ、本章では台湾人日本語学習者の「テイル」の習得状況を考察す

るため、「テイル」の習得に関わる要因として、①「テイルの用法」（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）、②「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）、③「時制形式」（テイル形とテイタ形）、④「構文的位置」（文末と連体修飾節）の4つの要因を取り上げて、「テイル」の習得に影響する要因を詳細に分析する。また、学習者の「テイル」の習得状況がどのように変化していくのかを考察するため、⑤学習者の「日本語学習期間」（1年、1年半、2年、2年半）を5つ目の要因として設定した。学習者の「テイル」の習得過程において、上記5つの要因がいかに絡み合って相互に影響し合っているのかを明らかにする。

5.2 分析結果

5.2.1 「テイル」の習得への影響

本節では、学習者の「テイル」の習得過程において①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤学習者の「日本語学習期間」の5つの要因が学習者の「テイル」の習得に影響する度合いと、これらの要因の相互作用を検討する。上記5つの要因で「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果を、図5-1のデンドログラムに示す¹。

図5-1を見ると、作文データの中で取り上げられた「テイル」の正用と誤用（非使用、過剰使用、テンスの誤り）の数は合計577例であった。このうち、学習者の正用の頻度は431回で全体の74.7%、誤用の頻度は146回で全体の25.3%を占めていた。そして、図5-1に示しているように、ルートノード（ノード0）で最初に現れた変数が「テイルの用法」であることから、5つの要因のうち、学習者の「テイル」の正誤用に最も強く影響した要因は、「テイルの用法」であることがわかった[$\chi^2(2)=21.459$, $p<.001$]。用法別の正用率を見ると、5つの用法の中で「動作の持続」と「単なる状態」

¹ なお、本分析の相対リスクは24.6%なので、本分析が75.4%で正しく予測されていることが示された。

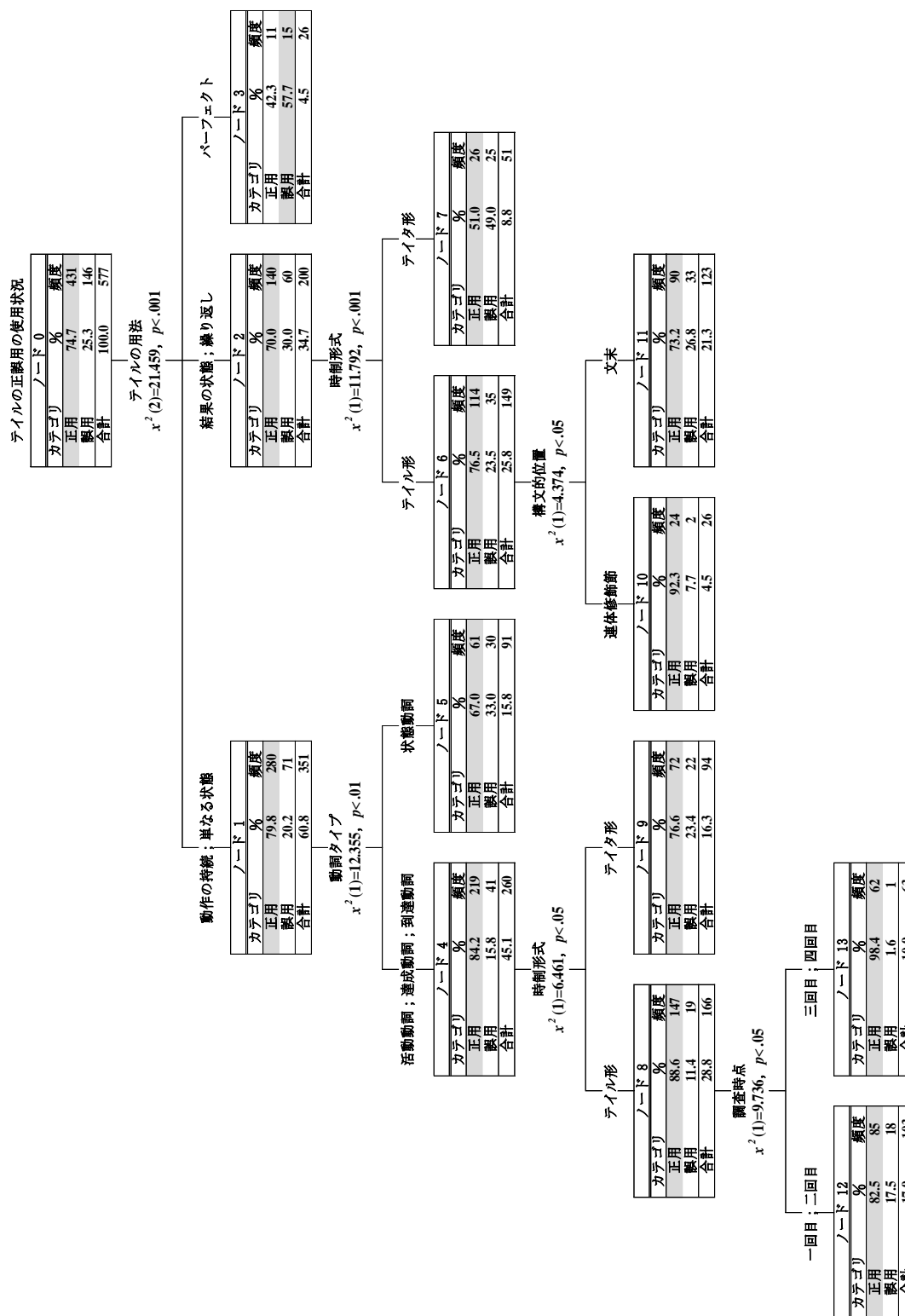


図5-1 台湾人日本語学習者の「テイル」の習得に影響する5つの要因についての分類木分析の結果

の2用法（ノード1，正用率79.8%）の正用率が最も高く、「結果の状態」と「繰り返し」の2用法（ノード2，正用率70.0%）が続き、いずれも7割以上の正用率を超え

ている。これらに対して、「パーフェクト」(ノード3, 正用率42.3%)の正用率はわずかに4割弱で、かなり低いことが示されている。このことから、5つの用法のうち、台湾人日本語学習者にとって最も習得しやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」、続いて「結果の状態」と「繰り返し」、そして習得が最も困難なのは「パーフェクト」の用法であることがわかった。

また、図5-1を見ると、「テイル」の各用法によって2番目に影響する要因が異なることがわかる。まず、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では、「動詞タイプ」の影響が第2の要因として認められた $[x^2(1)=12.335, p<.01]$ 。この2つの用法においては、4つの動詞タイプのうち、ノード4の「活動動詞」(例(1)～(4))、「達成動詞」(例(5)～(7))、「到達動詞」(例(8)～(10))の3動詞の正用率(84.2%)が、ノード5の「状態動詞」(正用率67.0%, 例(11)～(12))より有意に高かった。さらに、ノード4の「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプには、「時制形式」の違いによる影響が見られた $[x^2(1)=6.461, p<.05]$ 。図5-1のノード8の「テイル形」の場合には正用率が88.6%となり、ノード9の「テイタ形」の場合には正用率が76.6となっている。いずれも高い正用率と言えるが、「テイル形」のほうが有意に高かった。そして、ノード8の「テイル形」の場合には学習者の「日本語学習期間」による影響が見られた $[x^2(1)=9.736, p<.05]$ 。その場合、4つの調査時点のうち「三回目」と「四回目」(ノード13, 正用率98.4%)は「一回目」と「二回目」(ノード12, 正用率82.5%)よりも有意に正用率が高かった。一方、「状態動詞」の場合、他の3つの動詞タイプと異なり、他の要因による影響は見られなかった。

[活動動詞]

- (1) 「動作の持続」：兄さんは今大学院で動画デザインを勉強しています。
(SCU-A-3-104-3-T7)
- (2) 「動作の持続」：今年の夏休みに、私は寮の友達と一緒に寮に住んでいました。

(SCU-A-2-58-1-T2)

- (3) 「単なる状態」：また現在の子供はあまり健康な体を鍛えていません。

(SCU-A-3-88-3-T7)

- (4) 「単なる状態」：でも、緑ちゃんは悲しい顔をしていました。(SCU-A-2-97-2-T8)

[達成動詞]²

- (5) 「動作の持続」：ある地方政府はビンロウといつもミニスカートを着てビンロウを売っている「ビンロウ西施」を台湾の文化として外国人に紹介するという新聞を見るときびっくりしました。(SCU-A-3-99-3-T7)

- (6) 「動作の持続」：その学生は一体どれだけの圧力を背負っていたのか。(SCU-A-3-82-3-T7)

- (7) 「単なる状態」：確かに、今の社会ではこんな行為についてまだ有効な対策を出していないです。(SCU-A-3-95-4-T5)

[到達動詞]³

- (8) 「動作の持続」：教育制度を変化することに連れて、我が国では、今、大学数はますます増えているという。(SCU-A-3-85-3-T7)

- (9) 「単なる状態」：少年はその中で一つ穴が開いている木に登って幹の上で座わって、穴に覗き込みましたが、… (後略)。(SCU-A-2-96-2-T8)

- (10) 「単なる状態」：何にも知らず、天真爛漫な心を持っていた子供ころの私にとっては、… (後略)。(SCU-A-3-84-4-T5)

² 今回のデータの中には「単なる状態」の用法における「達成動詞」の「テイタ形」の用例は出現しなかった。

³ 今回のデータの中には「動作の持続」の用法における「到達動詞」の「テイタ形」の用例は出現しなかった。

[状態動詞]

(11) 「動作の持続」：もう、あなたって子一体何を考えているのよ。

(SCU-A-3-96-4-T5)

(12) 「単なる状態」：まずは、坊間の塾はあちらこちらにあふれていること。

(SCU-A-3-82-3-T7)

一方、「結果の状態」と「繰り返し」の場合、「動作の持続」と「単なる状態」とは異なり、学習者の「テイル」の正誤用に2番目に強く影響した要因は「時制形式」の違いであった[$\chi^2(1)=11.792, p<.001$]。この2つの用法では、(13) (14)のような「テイタ形」の正用率(ノード7, 正用率51.0%)は5割弱にしか達しておらず、(15)～(18)のような「テイル形」(ノード6, 正用率76.5%)に比べるとかなり低いことが示される。さらに、学習者の「テイル形」の使用は、「構文的位置」の違いによる影響を受けている[$\chi^2(1)=4.374, p<.05$]。図5-1のノード10の「連体修飾節」とノード11の「文末」との両位置の正用率を比べると、「連体修飾節」の正用率(ノード10, 正用率92.3%)は「文末」(ノード11, 正用率73.2%)の正用率よりもはるかに高かった。これに対し、この2用法の「テイタ形」の使用には、他の要因による影響が見られなかった。

[テイタ形]

(13) 「結果の状態」：私はそのまま思い出の中に沈んでいました。(SCU-A-2-80-1-T

2)

(14) 「繰り返し」：台湾の大学入試制度はずいぶん昔から行われていた。(SCU-A-3

-82-3-T7)

[テイル形]

- (15) 「結果の状態」：ゆうべ雨は降っていましたが、樹の葉の上にはまた少し水が残っています。(SCU-A-2-84-2-T8)
- (16) 「結果の状態」：しかし、試験の証明書を持っていることは、テストに強かっただけだと思います。(SCU-A-3-98-3-T7)
- (17) 「繰り返し」：毎日家のペットいぬのラキに連れていつもの森へ行くことは楽しみにしています。(SCU-A-2-84-2-T8)
- (18) 「繰り返し」：愛しい吾が弟よ、毎日私と母より夜遅くまで起きているのがこれだったのか。(SCU-A-3-96-4-T5)

そして、「パーフェクト」(例(19))の用法には、他の用法と異なり「構文的位置」や「動詞タイプ」などの要因による影響は見られなかった。作文データから見られた語数はわずか26例で5つの用法の中で最も少なかったが、誤用率(ノード3, 誤用率57.7%)が5割を超えている点は注目でき、各用法の中で最も習得困難度が高いことがわかった。

- (19) 「パーフェクト」：パーティーは三日間で続き、最後の夜で皆で一緒におどりました。私は毎日早から晩まであそこにずっといることではなかったですが、何曲かならっていませんでした。ですから、最後の夜、私はちょっと緊張しました。(SCU-A-2-84-1-T2)

5.2.2 「テイル」の誤用の種類と5つの要因の関係

前節では学習者の「テイル」の正誤用に対して①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因が及ぼす影響の強さについて分析を行った。本節では学習者が犯す「テイル」の誤用を非使用、

過剰使用、テンスの誤りの3つに分類し、特定の「テイル」の用法や動詞タイプ、時制形式などにおいて非使用、過剰使用、テンスの誤りに何らかの偏りがあるのか、またあるとすればいずれの傾向があるのかについて考察する。そこで、上記5つの要因における「テイル」の非使用、過剰使用、テンスの誤りの頻度を予測する分類木分析を行い、その結果、図5-2のデンドログラムが得られた⁴。

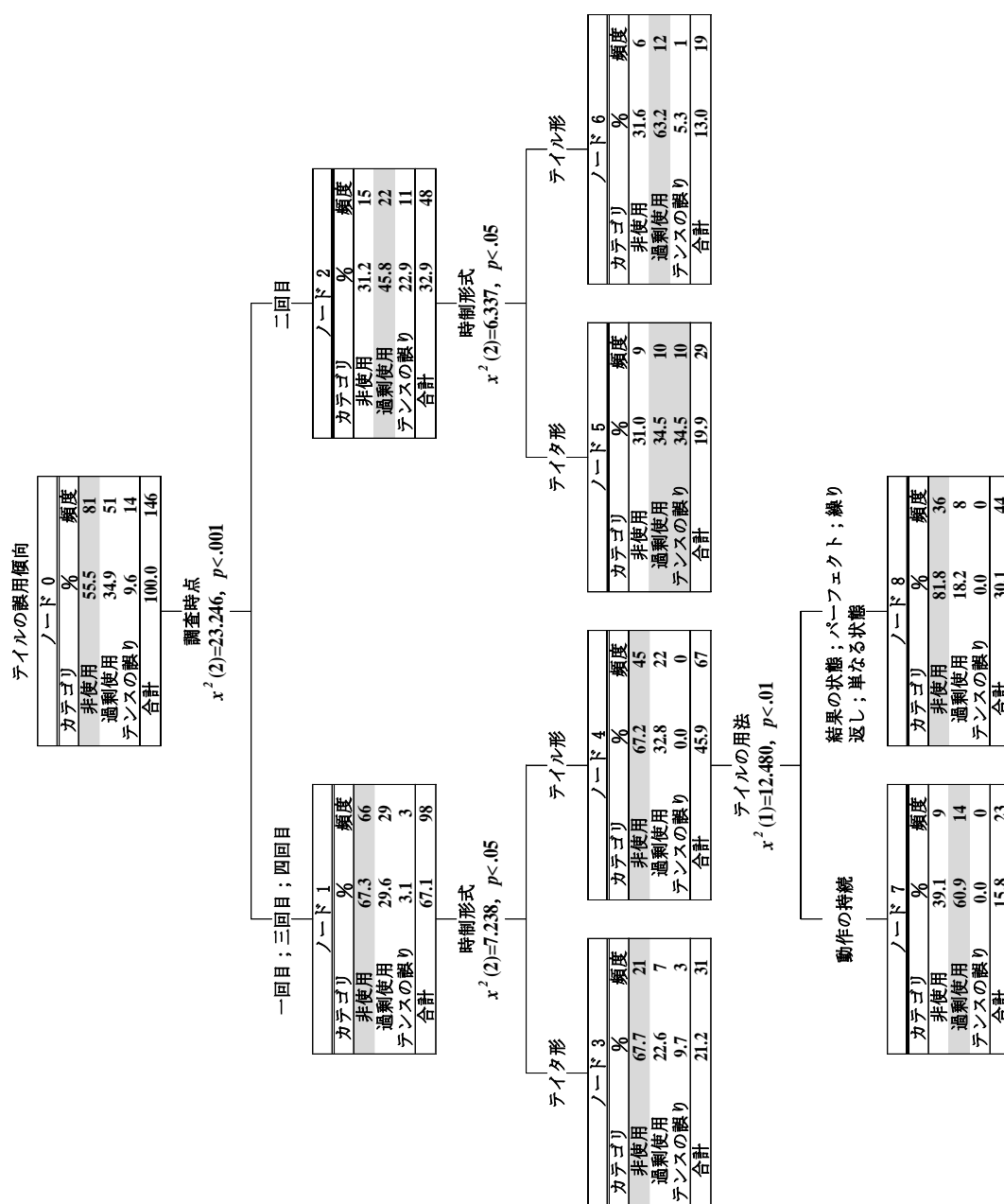


図5-2 台湾人日本語学習者の「テイル」の誤用傾向に影響する5つの要因についての分類木分析の結果

⁴ なお、本分析の相対リスクは36.3%なので、本分析が63.7%で正しく予測されていることが示された。

図 5-2 の最上部にあるルートノードを見ると、調査全体で見られた「テイル」の誤用の数は合計 146 例であった。このうち、非使用 (81 例で 55.5%) の比率が最も高く、次いで過剰使用 (51 例で 34.9%)、次にテンスの誤り (14 例で 9.6%) となった。このことから、学習者の犯す「テイル」の誤用の中で最も多いのは「テイル」を使うべき時に使わない「非使用」であることがわかる。また、図 5-2 では、5 つの要因のうち「日本語学習期間」、「時制形式」、「テイルの用法」の 3 つの要因による影響しか認められなかったことから、「動詞タイプ」と「構文的位置」の違いは学習者の犯す「テイル」の誤用の種類 (非使用、過剰使用、テンスの誤り) に影響していないことがわかる。図 5-2 に示されているように、最初に現れる変数が学習者の「日本語学習期間」であることから、5 つの要因の中で学習者の「テイル」の誤用の種類に最も強く影響している要因は、学習者の「日本語学習期間」であることがわかる。ルートノード (ノード 0) では、4 つの調査時点が 2 つの子ノードに分岐する [$\chi^2(2) = 23.246, p < .001$]。この中で、ノード 1 に含まれる「一回目」、「三回目」、「四回目」の 3 つの調査時点 (非用率 67.3% ; 過剰用率 29.6% ; テンスの誤用率 3.1%) では、(20) のような非使用の比率が最も高く、過剰使用とテンスの誤りの 2 つよりも非使用のほうがより起こりやすいことが観察された。これに対し、ノード 2 に含まれる「二回目」 (非用率 31.2% ; 過剰用率 45.8% ; テンスの誤用率 22.9%) の調査時点では、3 つの誤用の種類の中で (21) のような過剰使用の比率が最も高かった。さらに、調査全体で見られた (22) のようなテンスの誤りは 14 例あり、このうち 11 例は「二回目」の調査時点に集中していた。また、いずれの調査時点においても「時制形式」が学習者の「テイル」の誤用傾向に 2 番目に強く影響している要因であることがわかる。

「非使用」:

(20) 実に高校時代も寮にすんだ (→すんでいた)⁵けれど、家からは近いんだ。

⁵ 括弧内は筆者による訂正と加筆である。以下同様。

毎週家に帰られた。(NTU-A-2-125-1-T2)

「過剰使用」:

(21) 男の子は「私は死にたくない」と思っている (→思った) 時、浅い池に付いました。(SCU-A-2-57-2-T8)

「テンスの誤り」:

(22) むかしむかし、ある男の子が森の中に住んでいます (→住んでいました)。
(SCU-A-2-81-2-T8)

まず、「一回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点においては、ノード4の「テイル形」(非用率67.2%;過剰用率32.8%;テンスの誤用率0%)はノード3の「テイタ形」(非用率67.7%;過剰用率22.6%;テンスの誤用率9.7%)の場合と同様に、3つの誤用の種類の中で非使用率が最も高かった。しかし、過剰使用の場合は「テイル形」のほうが「テイタ形」よりも誤用率が高いのに対し、「テンスの誤り」の場合は「テイル形」よりも「テイタ形」のほうが誤用率が高い、という誤用傾向の違いが見られた[$\chi^2(2)=7.238, p<.05$]。さらに、「テイル形」の場合には「テイルの用法」の違いが3番目の影響要因として認められた[$\chi^2(1)=12.480, p<.01$]。この場合、5つの用法のうち、ノード7に含まれた「動作の持続」(非用率39.1%;過剰用率60.9%)の用法は(23)のように過剰使用率が最も高く、非使用やテンスの誤りよりも過剰使用のほうが起こりやすいことが明らかになった。これに対し、ノード8に含まれる「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の4用法(非用率81.8%;過剰用率18.2%)では、いずれも(24)~(27)のように非使用が最も頻繁に起こることがわかった。

[過剰使用]

- (23) 「動作の持続」：私は高校三年生のあった夕方、ひとりでキャンパスに歩いて
いる (→歩き) ながら、きれいな夕の景色とキャンパスの建物をみた。
(NTU-A-2-120-1-T2)

[非使用]

- (24) 「結果の状態」：あよっばらい運転は、台湾の一つの社会問題になった (→社
会問題になっている)。(SCU-A-2-97-1-T2)
- (25) 「パーフェクト」：家族たちもう一か月に会わない (→会っていない) ですか
ら、本当に皆に会いたいです。(SCU-A-2-65-1-T2)
- (26) 「繰り返し」：自分が「そうしよう」と思う一方、まだごみをあちこちにすてて
しまった (→すててしまっている)。(NTU-A-3-128-4-T5)
- (27) 「単なる状態」：その現象は台湾の大学生が知識が不足を示した (→示してい
る)。(SCU-A-3-64-3-T7)

一方、「二回目」の調査時点においては、「テイタ形」(非用率 31.0%; 過剰用率 34.5%; テンスの誤り 34.5%) の場合、過剰使用、非使用、テンスの誤りの 3 つの頻度には顕著な差異が見られなかったが、「テイル形」(非用率 31.6%; 過剰用率 63.2%; テンスの誤り 5.3%) の場合には、3 つの誤用の種類のうち過剰使用率が最も高い、という誤用傾向の違いが観察された [$\chi^2(2)=6.337, p<.05$]。

5.3 考察

5.3.1 「テイル」の習得について

以上、台湾人日本語学習者の「テイル」の習得過程において、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤学習者の「日本語学習期

間」の5つの要因の影響の強さと相互関連性について検討してきた。本研究による「テイル」の正誤用の分類木分析の結果、5つの要因のうち、「テイルの用法」の違いが学習者の「テイル」の習得に最も強く影響することが明らかになった。「テイル」の5つの用法のうち、台湾人日本語学習者にとって最も習得しやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」で、次いで「結果の状態」と「繰り返し」、そして最も習得が難しいのが「パーフェクト」の用法であった。「結果の状態」より「動作の持続」が習得されやすいという結果は、先行研究（黒野1995；許1997、2000、2002；魚住1998；Shirai & Kurono 1998；菅谷2002、2003、2004ab；小山2004；Sugaya & Shirai 2007；崔2009、2011）と一致する。さらに、「テイル」の各用法によって学習者の「テイル」の習得に次に影響する要因はそれぞれ異なる。

まず、「動詞タイプ」の影響が2番目に影響している要因として認められたが、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法でしか見られなかった。動詞の語彙的アスペクトの観点から「テイル」の習得を検討した先行研究では、「動作の持続」は常に「限界性」のない「活動動詞」に、「結果の状態」は主に「限界性」がある「到達動詞」に「テイル」がついたものであることから、「動作の持続」の習得が「結果の状態」よりも容易なのは「テイル」と結びつく動詞に内在する「限界性」の有無による影響と考えられており、第2章2.3節で言及したように、同じ動詞は構文的な条件付けによって複数の「テイル」の意味を表すことができるため、本研究の分析結果も同様に、同じ用法であっても動詞の語彙的アスペクト（特に「限界性」の有無）の影響を受けて各動詞タイプの正用率に明確な差が生じるはずである。しかし、図5-1に示したように、「テイル」の5つの用法の中で「動詞タイプ」の違いによる影響を受けるのは、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法のみであった。さらに、この2用法では「活動動詞」（例(28))、「達成動詞」（例(29))、「到達動詞」（例(30))の3つの動詞タイプ間の使用状況に、動詞に内在する「限界性」の有無による影響が見られず、いずれも高い正用率（図5-1のノード4、正用率84.2%）で用いられていた。先行研究で「テイル」

と結びつきにくいと判断されていた「到達動詞」も、「限界性」を持たない「活動動詞」と同様に高い正用率で用いられているのであり、学習者の「テイル」の使用に対する動詞に内在する「限界性」の有無による影響力が、用法によって変わる可能性が指摘できた。換言すれば、同じ「到達動詞」（例えば、「上がる」）の「テイル」でも、「結果の状態」（例：物価は上がっている）よりも「動作の持続」（例：物価は徐々に上がっている）の意味でのほうが学習者にとってより正確に使いやすい傾向があると推測できる。

「活動動詞」：

(28) あの時は毎日高校入学を受けるために、一生懸命勉強していたんです。

(SCU-A-2-80-1-T2)

「達成動詞」：

(29) 特にジャンニスが好きなので毎日友達と一緒にアイドルの話をしたり、ドラマや番組を見たりして、楽しい生活を送っていました。(SCU-A-2-84-1-T2)

「到達動詞」：

(30) 最近、私はどんどん太っていますから、毎週に1回水泳をするつもりです。

(SCU-A-2-100-1-T2)

一方、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法における「状態動詞」の正用率は67.0%（図5-1，ノード5）で、他の3つの動詞タイプに比べてかなり低かった。

「状態動詞」は他の動詞タイプと異なり、「動的」の意味要素を持たない点が特徴である。「動作の持続」の用法では、主に(31)のような「考える」、「思う」などの心理動詞が用いられ、「テイル」の使用は単に動きの時間的な局面を表すわけではなく、

人称やムードの違いなども関わるため、学習者にとってより習得が難しくなると考えられる。特に「思う」が常に「テイル」の形で用いられており、(32)のような過剰使用がよく観察される。その一方で、時間的展開を問題にせず、脱アスペクト化した「単なる状態」の用法では、(33)のような非使用が観察され、過剰使用は1例も見られなかった。さらに、この用法では(34)のような「状態動詞」以外の動詞タイプの誤用例はわずか2例のみであった。以上から、「状態動詞」と「テイル」との結びつきは、学習者にとって他の動詞タイプよりも比較的習得されにくいものであると考えられる。

「状態動詞」：

(31) 私は今の学生たちと昔の学生とずいぶんの違いがないと思っている。

(NTU-A-3-122-4-T5)

(32) ですから、国民の健康と、国の水準とインメージのために、ビンロウの販売を禁止することはあたり前で、しなければならぬことだと思っています (→思っています)。(SCU-A-3-97-3-T7)

(33) 「あのう、すみません、僕のコイちゃんを見ませんか」と僕は古いけどまだいきいきする (→いきいきしている) 木の穴に大きな声をかけました。

(SCU-A-2-98-2-T8)

「到達動詞」：

(34) 突然、目に映るのは立派な木が前に立ってあった (→立っている) こと (に気が付きました)。(SCU-A-2-98-2-T8)

「時制形式」の違いによる影響が、学習者の「動作の持続」と「単なる状態」における「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプの使用、および「結

果の状態」と「繰り返し」の2つの用法で見られた。このうち、「動作の持続」と「単なる状態」における「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプでは、「テイタ形」の使用も既に76.6%（図5-1、ノード9）の正用率で、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプを用いており、ある程度習得できており、「テイル形」の使用（図5-1のノード8、正用率88.6%）では「テイタ形」よりも、さらに高い習熟度が示される。一方、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法では、「動作の持続」と「単なる状態」の場合と同様に、「テイル形」の習得（図5-1のノード6、正用率76.5%）は「テイタ形」（図5-1のノード7、正用率51.0%）よりも進んでいる。しかし、「動作の持続」と「単なる状態」における「テイタ形」の使用に比べると、「結果の状態」と「繰り返し」における「テイタ形」の正用率はわずか51.0%であり、あまり習得できていない、という「テイル」の用法別による習得の差異が観察された。さらに、この2つの用法では学習者の「日本語学習期間」の違いによる使用状況の差異が見られなかったことから、2年半の日本語学習経験を持つ学習者（3年生後期）でも「テイタ形」における「結果の状態」と「繰り返し」の用法を正確に使いこなせていないことがわかる。

文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いによる影響は、第3の影響要因として「結果の状態」と「繰り返し」の2用法における「テイル形」の使用でしか認められなかった。この場合、(35) (36)のような「連体修飾節」（図5-1のノード10、正用率92.3%）の習得は、(37) (38)のような「文末」（図5-1のノード11、正用率73.2%）よりも進んでいることが観察された。

[連体修飾節]

(35) 「結果の状態」：(前略) ...すると、一番印象が残っているのは中学生の時です。(SCU-A-2-87-1-T2)

(36) 「繰り返し」：たとえば、いつまでも電気をつけている場所、あつくはないけど

クーラーをつける場合など。(NTU-A-3-120-4-T5)

[文末]

(37) 「結果の状態」：私はその時のまわりの景色もきれいに覚えています。

(NTU-A-2-121-1-T2)

(38) 「繰り返し」：政治の問題だけではなく最近のマスコミは視聴率を上げるため暴力、情色、暴露的な新聞やニュースを報道しています。(SCU-A-3-104-4-T5)

「日本語学習期間」の違いによる影響は学習者の「テイル」の使用に影響する諸要因の中で最も弱く、「結果の状態」と「繰り返し」の2用法における「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプの「テイル形」の使用でしか認められなかった。この場合、4つの調査時点は「一回目、二回目」(二年生)と「三回目、四回目」(三年生)に分けられ、学習者の学年による使用状況に明確な差が現れた。ただし、「動作の持続」と「単なる状態」では、二年生でもすでに82.5% (図5-1のノード12)という高い正用率で「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞の「テイル形」を用いており、かなり習得できていると言える。

5.3.2 「テイル」の誤用について

特定の「テイル」の用法や動詞タイプ、時制形式などにおいて、非使用、過剰使用、テンスの誤りのいずれかの傾向があるか否かを見るために、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因で学習者が犯す「テイル」の誤用の種類(非使用、過剰使用、テンスの誤り)の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、5つの要因の中で「日本語学習期間」、「時制形式」、「テイルの用法」の3つの要因の影響が認められた。4つの調査時点のうち、「二回目」の調査時点では、他の調査時点に比べて過剰使用とテンスの誤り

の比率が高いことが観察された。理由には作文のテーマの違いもあると考えられる。

「二回目」のテーマである「ナラティブ」は、文字のない絵本を用いて学習者にそのストーリーを書いてもらうものである。作文では主人公の少年とペットの犬との一連の行動及び出会いの場面が多く描写されている。学習者が時間の流れの中で次々と起こる動作・出来事の連鎖を描写する際、例示した(39)～(41)のような出来事間の継起性を表す「完成相」を使わず、出来事間の同時性を表す「非完成相」を誤用する、というような「テイル」の過剰使用が多く見られた。また、工藤(1995:191-195)が指摘しているように、物語では外的出来事の展開を描写する場合、過去形が主導時制形式として使用される。それゆえ、「二回目」の調査時点における過去形の使用は、主導時制形式が非過去形である「一回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点よりも多く、(42)～(44)のようなテンスの誤りもより多く見られたのではないかと推測される。このように、作文のテーマの違いにより、非使用、過剰使用、テンスの誤りのいずれがより頻繁に起こる傾向が見られた。ただし、「二回目」の調査時点で取り上げられたテンスの誤りの誤用例(11例)を見ると、その殆どは「テイタ形」を使用すべきところに「テイル形」を使用してしまっているもので、(44)のように「テイル形」におけるテンスの誤りはわずか1例しか見られなかった。

「過剰使用」：

(39) 角がつかまれたので、驚いて怒っている (→怒った) 鹿は、突然立ちあがった。

(NTU-A-2-117-2-T8)

(40) 鹿は急に止まっていた (→止まった) ので、ジョンは鹿の角から池に落ち込みました。(SCU-A-2-84-2-T8)

(41) 「カエルさん、どこにいるか。」と大声で叫んでいる。そのとき、角のような枝は動いている (→動いた)。(SCU-A-2-65-2-T8)

「テンスの誤り」:

- (42) ジムが専念に穴を見る (→見ていた) 頃、次郎も自分なりの方法であそんでい
る (→あそんでいた)。 (NTU-A-2-123-2-T8)
- (43) 藪の中で休んでいる (→休んでいた) 鹿は坊やに角を握られて、とても怒って
いて、坊やを自分の頭の上に乗せ、崖の方へ走っていました。 (SCU-A-2-87-2-T8)
- (44) ちゃんと見ると私はあの鹿の頭の上に座っていました (→座っている) と(い
うことに) やっと気が付きました。 (SCU-A-2-93-2-T8)

一方、「一回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点の場合、「テイル形」と「テイタ形」のいずれの時制形式においても、非使用の比率が最も高かった。ただし、テンスの誤りは「二回目」の調査時点の場合と同様に、「テイタ形」を使用すべきところに「テイル形」を使用したものに集中していた。また、学習者の「テイル形」の誤用では5つの用法はさらに2つのグループに分けられる。一つ目は、(45)のような過剰使用の比率が最も高い「動作の持続」(図5-2のノード7, 非使用率39.1%; 過剰使用率60.9%)の用法によるグループである。その過剰使用例(14例)を見ると、(46)のように「思う」による過剰使用(一回目が2例; 三回目が3例; 四回目が3例)が多かった。二つ目は、(47)~(50)=(34)のように非使用のほうがより起こりやすい「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の4用法(図5-2のノード8, 非使用率81.8%; 過剰使用率18.2%)のグループである。このうち、「単なる状態」の用法では、例示した(50)=(34)のような非使用のうち、(51)(52)のように「不足」、「充実」などの語を動詞ではなく形容詞・名詞として使用しているような誤用も見られた。このような誤用は「単なる状態」の用法での非使用(6例)の半数を占めている。

「動作の持続」:

- (45) 車も自転車も乗ることは危険が隠れているから、乗るときはもっと注意力を集中している (→集中する) のを必要だと思います。(SCU-A-2-85-1-T2)
- (46) そのような規定は必要ではなく、学生たちにもっと多くの選択を与えるほうがいいと思っている (→思う)。(NTU-A-3-125-4-T5)

「結果の状態」

- (47) あのごろのこと、私は永遠に覚える (→覚えている) と思います。(SCU-A-2-97-1-T2)

「パーフェクト」:

- (48) 小学校から卒業してから、クラス会が一度も行いません (→行っていません) が、みんなの絆はきっと深くなるだろうと思います。(SCU-A-2-88-1-T2)

「繰り返し」:

- (49) 昔、台湾の中でたくさん人がビンロウを販売した (→販売していた)。(SCU-A-3-102-3-T7)

「単なる状態」:

- (50) 突然、目に映るのは立派な木が前に立ってあった (→立っている) こと (に気が付きました)。(SCU-A-2-98-2-T8)
- (51) 私の小学生生活はとても充実でした (→充実していました)。(SCU-A-2-100-1-T2)
- (52) 台湾政府から台湾人民まで、国際観が不足だ (→不足している) と思う。(SCU-A-3-89-4-T5)

5.4 まとめ

本章では、台湾人日本語学習者の「テイル」の習得における①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因の影響の仕方と相互作用に焦点を置き、分析を行った。結果を以下にまとめる。

1. 5つの要因のうち、「テイルの用法」の違いは学習者の「テイル」の習得に最も強く影響する要因であった。5つの用法の中で最も習得されやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」の2つであり、次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つ、最も習得されにくいのは「パーフェクト」の用法であった。また、「テイル」の各用法によって「テイル」の習得に次に影響する要因はそれぞれ異なる。
2. 「動詞タイプ」の影響は第2の影響要因として学習者の「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の使用のみで認められた。この場合4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプが「状態動詞」よりも正用率が高かった。
3. 「時制形式」の違いによる影響は学習者の「動作の持続」、「単なる状態」、「結果の状態」、「繰り返し」の4つの用法の使用で見られた。いずれの用法においても「テイル形」の習得は「テイタ形」よりも進んでいた。
4. 「構文的位置」の違いによる影響は「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法における学習者の「テイル形」の使用で見られた。この場合、連体修飾節における「テイル」の習得は文末におけるものよりも進んでいた。
5. 「日本語学習期間」の違いによる影響は学習者の「テイル」の使用に影響する諸要因の中で最も弱く、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の使用のみで認められた。この場合、学習者の学年による使用状況に明確な差が現れ

た。

このように、学習者の「テイル」の習得は、「テイル」の用法を中心に、動詞に内在する語彙的アスペクトと時制形式の違いなど諸要因が複雑に影響し合いながら進むことが明らかになった。しかし、本章の分析の結果では、「構文的位置」、「時制形式」、「日本語学習期間」の影響についていずれも特定の「テイル」の用法でしか議論されていないため、「構文的位置」、「時制形式」、「日本語学習期間」の違いによって学習者の「テイル」の習得がどう違うのか具体的な違いを指摘するには不十分であり、より詳細な検討が必要である。そこで、第6章では「日本語学習期間」を、第7章では「構文的位置」を、第8章では「時制形式」を各々中心に学習者の「テイル」の習得状況を考察していくこととする。

第6章 日本語学習期間による「テイル」の習得状況

6.1 はじめに

前章では、「テイル」の習得における①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因の影響について分類木分析によって検討した。その結果、5つの要因のうち、学習者の「テイル」の習得に最も強く影響する要因は「テイルの用法」であり、次いで「動詞タイプ」と「時制形式」の2つの要因が同程度で続き、次に「構文的位置」、次に「日本語学習期間」の順となることがわかった。このことから、学習者の「日本語学習期間」の影響は「テイル」の習得に影響する諸要因の中で最も弱いことが明らかとなった。しかし、「日本語学習期間」の影響が5つの要因のうち一番弱いと言っても、影響がないわけではない。学習者が実際にどのような過程を経て「テイル」を習得していくのかを明らかにすることが、習得研究にとって重要な研究課題である。

そこで、本章では「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の用法別の習得状況と、動詞タイプ別の「テイル」の習得状況の変化を考察する。続く第7章では「構文的位置」の違いによる「テイル」の習得状況、第8章では「時制形式」の違いによる「テイル」の習得状況を考察する。なお、前章で指摘したように、「テイル」の表す意味は基本的に動詞の語彙的アスペクトによって決定され（奥田 1977、1978ab；工藤 1982ab、1995；鷲尾・三原 1997）、「テイル」の諸用法の中でどの用法の習得が困難であるかは動詞そのものの持つアスペクト的な意味とも深く関わっている。そのため、学習者の「テイル」の習得を検討するうえでは、「テイル」の用法別の習得難易度、或いは動詞に内在する語彙的アスペクトのどちらか一つのみから分析を行うのではなく、両者とも考慮に入れて考察する必要がある。よって、本章では以下の3段階の手順で分析を行う。

1. 「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の用法別の習得状況について明らかにする。
2. 「日本語学習期間」の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について明らかにする。
3. 1と2を合わせ、「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の用法と動詞タイプの両者を合わせた使用状況について明らかにする。

6.2 調査の概要

6.2.1 調査対象者

本章では、前章と同様に「台湾人日本語学習者コーパス(CTLJ)」¹の中から2年間(2006学年度から2007学年度にかけて)で4回分(半年ごとに1回)の作文が揃っている、40名の学習者による計160篇の作文データを調査対象として分析を行った。

6.2.2 分析手順

以下の手順で分析を行った。

- ① 作文の中で「テイル」が使用されたところ、および使用すべきところを抽出した。
- ② ①を前後の文脈によって「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分類した(「テイル」の用法の分類基準は2.3節で提示しているとおり)。
- ③ ②の5つの用法で使用された動詞を「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプに分類した(動詞タイプの分類基準は2.4節で説明しているとおり)。
- ④ 4つの調査時点における「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用頻度、およ

¹ CTLJの詳細および検索方法については第4章4.4節と4.5節を参照。

び正用と誤用²の頻度を集計し、延べ語数によってそれらの比率を算出した。

その上で、本章では「日本語学習期間」の違いによる学習者の「テイル」の習得状況について、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因の影響の仕方に焦点を置き、「テイル」の使用率（正用、過剰使用、テンスの誤り）と正用率の2つの側面から考察した。そこで、以下の2つの手法で分析を行った。第一に、「日本語学習期間」の違いによって「テイル」の用法間と動詞タイプ間の使用率にいかなる差異があるのか、および「テイル」の用法別と動詞タイプ別の使用率にいかなる変化があるのか、カイ二乗分布を用いた「適合度検定」と「独立性の検定」で検討した。さらに、独立性の検定の結果、有意であった場合には「残差分析」を行い、具体的にどの用法、或いは動詞タイプの使用に有意な偏りがあるのかを判断した。第二に、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③学習者の「日本語学習期間」の3つの要因が学習者の「テイル」の習得にどのように影響しているのかを検証するために、この3つの要因で「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する「分類木分析」で検討した。

6.3 分析結果

6.3.1 「テイル」の用法別の習得状況

本節では、「日本語学習期間」が長くなるに従って、学習者の「テイル」の用法別の習得状況がどう違ってくるのかについて考察する。以下の手順で考察を進める。

- ① 日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法別の使用率の変化を考察する。
- ② 日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法別の正用率の変化を考察する。
- ③ 日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法間の正用率の差異を考察する。
- ④ 日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法間の正用率の変化を考察する。

² 「テイル」の正用と誤用の判断基準については第4章4.2節を参照。

このうち、①については6.3.1.1節、②については6.3.1.2節、③と④については6.3.1.3節で論じる。

6.3.1.1 日本語学習期間による「テイル」の用法別の使用率

調査時点ごとに「テイル」の用法別の使用頻度を集計すると、表6-1のようになる。

表6-1 各調査時点における「テイル」の用法別の使用頻度 ($n=40$)

調査時点	動作の持続		結果の状態		パーフェクト		繰り返し		単なる状態		適合度検定
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
一回目	66	0.635	20	0.192	3	0.029	13	0.125	2	0.019	$\chi^2(4)=133.404, p<.001$
二回目	135	0.746	36	0.199	0	0	1	0.006	9	0.050	$\chi^2(3)=252.215, p<.001$
三回目	30	0.353	25	0.294	4	0.047	18	0.212	8	0.094	$\chi^2(4)=28.471, p<.001$
四回目	56	0.444	29	0.230	8	0.063	21	0.167	12	0.095	$\chi^2(4)=57.571, p<.001$
合計	287	0.579	110	0.222	15	0.030	53	0.107	31	0.063	

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

4つの調査時点における学習者の「テイル」の用法別の使用について偏りを考察するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を調査時点ごとに行った。その結果、表6-1に示されるようにいずれの調査時点においても、学習者の「テイル」の使用はある特定の用法に偏る傾向がある。さらに、学習者の「テイル」の使用がどの用法に偏っているのかを具体的に考察するため、調査時点ごとに「テイル」の5つの用法を使用率順に並べると、表6-2のようになる。

表6-2 各調査時点における「テイル」の用法別の使用率の順位

		使用率の順位				
		1位	2位	3位	4位	5位
調査 時点	一回目	動作の持続 (63.5%)	結果の状態 (19.2%)	繰り返し (12.5%)	パーフェクト (2.9%)	単なる状態 (1.9%)
	二回目	動作の持続 (74.6%)	結果の状態 (19.9%)	単なる状態 (5.0%)	繰り返し (0.6%)	パーフェクト (0%)
	三回目	動作の持続 (35.3%)	結果の状態 (29.4%)	繰り返し (21.2%)	単なる状態 (9.4%)	パーフェクト (4.7%)
	四回目	動作の持続 (44.4%)	結果の状態 (23.0%)	繰り返し (16.7%)	単なる状態 (9.5%)	パーフェクト (6.3%)

注1：表で示した順位は調査時点ごとに「テイル」の5つの用法を使用率が高い順を並べたものである。

注2：括弧内の比率は調査時点ごとに「テイル」の5つの用法の使用頻度（延べ語数）によって算出したものである。

表6-2に示されるように、いずれの調査時点においても5つの用法の中で(1)のような「動作の持続」の用法が最も多く用いられている。特に「一回目」と「二回目」の2つの調査時点では「動作の持続」の使用率は全体の6割以上を占めている。しかし、「三回目」の調査時点からはその使用率が4割以下に下がり、「結果の状態」(例(2))と「繰り返し」(例(3))の2つの用法の使用率が増えている。このうち、「結果の状態」の使用率はいずれの調査時点においても全体の2割程度を占めており、「動作の持続」の用法に次いで2番目に高かった。「繰り返し」の用法は「二回目」の調査を除けば、各用法の中で3番目に多く用いられている。そして、「単なる状態」(例(4))と「パーフェクト」(例(5))の2つの用法はいずれの調査時点においても使用率が1割にさえ届いていない。特に「パーフェクト」の使用率は「一回目」の調査時点を除けば、常に各用法の中で最も低い。このように、学習者の「テイル」の使用は「動作の持続」の用法に偏っていることが明らかになった。

「動作の持続」:

- (1) 私は今、大学で日本語の勉強をしています。(SCU-A-2-65-1-T2)

「結果の状態」:

- (2) 今の社会はコンピュータのおかげで生活が昔よりもっと便利になっているだが、さまざまな問題も出てくる。(SCU-A-3-355-4-T5)

「繰り返し」:

- (3) さらに、観衆を引くために、各テレビ局はいろいろなアイデアを考えて、自分のニュース番組の内容を豊かに放送しています。(SCU-A-3-80-3-T7)

「単なる状態」:

- (4) 今の社会では人の財布やコンビニの飲み物・お菓子やキャンパスの自転車などを盗ぶ泥棒のみならず、その以上大切な物を盗ぶ泥棒も存在している。

(SCU-A-3-98-4-T5)

「パーフェクト」:

- (5) パーティーは三日間で続き、最後の夜で皆で一緒におどりました。私は毎日早から晩まであそこにずっといることではなかったですが、何曲かならっていませんでした。(SCU-A-2-84-1-T2)

6.3.1.2 日本語学習期間による「テイル」の用法別の正用率の変化

本節では、日本語学習期間の違いによる「テイル」の各用法の正用率の変化を考察する。4つの調査時点における学習者の「テイル」の用法別の正誤用の頻度を集計すると、表6-3のようになる。さらに、表6-3で示された「テイル」の正用率を基に「テイル」の用法ごとに各調査時点における正用率を折れ線グラフで表示すると、図6-1から図6-5のようになる。以下、「テイル」の用法ごとに「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの正用率の変化について、順次考察していく。

表6-3 各調査時点における「テイル」の用法別の正誤用の頻度 (n=40)

調査時点	用法	正用			誤用		
		延べ語数	異なり語数	正用率	延べ語数	異なり語数	誤用率
一回目	動作の持続	55	31	0.688	25	20	0.313
	結果の状態	17	11	0.586	12	10	0.414
	パーフェクト	3	3	0.375	5	5	0.625
	繰り返す	11	8	0.647	6	5	0.353
	単なる状態	2	2	0.667	1	1	0.333
	合計	88	51	0.642	49	40	0.358
二回目	動作の持続	115	48	0.804	28	18	0.196
	結果の状態	23	11	0.575	17	13	0.425
	パーフェクト	0	0	0	1	1	1.000
	繰り返す	1	1	1.000	0	0	0
	単なる状態	9	9	0.818	2	2	0.182
	合計	148	69	0.755	48	33	0.245
三回目	動作の持続	27	19	0.794	7	3	0.206
	結果の状態	23	12	0.767	7	7	0.233
	パーフェクト	4	3	0.571	3	3	0.429
	繰り返す	17	13	0.708	7	6	0.292
	単なる状態	8	6	0.800	2	2	0.200
	合計	79	48	0.752	26	20	0.248
四回目	動作の持続	52	36	0.912	5	3	0.088
	結果の状態	27	15	0.818	6	6	0.182
	パーフェクト	4	4	0.400	6	6	0.600
	繰り返す	21	19	0.808	5	5	0.192
	単なる状態	12	9	0.923	1	1	0.077
	合計	116	75	0.835	23	21	0.165

注：ここで示した各指標の比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

まず、図6-1は表6-3の「一回目」から「四回目」までの「動作の持続」の用法の正用率と、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を示したものである。

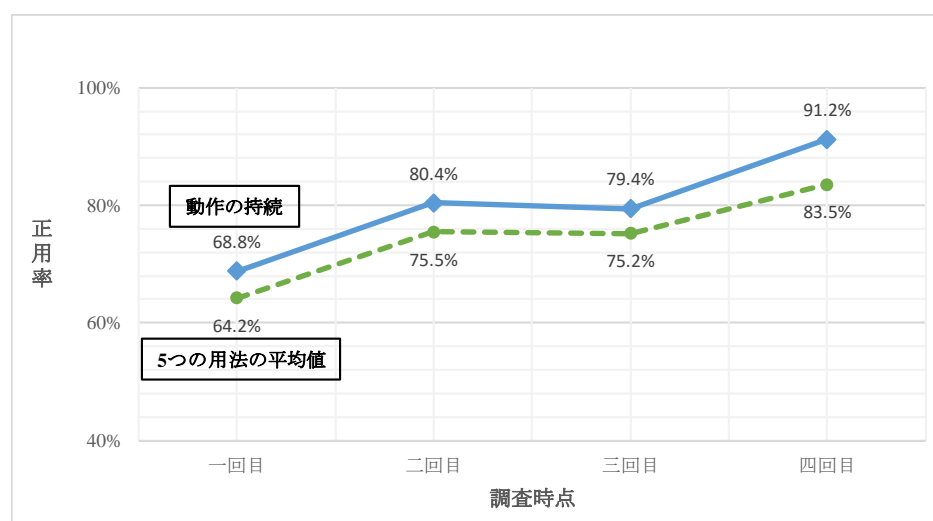


図6-1 各調査時点における「動作の持続」の正用率の推移

各調査時点における「動作の持続」の正用率と「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を比較すると、図6-1に示されるように、「動作の持続」の正用率は「一回目」の調査時点からずっと「テイル」の5つの用法の正用率の平均値より高かった。また、「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの「動作の持続」の正用率の変化を見ると、4つの調査時点のうち、「二回目」（正用率80.4%）と「三回目」（正用率79.4%）の2つの調査時点の正用率にあまり明確な変化は見られなかったが、調査全体として学習者の日本語学習期間が長くなるほど正用率が上がる傾向が見られた。特に「四回目」の調査時点では「動作の持続」の正用率は91.2%に達しており、かなり習得できている。

また、図6-2は表6-3の「一回目」から「四回目」までの「結果の状態」の用法の正用率と、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を図示したものである。

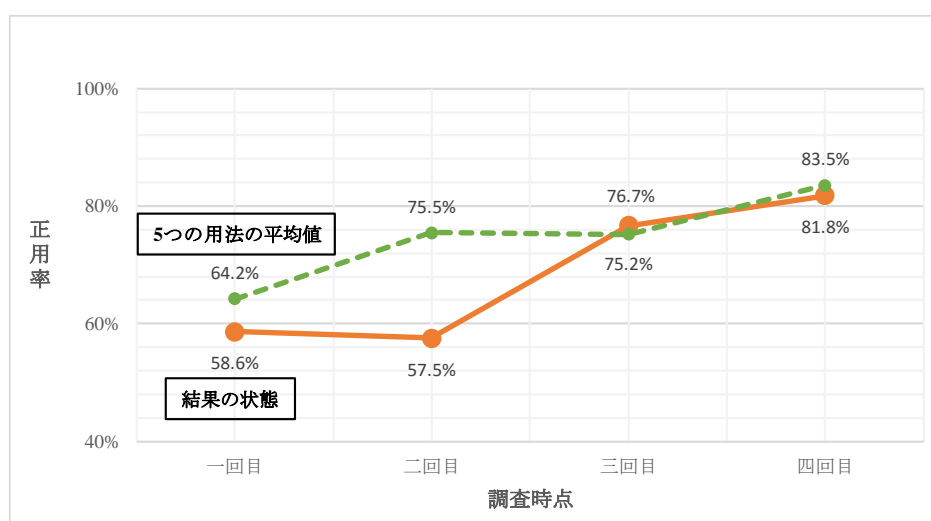


図6-2 各調査時点における「結果の状態」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの「結果の状態」の正用率の変化を見ると、4つの調査時点のうち、「一回目」（正用率58.6%）と「二回目」（正用率57.5%）ともに「結果の状態」の正用率は5割強程度で両者の間にあまり差異は見られないが、いずれも「テイル」の5つの用法の正用率の平均値よりも低い。一方、

「三回目」の調査時点では「結果の状態」の正用率(76.7%)が大幅に伸びており、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を上回っている。その後、正用率は引き続き上がっているが、その上り幅が「テイル」の5つの用法の正用率の平均値に比べて小さいため、「四回目」の調査時点(正用率81.8%)で再び「テイル」の5つの用法の正用率の平均値(83.5%)を下回る。

図6-3は表6-3の「一回目」から「四回目」までの「パーフェクト」の用法の正用率と、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を図示したものである。

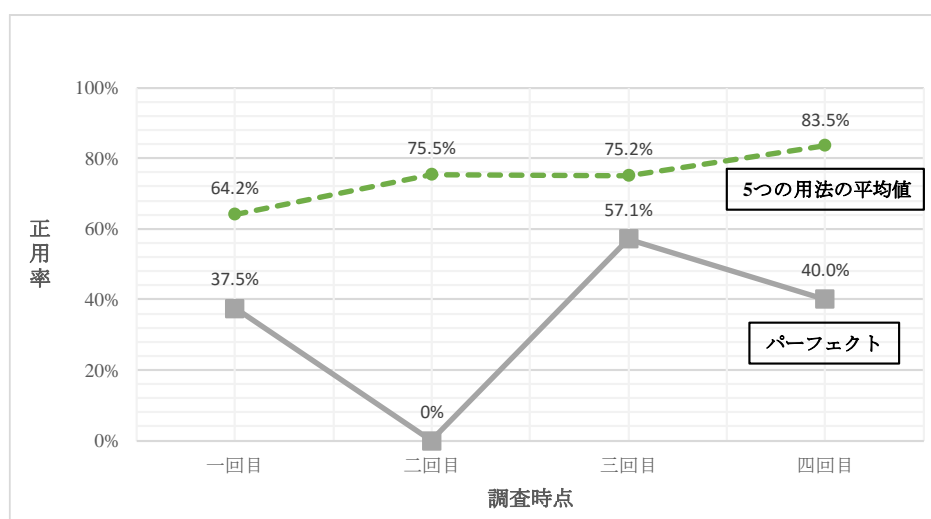


図6-3 各調査時点における「パーフェクト」の正用率の推移

各調査時点における「パーフェクト」の正用率と「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を比較すると、図6-3に示されるようにいずれの調査時点においても「パーフェクト」の正用率は「テイル」の5つの用法の正用率の平均値よりも低い。また、「一回目」から「四回目」までの「パーフェクト」の正用率の変化を見ると、「一回目」の調査時点ではその正用率はわずか37.5%とかなり低かったが、「二回目」の調査時点では、その正用率はさらに0%に下がっている。その後、「三回目」の調査時点では正用率が57.1%にまで上っているが、「四回目」の調査時点では正用率が再び下がっている。「四回目」の調査時点でも「パーフェクト」の正用率がわずか40.0%に過ぎないこ

とから、2年半の日本語学習経験を持つ学生（3年生後期）であってもこの用法を正確に使いこなせていないことがわかった。

続いて、図6-4は表6-3の「一回目」から「四回目」までの「繰り返し」の用法の正用率と、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を図示したものである。

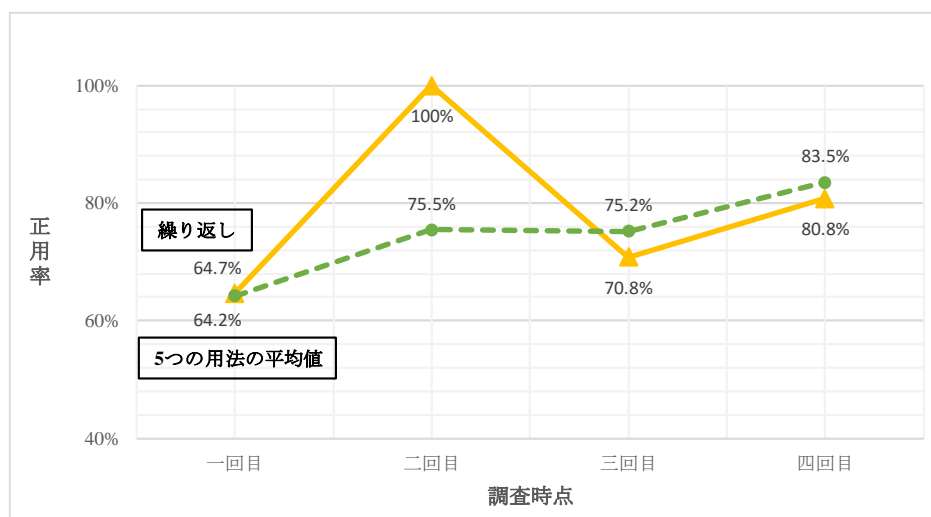


図6-4 各調査時点における「繰り返し」の正用率の推移

「一回目」から「四回目」までの「繰り返し」の正用率の変化を見ると、「一回目」の調査時点（正用率 64.7%）から「二回目」の調査時点（正用率 100%）にかけては「繰り返し」の正用率が大きく上がっている。しかし、前掲した表6-3のように「二回目」の調査時点では、「繰り返し」の使用がわずか1例しかないため、この2つの調査時点で観察された正用率の伸びは、日本語学習期間が長くなるほど正用率が上がるとは言いがたい。その後、「三回目」の調査時点では正用率が 70.8%に下がっており、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値（正用率 75.2%）を下回るが、「四回目」の調査時点（正用率 80.8%）では再び上昇している。また、4つの調査時点における「繰り返し」の正用率と「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を比較すると、「二回目」の調査時点を除けば、いずれの調査時点においても両者の正用率にあまり明確な差異は見られなかった。

そして、図6-5は表6-3の「一回目」から「四回目」までの「単なる状態」の用法の正用率と、「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を図示したものである。

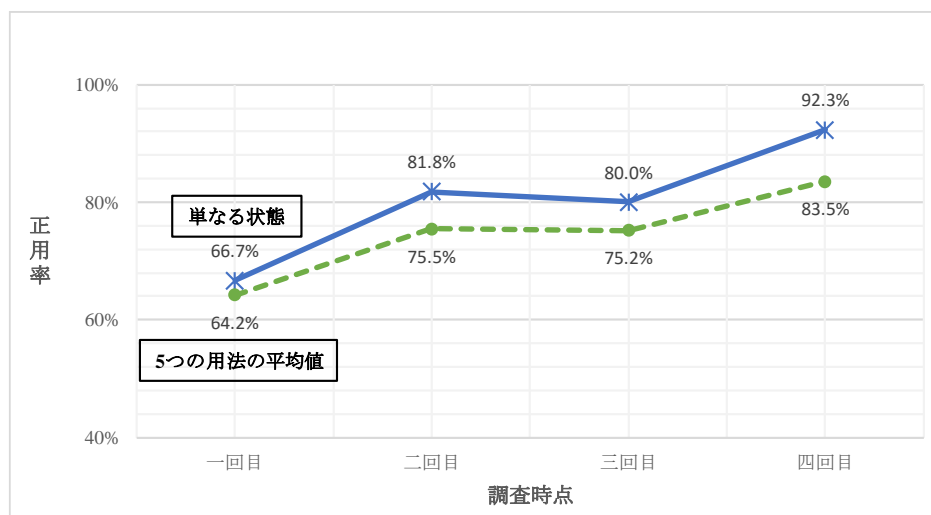


図6-5 各調査時点における「単なる状態」の正用率の推移

各調査時点における「単なる状態」の正用率と「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を比較すると、図6-5に示されているように「単なる状態」の用法は「一回目」の調査時点からずっと「テイル」の5つの用法の正用率の平均値より正用率が高いことが観察された。また、「一回目」から「四回目」までの「単なる状態」の正用率の変化を見ると、4つの調査時点のうち、「二回目」(正用率81.8%)と「三回目」(正用率80.0%)の2つの調査時点の間で正用率はあまり変わらないが、調査全体として、学習者の日本語学習期間が長くなるほど「単なる状態」の正用率が上がる傾向が見られた。特に「四回目」の調査時点では学習者が92.3%という高い正用率で「単なる状態」を用いることができおり、かなり習得できていると言える。

最後に、「テイル」の5つの用法の習得状況を比較するために、表6-3で提示された各調査時点における5つの用法の正用率と「テイル」の5つの用法の正用率の平均値を折れ線グラフで表示すると、図6-6のようになる。

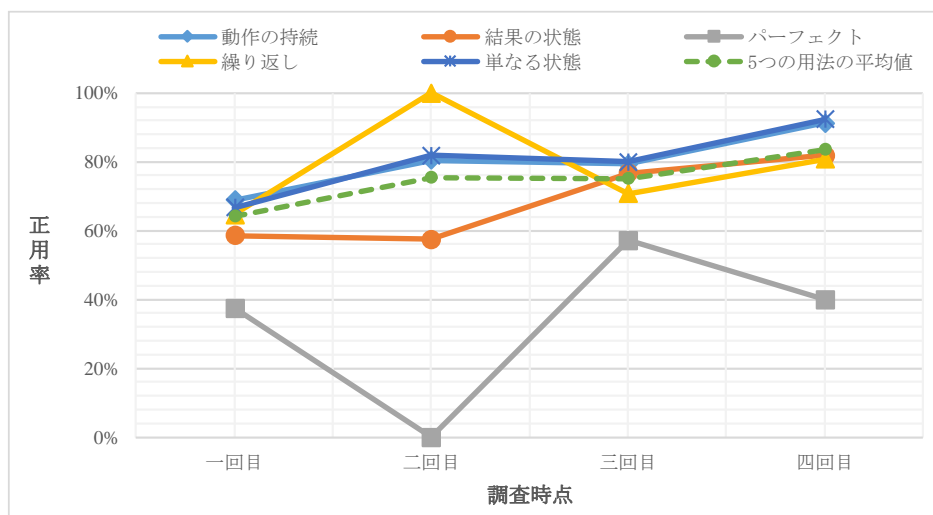


図6-6 各調査時点における「テイル」の用法別の正用率の推移

「テイル」の用法別の正用率を見ると、5つの用法の中で「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では「一回目」の調査時点からずっと「テイル」の5つの用法の正用率の平均値より高い正用率が維持されている。このうち、「動作の持続」の使用率（一回目 63.5%；二回目 74.6%；三回目 35.3%；四回目 44.4%）は、前掲した表6-1に示されるように、いずれの調査時点においても「テイル」の5つの用法の中で最も高かった。さらに、「動作の持続」の用法で使用された動詞を見ると、例示した(6)(7)のように「思う」（使用頻度において一回目 11例；二回 9例；三回目 10例；四回目 11例）が繰り返し用いられているが、それ以外の動詞を繰り返し使用した例は見られず、使用された動詞の異なり語数も多かった。このように、学習者が「一回目」の調査時点という早い段階ですでに生産的かつ正確に「動作の持続」を使いこなしていることから、「テイル」の5つの用法の中では「動作の持続」が最も習得されやすいことがわかった。

「動作の持続」の高い正用率と使用率に対し、「パーフェクト」の正用率は調査期間を通じて5割程度にしか達しておらず、使用率（表6-1，一回目 2.9%；二回目 0%；三回目 4.7%；四回目 6.3%）も各用法の中で最も低いことから、5つの用法の中で「パーフェクト」の習得が比較的困難で、たとえ2年半の日本語学習経験（四回目の調査

時点)を持つ学生(3年生後期)であってもこの用法を正確に使いこなせていないことがわかった。

「動作の持続」:

(6) ですから、私は台湾のテレビ番組が管理すべきだと思っています。(SCU-A-3-80-3-T7)

(7) なぜなら、親は勉強してこそ社会に役立つとか、金持ちなどになれると思っているからだ。(SCU-A-3-82-3-T7)

6.3.1.3 日本語学習期間による「テイル」の用法間の正用率の差異

前節では、「テイル」の用法ごとに日本語学習期間の違いによる使用率と正用率の変化について考察してきた。しかし、これだけでは学習者の日本語学習期間が長くなるに従って、「テイル」の用法別の習得状況がどのように変化していくかを指摘するにはまだ不十分である。さらに、日本語学習期間の違いによって「テイル」の各用法の使用状況にいかなる差異があるのかについてもまだ明らかにできていない。そこで、本節では日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法の習得状況を考察するために、「日本語学習期間」(4つの調査時点:一回目(1年)、二回目(1年半)、三回目(2年)、四回目(2年半))と「テイルの用法」(動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態)の2つの要因で学習者の「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。

まず、日本語学習期間の違いによって学習者の「テイル」の用法間の習得状況がどう違うのか考察するために、学習者の「日本語学習期間」を分類木の最初に来る変数³

³ 分類木分析では、ある特定の要因(独立変数、或いは説明変数)を分類木の最初に来る変数として設定していない場合、分析の結果は「テイル」の正誤用の頻度に有意な影響を持つ要因のうち強いものから順に現れる。しかし、ここでは学習者の日本語学習期間の違いによって、「テイル」の用法別の使用状況がどう違うのかを考察するのが目的なので、学習者の「日本語学習期間」を最初の変数として設定して分析を行った。

として設定して分析した結果、図6-7のデンドログラムが得られた⁴。

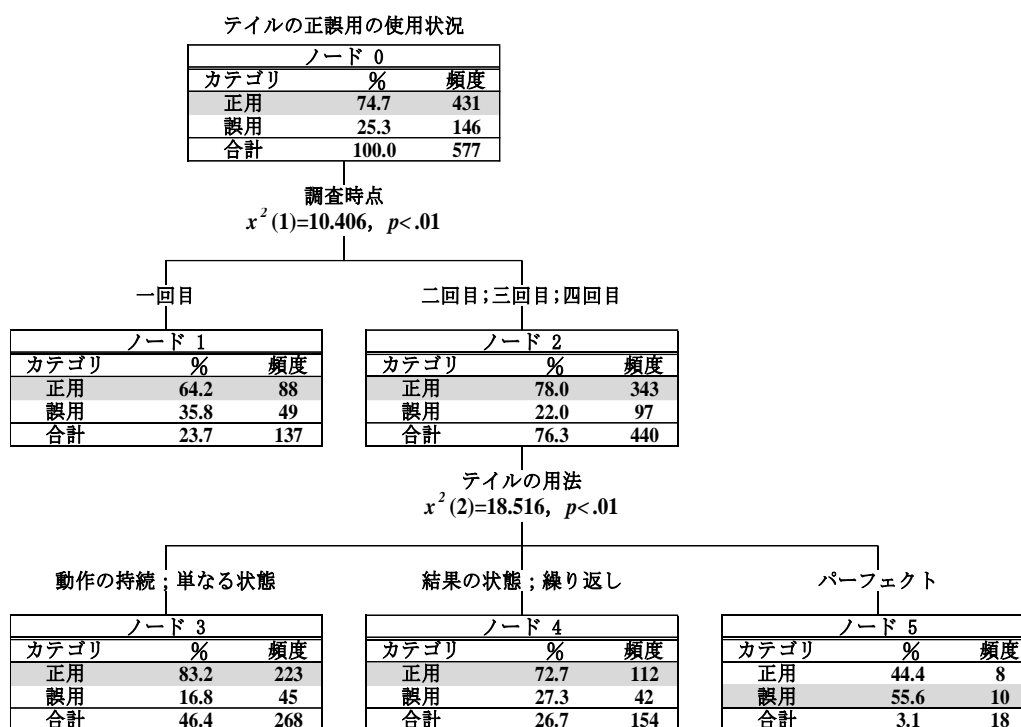


図6-7 各調査時点における「テイル」の用法別の正誤用についての分類木分析の結果

図6-7のデンドログラムを見ると、学習者の「日本語学習期間」と「テイルの用法」の2要因とも学習者の「テイル」の使用に有意な影響力を持っていることが分かる。図6-7の最上部にあるノード0から伸びているのは、最初の変数として設定した4つの調査時点を表すノード1とノード2である。このうち、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点の間に「テイル」の正誤用の差異は見られなかったが、この3つの調査時点の正用率の平均値（ノード2，正用率78.0%）は「一回目」（ノード1，正用率64.2%）の調査時点より有意に高かった[$x^2(1)=10.406, p<.01$]。これは、「二回目」の調査時点においてすでに学習者の「テイル」の習得状況は止まっており、たとえば学習者の日本語学習期間がさらに長くなってもあまり顕著な変化はない、ということの意味している。また、4つの調査時点のうち、ノード1の「一回目」を除くほか

⁴ なお、本分析の相対リスクは25.0%なので、本分析が75.0%で正しく予測されていることが示された。

の3つの調査時点は「テイル」の用法の違いによる影響を受けている [$\chi^2(2)=18.516$, $p<.01$]. ノード2の「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点においては、5つの用法のうち「動作の持続」(例(8))と「単なる状態」(例(9))の2用法(ノード3, 正用率83.2%)の正用率が最も高く、次に「結果の状態」(例えば(10))と「繰り返し」(例(11))の2つの用法(ノード4, 正用率72.7%)が同程度で続き、いずれも7割以上の高い正用率を占めている。一方、(12)のような「パーフェクト」(ノード5, 正用率44.4%)の正用率は5割にさえも達しておらず、他の用法に比べるとかなり低いという結果が出ている。

「動作の持続」:

- (8) 男の子はある日、森の中でかわいがっていた犬と遊んでいました。(SCU-A-2-82-2-T8)

「単なる状態」:

- (9) そして、私立大学と国立大学は待遇や給料も全然違っている。(SCU-A-3-85-4-T5)

「結果の状態」:

- (10) 最初は全然気付かなかったが、あんな暗い隅にある男の人が立っていました。(SCU-A-2-96-1-T2)

「繰り返し」:

- (11) 近年、台湾の大学入試制度が教育部によって、時々変更されているんです。(SCU-A-3-87-3-T7)

「パーフェクト」:

- (12) 子供たちは勉強は人生の第一の目標と教えられているから、頭に「勉強、勉強」
っていっぱいだ。(SCU-A-3-93-3-T7)

次に、「日本語学習期間」が長くなるに従って、「テイル」の用法別の習得状況がどのように変化するかを検証するために、「日本語学習期間」と「テイルの用法」の2つの要因で「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、図6-8のデンドログラムが得られた⁵。

図6-8のデンドログラムを見ると、ルートノード(ノード0)では「テイル」の5つの用法が3つの子ノードに分岐する[$\chi^2(2)=21.549, p<.001$]。それらの正用率を比較すると、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法(ノード1, 正用率79.8%)が最も高く、次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法(ノード2, 正用率70.0%)、次に「パーフェクト」(ノード3, 正用率42.3%)の用法となっている。このうち、ノード1に含まれる「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法と、ノード2に含まれる「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法では、さらに学習者の「日本語学習期間」による影響が認められた。

「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では、4つの調査時点が3つの子ノードに分かれた[$\chi^2(2)=12.263, p<.05$]。このうち、正用率が最も高いのはノード6の「四回目」の調査時点(正用率91.4%)であり、次いでノード5の「二回目」と「三回目」の2つの調査時点(正用率80.3%)、次にノード4の「一回目」の調査時点(正用率68.7%)である。このことから、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の習得は「二回目」から「三回目」の調査時点までの間で、一時的に止まるが、全体的にはかなり伸びているということがわかった。

⁵ なお、本分析の相対リスクは24.6%なので、本分析が75.4%で正しく予測されていることが示された。

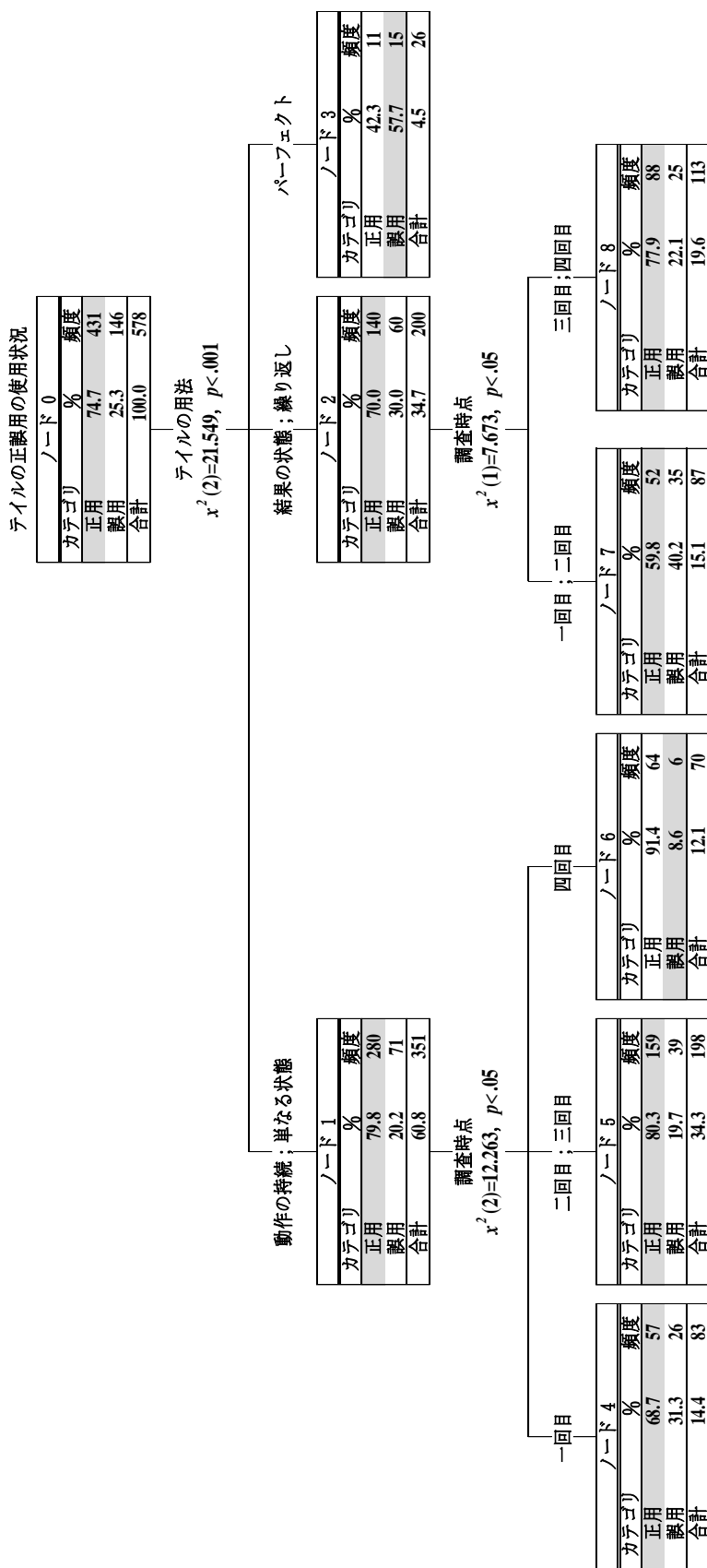


図6-8 「テイル」の用法別における4つの調査時点の正誤用の使用状況についての分類木分析の結果

一方、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法では、4つの調査時点が2つの子ノードに分かれた $[\chi^2(1)=7.673, p<.05]$ 。このうち、ノード8に含まれる「三回目」と「四回目」の2つの調査時点（正用率 77.9%）の正用率が、ノード7に含まれる「一回目」と「二回目」の2つの調査時点（正用率 59.8%）より有意に高かった。このことから、「結果の状態」、「繰り返し」の2つの用法の習得は学習者の学年が上がるにつれて伸びているが、それ以降この2つの用法の習得は止まり、それ以上進まないことがわかった。

最後に、5つの用法の中で「パーフェクト」の用法のみには、「日本語学習期間」による影響が見られなかった。さらに、その全体的な正用率が5割にさえも達していないことから、学習者の「パーフェクト」の習得には各調査時期を通じてあまり明確な変化はなく、2年半の日本語学習経験を持つ学習者（3年生後期）でも「パーフェクト」の用法を習得できていないことがわかった。

6.3.2 動詞タイプ別の「テイル」の習得状況

前節では学習者の「テイル」の用法別の習得状況に焦点を当てて分析を行った。本節では、「日本語学習期間」が長くなるに従って、学習者の動詞タイプ別の「テイル」の習得状況がどう違うのか考察する。以下の手順で調査を進める。

- ① 日本語学習期間の違いによる動詞タイプ別の使用率の変化を考察する。
- ② 日本語学習期間の違いによる各動詞タイプの正用率の変化を考察する。
- ③ 日本語学習期間の違いによる動詞タイプ間の正用率の差異を考察する。
- ④ 日本語学習期間の違いによる動詞タイプ間の正用率の変化を考察する。

このうち、①については6.3.2.1節で、②については6.3.2.2節で、③と④については6.3.2.3節で論じる。

6.3.2.1 日本語学習期間による動詞タイプ別の「テイル」の使用率

本節では、調査時点の違いによる動詞タイプ別の使用率の変化を観察する。4つの調査時点における動詞タイプ別の使用頻度を集計すると、表6-4のようになる。

表6-4 各調査時点における動詞タイプ別の使用頻度 (n=40)

調査時点	活動動詞			達成動詞			到達動詞			状態動詞			適合度検定
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	
一回目	56	0.538	0.6	4	0.038	-1.1	23	0.221	-1.0	21	0.202	1.1	$\chi^2(3)=54.538, p<.001$
二回目	119	0.657	4.8	6	0.033	-2.0	38	0.210	-1.9	18	0.099	-3.0	$\chi^2(3)=171.818, p<.001$
三回目	29	0.341	-3.5	11	0.129	2.8	31	0.365	2.5	14	0.165	-0.02	$\chi^2(3)=14.718, p<.01$
四回目	51	0.405	-2.8	10	0.079	0.9	36	0.286	0.8	29	0.230	2.3	$\chi^2(3)=27.587, p<.001$
合計	255	0.514	-	31	0.063	-	128	0.258	-	82	0.165	-	

独立性の検定の結果 $\chi^2(9)=40.438, p<.001$

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

各調査時点における学習者の「テイル」の使用はある特定の動詞タイプに偏るかどうかを検証するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を調査時点ごとに行った。その結果は表6-4に示すように、いずれの調査時点においても有意となり、つまり4つの調査時点すべてで「テイル」はある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向がある。さらに、具体的に学習者の「テイル」の使用がどの動詞タイプに偏っているのかを考察するため、調査時点ごとに「テイル」の使用された4つの動詞タイプを使用率が高い順に並べると、表6-5のようになる。

表6-5 各調査時点における動詞タイプ別の使用率の順位

		使用率の順位			
		1位	2位	3位	4位
調査時点	一回目	活動動詞 (53.8%)	到達動詞 (22.1%)	状態動詞 (20.2%)	達成動詞 (3.8%)
	二回目	活動動詞 (65.7%)	到達動詞 (21.0%)	状態動詞 (9.9%)	達成動詞 (3.3%)
	三回目	到達動詞 (36.5%)	活動動詞 (34.1%)	状態動詞 (16.5%)	達成動詞 (12.9%)
	四回目	活動動詞 (40.5%)	到達動詞 (28.6%)	状態動詞 (23.0%)	達成動詞 (7.9%)

注1：表で示した順位は調査時点ごとに「テイル」の使用された4つの動詞タイプを使用率が高い順に並べたものである。

注2：括弧内の比率は調査時点ごとに「テイル」の使用された4つの動詞タイプの頻度（延べ語数）によって算出したものである。

各調査時点における動詞タイプ別の「テイル」の使用率を見ると、「三回目」の調査時点を除けば、いずれの調査時点においても学習者の「テイル」の使用は4つの動詞タイプのうち「活動動詞」(例(13))の使用率が最も高く、次いで「到達動詞」(例(14))となっている。これら3つの調査時点に対し、「三回目」の調査時点では、学習者の「テイル」の使用は逆に「到達動詞」(36.5%)の使用率が4つの動詞タイプの中で最も高くなっているが、「活動動詞」(34.1%)とはあまり大きな差は見られなかった。一方、「達成動詞」(例(15))と「状態動詞」(例(16))の2つの動詞タイプの「テイル」の使用について、表6-5に示されるように調査時期を通じて「状態動詞」の使用率は3番目に高く、「達成動詞」の使用率は4つの動詞タイプの中で最も低い。このように、学習者の「テイル」の使用は「活動動詞」に偏っていることが観察された。

また、動詞タイプ別の使用例を見ると、「到達動詞」では「三回目」の調査時点から前掲した(14)のように「持つ」(一回目3例；二回目1例；三回目12例；四回目14例)と「テイル」が強く結びついていて頻繁に使用されている。しかし、「三回目」と「四回目」の2つの調査時点ではこの誤用例は1例も見られなかった。また、「状態動詞」では(17)のように「思う」(一回目12例；二回目7例；三回目11例；四回目12例)が常に「テイル」の形で用いられ、(18)のような過剰使用(一回目3例；二回目3例；三回目3例；四回目4例)が調査時期を通じて観察された。これらに対し、「活動動詞」と「達成動詞」の2つの動詞タイプでは特定の動詞の繰り返し使用は見られなかった。

「活動動詞」：

(13) 街を歩いていると、急にいやなタバコのおいを感じた経験がありませんか。

(SCU-A-3-87-4-T5)

「到達動詞」：

- (14) 台湾では毎人がほとんど車を持っている。(SCU-A-3-95-3-T7)

「達成動詞」：

- (15) だから、ビンロウを植えている地区は時々水災や水土流失などの災害があるのはそのような原因があるから。(NTU-A-3-126-3-T7)

「状態動詞」：

- (16) (前略)、そばの枯れ木から、緑ちゃんと似ている声を聞きました。
(SCU-A-2-97-2-T8)
- (17) 皆、塾に通ってから、たとえ学校に出席しなくても大丈夫だと思っている。
(SCU-A-3-85-4-T5)
- (18) そのような規定は必要ではなく、学生たちにもっと多くの選択を与えるほうがいいと思っている (→思う) ⁶。(NTU-A-3-125-4-T5)

そして、学習者の日本語学習期間の違いによって、動詞タイプ別の「テイル」の使用頻度に差異があるか否かを検証するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った結果、有意となった $[x^2(9)=40.438, p<.001]$ 。さらに、具体的にどの動詞タイプで調査時点の違いによって「テイル」の使用頻度に有意な偏りがあるのか、およびそれがどう違うのかを考察するために、各調査時点における動詞タイプ別の「テイル」の使用頻度を残差分析によって検討した。その結果を前掲した表 6-4 で提示された調整済み残差に示す。さらに、調整済み残差の値によって動詞タイプ別に4つの調査時点をグループに分けると、表 6-6 のようになる⁷。

⁶ 括弧内は筆者による訂正と加筆である。以下同様。

⁷ ここでは調整済み残差の値は+1.96 よりも大きいもの、-1.96 よりも小さいもの、およびその絶対値は1.96 よりも小さいものの3つのグループに分けた。

表6-6 動詞タイプ別に4つの調査時点の使用率の比較

動詞タイプ	調整済み残差の順位
活動動詞	①二回目 (z=4.8, 65.7%) > ②一回目 (z=0.6, 53.8%) > ③三回目 (z=-3.5, 34.1%) = 四回目 (z=-2.8, 40.5%)
達成動詞	①三回目 (z=2.8, 12.9%) > ②一回目 (z=-1.1, 3.8%) = 四回目 (z=0.9, 7.9%) > ③二回目 (z=-2.0, 3.3%)
到達動詞	①三回目 (z=2.5, 36.5%) > ②一回目 (z=-1.0, 22.1%) = 二回目 (z=-1.9, 21.0%) = 四回目 (z=0.8, 28.6%)
状態動詞	①四回目 (z=2.3, 23.0%) > ②一回目 (z=1.1, 20.2%) = 三回目 (z=-0.02, 16.5%) > ③二回目 (z=-3.0, 9.9%)

注1：括弧内の数値は調整済み残差と使用率である。調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

注2：表で示した順位は動詞タイプ別に4つの調査時点の調整済み残差によってつけたものである。

表6-6に示したように「二回目」の調査時点で「テイル」は「活動動詞」(65.7%)に多く用いられており、「達成動詞」(3.3%)と「状態動詞」(7.9%)の2つの動詞タイプでは4つの調査時点の中で「二回目」の調査時点に使用率が最も低かった。しかし、「三回目」(34.1%)と「四回目」(40.5%)の調査時点で「活動動詞」(三回目34.1%；四回目40.5%)の使用率が下がっているとともに、「三回目」の調査時点で「達成動詞」(12.9%)と「到達動詞」(36.5%)の2つの動詞タイプの使用率、「四回目」の調査時点で「状態動詞」(23.0%)の使用率が大幅に上がっている。このように、学習者の日本語学習期間が長くなるにつれ、「テイル」の使用は「活動動詞」以外に「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプの使用率が多くなる傾向が見られた。

6.3.2.2 日本語学習期間による動詞タイプ別の「テイル」の正用率の変化

本節では、日本語学習期間の違いによる各動詞タイプの正用率の変化を考察する。各調査時点における動詞タイプ別の正誤用の頻度を集計すると、表6-7のようになる。さらに、表6-7で提示された「テイル」の正用率に基づき、動詞タイプ別に各調査時点における正用率を折れ線グラフで表示すると、図6-9から図6-12のようになる。以下、動詞タイプ別に「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの正用率の変化について順次考察していく。

表6-7 各調査時点における動詞タイプ別の正誤用の頻度 (n=40)

調査時点	動詞タイプ	正用			誤用		
		延べ語数	異なり語数	正用率	延べ語数	異なり語数	誤用率
一回目	活動動詞	49	29	0.710	20	18	0.290
	達成動詞	2	2	0.333	4	3	0.667
	到達動詞	20	13	0.606	13	11	0.394
	状態動詞	17	7	0.586	12	8	0.414
	合計	88	51	0.642	49	40	0.358
二回目	活動動詞	104	44	0.825	22	15	0.175
	達成動詞	3	3	0.500	3	3	0.500
	到達動詞	27	15	0.628	16	12	0.372
	状態動詞	14	7	0.667	7	3	0.333
	合計	148	69	0.755	48	33	0.245
三回目	活動動詞	28	20	0.800	7	7	0.200
	達成動詞	11	10	0.733	4	3	0.267
	到達動詞	29	14	0.784	8	7	0.216
	状態動詞	11	4	0.611	7	3	0.389
	合計	79	48	0.752	26	20	0.248
四回目	活動動詞	49	39	0.891	6	6	0.109
	達成動詞	9	9	0.818	2	2	0.182
	到達動詞	34	18	0.829	7	7	0.171
	状態動詞	24	9	0.750	8	6	0.250
	合計	116	75	0.835	23	21	0.165

注：ここで示した各指標の比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

まず、図6-9は表6-7で示された「一回目」から「四回目」までの「活動動詞」の正用率と、4つの動詞タイプの正用率の平均値を図示したものである。

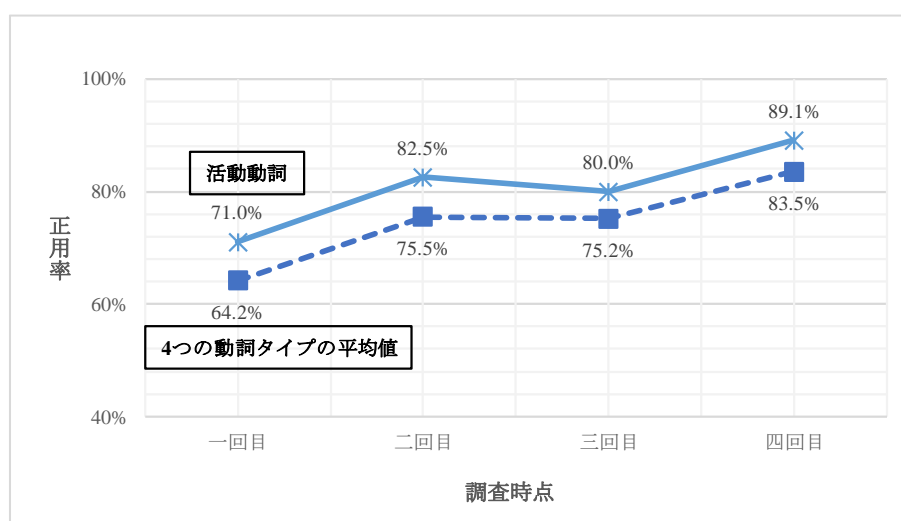


図6-9 各調査時点における「活動動詞」の正用率の推移

各調査時点における「活動動詞」の正用率と4つの動詞タイプの正用率の平均値を比較すると、図6-9に示されているように、「活動動詞」の正用率は「一回目」の調査時点からずっと4つの動詞タイプの正用率の平均値より高いことが観察された。また、「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの「活動動詞」の正用率の変化を見ると、「一回目」の調査時点(71.0%)から「二回目」の調査時点(82.5%)で「活動動詞」の正用率が大幅に上がっている。その後、「二回目」と「三回目」(80.0%)の2つの調査時点での正用率にあまり明確な変化は見られなかったが、「四回目」の調査時点(89.1%)では再び正用率が上昇している。このように、調査全体として学習者の日本語学習期間が長くなるほど「活動動詞」の正用率が上がっている。

また、図6-10は表6-7で提示された「一回目」から「四回目」までの「達成動詞」の正用率と、4つの動詞タイプの正用率の平均値を図示したものである。

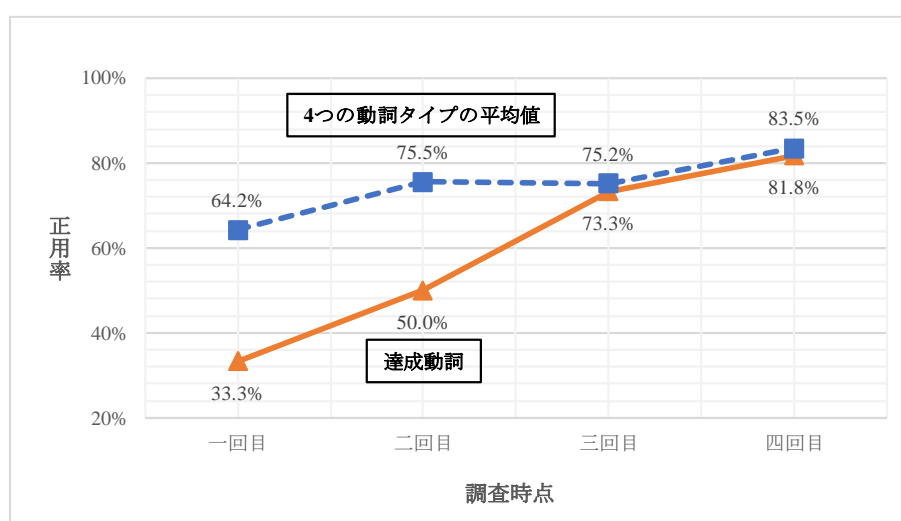


図6-10 各調査時点における「達成動詞」の正用率の推移

調査時点の違いによる「達成動詞」の正用率の変化を見ると、「一回目」の調査時点ではその正用率が33.3%と低かったが、その後、学習者の日本語学習期間が長くなるほど「達成動詞」の正用率が上がっている。特に「二回目」から「三回目」までの間に正用率が50.0%から73.3%までに上がっており、かなり顕著な伸びが見られた。

最終的に、「四回目」の調査時点ではその正用率が81.8%に達していた。しかし、各調査時点における「達成動詞」の正用率と4つの動詞タイプの正用率の平均値を比較すると、いずれの調査時点でも「達成動詞」の正用率が4つの動詞タイプの正用率の平均値より低い。

続いて、図6-11は表6-7で示された「一回目」から「四回目」までの「到達動詞」の正用率と、4つの動詞タイプの正用率の平均値を図示したものである。

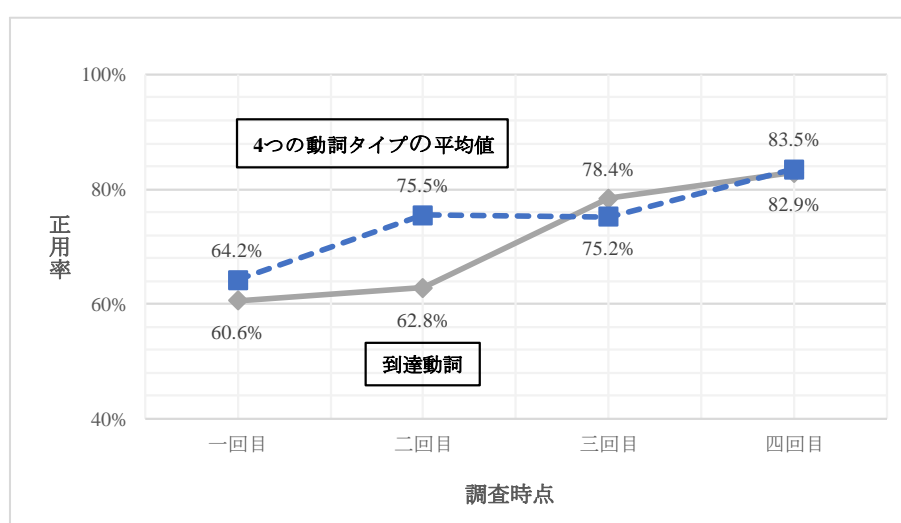


図6-11 各調査時点における「到達動詞」の正用率の推移

調査時点の違いによる「到達動詞」の正用率の変化を見ると、4つの調査時点のうち、「一回目」(60.6%)と「二回目」(62.8%)の2つの調査時点ともに正用率が6割弱程度で両者の間にあまり差異はないが、いずれも4つの動詞タイプの正用率の平均値(一回目64.2%;二回目75.5%)よりも低い。しかし、「三回目」の調査時点で「結果の状態」の正用率(78.4%)が大幅に伸びており、4つの動詞タイプの正用率の平均値(75.2%)を上回っている。その後、「到達動詞」の正用率(82.9%)は引き続き上がっているが、その伸び率が4つの動詞タイプの正用率の平均値(83.5%)に比べて低いため、「四回目」の調査時点で両者の間に明確な差異は見られなかった。

図6-12は表6-7で示された「一回目」から「四回目」までの「状態動詞」の正用率

と、4つの動詞タイプの正用率の平均値を図示したものである。

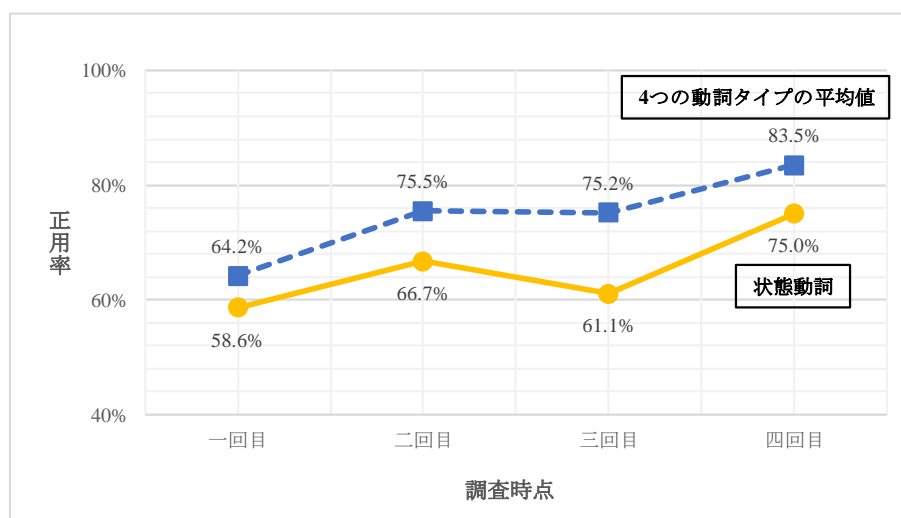


図 6-12 各調査時点における「状態動詞」の正用率の推移

4つの調査時点における「状態動詞」の正用率と4つの動詞タイプの正用率の平均値を比較すると、図 6-12 に示されるように「状態動詞」の正用率は「一回目」の調査時点からずっと4つの動詞タイプの正用率の平均値を下回っている。このうち、「三回目」の調査時点では両者の間に14.1%という大きな差が見られた。また、「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの正用率の変化を見ると、「一回目」の調査時点から「二回目」の調査時点にかけて正用率が58.6%から66.7%に伸びている。その後、「三回目」の調査時点では正用率が一時的に61.1%まで下がっているが、「四回目」の調査時点では再び上昇しており、最終的に正用率は75.0%に達している。

最後に、4つの動詞タイプの「テイル」の使用状況を比較するために、表 6-7 に示された各調査時点における動詞タイプ別の正用率と4つの動詞タイプの正用率の平均値を折れ線グラフで表示すると、図 6-13 のようになる。

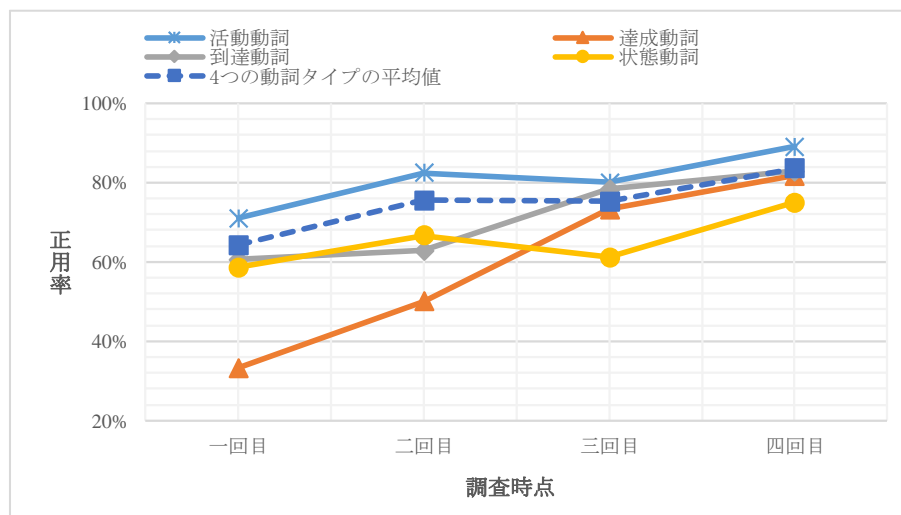


図 6-13 各調査時点における動詞タイプ別の正用率の推移

動詞タイプ別の正用率を見ると、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」はいずれの調査時点においても正用率が最も高かった。さらに、その使用率（一回目 53.8%；二回目 65.7%；三回目 34.1%；四回目 40.5%）は前掲の表 6-4 に示されているように、「三回目」の調査時点を除けば、いずれの調査時点においても4つの動詞タイプの中で最も高かった⁸。その使用例を見ると、特定の動詞が「テイル」と強く結びついていて頻繁に使用される例は見られず、使用された動詞の異なり語数も多かった。これらのことから、4つの動詞タイプの中で「活動動詞」は最も「テイル」と結びつきやすいことがわかった。

一方、「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプでは調査時期を通じて正用率がずっと「テイル」の5つの正用率の平均値を下回っていた。4つの調査時点のうち、「一回目」と「二回目」の2つの調査時点において「達成動詞」の正用率は各動詞タイプの中で最も低かったが、「二回目」の調査時点からその正用率には顕著な伸びが見られ、「三回目」の調査時点で「状態動詞」の正用率を上回っている。この時点から、「状態動詞」の正用率が4つの動詞タイプの中で最も低くなっている。

⁸ 三回目の調査時点では「活動動詞」(34.1%)と「到達動詞」(36.5%)の使用率にあまり明確な差はない。

6.3.2.3 日本語学習期間による動詞タイプ間の「テイル」の正用率の差異

前節では、動詞タイプ別に日本語学習期間の違いによる「テイル」の使用率と正用率の変化について考察してきた。本節ではまず、学習者の日本語学習期間の違いから動詞タイプ間の「テイル」の使用状況にいかなる差異があるのかを検証するために、「日本語学習期間」（4つの調査時点：一回目（1年）、二回目（1年半）、三回目（2年）、四回目（2年半））と「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）の2つの要因で「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。学習者の「日本語学習期間」を分類木の最初に来る変数として設定して分析した結果、図6-14のデンドログラムが得られた⁹。

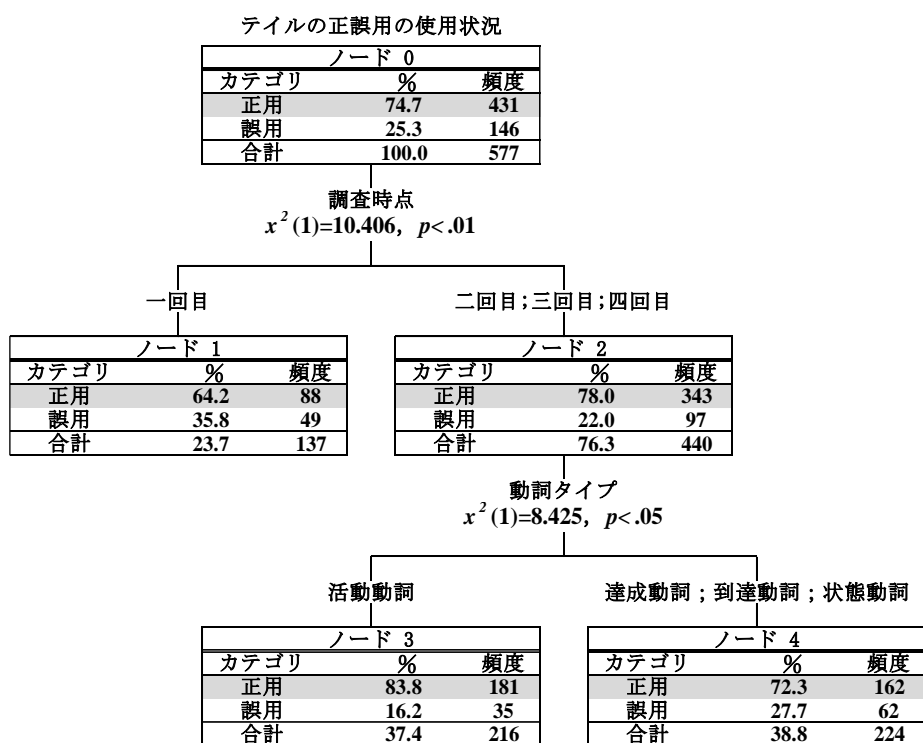


図6-14 各調査時点における動詞タイプ別の正誤用についての分類木分析の結果

図6-14に示されるように、最初の変数として設定した4つの調査時点は2つの子ノードに分岐する。このうち、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点の間に

⁹ なお、本分析の相対リスクは25.3%なので、本分析が74.7%で正しく予測されていることが示された。

「テイル」の正誤用の差異は見られなかったが、この3つの調査時点の正用率の平均値（ノード2，正用率78.0%）が「一回目」（ノード1，正用率64.2%）の調査時点より有意に高かった $[x^2(1)=10.406, p<.01]$ 。このうち、ノード1の「一回目」の調査時点では「テイル」の使用された4つの動詞タイプの間には正誤用の差異が認められなかったが、ノード2の「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では4つの動詞タイプの正誤用に明確な差異が見られた。この場合、4つの動詞タイプの中で、ノード3に含まれる「活動動詞」（例（19），正用率83.8%）の正用率がノード4に含まれる「達成動詞」（例（20））、「到達動詞」（例（21））、「状態動詞」（例（22））の3つの動詞タイプ（正用率72.3%）より有意に高かった $[x^2(1)=8.425, p<.05]$ 。

「活動動詞」：

(19) 皆はずっと私に笑っていましたげと、私も楽しかったです。(SCU-A-2-81-1-T2)

「達成動詞」：

(20) 台湾のマスコミはある特定の政党を偏っていて報道した新聞やニュースもその政党に対してプラスの印象を視聴者に与えています。(SCU-A-3-104-4-T5)

「到達動詞」：

(21) 台北市の大安区にはバイクの専の道があるけれども、いつもたくさんの車がとまっている。(NTU-A-3-125-3-T7)

「状態動詞」：

(22) 2007年度現在、ニュース番組は様々があつて、その放送内容と質もそれぞれに違っています。(SCU-A-3-80-3-T7)

また、学習者の「日本語学習期間」が長くなるに従って、動詞タイプ別の「テイル」の使用状況がどのように変化するかを検証するため、「日本語学習期間」と「動詞タイプ」の2つの要因で「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った結果、図6-15のデンドログラムが得られた¹⁰。

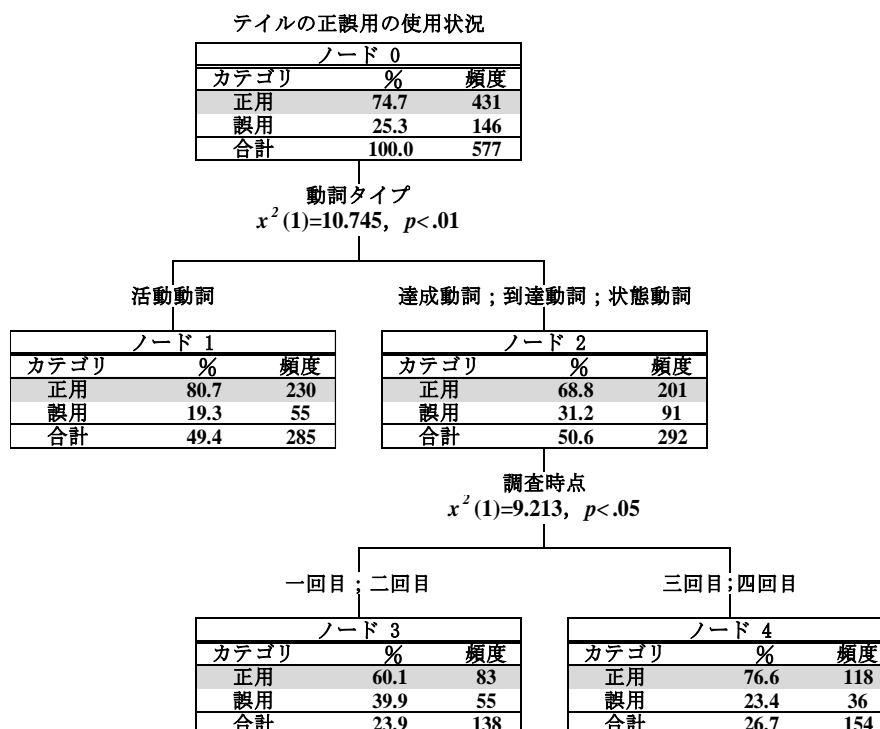


図6-15 動詞タイプ別における4つの調査時点の正誤用についての分類木分析の結果

図6-15に示すように、ルートノード（ノード0）では4つの動詞タイプが2つの子ノードに分岐する。このうち、ノード1に含まれる「活動動詞」（正用率80.7%）の正用率はノード2に含まれる「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプ（正用率68.8%）より有意に高かった $[\chi^2(1)=10.745, p<.01]$ 。また、ノード2の「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプから分岐し、4つの調査時点はさらに「一回目、二回目」（2年生）と「三回目、四回目」（3年生）に分かれた。こ

¹⁰ なお、本分析の相対リスクは24.1%なので、本分析が75.9%で正しく予測されていることが示された。

のうち、ノード4に含まれる「三回目」と「四回目」の2つの調査時点（正用率76.6%）は、ノード3に含まれる「一回目」と「二回目」の2つの調査時点（正用率60.1%）よりも、正用率が有意に高かった $[x^2(1)=9.213, p<.05]$ 。このように、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプでは学習者の学年による使用状況に明確な差が現れている。

6.3.3 日本語学習期間による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響

以上、「テイル」の用法別の習得難易度、および動詞タイプ別の「テイル」の使用状況のいずれかに焦点を置き、学習者の「テイル」の習得状況を考察してきた。本節では、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況について考察する。

6.3.3.1 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率

日本語学習者の「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率にいかなる差異があるのかについて考察する。表6-8における頻度と比率は、「動作の持続」などの各用法において「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの使用頻度と使用率を表すものである。なお、作文データで取り上げた「テイル」の用例が少ないため、ここでは日本語学習期間の違いによって、各用法で使用された動詞タイプ別の使用率にいかなる変化があるのかについては考察しないこととする。

表6-8 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用頻度 (n=40)

用法	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		適合度検定
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	208	0.725	10	0.035	2	0.007	67	0.233	$x^2(3)=379.997, p<.001$
結果の状態	0	0	5	0.045	105	0.955	0	0	$x^2(1)=90.909, p<.001$
パーフェクト	6	0.400	6	0.400	2	0.133	1	0.067	$x^2(3)=5.533, p=.137, ns$
繰り返し	37	0.698	5	0.094	5	0.094	6	0.113	$x^2(3)=56.811, p<.001$
単なる状態	4	0.129	5	0.161	14	0.452	8	0.258	$x^2(3)=7.839, p<.05$

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：「単なる状態」の用法では、動詞タイプ別の使用頻度を適合度検定で分析した結果、 $p<.05$ であるが、ボンフェローニ（Bonferroni）の補正を行った有意水準（ $0.05/5=0.01$ ）より高いために有意ではないこととなる。

「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率が等しいか否かを検証するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を用法ごとに行った。その結果は、表 6-8 に示すように「動作の持続」 $[x^2(3)=379.997, p<.001]$ 、「結果の状態」 $[x^2(1)=90.909, p<.001]$ 、「繰り返し」 $[x^2(3)=56.811, p<.001]$ の3つの用法が有意となっている。つまり、5つの用法の中で「パーフェクト」と「単なる状態」の2つの用法では、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向はないことが示唆される。また、「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」の3つの用法における動詞タイプ別の使用率を見ると、「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法ではそれぞれ(23)と(24)のように「活動動詞」が最も多く用いられるのに対し、「結果の状態」では(25)のように「到達動詞」の使用率が圧倒的に高い。このように、日本語学習者の「テイル」の使用は「テイル」の用法の違いで動詞タイプ別の使用率が異なることが観察された。

[活動動詞]

- (23) 「動作の持続」：そして、石の上を登ってきた田川さんはもう一度落さないように木の枝で自分をささえて大声で蛙を呼んでいました。(SCU-A-2-99-2-T8)
- (24) 「繰り返し」：これこそ教育の改革が失敗した原因の一つだと言われている。(SCU-A-3-82-3-T7)

[到達動詞]

- (25) 「結果の状態」：少し政治に関心を持っていると、官僚のメンバーはよく交替することを知っているはずだ。(SCU-A-3-82-3-T7)

6.3.3.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率

本節では「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率、およびそれは学習者の日本語学習期間によってどう違うのかを検証するために、①「テイルの用法」、②「動

詞タイプ」、③「日本語学習期間」の3つの要因で「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。学習者の「日本語学習期間」を分類木の最初に来る変数として設定して分析した結果を、図6-16のデンドログラムに示す¹¹。

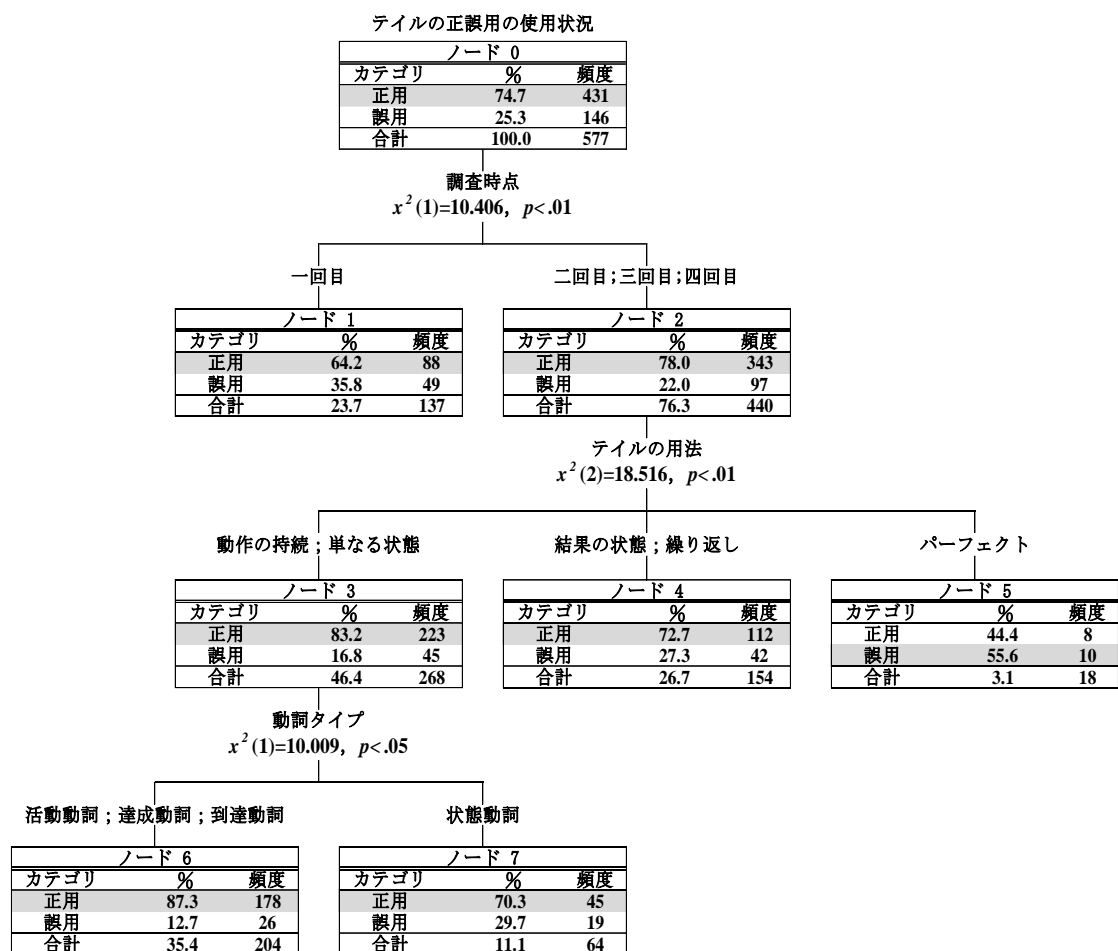


図6-16 調査時点による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の正誤用についての分類木分析の結果

図6-16の最上部にあるノード0から伸びているのは、最初の変数として設定された4つの調査時点を表すノード1とノード2である[$x^2(1)=10.406, p<.01$]。このうち、ノード1に含まれる一回目の調査時点においては、「テイルの用法」と「動詞タイプ」のいずれの影響も見られなかったのに対し、ノード2に含まれる「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点は「テイルの用法」の違いによる影響を受けている[x^2

¹¹ なお、本分析の相対リスクは25.0%なので、本分析が75.0%で正しく予測されていることが示された。

(2)=18.516, $p<.01$]. この3つの調査時点においては、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法（ノード3, 正用率 83.2%）の正用率が最も高く、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法（ノード4, 正用率 72.7%）が続き、いずれも7割以上の正用率を示す。これらに対して、「パーフェクト」（ノード5, 正用率 44.4%）の正用率はわずか4割弱で、かなり低い。また、「テイル」の5つの用法のうち、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法ではさらに「動詞タイプ」の違いによる影響が見られた [$\chi^2(1)=10.009, p<.05$]. この2つの用法においては、4つの動詞タイプのうち、ノード6の「活動動詞」（例(26)(27))、「達成動詞」（例(28)(29))、「到達動詞」（例(30)(31)）の3つの動詞タイプの正用率（87.3%）が、ノード7の「状態動詞」（正用率 70.3%, 例(32)(33)）より有意に高かった。

〔活動動詞〕

(26) 「動作の持続」：兄さんは今大学院で動画デザインを勉強しています。

(SCU-A-3-104-3-T7)

(27) 「単なる状態」：また現在の子供はあまり健康な体を鍛えていません。

(SCU-A-3-88-3-T7)

〔達成動詞〕

(28) 「動作の持続」：ある地方政府はビンロウといつもミニスカートを着てビンロウを売っている「ビンロウ西施」を台湾の文化として外国人に紹介するという新聞を見るときびっくりしました。(SCU-A-3-99-3-T7)

(29) 「単なる状態」：確かに、今の社会ではこんな行為についてまだ有効な対策を出していないです。(SCU-A-3-95-4-T5)

[到達動詞]

- (30) 「動作の持続」：教育制度を変化することに連れて、我が国では、今、大学数はますます増えているという。(SCU-A-3-85-3-T7)
- (31) 「単なる状態」：かれの前はみどりがあふれる大きい木が立っている。
(NTU-A-2-122-2-T8)

[状態動詞]

- (32) 「動作の持続」：まだ若いうちに、後悔しないように生きていくことは大切だと思っています。(SCU-A-2-87-1-T2)
- (33) 「単なる状態」：瞳を閉じて、思い出してみれば、Wちゃんとはじめて出会うときのその風景は、今でもまだ觸れるみたいに鮮やかに存在しています。
(NTU-A-2-123-1-T2)

6.4 考察

6.4.1 「テイル」の習得状況について

分類木分析の結果では、学習者の「テイル」の習得状況は「一回目」の調査時点（学習期間1年）と「二回目」の調査時点（学習期間1年半）との間に顕著な伸びが見られた。しかし、それ以降、「テイル」の習得は止まっており、たとえ学習者の学年が上がっても「テイル」の習得はそれ以上進まないことが観察された。これは恐らく学習者の習得環境や「テイル」のインプットに関わっていると考えられる。本研究は台湾の大学で日本語を専攻している大学生、つまり JFL 学習者を対象としたために、調査対象者の日本語の習得は JSL 学習者と異なり、学校での授業への依存度がかなり高い¹²。日本語の教育現場では「テイル」の主な用法が初級段階で導入されている（木村

¹² 日本に住んで生活の手段として習う日本語を JSL (Japanese as a Second Language: 第二言語としての日本語) といい、海外で外国語科目として習ったり日本に短期滞在で習ったりする日本語を JFL (Japanese as a Foreign Language: 外国語としての日本語) という (迫田 2002 : 10)

1994 ; 許 1997 ; 高梨 2013、2014)。その際には「テイル」が授業で文法項目として扱われているために、一時的に大量の「テイル」のインプットが得られてその習得が進んでいる。しかし、後述するように、「テイル」の習得過程において、「動作の持続」の用法のような習得が早いものと、「パーフェクト」の用法のような長い期間が経っても習得が進まないものがある。学習者にとってこれほどの短期間に「テイル」の表す様々な意味をすべて理解し、正確に使いこなせるようになるのは容易ではない。さらに、「テイル」の導入後、次の学習項目に入ると、「テイル」が授業で取り扱われる文法項目ではなくなるため、「テイル」のインプットが少なくなり、その習得を促進する環境がなくなる。それゆえに、学習者の「テイル」の習得は二回目の調査時点以降から、たとえ学年が上がっても顕著な伸びはないと推測される。

6.4.2 「テイル」の用法別の習得状況について

日本語学習期間による「テイル」の5つの用法の習得状況を分析した結果、4つの調査時点のうち、「一回目」の調査時点では5つの用法の正用率は殆ど同じで明確な差異はなかったが、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では「テイル」の用法の違いによる有意な影響が見られた。この場合、5つの用法のうち、最も習得されやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法であり、次に「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法が同程度で続く。そして、最も習得されにくいのは「パーフェクト」の用法であるという結果が出ている。さらに、日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法別の習得状況の変化を分析した結果、5つの用法の中で「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では「二回目」の調査時点ですでに顕著な伸びが見られたことから、この2つの用法の習得が最も早く進むことがわかった。次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法であった。この2つの用法の習得は学習者の学年（三回目の調査時点）が上がるとともに伸びていることが見られた。これらに対し、「パーフェクト」の習得は調査時期を通じてあまり進まないことが観察さ

れた。台湾人日本語学習者の「テイル」の用法の習得状況にこのような差異が現れるのは、日中両言語のAspect表現の異同による母語の影響を受けている可能性が考えられる。中国語では進行中の動作を表す「動作の持続」に対応する非完成相の“（正）在”が存在し、日中両言語の対応関係はほぼ一致している。これに対し、「結果の状態」に対応する中国語のAspect表現には、概ね動詞によって変化で生じた結果の状態に焦点が置かれる非完成相の“著”（例：電気がついている - 燈亮著）と、変化そのものに焦点が置かれる完成相の“了”（例：ガラスが割れている - 玻璃破了）の2つの表現がある。許（1997）では、「結果の状態」の習得について台湾人日本語学習者は“著”が「結果の状態」の「テイル」、「了」が「タ形」と対応していると認識しているため、中国語で“了”と訳される動詞（例えば、「落ちる」「死ぬ」など）に「テイル」を使わずに「タ形」を使ってしまう誤用が多く見られ、その誤用率も中国語で“著”と訳される動詞（例えば、「止まる」「閉まる」など）より高かったと指摘している。この点に関しては、本研究で取り上げた132例の「結果の状態」の使用例を中国語の対応表現によって“了”、“著”、「対応表現なし」¹³の3つに分け、それらの正誤用の頻度を集計して独立性の検定によって分析した。

表 6-9 「結果の状態」における中国語の対応表現による正誤用の頻度

対応表現	正用			誤用			用例
	頻度	正用率	調整済み残差	頻度	誤用率	調整済み残差	
了	20	0.444	-4.2	25	0.556	4.2	濡れる、落ちる、～になるなど
著	54	0.806	3.1	13	0.194	-3.1	持つ、握る、座るなど
なし	16	0.800	1.2	4	0.200	-1.2	知る、残る、こむなど
独立性の検定の結果				$\chi^2(2)=17.736, p<.001$			

注1：ここで示した頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

その結果は、表 6-9 に示されるように有意となり [$\chi^2(2)=17.736, p<.001$]、この3つの

¹³ 中国語で動詞に何もつかない形で使われるものを指す。

グループの正誤用の頻度に明確な差異があることが分かる。さらに、正用に着目して調整済み残差を比較すると、この3つのグループの中で(34)のように“著”(z=+3.1, 正用率 80.6%)に対応するものの正用率が最も高く、次いで(35)のように「対応表現なし」のもの(z=+1.2, 正用率 80.0%)、次に(36)のように“了”(z=4.2, 正用率 44.4%)に対応するものとなっている。このうち、“了”に対応するものの正用率はわずかに4割に過ぎず、他の2つのグループに比べて習得がかなり遅れている。このように、本研究では学習者の「結果の状態」の使用は中国語で“著”と訳される動詞の正用率が、“了”と訳される動詞よりも高いという点で許(1997)の調査と一致する結果が得られた。ただし、中国語の“了”に対応する動詞の誤用例を見ると、非使用の中に(37)(38)のように「テイル」を使わずに「タ形」を使っているものの他に、(39)(40)のように「テイル」を使わずに「テイク」・「テクル」を使っている誤用も見られた。

(34) しかし、ジョンはどうしても手を離さないで、しっかり角を握っていました。

(SCU-A-2-84-2-T8)

(35) 空気の読める人なら、他人と距離を隔て、遠ざがってタバコを吸うことまだ知っているが、一本、一本ずつ、吸い続ける人も少なくなかない。(SCU-A-3-90-4-T5)

(36) 池の水はとても涼しくて、体が濡れているのに、健志も楽しみにグワちゃんに合いたかった(→健志はグワちゃんに会うことを楽しみにしていました)。

(SCU-A-2-89-2-T8)

(37) よっばらい運転は、台湾の一つの社会問題になった(→社会問題になっている)。(NTU-A-3-117-3-T7)

(38) 蜂に追った犬は帰って、とても疲れました(→疲れていた)。(SCU-A-2-57-2-T8)

(39) 交通事故の現場で車にはねられて意識を失った人が道端にたおれていった(→たおれていた)が、周囲の人は犯人に誤解されることをこわくて、誰も手を伸

ばして助けてくれないという事件が大幅に増えました。(SCU-A-3-73-4-T5)

(40) 二酸化炭素によって温室効果はひどくなってきました (→ひどくなっています)。

(SCU-A-3-100-4-T5)

このように、「結果の状態」よりも「動作の持続」のほうがより習得されやすいのは、「動作の持続」の「テイル」と“(正) 在”のほうがより完全的な対応関係を持つことに起因すると考えられる。さらに、このような対応関係から、殆ど完成相の“了”のみに対応する「パーフェクト」(例 (41)) の習得が各用法の中で最も困難である原因も窺える。ところが、同じく「テイル」の派生的な意味である「繰り返し」と「単なる状態」の2つの用法には、「テイル」に対応する中国語のアスペクト表現は存在せず、いずれも動詞の基本形で表現するケースが多い¹⁴。それにもかかわらず、分類木分析の結果でこの2つの用法はいずれもほぼ完成相の“了”のみに対応する「パーフェクト」より習得されやすく、さらに「単なる状態」の習得難易度は「動作の持続」、「繰り返し」の習得難易度は「結果の状態」と同程度であることが示されている。これらのことから、台湾人日本語学習者にとって「テイル」の表す多様な意味の中で、対応表現のないものよりも中国語のアスペクト表現“了”と対応するもののほうがより習得されにくいと推測できる。ただし、「繰り返し」と「単なる状態」の2つの用法に「テイル」に対応する中国語のアスペクト表現はないため、いずれも(42)(43)のように誤用の中で非使用のほうが圧倒的に高い、という対応表現の有無による影響が観察された¹⁵。

¹⁴ 何(1998)では、『日本語基本動詞用法辞典』の動詞728例を全部中国語に訳し、「テイル」と中国語の対応表現の異同を考察した結果、「テイル」の用法に対し、中国語では基本的に完成相の“了”、非完成相の“(正) 在”と“著”、基本形(つまり、動詞に何もつかない形)の3つの形式で表していると提示されている。このうち、「繰り返し」(例えば(i))と「単なる状態」(例えば(ii))の2用法については、中国語では殆ど動詞の基本形で表現すると指摘している。

(i) あら、わたしも毎日見ているわ(哎呀,我也每天都看)。

(ii) 日本は四つの島に分かっている(日本分為四個島嶼)。 ((i)~(ii)のいずれも何1998)

¹⁵ 本研究で取り上げた「繰り返し」と「単なる状態」の2つの用法の誤用例を見ると、「繰り返し」の用法では非使用率が83.3%、「単なる状態」の用法では非使用率が100%であった。

「パーフェクト」:

- (41) この間、ある大学入試制度の記事が出て来た (→出ていた)。ある学生が 入試最低限を達しないけれど、大学側も引き受けられた。(SCU-A-3-85-3-T7)

「繰り返し」:

- (42) 台湾の教育制度はいつもアメリカに模倣する (→模倣している) である。(SCU-A-3-89-4-T5)

「単なる状態」:

- (43) 「あのう、すみません、僕のコイちゃんを見ませんか」と僕は古いけどまだいきいきする (→いきいきしている) 木の穴に大きな声をかけました。(SCU-A-2-98-2-T8)

6.4.3 動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について

日本語学習期間による動詞タイプの使用状況を分析した結果、「一回目」の調査時点(学習期間1年)においては4つの動詞タイプの正誤用に明確な差異がなかったが、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では動詞タイプの違いによる有意な影響が見られた。この場合、「活動動詞」の正用率が「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプより有意に高い、という使用状況が観察された。このことから、同じ「動的」の要素を持つ「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプであっても、「限界的」の要素がある限界動詞である「達成動詞」と「到達動詞」より、学習者は「限界的」の要素のない非限界動詞である「活動動詞」に「テイル」を正確に使いこなす、ということがわかった。これは「アスペクト仮説」の予測と一致する結果である。理由としては、「テイル」の使用において特定の文脈や構文

的条件などがない場合、非限界動詞である「活動動詞」は常に「動作の持続」(例：彼が本を読んでいる)の用法しか表さないのに対し、限界動詞は「結果の状態」(例：財布が落ちている)と「動作の持続」(例：涙が落ちている)の2つの用法とも表すことが可能である。そのため、学習者は限界動詞を処理する際の認知的負担が非限界動詞より大きいため、処理が行き届かずに誤用を引き起こしてしまう可能性がある。従って、学習者にとって動作しか表さない非限界動詞である「活動動詞」よりも、動作と変化をどちらも表せる限界動詞である「達成動詞」と「到達動詞」のほうが「テイル」に結びつきにくいと考えられる。

一方、「動的」の要素が欠けた「状態動詞」は、表6-7に示されるように「動作の持続」の用法に最も多く用いられている。そのため、その誤用例の殆どは(44)(45)のように「考える」、「思う」、「信じる」などの心理動詞に集中している。このうち、特に「思う」の使用では(46)のように主観的な判断と客観的な記述との使い分けを間違えてしまう誤用が3年生後期(四回目の調査時点)にも見られた。このように、これらの心理動詞に「テイル」がつくと、「活動動詞」と同様に主に「動作の持続」の用法を表す場合が多いが、その「テイル」の使用は「活動動詞」と異なり、単に動きの時間的局面を表すわけではなく、主語の人称制限やムードの違いも関わるのでより難しくなると考えられる。

「状態動詞」：

(44) 私は「現在の自分はいろいろな思い出を堆積して完成した。」と信じる (→信じている)。(NTU-A-2-120-1-T2)

(45) 多くの人は兵役をする、その一年三が月は時間がむだになると思います (→思っています)が、... (後略)。(SCU-A-3-88-3-T7)

(46) ただ一回を使って捨てた木の箸、プラスチックのカップとか、たくさんのゴミを処理するためにエネルギーを使うのは浪費だと思っている (→思う)。(NTU-A-

3-120-4-T5)

6.4.4 日本語学習期間による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の関係

まず、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率を分析した結果、「テイル」の用法によって動詞タイプ別の使用傾向は異なっているが、5つの用法のうち「パーフェクト」と「単なる状態」の2つの用法では、いずれかの動詞タイプに偏って用いられるという使用傾向は見られなかった。一方、「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法では、いずれも「活動動詞」の使用率(表6-8, 「動作の持続」では72.5%; 「繰り返し」では69.8%)が突出して高くなっているのに対し、「結果の状態」の用法では「テイル」が「到達動詞」に用いられる比率(表6-8, 使用率95.5%)は他の動詞タイプを圧倒して極めて高いという使用傾向が観察された。このうち、「活動動詞」と「到達動詞」は文脈と構文的条件がない場合、それぞれ「動作の持続」と「結果の状態」の意味を優先的に表現するため、「動作の持続」の用法では「活動動詞」、「結果の状態」の用法では「到達動詞」が最も多く用いられる結果になった。一方、どのような動詞タイプでも表現できる「繰り返し」の用法では、「活動動詞」が最も多く用いられることから、学習者の「繰り返し」の用法の使用では例示した(47)(48)のように定期的に継続して行われる動作、または行為を表す場合には最も多く用いられることがわかった。

「繰り返し」:

- (47) 「活動動詞」: 今年の夏はずっと精一杯野球を練習していました。(SCU-A-2-8
1-1-T2)
- (48) 「活動動詞」: 小さい頃から、ずっとある中年人がビンロウを咀嚼することを見ている。(SCU-A-3-102-3-T7)

また、「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率を分析した結果、「一回目」の調査時点では「テイルの用法」と「動詞タイプ」のいずれの影響も見られなかったのに対し、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因とも学習者の「テイル」の使用に有意な影響力を持っていることが示されている。この2つの要因のうち、学習者の「テイル」の使用に最も強く影響した要因は「テイルの用法」の違いであることが明らかになった。5つの用法のうち、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法が各用法の中で最も習得されやすく、次に「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法となっている。そして、「パーフェクト」の用法は「テイル」の5つの用法の中で最も習得が困難であることがわかった。また、「動詞タイプ」の違いは学習者の「テイル」の使用に2番目に強く影響した要因であったが、その影響は「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法でしか見られなかった。この場合、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプのほうが、「状態動詞」より正用率が有意に高いという結果が出ている。このうち、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法における「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプの使用に動詞に内在する「限界性」の有無による影響は見られず、いずれも高い正用率（図6-16のノード6、正用率87.3%）で用いられていることが観察された。これは「テイル」の用法を区別せずに「テイル」の使用された動詞タイプ別の正用率を分析した6.3.2.2節で得られた結果とは異なる使用状況である¹⁶。特に、「テイル」と結びつきにくい「到達動詞」でも、「限界性」を持たない「活動動詞」と同様に高い正用率で用いられていることから、「動作の持続」と「単なる状態」のような習得されやすい用法の場合には、学習者の「テイル」の使用に対する動詞に内在する「限界性」の有無による影響力が弱まっていることが判明した。

¹⁶ 本章の6.3.2.3節では、「テイル」の用法を区別せずに「テイル」の使用された動詞タイプ別の正用率を分類木分析によって分析した結果、「活動動詞」の正用率が「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプより有意に高かった。

一方、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法における「状態動詞」の正用率は、他の3動詞に比べて比較的低かった。「状態動詞」は「動的」の意味要素が欠けている点で他の動詞タイプと異なる。「動作の持続」の用法では、既述したように主に「考える」、「思う」などの心理動詞が用いられるため、「テイル」の使用は単に動きの時間的局面を表すわけではなく、主語の人称制限やムードの違いも絡み合うのでより難しくなると考えられる。その一方で、時間的展開を問題にせず、ものの属性や状態などをとらえる「単なる状態」の用法では、(49= (43)) (50) のような非使用が観察され、過剰使用は1例も見られなかった。さらに、その非使用の例(4例)の中で例示した(49= (43)) 以外は、いずれも(50)のように「不足」、「充実」などの語を動詞ではなく形容詞・名詞として使用していた。このように、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法において「動的」の意味要素を持たない「状態動詞」と「テイル」との結びつきは、学習者にとって他の動詞タイプよりも比較的習得されにくいものであることがわかった。

「単なる状態」:

(49) 「状態動詞」: 「あのう、すみません、僕のコイちゃんを見ませんか」と僕は古いけどまだいきいきする (→いきいきしている) 木の穴に大きな声をかけました。(SCU-A-2-98-2-T8)

(50) 「状態動詞」: 私の小学生生活はとても充実でした (→充実していました)。(SCU-A-2-100-1-T2)

6.5 まとめ

本章では、学習者の日本語学習期間が長くなるに従って、①「テイル」の用法別の習得状況、②動詞タイプ別の「テイル」の習得状況、③「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況にいかなる変化があるのかについて考察した。その結果、以

下の3点が明らかになった。

1. 「テイル」の5つの用法の中で習得が最も早く進むのは「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法であり、「二回目」の調査時点で顕著な伸びが見られた。次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法となり、学習者の学年が上がる（三回目の調査時点）とともに正用率が大きく伸びている。一方、「パーフェクト」の用法は学習者の日本語学習期間にかかわらず調査時期を通じて正用率が低く、習得があまり進まないことが観察された。
2. 4つの動詞タイプの中で「活動動詞」の正用率が最も高かったが、「一回目」の調査時点で正用率がすでに7割を超えているため、学習者の日本語学習期間に関係なく調査時期を通じて使用状況に明確な変化はなかった。これに対し、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプの「テイル」の使用は学習者の学年が上がる（三回目の調査時点）とともに正用率が大きく伸びたことが観察された。
3. 4つの調査時点のうち、「一回目」の調査時点を除く他の3つの調査時点では、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因の影響が見られた。このうち、学習者の「テイル」の使用に最も強く影響した要因は「テイルの用法」の違いであった。5つの用法の正用率を比べると、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法が最も高く、次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法、次に「パーフェクト」となっている。また、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法ではさらに「動詞タイプ」の影響が見られ、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプのほうが「状態動詞」より正用率が有意に高かった。一方、「動作の持続」と「単なる状態」の以外の用法では「動詞タイプ」の影響が見られなかった。

第7章 構文的位置による「テイル」の習得状況

7.1 はじめに

前章では、「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の習得状況について考察した。その結果、学習者の「テイル」の習得は「二回目」の調査時点（学習期間1年半）ですでに止まっており、たとえ学習者の学年が上がっても「テイル」の習得はそれ以上進まないことが明らかになった。しかし、前章では文末と連体修飾節の違いについては論じられていない。第2章で指摘したように連体修飾節中のテンス・アスペクト形式の振舞は文末と異なるものであり、より複雑である。例えば、下記の(1a)～(3a)において、文末ではいずれも「テイル形」のみが容認されているが、連体修飾節の場合は、(1b)では「ル形」も「テイル形」も、(2b)では「タ形」のみが、(3b)では「テイル形」のみが容認されるという違いがある。

- (1) a. 現在、両親はニューヨークに {*住む／住んでいる}。
b. 現在、ニューヨークに {住む／住んでいる} 両親。
- (2) a. あの子の行動はいつも {*馬鹿げた／馬鹿げている}。
b. あの子はいつも {馬鹿げた／*馬鹿げている} 行動。
- (3) a. 今その人は私のコートを {*着た／着ている}。
b. 今その人が {*着た／着ている} コートは私のものだ。

((1)～(3) はいずれも陳 2014 : 125)

このようなテンスおよびアスペクトの現れ方の違いは学習者の「テイル」の習得に影響する可能性があるため、「テイル」の習得における文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いによる影響について検証する必要がある。

そこで、本章では文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の習得状況につい

て考察し、「構文的位置」の違いによって「テイル」の用法別の習得状況、および動詞タイプ別の「テイル」の習得状況にどのような差異があるのかを明らかにしたい。以下、本章の研究目的として次の3点を設定して考察していく。

1. 文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる「テイル」の用法別の習得状況について明らかにする。
2. 文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について明らかにする。
3. 文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況について明らかにする。

7.2 調査の概要

7.2.1 調査対象者

本章では、前章と同様に「台湾人日本語学習者コーパス(CTLJ)」¹の中から2年間(2006学年度から2007学年度にかけて)で4回分(半年ごとに1回)の作文が揃っている、40名の学習者による計160篇の作文データを調査対象として分析を行った。

7.2.2 分析手順

以下の手順で分析を行った。

- ① 作文の中で「テイル」が使用されたところ、および使用すべきところを抽出した。
- ② ①を前後の文脈によって「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分類した(「テイル」の用法の分類基準は2.3節で提示しているとおりの)。

¹ CTLJの詳細および検索方法については第4章4.4節と4.5節を参照。

- ③ ②の5つの用法で使用された動詞を「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプに分類した（動詞タイプの分類基準は2.4節で説明しているとおり）。
- ④ ③を文末の場合と連体修飾節の場合に分けた。
- ⑤ 4つの調査時点に現れた②～④の使用頻度、および正用と誤用²の頻度を集計し、延べ語数によってそれらの比率を算出した。

上記をもとに、本章では文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の習得状況について、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「日本語学習期間」の3つの要因がどのように影響するのかに焦点を置き、「テイル」の使用率と正用率の2つの側面から考察することとし、以下の2つの手法で分析を行った。第一に、文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いによって「テイル」の用法別の使用率、および動詞タイプ別の「テイル」の使用率にいかなる差異があるのかを、カイ二乗分布を用いた「適合度検定」と「独立性の検定」で検討した。さらに、独立性の検定の結果、有意であった場合には「残差分析」を行い、具体的にどの用法、或いは動詞タイプの使用に有意な偏りがあるのか判断した。第二に、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③学習者の「日本語学習期間」の3つの要因が、文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の習得にどのように影響しているのかを検証するために、この3つの要因で文末と連体修飾節における「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する「分類木分析」で検討した。

7.3 分析結果

7.3.1 「テイル」の用法の習得状況

本節では、文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いが、学習者の「テイル」の用

² 「テイル」の正用と誤用の判断基準について第4章4.2節を参照。

法別の習得状況にどう影響しているのかについて、以下の手順で考察する。

- ① 構文的位置の違いによる「テイル」の用法別の使用率の差異を考察する。
- ② 構文的位置の違いによる「テイル」の用法別の正用率の差異を考察する。
- ③ 構文的位置の違いによる「テイル」の用法間の正用率の差異を考察する。

このうち、①については7.3.1.1節、②については7.3.1.2節、③については7.3.1.3節で論じる。

7.3.1.1 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の使用率

本節では文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の使用率にいかなる差異があるのかについて考察する。学習者の作文データで取り上げた「テイル」に関する正用と誤用の中で、文末の用例は419例で全体の72.6%、連体修飾節の用例は158例で全体の27.4%を占めた。このうち、文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の用法別の使用頻度（正用、過剰使用、テンスの誤り）を集計すると、表7-1のようになる。

表7-1 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の使用頻度 (n=40)

構文的位置	動作の持続			結果の状態			パーフェクト			繰り返し			単なる状態		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差
文末	198	0.564	-1.0	77	0.219	0.2	10	0.028	-0.4	47	0.134	3.0	19	0.054	-1.2
連体修飾節	89	0.614	1.0	33	0.228	-0.2	5	0.034	0.4	6	0.041	-3.0	12	0.083	1.2
合計	287	0.579	-	110	0.222	-	15	0.030	-	53	0.107	-	31	0.063	-
文末における適合度検定の結果						$\chi^2(4)=329.954, p<.001$									
連体修飾節における適合度検定の結果						$\chi^2(4)=172.759, p<.001$									
独立性の検定の結果						$\chi^2(4)=10.157, p<.05$									

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

まず、文末と連体修飾節の両位置において、学習者の「テイル」の使用は5つの用法のいずれかに偏るか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果はいずれも有意となり、文末 $[x^2(4)=329.954, p<.001]$ 、連体修飾節 $[x^2(4)=172.759, p<.001]$ の両方ともがある特定の「テイル」の用法に偏って用いられる傾向を持つことが示された。両位置における「テイル」の用法別の使用率を見ると、文末、連体修飾節のいずれの位置においても、「結果の状態」(例(4))よりも「動作の持続」(例(5)(6))のほうがより多く用いられている。つまり、連体修飾節における日本語学習者の「テイル」の使用で、文末の場合と同様に、「動作の持続」の用法が最も多く用いられていた。

「結果の状態」:

- (4) 体が全部濡れている健志とワンちゃんは何も知らないで、池の中に座っていました。(SCU-A-2-89-2-T8)

「動作の持続」:

- (5) 私は今市場の近くに住んでいる。(SCU-A-3-102-3-T7)
- (6) いずれの原因も、私たち人類の、台湾で生活している人々の、生命教育の不足なのだ。(NTU-A-3-123-4-T5)

また、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、学習者の「テイル」の用法別の使用率に差異があるか否かを検証するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った結果、有意となった $[x^2(4)=10.157, p<.05]$ 。つまり、学習者の「テイル」の用法の使用は構文的位置の違いによる影響を受けていることがわかった。さらに、具体的にどの用法で文末と連体修飾節の使用率に有意な偏りがあるのかを考察するために、両位置における各用法の使用頻度を残差分析によって検討した。結果、「テイル」

の5つの用法のうち、調整済み残差の絶対値が1.96よりも大きいのは「繰り返し」($z = \pm 3.0$)の用法のみであった。このことから、他の用法と比べて、「繰り返し」の用法では、文末と連体修飾節の使用率に有意な偏りがあることがわかった。この用法では(7)のような連体修飾節(使用率4.1%)よりも、(8)のように文末での使用率(13.4%)が比較的高い。このように、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、学習者の「繰り返し」の使用率に明確な差異が現れることが見られた。

「繰り返し」:

- (7) この台湾で一番の大学と言われているT大学でさえ、学生たちの勉強についての態度や試験についての態度は悲しいほど不真面目だ。(NTU-A-3-123-3-T7)
- (8) 小さい頃から、ずっとある中年人がビンロウを咀嚼することを見ている。(SCU-A-3-102-3-T7)

7.3.1.2 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の正用率の差異

本節では、構文的位置の違いによる「テイル」の各用法の正用率の差異を考察する。4つの調査時点において、文末と連体修飾節の両位置における「テイル」の用法別の正用と誤用の頻度を集計すると、表7-2のようになる。さらに、表7-2で提示された文末と連体修飾節における「テイル」の正用率を基に、「テイル」の用法ごとに各調査時点における正用率を折れ線グラフで表示すると、図7-1から図7-5のようになる。以下、「テイル」の用法別に文末と連体修飾節における正用率の差異について順次考察していく。

表 7-2 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の正誤用の頻度 (n=40)

調査時点	用法	文末				連体修飾節			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	動作の持続	43	0.652	23	0.348	12	0.857	2	0.143
	結果の状態	12	0.500	12	0.500	5	1.000	0	0
	パーフェクト	3	0.375	5	0.625	0	0	0	0
	繰り返し	11	0.647	6	0.353	0	0	0	0
	単なる状態	2	0.667	1	0.333	0	0	0	0
	合計	71	0.602	47	0.398	17	0.895	2	0.105
二回目	動作の持続	76	0.835	15	0.165	39	0.750	13	0.250
	結果の状態	10	0.476	11	0.524	13	0.684	6	0.316
	パーフェクト	0	0	0	0	0	0	1	1.000
	繰り返し	1	1.000	0	0	0	0	0	0
	単なる状態	4	1.000	0	0	5	0.714	2	0.286
	合計	91	0.778	26	0.222	57	0.722	22	0.278
三回目	動作の持続	18	0.750	6	0.250	9	0.900	1	0.100
	結果の状態	18	0.720	7	0.280	5	1.000	0	0
	パーフェクト	1	0.333	2	0.667	3	0.750	1	0.250
	繰り返し	16	0.762	5	0.238	1	0.333	2	0.667
	単なる状態	5	0.833	1	0.167	3	0.750	1	0.250
	合計	58	0.734	21	0.266	21	0.808	5	0.192
四回目	動作の持続	34	0.872	5	0.128	18	1.000	0	0
	結果の状態	21	0.778	6	0.222	6	1.000	0	0
	パーフェクト	3	0.375	5	0.625	1	0.500	1	0.500
	繰り返し	17	0.773	5	0.227	4	1.000	0	0
	単なる状態	8	0.889	1	0.111	4	1.000	0	0
	合計	83	0.790	22	0.210	33	0.971	1	0.029

注：ここで示した正誤用の頻度と比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

まず、図 7-1 は表 7-2 の「一回目」から「四回目」までの文末と連体修飾節における「動作の持続」の用法の正用率を図示したものである。

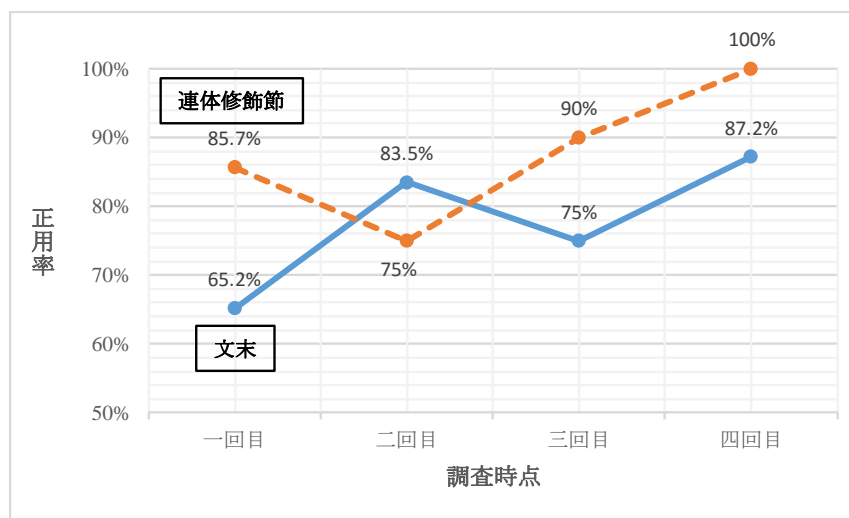


図 7-1 文末と連体修飾節における「動作の持続」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの、文末と連体修飾節における「動作の持続」の正用率の変化を見ると、文末の場合には「一回目」の調査時点（正用率 65.2%）から「二回目」の調査時点（正用率 83.5%）にかけて正用率が大きく伸びている。「三回目」の調査時点では正用率が一時的に 75.0%にまで下がるが、「四回目」の調査時点では正用率が再び上がって 87.2%に達している。一方、連体修飾節の場合には4つの調査時点のうち、「二回目」（正用率 75.0%）を除く他の調査時点ではいずれも8割以上の正用率を超えている。特に「四回目」の調査時点ではその誤用例は1例も見られず、かなり習得できていると言える。また、各調査時点における文末と連体修飾節の「動作の持続」の正用率を比較すると、図7-1に示されているように、「二回目」の調査時点を除けば、いずれの調査時点においても連体修飾節における「動作の持続」の正用率は文末より高いことが観察された。

続いて、図7-2は表7-2の「一回目」から「四回目」目までの文末と連体修飾節における「結果の状態」の用法の正用率を図示したものである。

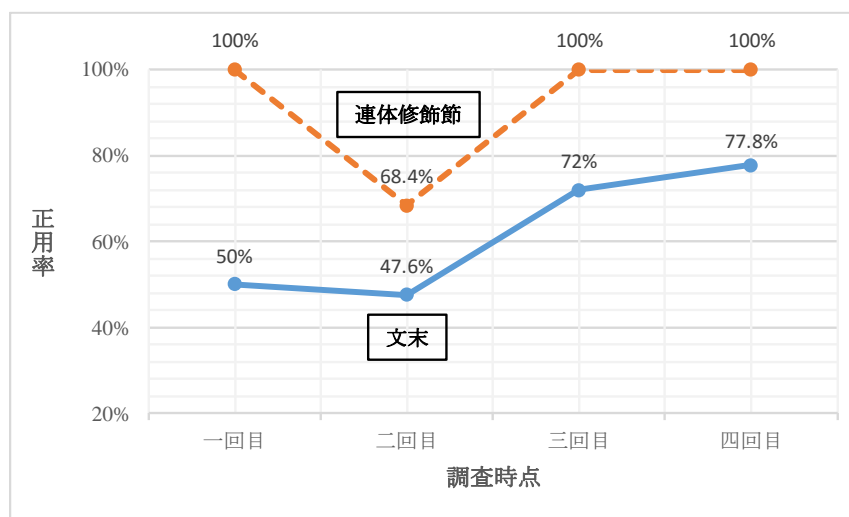


図7-2 文末と連体修飾節における「結果の状態」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「結果の状態」の正用率の変化を見ると、図7-2に示されているように、文末の場合

は「一回目」の調査時点（正用率 50.0%）と「二回目」の調査時点（正用率 47.6%）の間では正用率の差異はあまり見られないが、「三回目」の調査時点では「結果の状態」の正用率（72.0%）が大幅に伸びている。その後、正用率は引き続き上昇して 77.8%に達している。調査全体として学習者の日本語学習期間が長くなるほど文末における「結果の状態」の正用率が上がる傾向が見られた。一方、連体修飾節の場合には4つの調査時点のうち、「二回目」の調査時点（正用率 68.4%）を除けば、いずれの調査時点でもその誤用例は見られず、かなり習得できていると言える。また、各調査時点における文末と連体修飾節の「結果の状態」の正用率を比較すると、「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点まで連体修飾節の正用率は一貫して文末を上回っていた。よって、「結果の状態」の用法では連体修飾節での習得が文末での習得よりも容易であるとわかる。

図 7-3 は表 7-2 の「一回目」から「四回目」までの文末と連体修飾節における「パーフェクト」の用法の正用率を図示したものである。

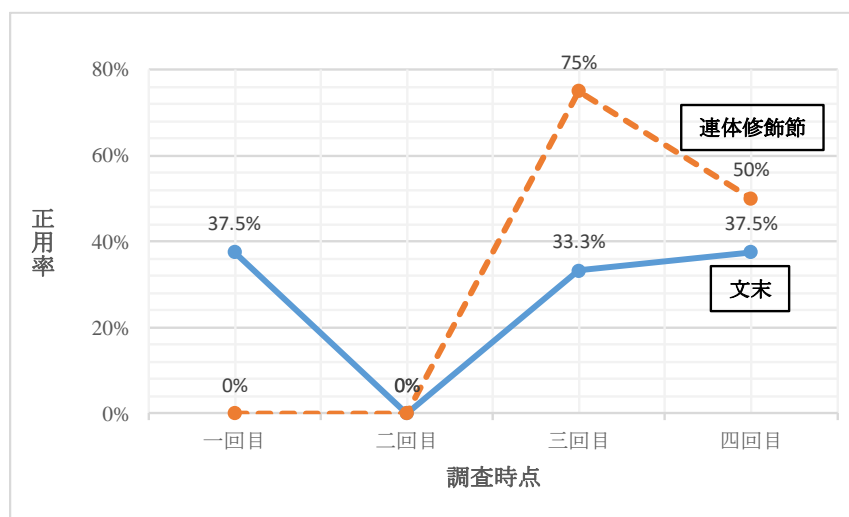


図 7-3 文末と連体修飾節における「パーフェクト」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「パーフェクト」の正用率の変化を見ると、文末の場合では、表 7-2 に示されたよう

に「二回目」の調査時点で「パーフェクト」の使用はなく、正用率が0%となっている。「二回目」を除く他の調査時点ではいずれも正用率が4割にさえも届いておらず、各調査時点間の正用率に明確な変化は見られなかった。一方、連体修飾節の場合、「一回目」の調査時点では「パーフェクト」の使用がなく、「二回目」の調査時点で正用例がないため、この2つの調査時点ではいずれも正用率は0%となる。その後、「三回目」の調査時点では正用率が大幅に上がり75.0%に達するが、「四回目」の調査時点では正用率が50.0%にまで下がる。また、各調査時点における文末と連体修飾節の「パーフェクト」の正用率を比較すると、「三回目」と「四回目」の調査時点では連体修飾節のほうが文末より正用率が高いことが観察された。しかし、文末と連体修飾節、いずれの位置においても、「四回目」の調査時点では「パーフェクト」の正用率が50.0%を超えないことから、2年半の日本語学習経験を持つ学習者（3年生後期）にもこの用法が習得されていないことがわかる。

次の図7-4は表7-2の「一回目」から「四回目」までの文末と連体修飾節における「繰り返し」の用法の正用率を図示したものである。

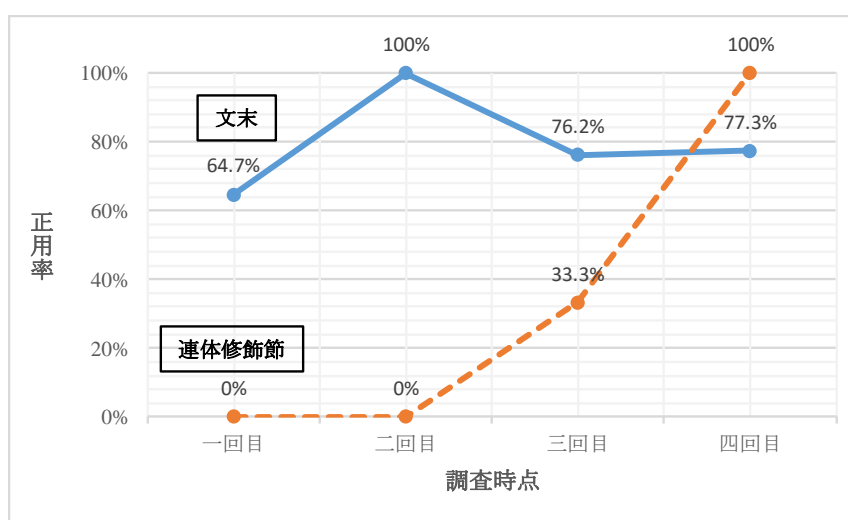


図7-4 文末と連体修飾節における「繰り返し」の正用率の推移

「一回目」から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「繰り返し」

の正用率の変化を見ると、文末の場合では「一回目」の調査時点（64.7%）から「二回目」の調査時点（正用率 100%）にかけて正用率が大幅に上がっている。しかし、表 7-2 に前掲したように、「二回目」の調査時点では「繰り返し」の使用はわずか1例しかなく、この2つの調査時点で観察された正用率の伸びは日本語学習期間が長くなるほど正用率が上がっているとは言いがたい。その後、「三回目」の調査時点では正用率が76.2%に下がる。「四回目」の調査時点では正用率は7割程度で維持されており、「三回目」の調査時点との間に明確な差異は見られなかった。一方、連体修飾節の場合、「一回目」と「二回目」の2つの調査時点で「繰り返し」の使用が出現していないため、正用率はいずれも0%となる。その後、「三回目」の調査時点では正用率が33.3%で文末での正用率を下回っているが、「四回目」の調査時点では誤用例は1例も見られず、正用率は100%に達して文末での正用率（77.3%）を上回っている。

最後に、図 7-5 は表 7-2 の「一回目」から「四回目」目までの文末と連体修飾節における「単なる状態」の用法の正用率を図示したものである。

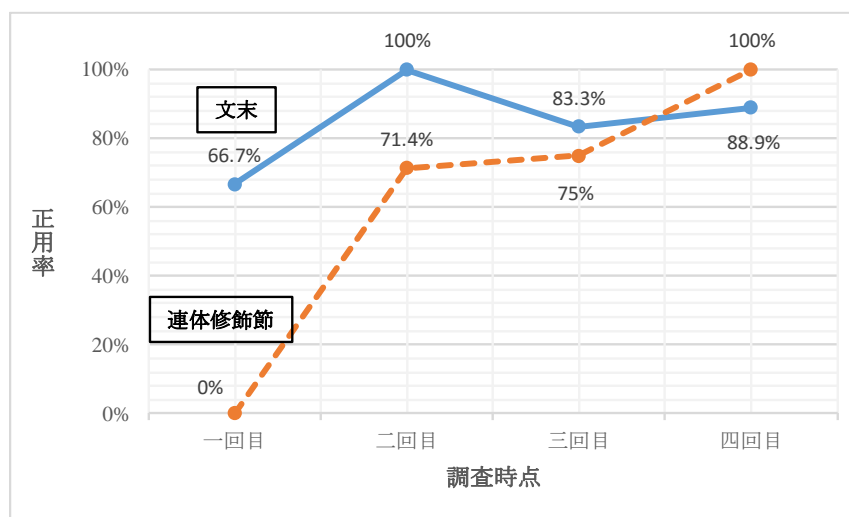


図 7-5 文末と連体修飾節における「単なる状態」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「単なる状態」の正用率の変化を見ると、文末の場合、「一回目」の調査時点（正用率

66.7%) から「二回目」の調査時点（正用率 100%）にかけて正用率が大幅に上がっている。「三回目」の調査時点では正用率が 83.3%に下がるが、「四回目」の調査時点では正用率は再び上がり、88.9%となる。一方、連体修飾節の場合、「一回目」の調査時点では「パーフェクト」の使用が出現していないため、正用率はいずれも 0%となる。

「二回目」（正用率 71.4%）と「三回目」の調査時点（正用率 75.0%）では正用率はいずれも 7 割程度で両者間に明確な変化は見られなかった。その後、「四回目」の調査時点では誤用例が見られず、正用率は 100%となり文末での正用率を上回っている。

7.3.1.3 文末と連体修飾節における「テイル」の用法間の正用率の差異

前節では文末と連体修飾節における「テイル」の各用法の使用率と正用率の差異を考察した。続いて、本節では文末と連体修飾節の両位置において、「テイル」の用法間の使用状況にいかなる同異点があるのか、および学習者の日本語学習期間の違いに影響されるのかを検証する。そこで、本節では「構文的位置」（文末、連体修飾節）、「日本語学習期間」（4つの調査時点：一回目（1年）、二回目（1年半）、三回目（2年）、四回目（2年半））、「テイルの用法」（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）の3つの要因で学習者の「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。文末と連体修飾節の「構文的位置」を分類木の最初に来る変数として設定して分析した結果を図 7-6 のデンドログラムに示す³。

図 7-6 では、「構文的位置」、「テイルの用法」、「日本語学習期間」の3要因ともが学習者の「テイル」の使用に有意な影響力を持つことが示される。まず、最初の変数として設定した文末と連体修飾節における「テイル」の正用率を比較すると、文末（ノード1, 正用率 72.3%）よりも連体修飾節における「テイル」の正用率（ノード2, 正用率 81.0%）が有意に高かった $[x^2(1)=4.592, p<.05]$ 。すなわち、文末よりも連体修飾節における学習者の「テイル」の習熟度がより高いということが示されている。

³ なお、本分析の相対リスクは 24.4%なので、本分析が 75.6%で正しく予測されていることが示された。

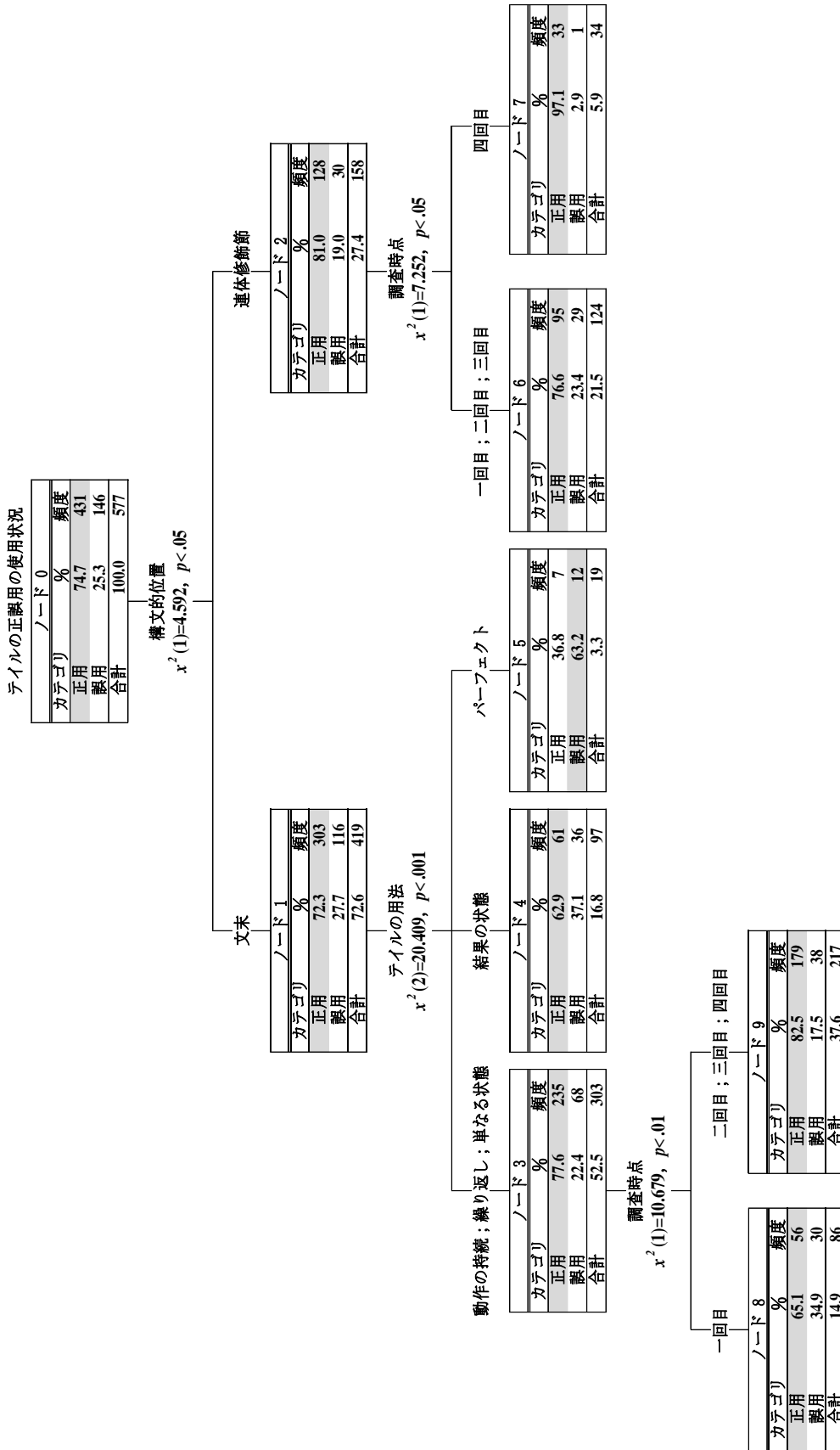


図7-6 文末と連体修飾節における「テイルの用法」と「日本語学習期間」の2つの要因の影響についての分類木分析の結果

また、図 7-6 に示すように、構文的位置の違いによって異なる影響要因が現れている。文末において、「日本語学習期間」よりも「テイルの用法」の違いが学習者の「テイル」の使用により強く影響していることがわかった。「テイル」の5つの用法のうち、「動作の持続」(例 (9))、「繰り返し」(例 (10))、「単なる状態」(例 (11))の3用法(ノード 3, 正用率 77.6%)での正用率が最も高く、続いて(12)のような「結果の状態」の用法(ノード 4, 正用率 62.9%)となり、いずれも6割以上の正用率を占める。一方、(13)のような「パーフェクト」(ノード 5, 正用率 36.8%)の正用率は4割にさえも達しておらず、他の用法に比べるとかなり低いという有意差が示されている $[x^2(2)=20.409, p<.001]$ 。また、ノード3の「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3用法では、さらに「日本語学習期間」の違いによる影響が見られた $[x^2(1)=10.679, p<.01]$ 。この場合、4つの調査時点のうち、ノード9に含まれる「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点(正用率 82.5%)はノード8に含まれる「一回目」調査時点(正用率 65.1%)よりも正用率が有意に高かった。

「動作の持続」:

(9) 兄さんは今大学院で動画デザインを勉強しています。(SCU-A-3-104-3-T7)

「繰り返し」:

(10) 皆は教育を受けるべきだが、現在の社会では教育の本意が大変に変わってしま
うと言われている。(SCU-A-3-93-3-T7)

「単なる状態」:

(11) かれの前はみどりがあふれる大きい木が立っている。(NTU-A-2-122-2-T8)

「結果の状態」:

(12) それでも、そのときのみんなの笑顔が覚えています。(SCU-A-2-99-1-T2)

「パーフェクト」:

(13) 子供たちは勉強は人生の第一の目標と教えられているから、頭に「勉強、勉強」
っていっばいだ。(SCU-A-3-93-3-T7)

一方、連体修飾節においては学習者の「日本語学習期間」の影響しか認められなかった[$\chi^2(1)=7.252, p<.05$]。つまり、「テイルの用法」の違いは連体修飾節における学習者の「テイル」使用に影響しないと言える。連体修飾節における学習者の「テイル」の習得状況について、4つの調査時点のうち、「一回目」、「二回目」、「三回目」の3つの調査時点の間で正誤用の差異はなかったが、この3つの調査時点の正用率の平均値(ノード6, 正用率76.6%)は、「四回目」(ノード7, 正用率97.1%)の調査時点より有意に低かった。

7.3.2 動詞タイプ別の「テイル」の習得状況

本節では文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いによって、学習者の動詞タイプ別の「テイル」の習得状況にいかなる差異があるのかについて考察する。以下の手順で考察していく。

- ① 構文的位置の違いによる動詞タイプ別の使用率の差異を考察する。
- ② 構文的位置の違いによる動詞タイプ別の正用率の差異を考察する。
- ③ 構文的位置の違いによる動詞タイプ間の正用率の差異を考察する。

このうち、①については7.3.2.1節、②については7.3.2.2節、③については7.3.2.3

節で論じる。

7.3.2.1 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の使用率

本節では、構文的位置の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の使用率の差異を考察する。文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の使用頻度（正用、過剰使用、テンスの誤り）を集計すると、表 7-3 のようになる。

表 7-3 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の使用頻度 ($n=40$)

構文的位置	活動動詞			達成動詞			到達動詞			状態動詞		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差
文末	173	0.493	-1.5	18	0.051	-1.6	89	0.254	-0.4	71	0.202	3.4
連体修飾節	82	0.566	1.5	13	0.090	1.6	39	0.269	0.4	11	0.076	-3.4
合計	255	0.514	-	31	0.063	-	128	0.258	-	82	0.165	-
文末における適合度検定の結果						$\chi^2(3)=141.479, p<.001$						
連体修飾節における適合度検定の結果						$\chi^2(3)=90.448, p<.001$						
独立性の検定の結果						$\chi^2(3)=13.481, p<.01$						

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

文末と連体修飾節の両位置において、学習者の「テイル」の使用が4つの動詞タイプのいずれかに偏るか否かを検証するために、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果は表 7-3 に示されるようにいずれも有意となり、文末 $[\chi^2(3)=141.479, p<.001]$ 、連体修飾節 $[\chi^2(3)=90.448, p<.001]$ の両方ともに、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向があることが示唆される。さらに、両位置における動詞タイプ別の使用率を見ると、文末と連体修飾節のいずれの位置においても、4つの動詞タイプの中で「テイル」は(14)(15)の「使う、働く」のような「活動動詞」に最も多く用いられており、次いで(16)(17)の「持つ、座る」のような「到達動詞」に用いられている。一方、「達成動詞」(例(18)(19))と「状態動詞」(例(20)(21))の2つの動詞タイプでは、文末の場合では「状態動詞」の使用率が「達成動詞」よりも高かつ

たが、連体修飾節の場合には両者間に明確な差異は見られなかった。このように、連体修飾節における「テイル」の使用は文末の場合と同様に4つの動詞タイプの中で「活動動詞」が最も多く用いられていることがわかった。

「活動動詞」：

- (14) 人間はもう百年以上ガソリンを使っているが、工業の発展によってエネルギーの需要量はいまでもあげている。(NTU-A-3-120-4-T5)
- (15) また、高校二年生の時、母と妹は中国に行って、中国で働いている父と一緒に住んだ。(NTU-A-2-125-1-T2)

「到達動詞」：

- (16) 台湾では毎人がほとんど車を持っている。(SCU-A-3-95-3-T7)
- (17) そのとき、田川君も穴から急に飛んできたフクロウにびっくりされて、もともと座っていた木の枝から落ちてしまいました。(SCU-A-2-99-2-T8)

「達成動詞」：

- (18) 情報の集めやすいと共に、我々は必要かどうかをよそにいっぱいな情報を受けています。(SCU-A-3-80-4-T5)
- (19) たとえば、いつまでも電気をつけている場所、あつくないけどクーラーをつける場合など。(NTU-A-3-120-4-T5)

「状態動詞」：

- (20) 今の社会では人の財布やコンビニの飲み物・お菓子やキャンパスの自転車などを盗ぶ泥棒のみならず、その以上大切な物を盗ぶ泥棒も存在している。(SCU-A-3-98-4-T5)

- (21) (前略)... そばの枯れ木から、緑ちゃんと似ている声を聞きました。
(SCU-A-2-97-2-T8)

また、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる日本語学習者の動詞タイプ別の使用率への影響の有無を検証するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行い、結果は有意であった [$\chi^2(3)=13.481, p<.01$]。さらに、具体的にどの動詞タイプで文末と連体修飾節の使用率に有意な偏りがあるのかを考察するために、両位置における各動詞タイプ別の使用頻度による残差分析を行った。その結果、4つの動詞タイプの中で「状態動詞」 ($z=\pm 3.4$) では文末と連体修飾節の使用率に有意な偏りがあることが示され、連体修飾節 (使用率 7.6%) よりも文末での使用率 (20.2%) が比較的高かった。

7.3.2.2 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の正用率の差異

本節では、構文的位置の違いによる各動詞タイプの正用率の差異について考察する。「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における動詞タイプ別の正誤用の頻度を集計すると、表 7-4 のようになる。さらに、表 7-4 に示された、文末と連体修飾節における「テイル」の正用率を基に動詞タイプごとに各調査時点における正用率を折れ線グラフで表示すると、図 7-7 から図 7-10 のようになる。以下、動詞タイプ別に文末と連体修飾節における正用率の差異について順次考察していく。

表 7-4 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の正誤用の頻度 (n=40)

調査時点	動詞タイプ	文末				連体修飾節			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	活動動詞	37	0.673	18	0.327	12	0.857	2	0.143
	達成動詞	2	0.333	4	0.667	0	0	0	0
	到達動詞	15	0.536	13	0.464	5	1.000	0	0
	状態動詞	17	0.586	12	0.414	0	0	0	0
	合計	71	0.602	47	0.398	17	0.895	2	0.105
二回目	活動動詞	69	0.852	12	0.148	35	0.778	10	0.222
	達成動詞	2	0.667	1	0.333	1	0.333	2	0.667
	到達動詞	11	0.524	10	0.476	16	0.727	6	0.273
	状態動詞	9	0.750	3	0.250	5	0.556	4	0.444
	合計	91	0.778	26	0.222	57	0.722	22	0.278
三回目	活動動詞	20	0.870	3	0.130	8	0.667	4	0.333
	達成動詞	5	0.556	4	0.444	6	1.000	0	0
	到達動詞	24	0.750	8	0.250	5	1.000	0	0
	状態動詞	9	0.600	6	0.400	2	0.667	1	0.333
	合計	58	0.734	21	0.266	21	0.808	5	0.192
四回目	活動動詞	31	0.838	6	0.162	18	1.000	0	0
	達成動詞	6	0.857	1	0.143	3	0.750	1	0
	到達動詞	24	0.774	7	0.226	10	1.000	0	0
	状態動詞	22	0.733	8	0.267	2	1.000	0	0
	合計	83	0.790	22	0.210	33	0.971	1	0.029

注：ここで示した正誤用の頻度と比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

まず、図 7-7 は表 7-4 で示された「一回目」から「四回目」までの文末と連体修飾節における「活動動詞」の正用率を図示したものである。

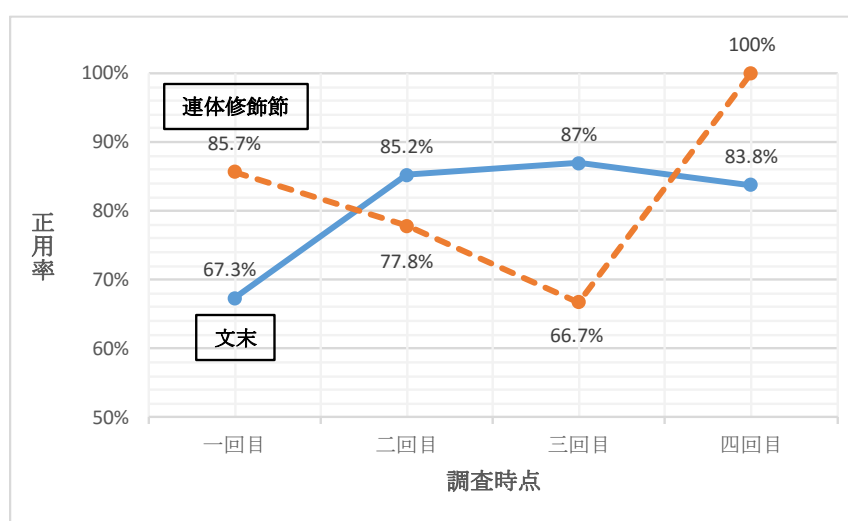


図 7-7 文末と連体修飾節における「活動動詞」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「活動動詞」の正用率の変化を見ると、図7-7に示されるように、文末の場合では「一回目」の調査時点（正用率 67.3%）から「二回目」の調査時点（正用率 85.2%）にかけて「活動動詞」の正用率に顕著な伸びが見られた。その後、「三回目」の調査時点でも正用率（87.0%）が少し上がるが、「四回目」の調査時点では正用率が 83.3%に下がる。ただし、「二回目」から「四回目」までの3つの調査時点の正用率の間に明確な差異は見られなかった。一方、連体修飾節の場合、「一回目」の調査時点では正用率が 85.7%で文末の正用率を上回るが、「二回目」の調査時点では正用率が 77.8%に下がり、文末の正用率を下回る。その後、「三回目」の調査時点（正用率 66.7%）では正用率は引き続き下がっているが、「四回目」の調査時点では正用率（100%）は再び上昇し、文末の正用率を上回っている。

図7-8は表7-4で示された「一回目」から「四回目」までの文末と連体修飾節における「達成動詞」の正用率を図示したものである。

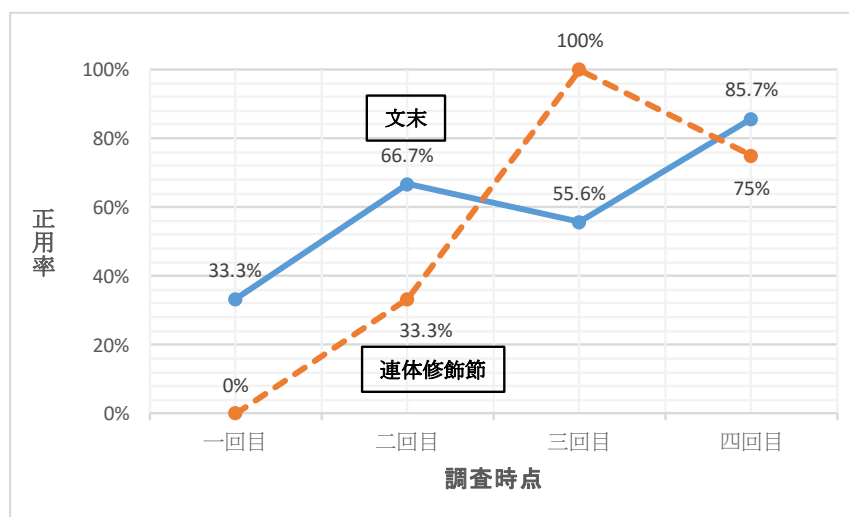


図7-8 文末と連体修飾節における「達成動詞」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「達成動詞」の正用率の変化を見ると、文末の場合、一回目の調査時点では正用率は

33.3%に過ぎないが、「二回目」の調査時点では正用率が66.7%までに上がり大きく伸びている。その後、「三回目」の調査時点では正用率(55.6%)が一時的に下がるが、「四回目」の調査時点では正用率は再び上がり、最終的には85.7%にまで達する。一方、連体修飾節の場合、4つの調査時点のうち、「三回目」以外のいずれの調査時点においても正用率は文末よりも低かった。このうち、「一回目」の調査時点では「達成動詞」の使用は出現していないため、正用率は0%となる。「二回目」の調査時点(正用率33.3%)から「三回目」の調査時点(正用率100%)にかけては正用率は大幅に伸び、「三回目」の調査時点では文末での正用率を上回る。しかし、その後、「四回目」の調査時点では正用率は75.0%に下がり、再び文末での正用率を下回る。

次の図7-9は表7-4で示された「一回目」から「四回目」までの文末と連体修飾節における「到達動詞」の正用率を図示したものである。

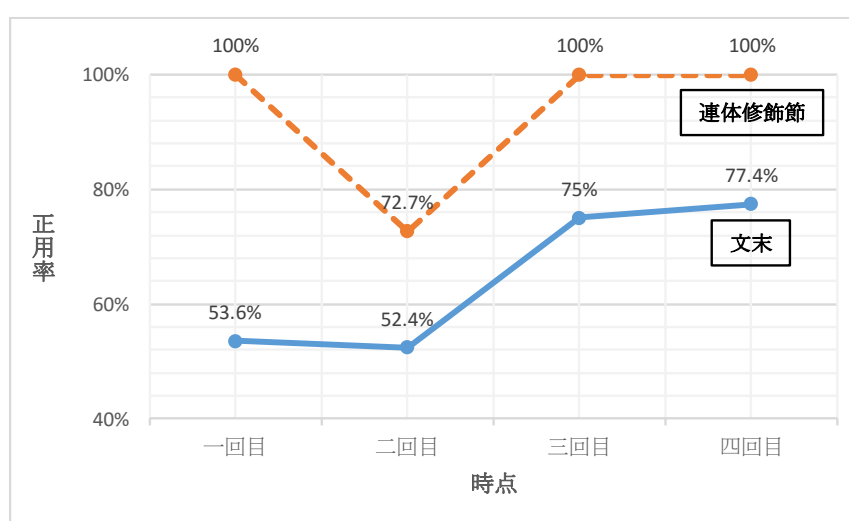


図7-9 文末と連体修飾節における「到達動詞」の正用率の推移

「一回目」の調査時点から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「到達動詞」の正用率の変化を見ると、「一回目」の調査時点(正用率53.6%)と「二回目」の調査時点(正用率52.4%)の間では正用率の差異があまりないが、「三回目」の調査時点では正用率は大きく伸びて75.0%に達する。その後、「四回目」の調査時点

では正用率 (77.4%) は引き続き上がっているが、その上り幅は「三回目」の調査時点に比べてわずか 2.4%で小さい。一方、連体修飾節の場合、4つの調査時点のうち、「二回目」の調査時点 (正用率 72.7%) を除けば、いずれの調査時点においても誤用例は1例も見られず、正用率は 100%となった。また、各調査時点における文末と連体修飾節の「到達動詞」の正用率を比較すると、「一回目」から「四回目」の調査時点まで一貫して連体修飾節における「到達動詞」の使用は文末よりも高い正用率を維持している。以上から、「到達動詞」の「テイル」の習得は学習者にとって連体修飾節のほうが文末でよりも容易であると判断できよう。

最後に、図 7-10 は表 7-4 で示された「一回目」から「四回目」目までの文末と連体修飾節における「状態動詞」の正用率を図示したものである。

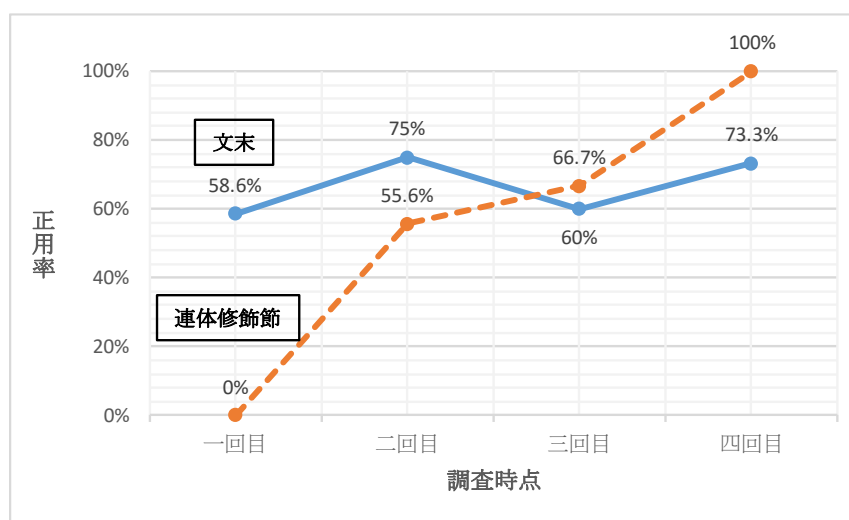


図 7-10 文末と連体修飾節における「状態動詞」の正用率の推移

「一回目」から「四回目」の調査時点までの文末と連体修飾節における「状態動詞」の正用率の変化を見ると、文末の場合、「一回目」の調査時点から「二回目」の調査時点にかけてその正用率が 58.6%から 75.0%にまで伸びている。その後、「三回目」の調査時点では正用率は 66.7%に下がっているが、「四回目」の調査時点では再び上昇して 73.3%に達する。一方、連体修飾節の場合、「一回目」の調査時点では「状態動詞」の

使用が出現していないため、正用率は 0%となるが、その後、学習者の日本語学習期間が長くなるほど正用率が上がる傾向が見られた。特に「三回目」から「四回目」までの間には正用率は 66.7%から 100%にまで上がり、かなり顕著な伸びが見られたと言える。

7.3.2.3 文末と連体修飾節における動詞タイプ間の「テイル」の正用率の差異

前節では、文末と連体修飾節で「テイル」の使用された各動詞タイプの使用率と正用率の差異を考察した。続いて、本節では文末と連体修飾節の両位置において、動詞タイプ間の使用状況にいかなる共通点及び相違点があるか、さらに学習者の日本語学習期間の違いに影響されているのかどうかを検証する。よって本節では「構文的位置」（文末、連体修飾節）、「日本語学習期間」（4つの調査時点：一回目（1年）、二回目（1年半）、三回目（2年）、四回目（2年半））、「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）の3要因で学習者の「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行う。文末と連体修飾節の「構文的位置」を分類木の最初に来る変数として設定し分析を行った結果、図 7-11 のデンドログラムが得られた⁴。

図 7-11 では、「構文的位置」、「動詞タイプ」、「日本語学習期間」の3要因ともに学習者の「テイル」の使用に有意な影響力を持つことが示されている。最初の変数として設定した文末と連体修飾節の両位置における「テイル」の正用率を比較すると、文末（ノード 1, 正用率 72.3%）よりも連体修飾節における「テイル」の正用率（ノード 2, 正用率 81.0%）が有意に高かった [$\chi^2(1)=4.592, p<.05$]。また、図 7-11 に示されるように、文末と連体修飾節のいずれの位置においても、「テイル」の使用状況に次に強く影響している要因は学習者の「日本語学習期間」であった。

⁴ なお、本分析の相対リスクは 25.3%なので、本分析が 74.7%で正しく予測されていることが示された。

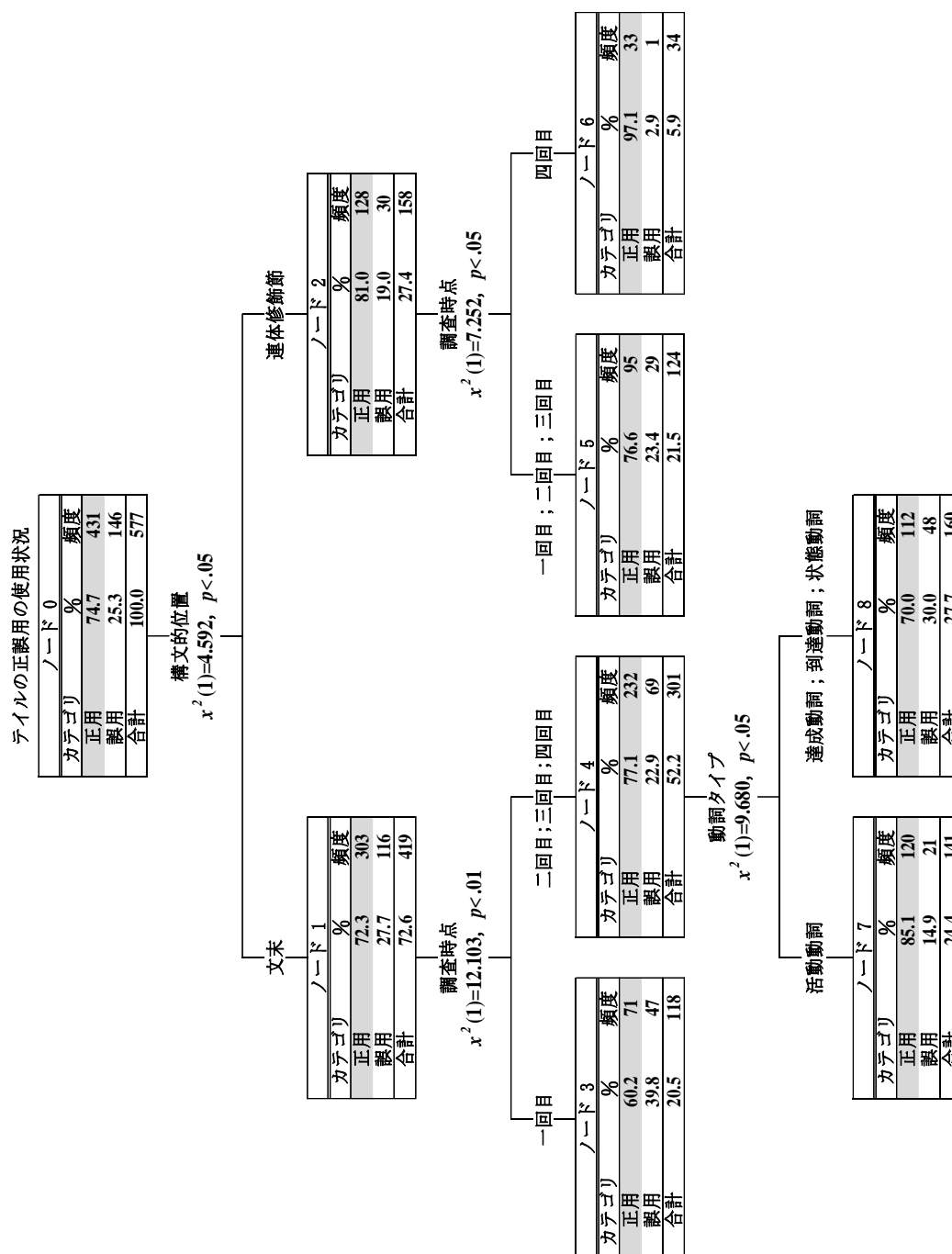


図7-11 文末と連体修飾節における「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2つの要因の影響についての分類木分析の結果

文末の場合、4つの調査時点のうち「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点の間で「テイル」の正誤用の差異は見られず、この3つの調査時点の正用率の平均値（ノード4、正用率77.1%）は「一回目」（ノード3、正用率60.2%）の調査時点より有意に高かった $[x^2(1)=12.103, p<.01]$ 。このことから、文末における学習者の「テ

イル」の習得度合いは、「二回目」の調査時点（学習期間1年半）ですでに止まっており、それ以降で顕著な変化はないと言える。また、ノード4に含まれる「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点ではさらに「動詞タイプ」による影響が見られた [$\chi^2(1)=9.680, p<.05$]。4つの動詞タイプの中で、(22)の「飛ぶ」のような「活動動詞」（ノード7, 正用率 85.1%）は「達成動詞」（例(23))、「到達動詞」（例(24))、「状態動詞」（例(25))の3動詞（ノード8, 正用率が 70.0%）よりも正用率が有意に高かった。

「活動動詞」：

(22) ある森の奥の中に、ちょうちょうや鳥など自由に飛んでいます。(SCU-A-2-84-2-T8)

「達成動詞」：

(23) ビンロウというのは、常に一般の人に悪い印象を与えている。(SCU-A-3-96-3-T7)

「到達動詞」：

(24) しかし、ジョンはどうしても手を離さないで、しっかり角を握っていました。(SCU-A-2-84-2-T8)

「状態動詞」：

(25) 2007年度現在、ニュース番組は様々があつて、その放送内容と質もそれぞれに違っています。(SCU-A-3-80-3-T7)

一方、連体修飾節の場合、4つの調査時点のうち、「一回目」、「二回目」、「三回目」

の3つの調査時点の間で「テイル」の正誤用の差異は見られなかったが、この3つの調査時点の正用率の平均値（ノード5, 正用率 76.6%）が「四回目」（ノード6, 正用率 97.1%）の調査時点よりも低い、という有意差が示された $[x^2(1)=7.252, p<.05]$ 。ただし、連体修飾節においては「日本語学習期間」の影響しか認められなかった。このことから、「動詞タイプ」の違いは連体修飾節における学習者の「テイル」の正誤用に影響しないことがわかった。

7.3.3 構文的位置による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響

以上、文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の習得難易度、或いは動詞タイプ別の「テイル」の使用状況に焦点を置き、学習者の「テイル」の習得状況を考察してきた。本節では、文末と連体修飾節の違いが「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況にどう影響しているのかについて考察する。

7.3.3.1 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率

本節では、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、日本語学習者の「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率にいかなる差異があるのかについて考察する。なお、作文データで取り上げた「テイル」の用例が少ないため、ここでは文末と連体修飾節において、日本語学習期間による各用法で使用された動詞タイプ別の使用率の変化については考察しない。まず、文末における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の頻度を集計すると、表 7-5 のようになる。表 7-5 における頻度と比率は、文末における「動作の持続」などの各用法での「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの使用頻度と使用率を表す。

表 7-5 文末における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度 (n=40)

	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		適合度検定
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	131	0.662	6	0.030	2	0.010	59	0.298	$\chi^2(3)=219.818, p<.001$
結果の状態	0	0	3	0.039	74	0.961	0	0	$\chi^2(1)=64.468, p<.001$
パーフェクト	5	0.500	2	0.200	2	0.200	1	0.100	$\chi^2(3)=3.600, p=.308, ns$
繰り返し	33	0.702	4	0.085	4	0.085	6	0.128	$\chi^2(3)=51.468, p<.001$
単なる状態	4	0.211	3	0.158	7	0.368	5	0.263	$\chi^2(3)=1.842, p=.606, ns$

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

文末における「テイル」の各用法内での動詞タイプ別の使用率が等しいか否かを検証するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を用法ごとに行った。その結果は、表 7-5 に示したように「動作の持続」 [$\chi^2(3)=219.818, p<.001$]、「結果の状態」 [$\chi^2(1)=64.468, p<.001$]、「繰り返し」 [$\chi^2(3)=51.468, p<.001$] の3つの用法が有意となった。つまり、文末における「パーフェクト」と「単なる状態」の2つの用法に関して、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向がないことが示唆されている。また、「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」の3つの用法で使用された4つの動詞タイプを使用率順に並べると、表 7-6 のようになる。

表 7-6 「動作の持続」、「繰り返し」、「結果の状態」における動詞タイプ別の使用率の順位

		使用率の順位			
		1位	2位	3位	4位
用法	動作の持続	活動動詞 (66.2%)	状態動詞 (29.8%)	達成動詞 (3.0%)	到達動詞 (1.0%)
	繰り返し	活動動詞 (70.2%)	状態動詞 (12.8%)	達成、到達動詞 (8.5%)	-
	結果の状態	到達動詞 (96.1%)	達成動詞 (3.9%)	-	-

注：表で示した順位は各用法で使用された4つの動詞タイプを使用率が高い順を並べたものである。

このうち、「動作の持続」の用法では4つの動詞タイプの中で「活動動詞」(使用率 66.2%) が最も多く用いられており、次いで「状態動詞」(使用率 29.8%)、「達成動詞」(使用率 3.0%)、「到達動詞」(使用率 1.0%) の順となる。また、「繰り返し」の用法

では「活動動詞」の使用率(70.2%)が最も高く、次いで「状態動詞」(使用率12.8%)となり、その次に「達成動詞」(使用率8.5%)と「到達動詞」(使用率8.5%)の2つの動詞タイプが同程度で続く。よって、文末において「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法では(26)(27)の「遊ぶ」のような「活動動詞」が最も多く用いられていると言える。

[活動動詞]

- (26) 「動作の持続」：男の子はある日、森の中でかわいがっていた犬と遊んでいました。(SCU-A-2-75-1-T2)
- (27) 「繰り返し」：それに好奇心がとても強い、毎日ワンちゃんの次郎と一緒に遊んでいる。(NTU-A-2-123-2-T8)

一方、「結果の状態」の用法で、使われている動詞は「到達動詞」と「達成動詞」のみであり、特に(28)の「残る」のような「到達動詞」の使用率が圧倒的に高かった。

[到達動詞]

- (28) 「結果の状態」：ゆうべ雨が降ってましたので、樹の葉の上にはまた少し水が残っています。(SCU-A-2-84-2-T8)

次に、連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の頻度を集計すると、表7-7のようになる。表7-7における頻度と比率は、連体修飾節における「動作の持続」などの各用法において「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの使用頻度と使用率を表す。

表 7-7 連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度 (n=40)

	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		適合度検定
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	77	0.865	4	0.045	0	0	8	0.090	$\chi^2(2)=113.551, p<.001$
結果の状態	0	0	2	0.061	31	0.939	0	0	$\chi^2(1)=25.485, p<.001$
パーフェクト	1	0.200	4	0.800	0	0	0	0	$\chi^2(1)=1.800, p=.180, ns$
繰り返し	4	0.667	1	0.167	1	0.167	0	0	$\chi^2(2)=3.000, p=.223, ns$
単なる状態	0	0	2	0.167	7	0.583	3	0.250	$\chi^2(2)=3.500, p=.174, ns$

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

連体修飾節において、「テイル」の各用法内における動詞タイプ別使用率の等しさを検証するために、カイ二乗分布を使った適合度検定を用法ごとに行った。その結果は、表 7-7 に示されるように「動作の持続」 [$\chi^2(2)=113.551, p<.001$] と「結果の状態」 [$\chi^2(1)=25.485, p<.001$] の 2 つの用法のみが有意となった。つまり、連体修飾節における「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の 3 つの用法では、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向がないことが示唆される。また、「動作の持続」と「結果の状態」の 2 つの用法における動詞タイプ別の使用率を見ると、「動作の持続」の用法では 4 つの動詞タイプのうち、(29) の「散歩する」のような「活動動詞」の使用率 (86.5%) が最も高いのに対し、「結果の状態」では (30) の「知る」のような「到達動詞」 (93.9%) が最も多く用いられていることがわかる。

[動作の持続]

- (29) 「活動動詞」：ある日、私は森に散歩している時、木の中に一つおかしいな穴が見付けました。(SCU-A-2-355-2-T8)

[結果の状態]

- (30) 「到達動詞」：その顔、私はよく知っています。私だけではなく、バンドの全

員もよく知っている人です。(SCU-A-2-96-1-T2)

以上からわかるように、「テイル」の5つの用法のうち、「動作の持続」の用法では「活動動詞」が、「結果の状態」の用法で「到達動詞」が最も多く用いられるという使用傾向は、文末と連体修飾節の構文的位置の違いに関係なく共通して見られる。また、「パーフェクト」と「単なる状態」の2つの用法では、文末と連体修飾節のいずれの位置においても特定の動詞タイプに偏る傾向は見られなかった。一方、「繰り返し」の用法では、文末の場合には4つの動詞タイプで「活動動詞」の使用率が最も高く、一方、連体修飾節の場合には特定の動詞タイプがより多く使用される傾向はなく、構文的位置の違いによる動詞タイプ別の使用率の差異が観察された。

7.3.3.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率

本節では、文末と連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の正用率を比較し、さらに学習者の日本語学習期間による影響を検証するために、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「日本語学習期間」、④「構文的位置」の4つの要因で「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。文末と連体修飾節の「構文的位置」を分類木の最初に来る変数として設定して分析した結果を、図7-12のデンドログラムに示す⁵。

図7-12を見ると、最初の変数として設定した文末と連体修飾節の両位置における「テイル」の正用率を比較すると、文末(ノード1, 正用率72.3%)よりも連体修飾節における「テイル」の正用率(ノード2, 正用率81.0%)が有意に高かった[$\chi^2(1)=4.592$, $p<.05$]。また、図7-12に示されているように、文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いによって現れる影響の要因が異なることがわかる。まず、文末において、図7-12に示されるように、「テイルの用法」、「日本語学習期間」、「動詞タイプ」の3要因とも

⁵ なお、本分析の相対リスクは24.4%なので、本分析が75.6%で正しく予測されていることが示された。

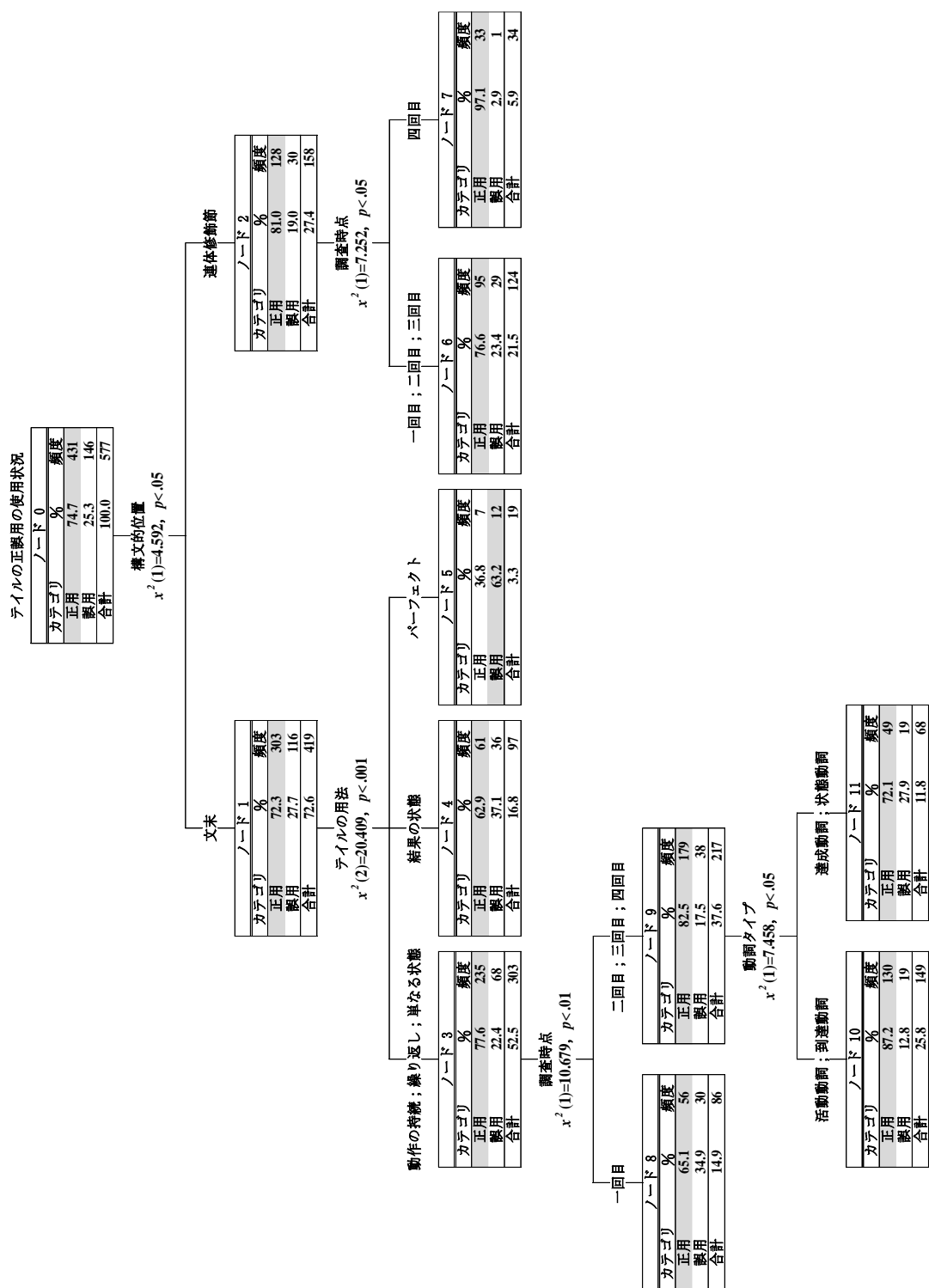


図7-12 文末と連続修飾節における「テイルの用法」、「動詞タイプ」、「動詞タイプ」の3つの要因の影響についての分類木分析の結果

学習者の「テイル」の正誤用に有意な影響力を持っている。このうち、「テイルの用法」の違いが学習者の「テイル」の正誤用に最も強く影響している[$x^2(2)=20.409, p<.001$]。

5つの用法の正用率を比べると、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法（ノード3, 正用率 77.6%）の正用率が高く、次いで「結果の状態」の用法（ノード4, 正用率 62.9%）、最後に「パーフェクト」（ノード5, 正用率 36.8%）の用法となる。また、ノード3の「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法の使用は、さらに学習者の「日本語学習期間」の違いによる影響を受けている [$\chi^2(1)=10.679, p<.01$]。4つの調査時点のうち、ノード9に含まれる「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点（正用率 82.5%）はノード8に含まれる「一回目」の調査時点（正用率 65.1%）よりも正用率が有意に高かった。そして、ノード9に含まれる「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では、「動詞タイプ」の違いによる影響が見られた [$\chi^2(1)=7.458, p<.05$]。ここでは、4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」（例（31））と「到達動詞」（例（32））との間、および「達成動詞」（例（33））と「状態動詞」（例（34））との間で正用率には明確な差異が見られなかった。しかし、ノード10の「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプ（正用率 87.2%）の正用率はノード11の「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプ（正用率 72.1%）より有意に高かった。

[繰り返し]

- (31) 「活動動詞」：「大学を卒業したら、失業者になる!」という話皆はよく聞いていますね。(SCU-A-3-93-4-T5)
- (32) 「到達動詞」：台北市の大安区にはバイクの専の道があるけれども、いつもたくさんの車がとまっている。(NTU-A-3-125-3-T7)
- (33) 「達成動詞」：近年、台湾の大学入試制度が教育部によって、時々変更されているんです。(SCU-A-3-87-3-T7)
- (34) 「状態動詞」：台湾のマスコミ文化はこういうもので、利益は正義より大切なことだと思われています。(SCU-A-3-80-4-T5)

一方、連体修飾節においては、「日本語学習期間」の影響しか認められなかった。つまり、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因は連体修飾節における学習者の「テイル」の正誤用に影響しないと言える。連体修飾節の場合、4つの調査時点のうち、「一回目」、「二回目」、「三回目」の3つの調査時点の間には「テイル」の正用率の差異が見られなかったが、これら3つの調査時点での正用率の平均値（ノード6, 正用率76.6%）は「四回目」（ノード7, 正用率97.1%）の調査時点よりも低い、という有意差が示された [$\chi^2(1)=7.252, p<.05$]。

7.4 文末と連体修飾節における「テイル」の誤用

本節では、文末と連体修飾節の両位置において学習者が犯す非使用、過剰使用、テンスの誤りに何らかの偏りがあるのか、またあるとすればいずれの傾向があるのかについて考察する。文末と連体修飾節における非使用、過剰使用、テンスの誤りの頻度を集計すると、その結果を表7-8に示す。

表7-8 文末と連体修飾節における「テイル」の誤用の内訳

構文的位置	非使用			過剰使用			テンスの誤り		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差
文末	68	0.586	1.5	41	0.353	0.2	7	0.060	-2.9
連体修飾節	13	0.433	-1.5	10	0.333	-0.2	7	0.233	2.9
合計	81	0.555	-	51	0.349	-	14	0.096	-

独立性の検定の結果 $\chi^2(2)=8.470, p<.05$

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

表7-8に示されるように、文末と連体修飾節の構文的位置に関係なく、学習者が犯す誤用では、(35) (36)のような非使用（文末58.6%；連体修飾節43.3%）の比率が最も高く、次いで(37) (38)のような過剰使用（文末35.3%；連体修飾節33.3%）、(39) (40)のようなテンスの誤り（文末6.0%；連体修飾節23.3%）となっている。

「非使用」:

(35) ある日、男の子と犬が山で遊びました (→遊んでいました)。(SCU-A-2-64-2-T8)

(36) ハルは石を下りたい (と思った) 時、手を握る (→握っていた) 枝は不思議に動きました。(SCU-A-2-77-2-T8)

「過剰使用」:

(37) 最近、国はお金が足りないので、取り締まることを激しくさせたのだ。違法駐車があきらかに減っていた (→減った)。(SCU-A-3-92-3-T7)

(38) 角がつかまれたので、驚いて怒っている (→怒った) 鹿は、突然立ちあがった。(NTU-A-2-117-2-T8)

「テンス誤り」:

(39) 毎日楽しい生活を送っています (→送っていました)。楽しい思い出やおもしろい思い出やいろいろな思い出が造った (できた)。(SCU-A-2-104-1-T2)

(40) 草を食べている (→食べていた) 鹿は立って、男の子を頭においてになりました。(SCU-A-2-57-2-T8)

また、文末と連体修飾節の両位置において学習者が犯す非使用、過剰使用、テンスの誤りに何らかの偏りがあるのか考察するために、両位置におけるこれらの誤用の頻度を独立性の検定によって分析した結果が有意となった [$\chi^2(2)=8.470, p<.05$]。このことから、文末と連体修飾節の構文的位置の違いが、学習者が犯す誤用の種類に影響していることがわかった。さらに、文末と連体修飾節における非使用、過剰使用、テンスの誤りの調整済み残差を見ると、非使用および過剰使用に比べて、テンスの誤り ($z=\pm 3.1$) では文末と連体修飾節の比率に有意な偏りがあることが示され、学習者は

文末 (6.0%) よりも連体修飾節 (23.3%) でテンスの誤りを起こしやすいことがわかった。連体修飾節におけるテンスの誤りの誤用例を見ると、いずれも学習者が1つの場面の中にある複数の出来事の継起的時間関係を表す際、連体修飾節で表された動作の継続が途切れた、という場合には (41) (42) のように「テイタ形」を使わずに「テイル形」を使ってしまっている。このように、連体修飾節における学習者の「テイル」の習熟度は文末におけるものよりも高かったが、連体修飾節におけるテンスの誤りの比率は文末におけるものよりも高かったことから、台湾人日本語学習者にとっては、連体修飾節におけるテンスの習得のほうがアスペクトの習得よりも困難であると推測できる。ただし、この点については「非完成相」(テイル形・テイタ形)のみならず、「完成相」(ル形・タ形)の使用状況に関しても詳細な検討が必要である。

「テンスの誤り」:

- (41) その時、直樹ちゃんが捜している (→捜していた) 木の穴の中からフクロウが一匹出てきました。(SCU-A-2-75-2-T8)
- (42) 藪の中で休んでいる (→休んでいた) 鹿は坊やに角を握られて、とても怒っていて、坊やを自分の頭の上に乗せ、崖の方へ走っていました。(SCU-A-2-87-2-T8)

最後に、連体修飾節におけるテンス・アスペクト形式の振舞いは文末の場合と異なる。文末の場合、「テイル形」のみが容認されるが、連体修飾節の場合「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法では「テイル形」は「ル形」に、「結果の状態」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3つの用法では「テイル形」を「タ形」に入れ替えることが可能である。そのため、文末と連体修飾節における「テイル形」の5つの用法では、学習者が犯す誤用に差異があるかどうかについて考察する。文末と連体修飾節における「テイル形」の用法別の正用、非使用、過剰使用、テンスの誤りの頻度を

集計すると、その結果を表 7-9 に示す。

表 7-9 文末と連体修飾節における「テイル形」の用法別の正誤用の内訳

用法	構文的 位置	正用		誤用					
		頻度	比率	非使用		過剰使用		テンスの誤り	
				頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
動作の持続	文末	110	0.791	10	0.072	19	0.137	0	0
	連体節	55	0.887	2	0.032	5	0.081	0	0
結果の状態	文末	52	0.712	15	0.205	6	0.082	0	0
	連体節	19	0.905	0	0	1	0.048	1	0.048
パーフェクト	文末	5	0.357	7	0.500	2	0.143	0	0
	連体節	4	0.800	1	0.200	0	0	0	0
繰り返す	文末	38	0.760	11	0.220	1	0.020	0	0
	連体節	5	1.000	0	0	0	0	0	0
単なる状態	文末	18	0.900	2	0.100	0	0	0	0
	連体節	11	0.786	3	0.150	0	0	0	0
合計	文末	223	0.753	45	0.152	28	0.095	0	0
	連体節	94	0.879	6	0.056	6	0.056	1	0.009

表 7-9 を見ると、「テイル形」の 5 つの用法のうち、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返す」の 3 つの用法において、文末よりも連体修飾節では非使用率が大幅に低くなり、正用率が上がっていることが観察された。ただし、このうち連体修飾節における「パーフェクト」と「繰り返す」の 2 つの用法の正誤用は合計でそれぞれ 5 例ずつしかないため、文末での使用との差異について論じるのは難しいと思われる。一方、「動作の持続」と「単なる状態」の 2 つの用法では、構文的位置の違いによる誤用の差異が見られなかった。

7.5 考察

7.5.1 文末と連体修飾節における「テイル」の習得状況について

以上、文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の習得状況について分析した結果、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる学習者の「テイル」の習得状況には明確な差異が現れ、文末（図 7-6 のノード 1，正用率 72.3%）よりも連体修飾節（図 7-6 のノード 2，正用率 81.0%）における「テイル」の正用率が有意に高いことが観察

された。このことから、台湾人日本語学習者にとっては文末よりも連体修飾節における「テイル」のほうが習得しやすいことがわかった。特に、「四回目」の調査時点では連体修飾節の「テイル」が97.1% (図7-6のノード7) という高い正用率で用いられており、かなり習得できていると言える。また、学習者の日本語学習期間の違いによる両位置の「テイル」の正用率の変化を見ると、文末における学習者の「テイル」の習得は「一回目」の調査時点(2年生前期で学習期間1年)から「二回目」の調査時点(2年生後期で学習期間1年半)まではかなり進んでいたが、それ以降「テイル」の習得は止まり、たとえ学習者の学年が上がってもそれ以上進んでいない。一方、連体修飾節での学習者の「テイル」の習得は、「一回目」の調査時点から「三回目」の調査時点(3年生前期で学習期間2年)までは顕著な変化はあまり見られなかったが、「四回目」の調査時点(3年生後期で学習期間2年半)では初めて顕著な伸びが見られた。学習者の日本語学習期間によって、文末と連体修飾節における「テイル」の習得状況には明確な差異が現れていると言える。ただし、「一回目」の調査時点では、連体修飾節における「テイル」の正用率がすでに89.5% (表7-2) となっているのに対し、文末における「テイル」の正用率はわずか60.2% (表7-2) であり、両者間には明確な差が見られた。そのため、連体修飾節における学習者の「テイル」の習得は、「一回目」の調査時点以降伸びるのには文末においてよりも時間がかかると考えられる。

7.5.2 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の習得状況について

続いて、文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の用法別の習得状況について考察する。まず、文末と連体修飾節の両位置における「テイル」の用法別の使用率を分析した結果、文末と連体修飾節のいずれの位置においても、学習者の「テイル」の使用の半分以上は「動作の持続」の用法(表7-1, 文末での使用率56.4%; 連体修飾節での使用率61.4%)に集中しているのに対し、「パーフェクト」の用法の使用率(表7-1, 文末2.8%; 連体修飾節3.4%)は各用法の中で最も低い、という共通点が観察さ

れた。

また、「テイルの用法」と「日本語学習期間」の2つの要因による文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の正用率への影響について分析した結果、文末ではこの2つの要因とも「テイル」の使用に有意な影響力を持っているのに対し、連体修飾節では学習者の「日本語学習期間」による影響しか見られなかった。文末の場合、この2要因のうち、「テイル」の用法の違いによる影響は学習者の日本語学習期間よりも強く、学習者の「テイル」の正誤用に影響する主要な要因であった。5つの用法のうち、台湾人日本語学習者にとって習得しやすいのは「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法であり、続いて「結果の状態」の用法、「パーフェクト」の用法が最も習得しにくいことが明らかになった。「動作の持続」が「結果の状態」よりも習得されやすく、「パーフェクト」が各用法の中で最も習得困難であるという習得難易度は、先行研究（許 1997、2000、2002；魚住 1998；菅谷 2004b；崔 2011）に一致する。また、文末における「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3用法では、さらに学習者の日本語学習期間による影響が見られ、「二回目」の調査時点（2年生後期で学習期間1年半）でこの3つの用法の習得に顕著な伸びが見られた。この3つの用法に対し、文末における「結果の状態」と「パーフェクト」の2つの用法の習得は、学習者の日本語学習期間に関わらず調査時期を通じてあまり伸びていない。

一方、連体修飾節においては「テイル」の用法の影響が見られず、学習者の日本語学習期間による影響のみが認められた。言い換えれば、「テイル」の用法の違いは連体修飾節における学習者の「テイル」の使用に影響せず、5つの用法間の正用率に明確な差異はないと言える。以上から、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、「テイル」の用法間の習得難易度が異なることが明らかになった。

7.5.3 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について

文末と連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について、まず、

両位置における動詞タイプ別の使用率を分析した結果、文末と連体修飾節の構文的位置の違いには関係なく、学習者は「到達動詞」（表 7-3, 文末での使用率 25.4% ; 連体修飾節での使用率 26.9%）よりも「活動動詞」（表 7-3, 文末での使用率 49.3% ; 連体修飾節での使用率 56.6%）に「テイル」を結びつけやすいという結果が得られた。このように、従来文末に関して摘まれてきた「テイル」と「活動動詞」との結び付きが強い、という「アスペクト仮説」の普遍性は連体修飾節でも検証できることが判明した。

また、「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2つの要因による文末と連体修飾節における学習者の「テイル」の正誤用への影響について分析した結果、両位置のいずれにおいても、「動詞タイプ」よりも「日本語学習期間」のほうが学習者の「テイル」の使用により強く影響していることが判明した。文末の場合、4つの調査時点のうち、「一回目」の調査時点では4つの動詞タイプの使用に明確な差異はなかったが、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では、「活動動詞」（図 7-11 のノード7, 正用率 85.1%）は「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプ（図 7-11 のノード 8, 正用率 70.0%）よりも正用率が有意に高かった。このことから、文末における学習者の「テイル」の使用は動詞そのものの持つ語彙的アスペクトの影響を受けており、「テイル」は限界動詞である「達成動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプよりも非限界動詞である「活動動詞」により正確に用いられていることがわかった。

一方、連体修飾節においては、動詞タイプの影響が見られず、学習者の日本語学習期間による影響のみが認められた。つまり、動詞タイプの違いは連体修飾節における学習者の「テイル」の使用に影響せず、4つの動詞タイプ間の正用率にあまり差はないことがわかった。すなわち、連体修飾節における動詞タイプ別の「テイル」の習得状況が文末の場合と異なることが明らかになった。

7.5.4 文末と連体修飾節における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の関係

最後に、文末と連体修飾節における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響について分析した結果、図 7-12 のデンドログラムに示されるように、文末においては「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因とも学習者の「テイル」の習得に有意な影響力を持っていた。一方、連体修飾節において、「テイルの用法」と「動詞タイプ」のいずれの要因による影響も認められず、文末の場合と異なる結果となった。これは、学習者の連体修飾節における「テイル」の習得（図 7-12 のノード 2，正用率 81.0%）が文末（図 7-12 のノード 1，正用率 72.3%）よりも進んでいるため、連体修飾節における学習者の「テイル」の使用は「テイル」の用法と動詞タイプの違いから受ける影響が弱くなっているからではないかと考えられる。

また、文末の「テイル」の習得における「テイルの用法」、「動詞タイプ」、「日本語学習期間」の3つの要因の影響を見ると、文末における「テイル」の習得に最も強く影響する要因は「テイルの用法」であった。5つの用法のうち、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法が習得されやすく、「結果の状態」の用法が続き、「パーフェクト」の用法が最も習得されにくい。このうち、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法では「日本語学習期間」の影響が見られ、4つの調査時点の中で「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点（図 7-12 のノード 9，正用率 82.5%）では「一回目」の調査時点（図 7-12 のノード 8，正用率 65.1%）よりも正用率が高かった。そして、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点ではさらに「動詞タイプ」の違いが影響していた。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの使用（図 7-12 のノード 10，正用率 87.2%）に動詞に内在する「限界性」の有無による影響は見られず、いずれも「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプ（図 7-12 のノード 11，正用率 72.1%）より高い正用率で用いられていた。「活動動詞」と「到達動詞」の間で正用率の差異が見られなかったことは、「テイル」の用法を区別せず、文末で「テイル」が使用される動詞タイプ別正用率

の分析結果とは異なる使用状況であった。前節で言及したように、「テイル」の用法を区別せず文末で「テイル」が使用された動詞タイプ別正用率の分析では、「活動動詞」の正用率が「到達動詞」より有意に高いことが示された⁶。しかし、文末における「テイル」の各用法に使用された動詞タイプ別正用率の分析結果から、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法では、「活動動詞」と「到達動詞」の間で正用率の差異がなくなり、いずれも高い正用率で用いられており、学習者の「テイル」の使用に対して、動詞に内在する「限界性」の有無による影響力が、用法によって変わっていることが判明した。文末の場合、5つの用法の中で習得されやすい「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法に関しては、「限界性」を持つ「到達動詞」でも、「限界性」を持たない「活動動詞」と同様に高い正用率で用いられていた。

一方、文末における「結果の状態」と「パーフェクト」では、動詞タイプの違いによる影響は見られなかった。このうち、「パーフェクト」の用法では正用率がわずかに36.8% (図7-12, ノード5) で、あまり習得できておらず、この用法における動詞タイプ間に正用率の差異は見られなかった。つまり、各用法の中で最も習得が困難である「パーフェクト」の用法で使用された動詞は、動詞のもつ語彙的アスペクトの特徴に関わらず、いずれも正用率が低かった。また、「結果の状態」の用法では、使われている動詞は「到達動詞」(表7-5, 使用率96.1%)に集中しており、他の動詞タイプの使用が殆どなく、動詞タイプの違いによる影響が見られなかった。

7.6 まとめ

本章では、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、台湾人日本語学習者の①「テイル」の用法別の習得状況、②動詞タイプ別の「テイル」の習得状況、③「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況にいかなる差異があるのかについて考察した。結果を以下の3点に集約される。

⁶ 詳細な分析結果について本章7.3.2.3節を参照。

1. 学習者の「テイル」の用法別の習得状況について、文末に関して5つの用法のうち習得されやすいのは「動作の持続」、「単なる状態」、「繰り返し」の3つの用法であり、次いで「結果の状態」の用法、「パーフェクト」の用法が最も習得されにくかった。一方、連体修飾節における「テイル」の5つの用法の正用率に明確な差異はなく、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、「テイル」の用法別の習得難易度は異なる。
2. 学習者の動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について、文末に関しては、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」の正用率が最も高く、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つは同程度の正用率であった。一方、連体修飾節に関しては4つの動詞タイプの正用率に明確な差異はなかった。このように、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、動詞タイプ別の「テイル」の使用状況は異なると言える。
3. 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況について、文末において「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法では、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの正用率は「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプよりも高かった。一方、連体修飾節では「テイルの用法」と「動詞タイプ」のいずれの要因による影響も見られなかった。

第8章 時制形式による「テイル」の習得状況

8.1 はじめに

前章では文末と連体修飾節の「構文的位置」の違いによって、学習者の「テイル」の習得状況にどのような差異が生じるのかについて考察した。結果として、学習者にとって文末よりも連体修飾節における「テイル」のほうが習得しやすいことがわかった。本章では、学習者の「テイル」の習得状況について「テイル形」の場合と「テイタ形」の場合の違いを考察する。従来の「テイル」の習得に関する研究は、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる影響を議論したものには Shirai & Kurono (1998)、Shirai (2002b)、小山 (2004)、崔 (2009、2011)、簡 (2012) がある。しかし、このうち Shirai (2002b) では「テイル形」と「テイタ形」が使用された動詞タイプの割合しか明示されておらず、正誤用については議論されていない。一方、Shirai & Kurono (1998)、小山 (2004)、崔 (2009) では「動作の持続」と「結果の状態」の2つの用法の比較のみ、簡 (2012) では「パーフェクト」の用法の議論のみに限られており、他の用法との比較検討が欠如しているため、5つの用法全体を比較して議論する必要があると考える。このように、「テイル」の習得における時制形式の違いについての議論はまだ不十分であり、より詳細な検討が必要である。

そこで、本章では学習者の「テイル形」と「テイタ形」の習得状況を考察し、「時制形式」の違いによって「テイル」の用法別の習得状況、および動詞タイプ別の「テイル」の習得状況にどのような差異が生じるのかを明らかにしたい。本章の研究目的として以下の3点を設定して考察を進める。

1. 「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる「テイル」の用法別の習得状況について明らかにする。

2. 「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について明らかにする。
3. 「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる「テイル」の用法と動詞タイプの両者を合わせた使用状況について明らかにする。

8.2 調査の概要

8.2.1 調査対象者

本章では、前章と同様に「台湾人日本語学習者コーパス(CTLJ)」¹の中から2年間(2006学年度から2007学年度にかけて)で4回分(半年ごとに1回)の作文が揃っている、40名の学習者による計160篇の作文データを調査対象として分析を行った。

8.2.2 分析手順

以下の手順で分析を行った。

- ① 作文の中で「テイル」が使用されたところ、および使用すべきところを抽出した。
- ② ①を前後の文脈によって「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分類した(「テイル」の用法の分類基準は2.3節で提示した基準に従うこととする)。
- ③ ②の5つの用法で使用された動詞を「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプに分類した(動詞タイプの分類基準は2.4節の説明に従う)。
- ④ ③を「テイル形」の場合と「テイタ形」の場合に二分した。
- ⑤ 4つの調査時点に現れた②～④の使用頻度、および正用と誤用²の頻度を集計

¹ CTLJの詳細および検索方法について第4章4.4節と4.5節を参照。

² 「テイル」の正用と誤用の判断基準について第4章4.2節を参照。

し、延べ語数によって各比率を算出した。

上記をもとに、本章では学習者の「テイル形」と「テイタ形」の習得状況について、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「日本語学習期間」の3つの要因がどのように影響しているのかに焦点を置く。「テイル」の使用率（正用、過剰使用、テンスの誤り）と正用率の2つの側面から考察することとし、以下の2つの手法で分析を行った。第一に、「テイル形」と「テイタ形」の「時制形式」の違いによって「テイル」の用法別の使用率、および動詞タイプ別の「テイル」の使用率にどのような差異が生じるのかを、カイ二乗分布を用いた「適合度検定」と「独立性の検定」で検討した。さらに、独立性の検定の結果、有意であった場合には、具体的にどの用法、或いは動詞タイプの使用に有意な偏りがあるのか判断するために、「残差分析」を行った。第二に、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③学習者の「日本語学習期間」の3つの要因が、学習者の「テイル形」と「テイタ形」の習得にどのように影響しているのかを検証するために、この3つの要因で「テイル形」と「テイタ形」における正用と誤用の頻度を予測する「分類木分析」で検討した。

8.3 分析結果

8.3.1 日本語学習期間による「テイル形」と「テイタ形」の習得状況

本節では、学習者の日本語学習期間の長さによって、「テイル形」と「テイタ形」の習得状況がどのように変化するかについて考察する。学習者の作文データから抜粋した「テイル」の正用と誤用のうち、「テイル形」の用例は403例で全体の69.8%、「テイタ形」の用例は174例で全体の30.2%を占めていた。このうち、4つの調査時点における「テイル形」と「テイタ形」の正用と誤用の頻度を集計すると、表8-1のようになる。

表8-1 日本語学習期間の違いによる「テイル形」と「テイタ形」の正誤用の頻度と比率 ($n=40$)

調査時点	テイル形						テイタ形					
	正用			誤用			正用			誤用		
	頻度	正用率	調整済み残差	頻度	誤用率	調整済み残差	頻度	正用率	調整済み残差	頻度	誤用率	調整済み残差
一回目	51	0.662	-3.0	26	0.338	3.0	37	0.617	-	23	0.383	-
二回目	81	0.810	0.7	19	0.190	-0.7	67	0.698	-	29	0.302	-
三回目	76	0.784	-0.1	21	0.216	0.1	3	0.375	-	5	0.625	-
四回目	109	0.845	2.0	20	0.155	-2.0	7	0.700	-	3	0.300	-
合計	317	0.787	-	86	0.213	-	114	0.655	-	60	0.345	-
独立性の検定の結果	$\chi^2(3)=10.032, p<.05$						$\chi^2(3)=4.039, p=.257, ns$					

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

日本語学習期間の違いによる学習者の「テイル形」の正誤用への影響の有無を検証するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った結果は有意となった [$\chi^2(3)=10.032, p<.05$]。つまり、学習者の「テイル形」の正用率には日本語学習期間の違いによる明確な差異があることが示唆されている。さらに、具体的に4つの調査時点の間で正用率にいかなる差異があるのかを検証するために、各調査時点における正用と誤用の頻度による残差分析を行った。その結果、4つの調査時点のうち「四回目」の調査時点の正用率（84.5%, $z=2.0$ ）が最も高く、次に「二回目」（81.0%, $z=0.7$ ）と「三回目」（78.4%, $z=-0.1$ ）の2つの調査時点が同程度で続く。「一回目」の調査時点（66.2%, $z=-3.0$ ）の正用率が最も低かった。このことから、「二回目」と「四回目」の2つの調査時点では学習者の「テイル形」の習得に顕著な伸びがあると言える。

一方、「テイタ形」の使用では、4つの調査時点における正用と誤用の頻度を独立性の検定によって分析した結果、有意差が認められなかった [$\chi^2(3)=4.039, p=.257, ns$]。つまり、学習者の「テイタ形」の習得は調査時期を通じてあまり進んでいないと言える。4つの調査時点のうち、「三回目」の調査時点では正用率はわずか37.5%とかなり低かったが、その用例数（8例）が少ないために差について論じるのは難しいと思われる。

8.3.2 「テイル」の用法別の習得状況

続いて、本節では「テイル形」と「テイタ形」の「時制形式」の違いによる学習者の「テイル」の用法別の習得状況の差異について、以下の手順で考察していく。

- ① 時制形式の違いによる「テイル」の用法別の使用率の差異を考察する。
- ② 時制形式の違いによる「テイル」の用法別の正用率の差異を考察する。
- ③ 時制形式の違いによる「テイル」の用法間の正用率の差異を考察する。

このうち、①については8.3.2.1節、②については8.3.2.2節、③については8.3.2.3節で論じる。

8.3.2.1 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用率

本節では、学習者の「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用率にどのような差異があるのかについて考察する。なお、作文データから取り上げた「テイタ形」の用例が少ないため、ここでは「テイル形」と「テイタ形」の使用において、日本語学習期間による用法別の使用率の変化については考察しないこととする。学習者の「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用頻度を集計すると、表8-2のようになる。

表8-2 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用頻度 (n=40)

時制形式	動作の持続			結果の状態			パーフェクト			繰り返し			単なる状態		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差
テイル形	198	0.544	-2.6	81	0.223	0.1	11	0.030	0.05	45	0.124	2.0	29	0.080	2.6
テイタ形	89	0.674	2.6	29	0.220	-0.1	4	0.030	-0.05	8	0.061	-2.0	2	0.015	-2.6
合計	287	0.579	-	110	0.222	-	15	0.030	-	53	0.107	-	31	0.063	-
「テイル形」における適合度検定の結果						$\chi^2(4)=305.670, p<.001$									
「テイタ形」における適合度検定の結果						$\chi^2(4)=203.076, p<.001$									
独立性の検定の結果						$\chi^2(4)=12.898, p<.05$									

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

まず、学習者の「テイル形」と「テイタ形」の使用が、5つの用法のいずれかに偏っているかどうかを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果はいずれも有意となり、「テイル形」 $[x^2(4)=305.670, p<.001]$ 、「テイタ形」 $[x^2(4)=203.076, p<.001]$ の両方の使用には、ともにある特定の用法に偏って用いられる傾向があることが示された。「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用率を見ると、「テイル形」での使用率は、高い順に①「動作の持続」(54.4%)、①「結果の状態」(22.3%)、③「繰り返し」(12.4%)、④「単なる状態」(8.0%)、⑤「パーフェクト」(3.0%)となる。一方、「テイタ形」での使用率は、高い順に①「動作の持続」(67.4%)、②「結果の状態」(22.0%)、③「繰り返し」(6.1%)、④「パーフェクト」(3.0%)、⑤「単なる状態」(1.5%)となる。このように、時制形式の違いに関係なく学習者の「テイル」の使用の半数以上は、例示した(1)(2)のような「動作の持続」の用法に集中していることがわかる。

「動作の持続」:

- (1) 兄さんは今大学院で動画デザインを勉強しています。(SCU-A-3-104-3-T7)
- (2) これは私の初めてのコンサートですから、私は凄く緊張していました。
(SCU-A-2-84-1-T2)

また、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いが日本語学習者の「テイル」の用法別の使用率に影響しているかどうかを検証するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った結果は有意となった $[x^2(4)=12.898, p<.05]$ 。つまり、時制形式の違いによって、学習者の「テイル」の用法別の使用率に明確な差異があることがわかった。さらに、具体的にどの用法で「テイル形」と「テイタ形」の使用率に有意な偏りがあるのかを考察するために、「テイル形」と「テイタ形」における各用法の使用頻度を残差分析によって検証した。その結果、「テイル」の5つの用法のうち、調整済み残差の絶対値が1.96よりも大きいものは「動作の持続」($z=\pm 2.6$)、「繰り返し」($z=$

±2.0)、「単なる状態」(z= ±2.6)の3つの用法であった。このことから、「結果の状態」と「パーフェクト」の2つの用法に比べて、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法では「テイル形」と「テイタ形」の使用率に有意な偏りがあることがわかった。このうち、「動作の持続」の用法では「テイタ形」(使用率 67.4%)のほうが「テイル形」(使用率 54.4%)よりも使用率が比較的高かった。

一方、「繰り返し」と「単なる状態」の2つの用法では(3)(4)のような「テイル形」(「繰り返し」の使用率 12.4%;「単なる状態」の使用率 8.0%)のほうが(5)(6)のような「テイタ形」(「繰り返し」の使用率 6.1%;「単なる状態」の使用率 1.5%)よりも使用率が比較的高く、「時制形式」の違いによる使用率の差異が現れていた。

[テイル形]

- (3) 「繰り返し」:人間性そのものはただ悪い性格ばかりではなく、もともとは良い本性も持っていると考えられている。(NTU-A-3-121-4-T5)
- (4) 「単なる状態」:そして私立大学と国立大学は待遇や給料も全然違っている。(SCU-A-3-85-4-T5)

[テイル形]

- (5) 「繰り返し」:今年の夏はずっと精一杯野球を練習していました。(SCU-A-2-81-1-T2)
- (6) 「単なる状態」:でも、緑ちゃんは悲しい顔をしていました。(SCU-A-2-97-2-T8)

以上からわかるように、学習者の「テイタ形」の使用は「テイル形」の場合より「テイル」の基本的意味である「動作の持続」の用法に集中していたかわりに、派生的意味である「繰り返し」と「単なる状態」の2つの用法の使用率が「テイル形」の場合より低くなっていた。

8.3.2.2 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正用率の差異

本節では、時制形式の違いによる「テイル」の各用法の正用率の差異を考察する。4つの調査時点において、「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正用と誤用の頻度を集計すると、表8-3のようになる。

表8-3 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正誤用の頻度 (n=40)

調査時点	用法	テイル形				テイタ形			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	動作の持続	30	0.714	12	0.286	25	0.658	13	0.342
	結果の状態	13	0.650	7	0.350	4	0.444	5	0.556
	パーフェクト	1	0.167	5	0.833	2	1.000	0	0
	繰り返し	5	0.714	2	0.286	6	0.600	4	0.400
	単なる状態	2	1.000	0	0	0	0	1	1.000
	合計	51	0.662	26	0.338	37	0.617	23	0.383
二回目	動作の持続	61	0.824	13	0.176	54	0.783	15	0.217
	結果の状態	11	0.733	4	0.267	12	0.480	13	0.520
	パーフェクト	0	0	0	0	0	0	1	1.000
	繰り返し	1	1.000	0	0	0	0	0	0
	単なる状態	8	0.800	2	0.200	1	1.000	0	0
	合計	81	0.810	19	0.190	67	0.698	29	0.302
三回目	動作の持続	25	0.806	6	0.194	2	0.667	1	0.333
	結果の状態	23	0.793	6	0.207	0	0	1	1.000
	パーフェクト	4	0.667	2	0.333	0	0	1	1.000
	繰り返し	16	0.762	5	0.238	1	0.333	2	0.667
	単なる状態	8	0.800	2	0.200	0	0	0	0
	合計	76	0.784	21	0.216	3	0.375	5	0.625
四回目	動作の持続	49	0.907	5	0.093	3	1.000	0	0
	結果の状態	24	0.800	6	0.200	3	1.000	0	0
	パーフェクト	4	0.571	3	0.429	0	0	3	1.000
	繰り返し	21	0.808	5	0.192	0	0	0	0
	単なる状態	11	0.917	1	0.083	1	1.000	0	0
	合計	109	0.845	20	0.155	7	0.700	3	0.300

表8-3に示されるように各調査時点における「テイル形」（一回目 66.2%；二回目 81.0%；三回目 78.4%；四回目 84.5%）の平均正用率と「テイタ形」（一回目 61.7%；二回目 69.8%；三回目 37.5%；四回目 70.0%）の平均正用率を比較すると、いずれの調査時点においても、「テイル形」のほうが「テイタ形」よりも正用率が高かった。さらに、「テイル形」の平均正用率は「二回目」の調査時点ではすでに7割を超えているのに対し、「テイタ形」の平均正用率は調査時期を通じて7割を超えておらず、「テイ

ル形」の場合とは明確な差異が見られた。これらのことから、学習者の「テイタ形」の習得が「テイル形」の習得よりも遅れていることがわかった。

また、表 8-3 で提示された「テイル形」と「テイタ形」の正用率を基に、「テイル」の用法ごとに各調査時点における正用率を折れ線グラフで表示すると、図 8-1 から図 8-5 のようになる。以下、「テイル」の用法別に「テイル形」と「テイタ形」における正用率の差異について順次比較、検証していく。

まず、図 8-1 は表 8-3 の「一回目」から「四回目」の調査時点までの「テイル形」と「テイタ形」における「動作の持続」の用法の正用率を図示したものである。

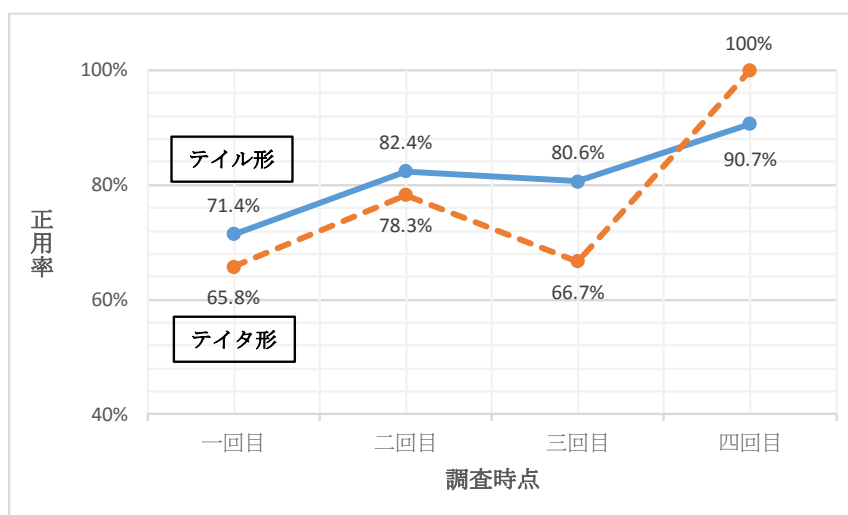


図 8-1 「テイル形」と「テイタ形」における「動作の持続」の正用率の推移

「テイル形」の場合には「一回目」(正用率 71.4%) から「二回目」の調査時点(正用率 82.4%)にかけては正用率に顕著な伸びが見られた。「三回目」の調査時点では正用率(80.6%)は少し下がるものの、「二回目」の調査時点と大きな差は見られなかった。その後、「四回目」の調査時点では正用率が再び上がって 90.7%に達している。一方、「テイタ形」の場合には「一回目」(正用率 65.8%)と「二回目」の調査時点(正用率 78.3%)の間で正用率に顕著な伸びが見られた。「三回目」の調査時点では正用率が 66.7%まで下がっているが、「四回目」の調査時点では正用率が再び上昇して 100%

に達している。また、各調査時点における「動作の持続」の「テイル形」と「テイタ形」の正用率を比較すると、図8-1に示されているように、4つの調査の時点のうち、「四回目」の調査時点を除けば、いずれの調査時点においても「テイル形」の正用率は「テイタ形」よりも高いことが観察された。

次の図8-2は表8-3の「一回目」から「四回目」の調査時点までの「テイル形」と「テイタ形」における「結果の状態」の用法の正用率を図示したものである。

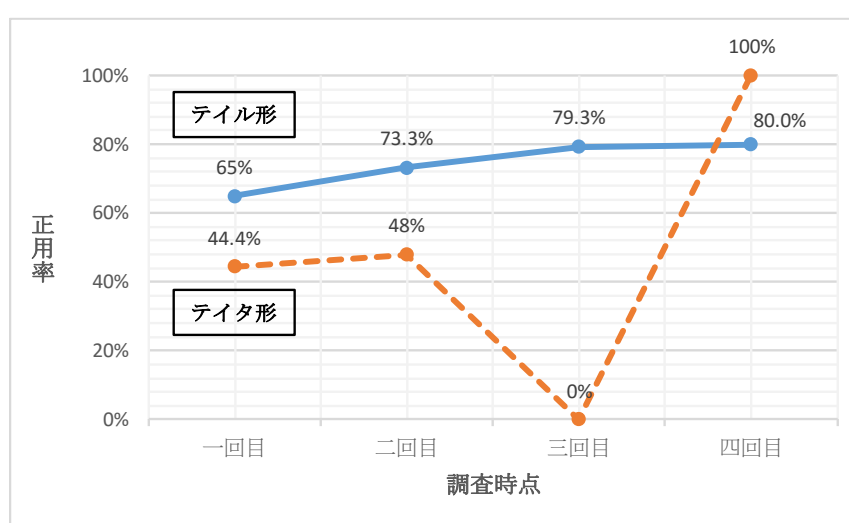


図8-2 「テイル形」と「テイタ形」における「結果の状態」の正用率の推移

図8-2に示されるように「テイル形」の場合、「一回目」(正用率65.0%)から「三回目」の調査時点(正用率79.3%)にかけて正用率は右肩上がりに伸びている。「四回目」の調査時点(正用率80.0%)では正用率の上昇が止まり、三回目の調査時点と明確な差異は見られなかった。一方、「テイタ形」の場合、「一回目」(正用率44.4%)と「二回目」の調査時点(正用率48.0%)の間に正用率の差異はあまり見られなかった。その後、「三回目」と「四回目」の2つの調査点では、正用例と誤用例がそれぞれ1例しかないために、「三回目」の調査時点では正用率が0%となり、「四回目」の調査時点では正用率は100%となる。

続いて、図8-3は表8-3の「一回目」から「四回目」の調査時点までの「テイル形」

と「テイタ形」における「パーフェクト」の用法の正用率を図示したものである。

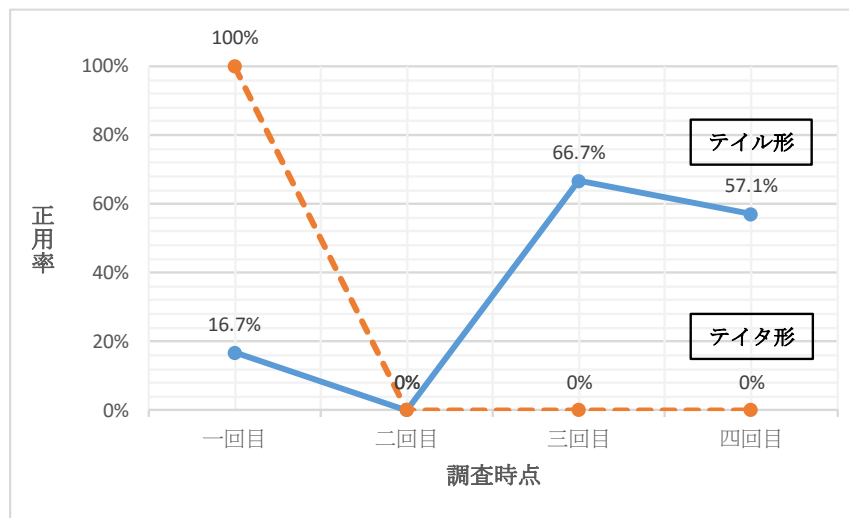


図8-3 「テイル形」と「テイタ形」における「パーフェクト」の正用率の推移

「テイル形」の場合、「一回目」の調査時点では正用率は16.7%と低い。「二回目」の調査時点で「パーフェクト」の使用はなく、正用率が0%となる。その後、「三回目」の調査時点では正用率が大幅に上がり66.7%に達するが、「四回目」の調査時点では正用率が57.1%にまで下がる。一方、「テイタ形」の場合、「一回目」の調査時点では「パーフェクト」の誤用はなく、正用率が100%となっているが、この調査時点で使用された例はわずか2例しかなかった。この後、「二回目」から「四回目」の調査時点にかけては「パーフェクト」の正用はなく、正用率はいずれも0%となる。ただし、この3つの調査時点のうち、「二回目」と「三回目」の調査時点では前掲した表8-3に示されたように誤用例はそれぞれ1例しかなかった。

図8-4は表8-3の「一回目」から「四回目」の調査時点までの「テイル形」と「テイタ形」における「繰り返し」の用法の正用率を図示したものである。

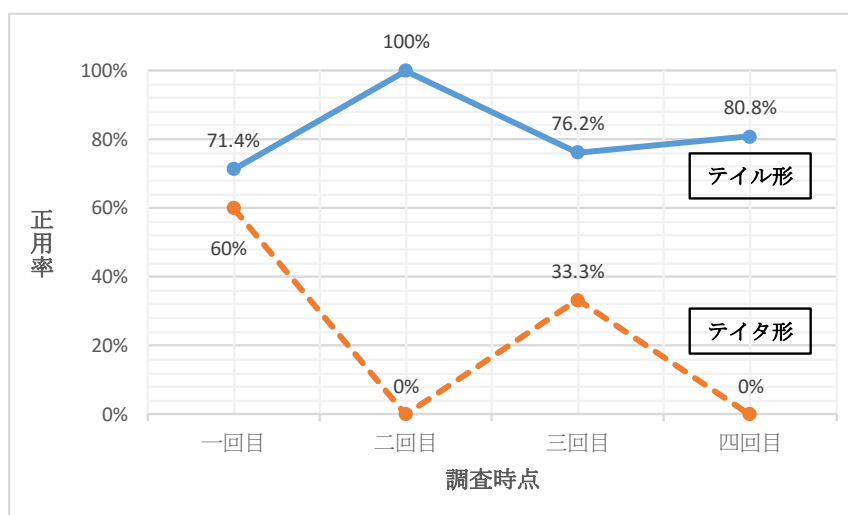


図8-4 「テイル形」と「テイタ形」における「繰り返し」の正用率の推移

「テイル形」の場合では「一回目」の調査時点（71.4%）から「二回目」の調査時点（正用率 100%）にかけて正用率が大幅に上がっている。ただし、この調査時点では「繰り返し」の使用は1例しかなく、この2つの調査時点で観察された正用率の伸びは日本語学習期間が長くなるにつれて上がっているとは言えない。その後、「三回目」と「四回目」の2つの調査時点では正用率は8割前後を維持しており、あまり大きな変化は見られなかった。一方、「テイタ形」の場合、4つの調査時点のうち「二回目」と「四回目」の調査時点では「繰り返し」の使用はなく、正用率はいずれも0%となる。残る「一回目」（60.0%）と「三回目」（33.3%）の調査時点ではいずれも正用率は6割を超えていない。また、各調査時点における「テイル形」と「テイタ形」の正用率を比較すると、「一回目」から「四回目」の調査時点まで「テイル形」の正用率は一貫して「テイタ形」を上回っていた。このことから、「繰り返し」の用法では「テイル形」の習得が「テイタ形」の習得よりも容易であることがわかる。

最後に、図8-5は表8-3の「一回目」から「四回目」の調査時点までの「テイル形」と「テイタ形」における「単なる状態」の用法の正用率を図示したものである。

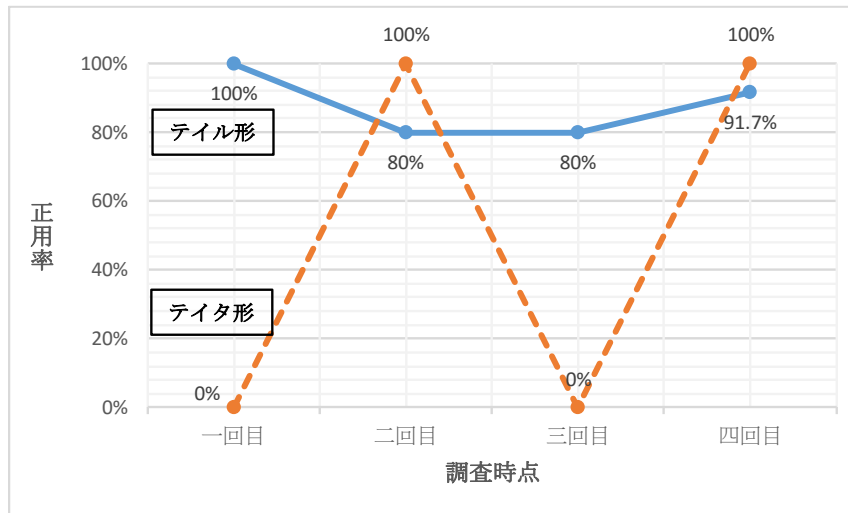


図8-5 「テイル形」と「テイタ形」における「単なる状態」の正用率の推移

「テイル形」の場合、「一回目」（正用率 100%）から「二回目」の調査時点（正用率 80.0%）にかけては正用率が大幅に下がっている。その後、「三回目」の調査時点（正用率 80.0%）では正用率に変化はないが、「四回目」の調査時点では正用率は初めて上昇して 91.7%となった。このように、「一回目」から「四回目」の調査時点まで学習者の「単なる状態」の使用は一貫して 8 割以上の正用率を維持していることが観察された。一方、「テイタ形」の場合、「単なる状態」の用法例が少ないために、正用率が 0% と 100%しか出ていない。

8.3.2.3 「テイル形」と「テイタ形」の用法間の正用率の差異

前節では、「テイル」の用法別に「テイル形」と「テイタ形」における正用率の差異を比較、検証してきた。続いて、本節では学習者の「テイル形」と「テイタ形」の使用において、「テイル」の用法間の使用状況にいかなる同異点があるのか、および日本語学習期間の違いに影響されているのかを検証する。そこで、「時制形式」、「テイルの用法」、「日本語学習期間」の3つの要因で学習者の「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。「テイル形」と「テイタ形」の時制形式を分類木の最初に来る変数として設定して分析した結果、図 8-6 のデンドログラムが得ら

れた³。

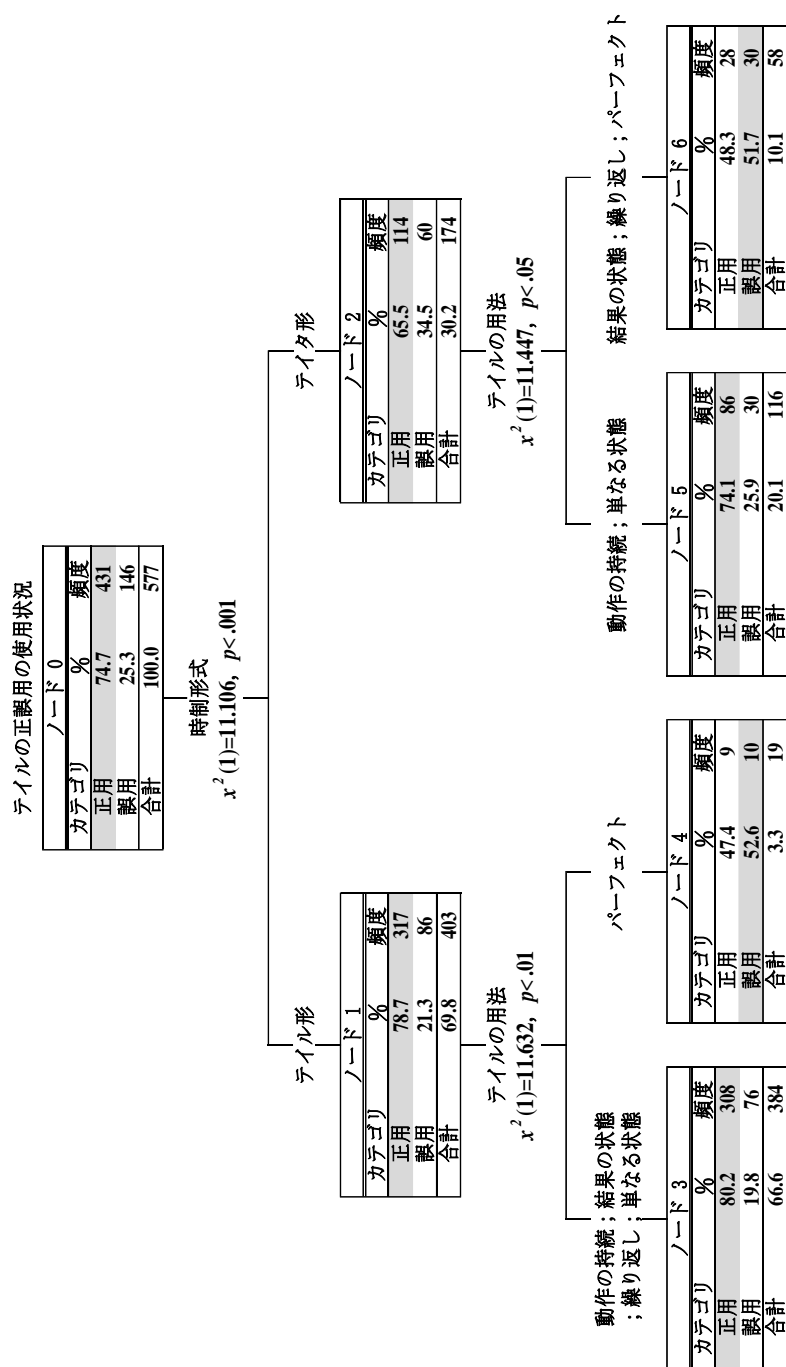


図8-6 「テイル形」と「テイタ形」の使用における「テイルの用法」と「日本語学習期間」の2つの要因の影響についての分類木分析の結果

図8-6に示されるように、「テイル形」(ノード1, 正用率78.7%)は「テイタ形」(ノード2, 正用率65.5%)よりも正用率が有意に高かった[$x^2(1)=11.106, p<.001$]。また、

³ なお、本分析の相対リスクは24.8%なので、本分析が75.2%で正しく予測されていることが示された。

「テイル形」の場合、5つの用法のうち、「動作の持続」(例(7))、「結果の状態」(例(8))、「繰り返し」(例(9))、「単なる状態」(例(10))の4つの用法の間で正用率に明確な差異は見られなかったが、この4つの用法の正用率の平均値(ノード3, 正用率80.2%)は(11)のような「パーフェクト」(ノード4, 正用率47.4%)の用法よりも有意に高かった[$\chi^2(1)=11.632, p<.01$]。

「動作の持続」:

- (7) いずれの原因も、私たち人類の、台湾で生活している人々の、生命教育の不足なのだ。(NTU-A-3-123-4-T5)

「結果の状態」:

- (8) 私は大学生の三年生です。大学入試の試験はもう遠いことです。でも、高校生の三年生の生活がよく覚えています。(SCU-A-3-58-3-T7)

「繰り返し」:

- (9) 「大学を卒業したら、失業者になる!」という話皆はよく聞いていますね。(SCU-A-3-93-4-T5)

「単なる状態」:

- (10) しかし、しばらくすると、まだ同じの対抗と争いが繰り返しかえしていくに決まっ
ていると思う。(NTU-A-3-117-4-T5)

「パーフェクト」:

- (11) 「パーフェクト」: 犯罪者になって、他人に否定されて自殺までしている人生はだれの望み?(SCU-A-3-61-3-T7)

一方、「テイタ形」の場合では、5つの用法のうちノード5の「動作の持続」(例(12))、と「単なる状態」(例(13))の2つの用法の正用率(74.1%)は、ノード6の「結果の状態」(例(14))、「繰り返し」(例(15))、「パーフェクト」(例(16))の3つの用法の正用率(48.3%)より有意に高かった[$\chi^2(1)=11.447, p<.05$]。

「動作の持続」:

- (12) 私は一年前に家族と一緒にZへ引っ越しました。その前はずっとGに住んで
いました。(SCU-A-2-75-1-T2)

「単なる状態」:

- (13) 何にも知らず、天真爛漫な心を持っていた子供ころの私にとっては、いつも
わくわくして、テレビの前に座っていました。(SCU-A-3-84-4-T5)

「結果の状態」:

- (14) 先日、A大学のネットBBS上には、学校中の野良犬の問題について、激しい
論争が起った。それに対して論争をしていた人々は、だいたい二つの主張に
わかれていた。(NTU-A-3-123-4-T5)

「繰り返し」:

- (15) 気持ちが悪いときやつまらないとき、いつも野球をしていました。
(SCU-A-2-81-1-T2)

「パーフェクト」:

- (16) 私は毎日早から晩まであそこにずっといることではなかったですが、何曲か
ならっていませんでした。ですから、最後の夜、私はちょっと緊張しました。

(NTU-A-2-121-1-T2)

なお、図 8-6 では設定した「時制形式」、「テイルの用法」、「日本語学習期間」の3つの要因のうち、学習者の「日本語学習期間」の影響が見られなかったことから、「日本語学習期間」は学習者の「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正誤用には影響しないと言える。

8.3.3 動詞タイプ別の「テイル」の習得状況

次に、本節では「テイル形」と「テイタ形」の「時制形式」の違いによって、学習者の動詞タイプ別の「テイル」の習得状況にいかなる差異があるのかについて考察する。以下の手順で調査を進める。

- ① 時制形式の違いによる動詞タイプ別の使用率の差異を考察する。
- ② 時制形式の違いによる動詞タイプ別の正用率の差異を考察する。
- ③ 時制形式の違いによる動詞タイプ間の正用率の差異を考察する。

このうち、①については 8.3.3.1 節、②については 8.3.3.2 節、③については 8.3.3.3 節で論じる。

8.3.3.1 「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ別の使用率

本節では、動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用傾向の異同について考察する。なお、作文データから取り上げた「テイタ形」の用例が少ないため、ここでは「テイル形」と「テイタ形」の使用において、日本語学習期間による動詞タイプ別の使用率の変化については考察しないこととする。学習者の動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度を集計すると、表 8-4 のようになる。

表8-4 「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の使用頻度 (n=40)

時制形式	活動動詞			達成動詞			到達動詞			状態動詞		
	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差	頻度	比率	調整済み残差
テイル形	174	0.478	-2.7	26	0.071	1.4	97	0.266	0.7	67	0.184	1.9
テイタ形	81	0.614	2.7	5	0.038	-1.4	31	0.235	-0.7	15	0.114	-1.9
合計	255	0.514	-	31	0.063	-	128	0.258	-	82	0.165	-
「テイル形」における適合度検定の結果						$\chi^2(3)=128.857, p<.001$						
「テイタ形」における適合度検定の結果						$\chi^2(3)=103.515, p<.001$						
独立性の検定の結果						$\chi^2(3)=8.492, p<.05$						

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：調整済み残差の絶対値が1.96（標準正規偏差値(z)の5%点に当たる）よりも大きければ、意味のある偏りであると判断できる。

まず、学習者の「テイル形」と「テイタ形」の使用が4つの動詞タイプのいずれかに偏るかどうかを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果は表 8-4 に示したようにいずれも有意となり、「テイル形」 [$\chi^2(3)=128.857, p<.001$]、「テイタ形」 [$\chi^2(3)=103.515, p<.001$] の使用には、ともにある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向があることが示されている。表 8-4 を見ると、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式に関係なく、4つの動詞タイプのうち、学習者の「テイル」の使用は (17) (18) の「待つ」のような「活動動詞」の使用率に集中していることがわかる

「活動動詞」：

- (17) 「いったい…」と僕は泣きそうな声でささやきました。帰りたいなあと思っても、コイちゃんはどこかに僕を待っているかもしれません。

(SCU-A-2-98-2-T8)

- (18) 私も新聞を読んで並んでいて、雨の日に約 10 時間でずっと待っていました。

(SCU-A-2-84-1-T2)

また、学習者の動詞タイプ別の使用率が時制形式の違いに影響されるか否かを検証するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った結果は有意となった [χ^2

(3)=8.492, $p<.05$]。さらに。具体的にどの動詞タイプで「テイル形」と「テイタ形」の使用率に有意な偏りがあるのかを考察するために、各動詞タイプの「テイル形」と「テイタ形」の使用頻度を残差分析によって検討した。その結果、表 8-4 に示されるように、4つの動詞タイプの中で調整済み残差の絶対値が 1.96 よりも大きいのは「活動動詞」($z=\pm 2.7$)のみであった。このことから、他の動詞タイプに比べて、「活動動詞」では「テイル形」と「テイタ形」の使用率に有意に偏っており、「テイル形」(使用率 47.8%) よりも「テイタ形」(使用率 61.4%) の使用率が有意に高いことがわかった。

8.3.3.2 「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ別の正用率の差異

次に、本節では時制形式の違いによる各動詞タイプの正用率の差異について考察する。各調査時点において、「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の正用と誤用の頻度を集計すると、表 8-5 のようになる。

表 8-5 「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の正誤用の頻度 ($n=40$)

調査時点	用法	テイル形				テイタ形			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	活動動詞	23	0.719	9	0.281	26	0.703	11	0.297
	達成動詞	1	0.333	2	0.667	1	0.333	2	0.667
	到達動詞	15	0.652	8	0.348	5	0.500	5	0.500
	状態動詞	12	0.632	7	0.368	5	0.500	5	0.500
	合計	51	0.662	26	0.338	37	0.617	23	0.383
二回目	活動動詞	59	0.855	10	0.145	45	0.789	12	0.211
	達成動詞	2	0.400	3	0.600	1	1.000	0	0
	到達動詞	15	0.833	3	0.167	12	0.480	13	0.520
	状態動詞	5	0.625	3	0.375	9	0.692	4	0.308
	合計	81	0.810	19	0.190	67	0.698	29	0.302
三回目	活動動詞	27	0.871	4	0.129	1	0.250	3	0.750
	達成動詞	9	0.692	4	0.308	2	1.000	0	0
	到達動詞	29	0.829	6	0.171	0	0	2	1.000
	状態動詞	11	0.611	7	0.389	0	0	0	0
	合計	76	0.784	21	0.216	3	0.375	5	0.625
四回目	活動動詞	46	0.920	4	0.080	3	0.600	2	0.400
	達成動詞	9	0.900	1	0.100	0	0	1	1.000
	到達動詞	30	0.811	7	0.189	4	1.000	0	0
	状態動詞	24	0.750	8	0.250	0	0	0	0
	合計	109	0.845	20	0.155	7	0.700	3	0.300

注：ここで示した正誤用の頻度と比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

さらに、表 8-5 に示される「テイル形」と「テイタ形」の正用率を基に、動詞タイプごとに各調査時点における正用率を折れ線グラフで表示すると、図 8-7 から図 8-10 のようになる。以下、動詞タイプ別に「テイル形」と「テイタ形」の正用率の差異について順次比較検討していく。

まず、図 8-7 は表 8-5 で示された「一回目」から「四回目」までの「テイル形」と「テイタ形」における「活動動詞」の正用率を図示したものである。

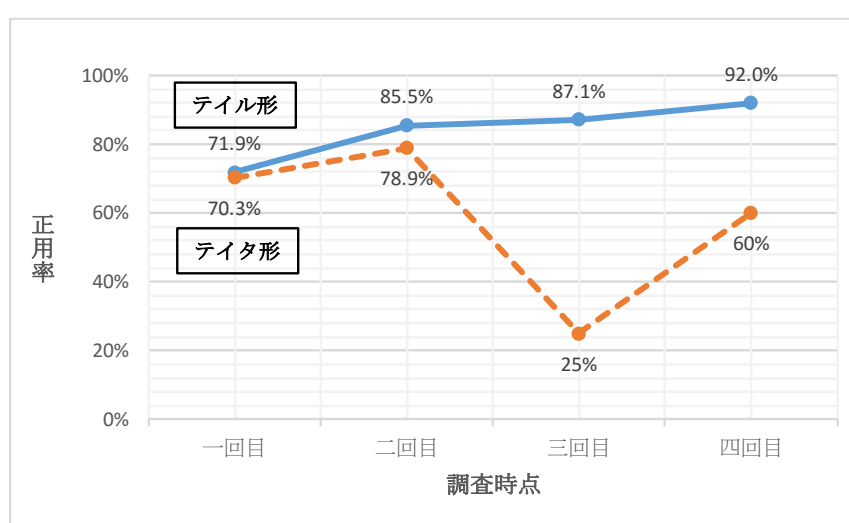


図8-7 「テイル形」と「テイタ形」における「活動動詞」の正用率の推移

「テイル形」の場合では「一回目」(正用率 71.9%) から「二回目」の調査時点(正用率 85.5%)にかけては正用率が大きく伸びている。「三回目」の調査時点では引き続き正用率(87.1%)が上昇するが、上り幅は小さく、「二回目」の調査時点とは明確な差異は見られなかった。最終的に、「四回目」の調査時点では正用率が 92.0%にまで上がり、かなり習得できていると言える。このように、「テイル形」における「活動動詞」の使用は学習者の日本語学習期間が長くなるほど正用率が上がるという傾向が見られた。一方、「テイタ形」の場合、「一回目」(正用率 70.3%) から「二回目」の調査時点(正用率 78.9%)にかけては正用率に明確な伸びが見られた。その後、「三回目」の調査時点では正用率が大きく下がり 25.0%となるが、「四回目」の調査時点では正用率は

再び上昇して60.0%に達している。このように、「一回目」の調査時点では「テイル形」と「テイタ形」の間で正用率に明確な差異は見られなかったが、「二回目」から「四回目」の調査時点にかけては「テイル形」の正用率が「テイタ形」を上回っていることが観察された。

次の図8-8は表8-5で示した「一回目」から「四回目」までの「テイル形」と「テイタ形」における「達成動詞」の正用率を図示したものである。

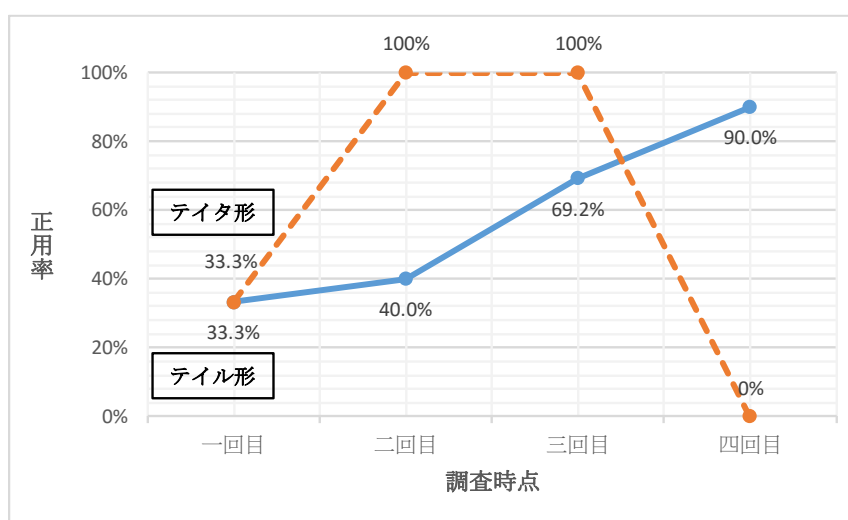


図8-8 「テイル形」と「テイタ形」における「達成動詞」の正用率の推移

「テイル形」の場合、「一回目」の調査時点では正用率は33.3%とかなり低いが、その後、学習者の日本語学習期間が長くなるにつれ、正用率は右肩上がりに伸びている。最終的に、「四回目」の調査時点では正用率が90.0%にまで上がり、かなり習得できていると言える。一方、「テイタ形」の場合では「一回目」(正用率33.3%)から「二回目」の調査時点(正用率100%)にかけては正用率が大きく伸びている。しかし、表8-5に示したように、「二回目」の調査時点では「達成動詞」の使用はわずか1例しかなく、この2つの調査時点で観察された正用率の伸びが日本語学習期間に比例して上がっているとは言いがたい。また、「三回目」と「四回目」の2つの調査時点でそれぞれ正用例が2例、誤用例が1例しかないために、正用率は100%と0%となっている。

続いて、図8-9は表8-5に示した「一回目」から「四回目」までの「テイル形」と「テイタ形」における「到達動詞」の正用率を図示したものである。

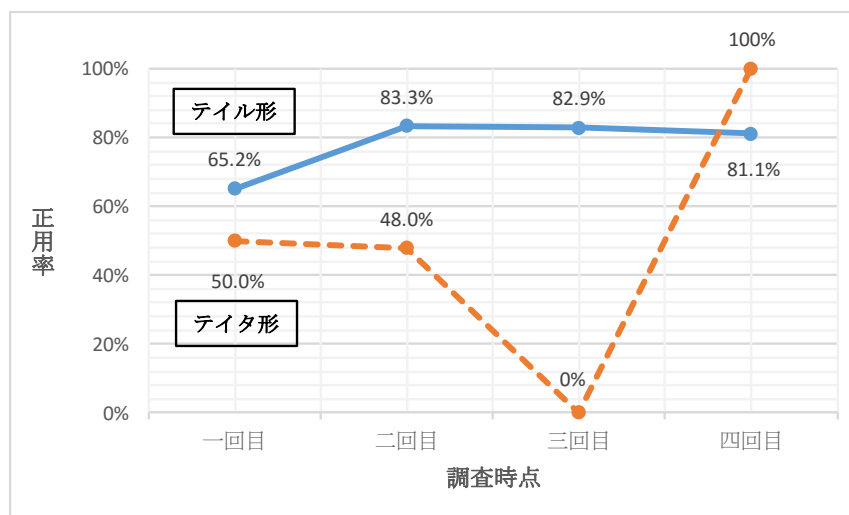


図8-9 「テイル形」と「テイタ形」における「到達動詞」の正用率の推移

「テイル形」の場合では「一回目」(正用率65.2%)から「二回目」の調査時点(正用率83.3%)にかけては正用率が大幅に伸びている。しかし、それ以降、「到達動詞」の正用率にあまり顕著な変化はなく、正用率はずっと8割程度に維持されている。一方、「テイタ形」の場合では、「一回目」(正用率50.0%)と二回目(正用率48.0%)の調査時点の間で正用率に明確な差異は見られなかったが、「三回目」の調査時点では正用例はなく、正用率が0%となる。しかし、「四回目」の調査時点では逆に誤用例はなく、正用率が100%となり、「テイル形」の正用率を上回っている。

最後に、図8-10は表8-5に示した「一回目」から「四回目」までの「テイル形」と「テイタ形」における「状態動詞」の正用率を図示したものである。

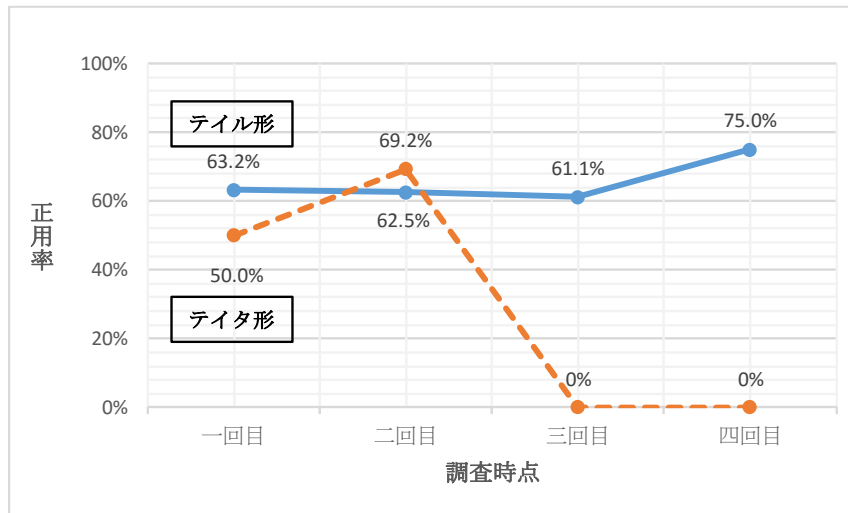


図8-10 「テイル形」と「テイタ形」における「状態動詞」の正用率の推移

図8-10に示されるように、「テイル形」の場合では「一回目」（正用率63.2%）から「三回目」の調査時点（正用率61.1%）にかけて正用率は右下がりになっているが、この3つの調査時点の間に明確な差はなく、正用率はずっと6割弱に維持されている。その後、「四回目」の調査時点では正用率が大幅に伸びて75.0%となる。一方、「テイタ形」の場合では「一回目」（正用率50.0%）から「二回目」の調査時点（正用率69.2%）にかけては正用率が大きく伸び、「テイル形」の正用率を上回っている。しかし、それ以降、「三回目」と「四回目」の調査時点では「状態動詞」の使用例はなく、いずれも正用率が0%となる。

8.3.3.3 「テイル形」と「テイタ形」の動詞タイプ間の正用率の差異

前節では、動詞タイプ別に「テイル形」と「テイタ形」における正用率の差異を比較、検証した。続いて、本節では学習者の「テイル形」と「テイタ形」の使用において、動詞タイプ間の使用状況にいかなる共通点と相違点があるのか、および日本語学習期間の違いに影響されるのかを検証する。そこで、本節では「時制形式」、「動詞タイプ」、「日本語学習期間」の3つの要因で学習者の「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。「テイル形」と「テイタ形」の時制形式を分類木

の最初に来る変数として設定して分析した結果、図8-11のデンドログラムが得られた

4。

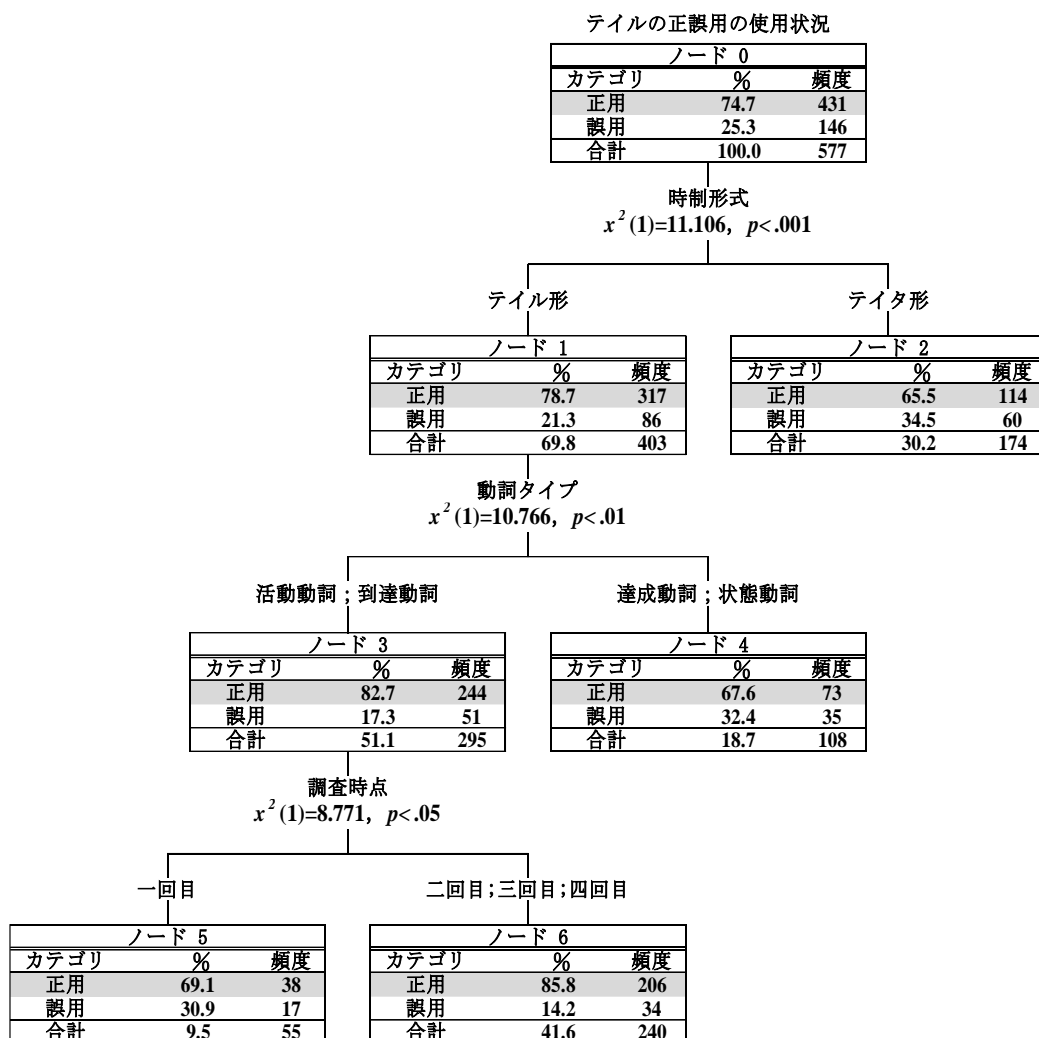


図8-11 「テイル形」と「テイタ形」における「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2つの要因の影響についての分類木分析の結果

図8-11に示されるように、「テイル形」の使用においてはまず、動詞タイプの違いによる影響が見られる。4つの動詞タイプのうち、ノード3の「活動動詞」(例(19))と「到達動詞」(例(20))の2つの動詞タイプ(正用率82.7%)は、ノード4の「達成動詞」(例(21))と「状態動詞」(例(22))の2つの動詞タイプ(正用率67.6%)

⁴ なお、本分析の相対リスクは25.3%なので、本分析が74.7%で正しく予測されていることが示された。

よりも正用率が高いという有意差が示されている [$\chi^2(1)=10.766, p<.01$]。また、ノード3に含まれる「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプでは、さらに学習者の日本語学習期間の影響が見られた。4つの調査時点のうち、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つの調査時点では正用率に明確な差異はないが、この3つの調査時点の正用率の平均値（ノード6, 正用率 85.8%）が「一回目」（ノード5, 正用率 69.1%）の調査時点より有意に高かった [$\chi^2(1)=8.771, p<.05$]。

「活動動詞」：

(19) 小さい頃から、親から生活常識や道德観念や様々なことを習んで生きている。

(SCU-A-3-85-4-T5)

「到達動詞」：

(20) 全国で彼だけ「三隻小豬」という言葉に成語と認めている。(SCU-A-3-88-4-T5)

「達成動詞」：

(21) 情報の集めやすいと共に、我々は必要かどうかをよそにいっぱい情報を受けています。(SCU-A-3-80-4-T5)

「状態動詞」：

(22) 皆、塾に通ってから、たとえ学校に出席しなくても大丈夫だと思っている。

(SCU-A-3-85-4-T5)

一方、分類木分析の結果では「テイタ形」の使用においては「動詞タイプ」と「日本語学習期間」のいずれの要因による影響も見られなかった。つまり、「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2つの要因は学習者の「テイタ形」の使用に影響していない。

8.3.4 時制形式による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響

以上、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる「テイル」の用法別の習得難易度、或いは動詞タイプ別の「テイル」の使用状況に関して、学習者の「テイル」の習得状況を考察してきた。本節では、時制形式の違いが「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況にどう影響しているのかについて検証する。

8.3.4.1 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率

本節では、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによって、日本語学習者の「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率にいかなる同異点があるのかについて検証する。なお、学習者の作文データから取り上げた「テイル」の用例が少ないため、ここでは「テイル形」と「テイタ形」の使用において、日本語学習期間による各用法で使用された動詞タイプ別の使用率の変化については考察しないこととする。まず、「テイル形」の各用法で使用された動詞タイプ別の頻度を集計すると、表8-5のようになる。表8-6における頻度と比率は、文末における「動作の持続」などの各用法での「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの使用頻度と使用率を表す。

表8-6 「テイル形」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度 ($n=40$)

	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		適合度検定
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	138	0.697	6	0.030	2	0.010	52	0.263	$\chi^2(3)=242.162, p<.001$
結果の状態	0	0	5	0.062	76	0.938	0	0	$\chi^2(1)=62.235, p<.001$
パーフェクト	4	0.364	5	0.455	1	0.091	1	0.091	$\chi^2(3)=4.636, p=.200, ns$
繰り返し	29	0.644	5	0.111	5	0.111	6	0.133	$\chi^2(3)=37.400, p<.001$
単なる状態	3	0.103	5	0.172	13	0.448	8	0.276	$\chi^2(3)=7.828, p<.05$

注1：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

注2：「単なる状態」の用法では、動詞タイプ別の使用頻度を適合度検定で分析した結果、 $p<.05$ であるが、ボンフェローニ (Bonferroni) の補正を行った有意水準 (0.05/5=0.01) より高いために有意ではないこととなる。

「テイル形」の各用法で使用された動詞が特定の動詞タイプに偏るかどうかを検証するために、各用法内における動詞タイプ別の使用頻度を適合度検定によって用法ごとに分析した。その結果は、表 8-6 に示したように「動作の持続」 $[x^2(3)=242.162, p<.001]$ 、「結果の状態」 $[x^2(1)=62.235, p<.001]$ 、「繰り返し」 $[x^2(3)=37.400, p<.001]$ の3つの用法が有意となった。つまり、「テイル形」の使用において「パーフェクト」と「単なる状態」の2つの用法では、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向がないことが示されている。また、「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」の3つの用法で使用された4つの動詞タイプを使用率順に並べると、表 8-7 のようになる。

表 8-7 「動作の持続」、「繰り返し」、「結果の状態」における動詞タイプ別の使用率の順位

		使用率の順位			
		1位	2位	3位	4位
用法	動作の持続	活動動詞 (69.7%)	状態動詞 (26.3%)	達成動詞 (3.0%)	到達動詞 (1.0%)
	繰り返し	活動動詞 (64.4%)	状態動詞 (13.3%)	達成、到達動詞 (11.1%)	-
	結果の状態	到達動詞 (93.8%)	達成動詞 (6.2%)	-	-

注：表で示した順位は各用法で使用された4つの動詞タイプを使用率が高い順を並べたものである。

このうち、「動作の持続」の用法では4つの動詞タイプの中で「活動動詞」(使用率 69.7%) が最も多く用いられており、次いで「状態動詞」(使用率 26.3%)、次に「達成動詞」(使用率 3.0%)、「到達動詞」(使用率 1.0%) の順となる。また、「繰り返し」の用法では「活動動詞」の使用率 (64.4%) が最も高く、次いで「状態動詞」(使用率 13.3%) となり、その次に「達成動詞」(使用率 11.1%) と「到達動詞」(使用率 11.1%) の2つの動詞タイプが同程度で続く。よって、「テイル形」の使用において「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法では (23) (24) の「勉強する」のような「活動動詞」が最も多く用いられていると言える。

[活動動詞]

(23) 「動作の持続」：兄さんは今大学院で動画デザインを勉強しています。

(SCU-A-3-104-3-T7)

(24) 「繰り返し」：現代の子供たちは幼い頃から、学校でいろいろな科目を学ぶだけでなく、放課後も塾で勉強している。(SCU-A-3-93-3-T7)

一方、「結果の状態」の用法で、使われている動詞は「到達動詞」と「達成動詞」のみであり、特に(25)の「持つ」のような「到達動詞」の使用率(93.8%)が圧倒的に高かった。

[到達動詞]

(25) 「結果の状態」：だから、今持っている物を大切に、思い出だけにならないほうがいい。(NTU-A-2-117-1-T2)

次に、「テイタ形」の各用法で使用された動詞タイプ別の頻度を集計すると、表8-8のようになる。表8-8における頻度と比率は、文末における「動作の持続」などの各用法での「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4つの動詞タイプの使用頻度と使用率を表す。

表8-8 「テイタ形」の各用法で使用された動詞タイプ別の使用頻度 (n=40)

	活動動詞		達成動詞		到達動詞		状態動詞		適合度検定
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	
動作の持続	70	0.787	4	0.045	0	0	15	0.169	$x^2(2)=84.292, p<.001$
結果の状態	0	0	0	0	29	1.000	0	0	-
パーフェクト	2	0.500	1	0.250	1	0.250	0	0	$x^2(2)=0.500, p=.211, ns$
繰り返し	8	1.000	0	0	0	0	0	0	-
単なる状態	1	0.500	0	0	1	0.500	0	0	$x^2(1)=0.000, p=1.000, ns$

注：ここで示した使用頻度と比率はすべて延べ語数によって計算したものである。

表 8-8 に示されるように、学習者の「テイタ形」の使用において、5つの用法のうち「結果の状態」の用法では(26)の「座る」のような「到達動詞」のみ、「繰り返し」の用法では(27)の「勉強する」のような「活動動詞」のみしか見られなかった。

[結果の状態]

- (26) 「到達動詞」：そのとき、田川君も穴から急に飛んできたフクロウにびっくりされて、もともと座っていた木の枝から落ちてしまいました。(SCU-A-2-99-2-T8)

[繰り返し]

- (27) 「活動動詞」：休みの日、私はいつも勉強していましたが、その時、図書館は私の家をそうにありました。(SCU-A-2-355-1-T2)

また、残る3つの用法で使用された動詞が特定の動詞タイプに偏るかどうかを検証するために、この3つの用法内における動詞タイプ別の使用頻度を適合度検定によって分析した。その結果は、「動作の持続」 $[\chi^2(2)=84.292, p<.001]$ のみが有意となり、「テイタ形」における「動作の持続」の用法では、ある特定の動詞タイプに偏って用いられる傾向があることが示された。「動作の持続」の用法における動詞タイプ別の使用率を見ると、4つの動詞タイプのうち、(28)の「さがす」のような「活動動詞」の使用率(78.8%)が最も多く用いられていることがわかる。

[動作の持続]

- (28) 「活動動詞」：男の子は「かわいい子よ、どこにいるか」といつも呼んで、あちこちにさがしていた。(NTU-A-2-128-2-T8)

以上により、「テイル」の5つの用法のうち、「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法では「活動動詞」が、「結果の状態」の用法で「到達動詞」が最も多く用いられるという使用傾向が「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いにかかわらず共通して見られた。また、「パーフェクト」と「単なる状態」の2つの用法では、文末と連体修飾節のいずれの位置においても特定の動詞タイプに偏る傾向がないことが観察された。

8.3.4.2 「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率

本節では、「テイル形」と「テイタ形」の各用法で使用された動詞タイプ別の正用率を比較、検証し、さらに学習者の日本語学習期間による影響を検証するために、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「日本語学習期間」、④「構文的位置」の4つの要因で「テイル」の正用と誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。「テイル形」と「テイタ形」の「時制形式」を分類木の最初に来る変数として設定して分析した結果を、図8-12のデンドログラムに示す⁵。

図8-12を見ると、「テイル形」と「テイタ形」の「時制形式」の違いによって、現れる影響の要因が異なることがわかる。まず、「テイル形」の使用において、「テイルの用法」、「日本語学習期間」、「動詞タイプ」の3要因とも学習者の「テイル」の正誤用に有意な影響力を持つことが示されている。このうち、「動詞タイプ」の違いが学習者の「テイル形」の使用に最も強く影響している[$\chi^2(2)=10.766, p<.01$]。4つの動詞タイプの正用率を比較すると、「活動動詞」と「到達動詞」との間、および「達成動詞」と「状態動詞」との間で正用率には明確な差異は見られなかったが、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの正用率の平均値（ノード3, 82.7%）は、「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプの正用率の平均値（ノード4, 67.6%）よりも有意に高かった。また、ノード3の「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプでは、

⁵ なお、本分析の相対リスクは24.6%なので、本分析が75.4%で正しく予測されていることが示された。

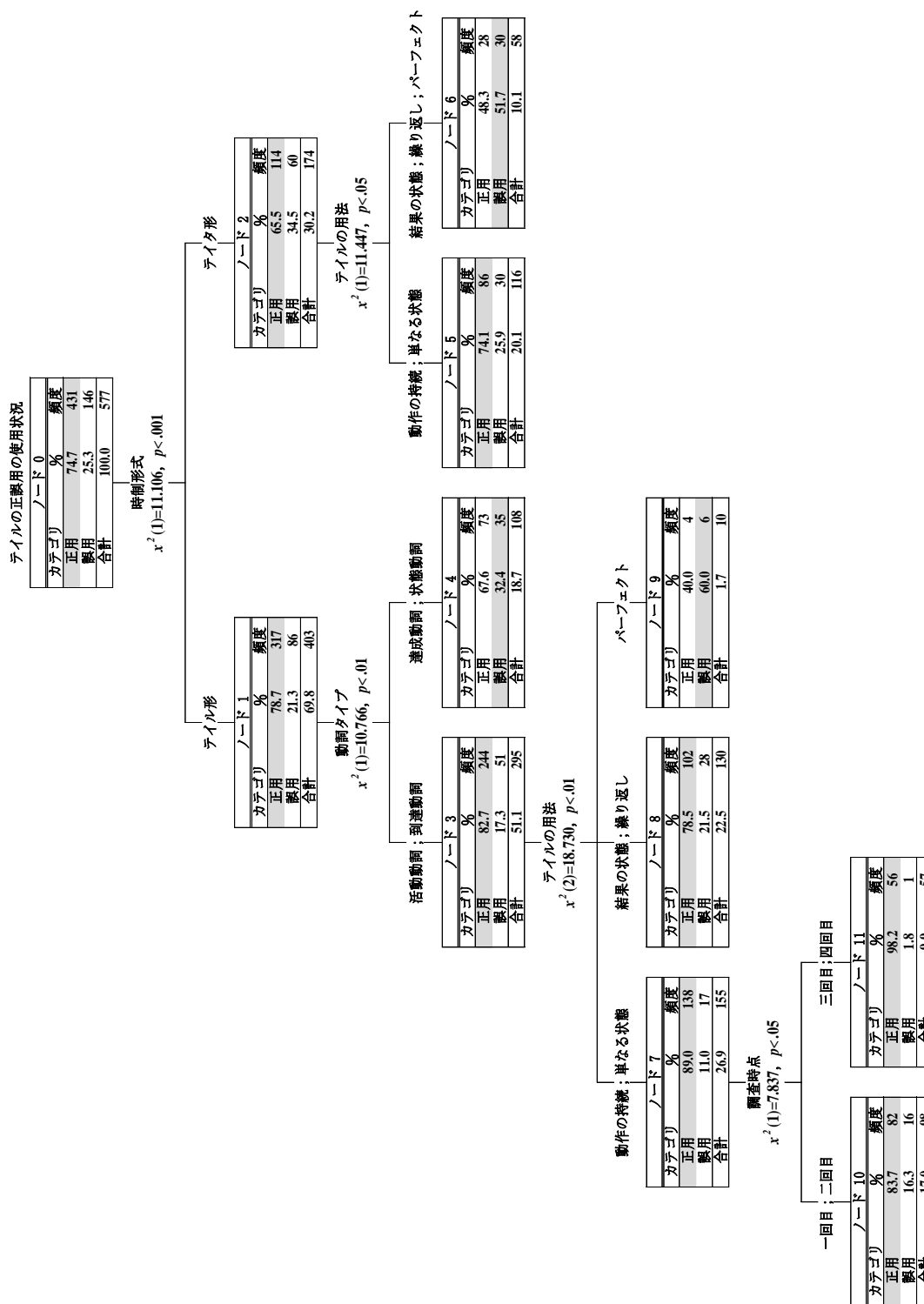


図8-12 「テイル形」と「テイル」の使用における「テイルの用法」、「動詞タイプ」、「日本語学習期間」の3つの要因の影響についての分類木分析の結果

さらに「テイルの用法」の違いによる影響を受けている [$x^2(1)=18.731, p<.01$]。5つの用法の正用率を比較すると、「動作の持続」(例 (29) (30))と「単なる状態」(例 (31))

(32) の2つの用法(ノード7, 正用率89.0%)の正用率が最も高く、次いで「結果の状態」(例(33))と「繰り返し」(例(34)(35))の2つの用法(ノード8, 正用率78.5%)、最後に(36)(37)のような「パーフェクト」の用法(ノード9, 正用率40.0%)となる。そして、ノード7の「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では、学習者の「日本語学習期間」の違いによる影響が認められた[$\chi^2(1)=7.837, p<.05$]。この2用法では、4つの調査時点のうち「三回目」と「四回目」の2つの調査時点(ノード11, 正用率98.2%)は、「一回目」と「二回目」の2つの調査時点(ノード10, 正用率83.7%)よりも正用率が有意に高いことが示されている。以上から、「テイル形」の使用については「動詞タイプ」の違いの影響が最も強く、次いで「テイルの用法」の違いの影響が強かった。そして、影響力が最も低いのは学習者の「日本語学習期間」であることがわかった。

[動作の持続]

- (29) 「活動動詞」：つまり、まだ闇に呑まれた世界の中に明るい未来をさがしている人間だ。(NTU-A-3-122-4-T5)
- (30) 「到達動詞」：教育制度を变化することに連れて、我が国では、今、大学数はますます増えているという。(SCU-A-3-85-3-T7)

[単なる状態]

- (31) 「活動動詞」：また現在の子供はあまり健康な体を鍛えていません。(SCU-A-3-88-3-T7)
- (32) 「到達動詞」：高くて特異な枝を持っていて、数多く木が並んでいる森は昼間よりもっとこわくて幽玄な雰囲気がある。(NTU-A-2-116-2-T8)

[結果の状態]⁶

- (33) 「到達動詞」：今でも初めてバスでDにある中学校に通った日がはつきり覚えています。(SCU-A-2-87-1-T2)

[繰り返し]

- (34) 「活動動詞」：「大学を卒業したら、失業者になる!」という話皆はよく聞いていますね。(SCU-A-3-93-4-T5)
- (35) 「到達動詞」：愛しい吾が弟よ、毎日私と母より夜遅くまで起きているのがこれだったのか。(SCU-A-3-96-4-T5)

[パーフェクト]

- (36) 「活動動詞」：子供たちは勉強は人生の第一の目標と教えられているから、頭に「勉強、勉強」っていっぱいだ。(SCU-A-3-93-3-T7)
- (37) 「到達動詞」：堪まらない人は、その期間に、他の人を構わず、臭い、それに人に悪いタバコを吸い始める。空気の読める人なら、他人と距離を隔て、遠ざかってタバコを吸うことまだ知っているが、一本、一本ずつ、吸い続ける人も少くなくない。(SCU-A-3-90-4-T5)

一方、「テイタ形」の使用においては、「テイルの用法」の影響しか認められなかった。つまり、「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2つの要因は学習者の「テイタ形」の正誤用に影響していないと言える。「テイタ形」の場合、5つの用法のうちノード5の「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の正用率の平均値(74.1%)は、ノード6の「結果の状態」、「繰り返し」、「パーフェクト」の3つの用法の正用率の平均値(48.3%)より有意に高いことが示されている[$\chi^2(1)=11.447, p<.05$]。

⁶ 非限界動詞である「活動動詞」は「結果の状態」の意味を表現することができない。

8.4 考察

8.4.1 「テイル形」と「テイタ形」の習得状況について

以上、学習者の「テイル形」と「テイタ形」の習得状況について分類木分析を行った結果、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる学習者の「テイル」の習得状況には明確な差異が現れ、「テイル形」の正用率（図8-6のノード1，78.7%）は「テイタ形」の正用率（図8-6のノード2，65.5%）より有意に高かった。このことから、台湾人日本語学習者にとって「テイタ形」の習得は「テイル形」の習得よりも困難であることがわかった。また、日本語学習期間の違いによる「テイル形」と「テイタ形」の正用率の変化を見ると、学習者の「テイル形」の使用では、4つの調査時点のうち「四回目」の調査時点の正用率（表8-1，84.5%）が最も高く、次に「二回目」（表8-1，81.0%）と「三回目」（表8-1，78.4%）の2つの調査時点が同程度で続き、正用率が最も低かったのは「一回目」の調査時点（表8-1，66.2%）であった。換言すれば、学習者の「テイル形」の習得は「一回目」の調査時点（2年生前期で学習期間1年）から「二回目」の調査時点（2年生後期で学習期間1年半）まではかなり進むが、その後、「三回目」の調査時点（3年生前期で学習期間2年）では一時的に伸び止まり「四回目」の調査時点（3年生後期で学習期間2年半）で再び顕著な伸びが見られる、という習得状況が観察された。このように、学習者の「テイル形」の習得は日本語学習期間の長さにつれて進むと言える。

一方、学習者の「テイタ形」の使用では、正用率が各調査時期を通じて7割を超えず、各調査時点の間で正用率に明確な差異が見られなかった。つまり、学習者の「テイタ形」の習得は日本語学習期間にかかわらずあまり進んでいなかった。このように、日本語学習期間によって、学習者の「テイル形」と「テイタ形」の習得状況に差異があることが明らかになった。ただし、「三回目」（8例）と「四回目」（10例）の2つの調査時点では、作文データから取り上げた「テイタ形」の用例が少なく、学習者の日本語学習期間による「テイタ形」の習得の変化を指摘するにはまだ不十分な量である

ため、今後より多くの学習者を対象とした検証が必要である。

8.4.2 時制形式による「テイル」の用法別の習得状況について

続いて、「テイル形」と「テイタ形」の用法別の習得状況について考察する。まず、「テイル形」と「テイタ形」の用法別の使用率を分析した結果、学習者の「テイル」の使用では「テイル形」と「テイタ形」の時制形式に関係なく5つの用法の中で「動作の持続」(表8-2, 「テイル形」での使用率54.4%; 「テイタ形」での使用率67.4%)の用法が最も多く用いられていることがわかった。

また、「テイルの用法」と「日本語学習期間」の2つの要因による学習者の「テイル形」と「テイタ形」の正用率への影響について分析した結果、「テイル形」と「テイタ形」のいずれの使用においても「テイルの用法」の影響しか見られなかった。「テイル形」の場合では、5つの用法のうち「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の4つの用法(図8-6のノード3, 正用率80.2%)の間では正用率に有意差が見られず、その正用率の平均値は「パーフェクト」の用法(図8-6のノード4, 正用率47.4%)より有意に高かった。このうち、「テイル形」における「動作の持続」と「結果の状態」の習得には明確な差がない、という点で従来の調査(黒野1995; Shirai & Kurono 1998; 小山2004; 菅谷2004a; Sugaya & Shirai 2007; 崔2009, 2011)とは異なる結果が得られた。従来「テイル形」に関する習得研究は、「動作の持続」と「結果の状態」の習得について「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの正答率の比較検討のみに限ったものが主で、「状態動詞」の使用状況については触れられていない。一方、本研究では、「動作の持続」と「結果の状態」の2つの用法で使用される4つの動詞タイプとも分析対象とした。そのため、本研究で「テイル形」における「動作の持続」と「結果の状態」の習得に明確な差がないという従来の調査と異なる結果が得られたのは、分析対象とした動詞タイプの違いのためと考えられる。実際、本章8.3.4.2節でさらに「テイル形」の習得における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の

2つの要因の影響について分析した結果⁷、学習者の「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの使用(図8-12のノード3)では「動作の持続」の用法(図8-12のノード7)は「結果の状態」の用法(図8-12のノード8)よりも正用率が有意に高いことが示され、従来の調査と一致する結果が得られた。このように、「活動動詞」と「到達動詞」における「動作の持続」と「結果の状態」の正用率の分析結果に照らし合わせると、動詞タイプは区別されず、「テイル形」の用法別正用率の分析で、「動作の持続」と「結果の状態」の間に正用率の差異がなかったのは、「達成動詞」と「状態動詞」の使用による影響と推察できる。ただし、第2章で指摘したように非限界動詞である「状態動詞」は「結果の状態」の意味を表すことはできない。一方、限界動詞である「達成動詞」は「動作の持続」と「結果の状態」のいずれの用法においても使用率(表8-6、「動作の持続」での使用率3.0%;「結果の状態」での使用率6.2%)が1割にも届いていない。以上から、「テイル形」における「動作の持続」と「結果の状態」の間に正用率の差異がないのは、「状態動詞」の誤用によって「動作の持続」の正用率が低くなり、「結果の状態」との間で正用率の差が縮まるためであることが明らかになった。「動作の持続」の用法で使用された「状態動詞」は、主に「思う」、「信じる」などの心理動詞に集中していた。心理動詞での「テイル」の使用は主語の人称制限やムードの違いなども関わるため、単に動きの時間的な局面を表すわけではないので、学習者にとってより習得が難しくなると考えられる。特に「思う」の「スル」と「テイル」の使い分けに混乱が見られ、例示した(38)のように学習者が自らの意見と感想を書く場合に、主観的な判断を表す「思う」を使わずに誤って客観的な確認・記述を表す「思っている」を使用してしまうというような過剰使用が多く観察される。

- (38) ただ一回を使って捨てた木の箸、プラスチックのカップとか、たくさんのゴミを処理するためにエネルギーを使うのは浪費だと思っている(→思う)。(NTU-A-

⁷ 詳細な分析結果について本章8.3.3.2節を参照。

3-120-4-T5)

一方、「テイタ形」の場合では5つの用法のうち、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法(図8-6のノード5, 正用率74.1%)は「結果の状態」、「繰り返し」、「パーフェクト」の3つの用法(図8-6のノード6, 正用率48.3%)よりも習得が容易であることがわかった。このうち、「動作の持続」のほうが「結果の状態」より習得されやすいという習得難易度に関する傾向は、先行研究(Shirai & Kurono 1998; 許 2002; 小山 2004; 崔 2009, 2011)と一致する。「テイタ形」の使用では、「動作の持続」の用法における「状態動詞」(表8-6, 「テイル形」での使用率26.3%; 表8-8, 「テイタ形」での使用率16.9%)の使用率は「テイル形」の場合と比べて低く、前述した「テイル形」の使用で見られた「思う」による過剰使用は例示した(39)の1例しか見られなかった。しかし、これは「テイル形」の場合とは異なり、一連の動作の継起を表す場合には「タ形」を使わずに「テイタ形」を使用してしまった誤用である。

- (39) 「いや、しかし、彼に一人ではだめだろう。」と思っていた(→思った)私が彼をつれてどこへ行った鹿をはじめて追いた。(NTU-A-2-126-2-T8)

また、「テイル形」の使用に比べると、学習者の「テイタ形」の使用では5つの用法とも正用率が低かった。しかし、5つの用法のうち「動作の持続」(「テイル形」の正用率82.1% : 「テイタ形」の正用率74.3%)と「単なる状態」(「テイル形」の正用率85.3% : 「テイタ形」の正用率66.7%)の2つの用法が「テイル形」と「テイタ形」のいずれの時制形式においても習得が容易なグループに位置付けられたのに対し、「パーフェクト」の用法(「テイル形」の正用率47.4% : 「テイタ形」正用率28.6%)はいずれの時制形式においても習得が困難なグループに位置付けられ、習得難易度において共通した傾向が観察された。一方、「結果の状態」(「テイル形」の正用率75.5% : 「テ

イタ形」の正用率 50.0%) と「繰り返し」(「テイル形」の正用率 78.2% : 「テイタ形」の正用率 53.8%) の2つの用法では時制形式の違いによって習得難易度が変わり、「テイタ形」の使用では他の用法に比べて正用率がより顕著に下がっていた。このことから、時制形式の違いは「動作の持続」、「単なる状態」、「パーフェクト」の3つの用法よりも学習者の「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法の習得により強く影響していることがわかった。

8.4.3 時制形式による動詞タイプ別の「テイル」の習得状況について

「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の習得状況について、まず、「テイル形」と「テイタ形」が使用される動詞タイプ別使用率を分析した結果、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式に関係なく、学習者の「テイル」の使用は、「到達動詞」(表 8-3, 「テイル形」の使用率 26.6% ; 「テイタ形」の使用率 23.5%) よりも「活動動詞」(表 8-3, 「テイル形」の使用率 47.8% ; 「テイタ形」の使用率 61.4%) との結び付きが強いことが判明した。学習者の「テイタ形」の使用は「テイル形」の場合と同様に「到達動詞」より「活動動詞」と結び付きやすい、という「アスペクト仮説」に一致する結果が得られた。

また、「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2要因による学習者の「テイル形」と「テイタ形」の正用率への影響について分類木分析によって検証した結果、「テイル形」の使用では「動詞タイプ」と「日本語学習期間」の2つの要因の影響が見られた。この2要因のうち、「日本語学習期間」よりも「動詞タイプ」のほうが学習者の「テイル」の使用により強く影響していることが判明した。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」との間、および「達成動詞」と「状態動詞」との間に正用率に明確な差異はなかったが、「活動動詞」と「到達動詞」の2つ(図 8-11 のノード 3, 正用率 82.7%) は、「達成動詞」と「状態動詞」の2つ(図 8-11 のノード 4, 正用率 67.6%) より正用率が有意に高かった。また、学習者の「活動動詞」と「到達動詞」

の2つの動詞タイプの使用はさらに日本語学習期間の違いによる影響を受けていた。4つの調査時点のうち、「二回目」の調査時点（2年生後期で学習期間1年半）では顕著な伸びが見られたが、それ以降の使用状況はあまり変わらなかった。従来、「アスペクト仮説」の普遍性を検証した研究では、「テイル」の使用された「活動動詞」と「到達動詞」の使用率の提示に止まっているもの（Shirai 1995 ; Shirai & Kurono 1998 ; shibata 1999 ; 菅谷 2002 ; 塩川 2007 ; 孫ほか 2010）が主だが、三村（1999a）と小山（2004）がこの2つの動詞タイプの「テイル」がどの程度正確に使用されるかを検証している⁸。前述したように、この2つの動詞タイプの使用率から見ると、本研究では学習者の「テイル形」の使用は「到達動詞」より「活動動詞」と結び付きやすい、という先行研究と一致する結果が得られた。しかし本研究では、この2つの動詞タイプの間で正用率に明確な差異がないという三村（1999a）と小山（2004）の調査とは異なる結果が得られた。三村（1999a）と小山（2004）では、提示された調査文（調査項目）を見ると、いずれも四肢選択式の文法性判断テストで学習者が「動作の持続」と「結果の状態」の文脈で、「活動動詞」（＝「動作の持続」）と「到達動詞」（＝「結果の状態」）の「テイル」をどの程度正確に選択できるかを調査している。一方、本研究では学習者の作文データで「テイル」の用法を限定せず、「テイル」の使用された動詞タイプ別の正用率を分析した。そのため、三村（1999a）と小山（2004）の調査とは結果が異なったのは、調査で用いられた「テイル」の用法（コンテキスト）が違ったからであると考えられる。実際、作文データから取り上げた「動作の持続」と「結果の状態」の文脈で「テイル形」の使用された「活動動詞」（正用 120 例で正用率 88.9% ; 誤用 15 例で誤用率 11.1%）と「到達動詞」（正用 70 例で正用率 76.9% ; 誤用 21 例で誤用率 23.1%）の正用と誤用の頻度を独立性の検定によって分析すると、「活動動詞」のほうが「到達動詞」より正用率が有意に高い $[x^2(1)=5.812, p<.05]$ 、という三村（1999a）と小山（2004）

⁸ 簡・中村（2010）では「活動動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の正用率の比較検討を行ったが、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて言及されていないため、ここでは議論の対象から外した。

の調査に合致する結果が出る。

一方、「テイタ形」の使用では「動詞タイプ」及び「日本語学習期間」の影響はどちらも認められなかった。言い換えれば、動詞タイプの違いは学習者の「テイタ形」の使用に影響せず、4つの動詞タイプの間で、正用率に明確な差はない。さらに、このような使用状況は学習者の日本語学習期間に関係なく共通して見られた。「テイタ形」の使用で、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」と「到達動詞」の正用率に明確な差異が見られなかったことは、小山(2004)の調査結果とは異なる。しかし、前述したように小山(2004)の調査は、「動作の持続」と「結果の状態」の文脈における「活動動詞」(=「動作の持続」)と「到達動詞」(=「結果の状態」)の「テイル」の正答率を考察したものである。そのため、本研究でも同じく「動作の持続」と「結果の状態」の文脈で「テイタ形」の使用された「活動動詞」(正用66例で正用率75.0%;誤用22例で誤用率25.0%)と「到達動詞」(正用19例で正用率50.0%;誤用19例で誤用率50.0%)の正用と誤用の頻度を独立性の検定によって分析すると、「活動動詞」のほうが「到達動詞」より正用率が有意に高い $[\chi^2(1)=7.556, p<.01]$ 、という小山(2004)の調査と同じ結果が得られた。

以上から、「テイル形」の習得では「テイタ形」の場合と同様に、学習者の「活動動詞」及び「到達動詞」の使用に関しては正用率に明確な差異はなかった。しかし、いずれの時制形式においても「動作の持続」と「結果の状態」の用法で使用された「活動動詞」(=「動作の持続」)と「到達動詞」(=「結果の状態」)の間には正用率に明確な差異が現れた。このことから、「動作の持続」と「結果の状態」の用法で「活動動詞」が「到達動詞」よりも高い正用率で用いられているのは、動詞の語彙的アスペクトによる影響というよりも、むしろ学習者の「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の習熟度の違いが反映されているのではないかと考えられる。つまり、「動作の持続」の用法は「結果の状態」の用法よりも習熟度が高いため、「テイル」は「結果の状態」の意味を表す「到達動詞」よりも「動作の持続」の意味を表す「活動動詞」でのほうが、

より正確に用いられていると思われる。

8.4.4 時制形式による「テイル」の用法と動詞タイプの関係

最後に、「テイル形」と「テイタ形」の習得における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響について分析した結果、図8-12のデンドログラムに示されるように、設定した「テイルの用法」、「動詞タイプ」、「日本語学習期間」の3つの要因とも学習者の「テイル形」の習得に有意な影響力を持っていた。一方、「テイタ形」の習得においては、「テイルの用法」の違いによる影響のみが認められ、「テイル形」の場合と異なる結果となった。

「テイル形」の習得における「テイルの用法」、「動詞タイプ」、「日本語学習期間」の3つの要因の影響を見ると、「テイル形」の習得に最も強く影響する要因は「動詞タイプ」であった。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプ（図8-12のノード3，正用率82.7%）は「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプ（図8-12のノード4，正用率67.6%）より高い正用率で用いられていた。また、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの使用では「テイルの用法」の影響が見られた。5つの用法の中では「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法が習得されやすく、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法が同程度で続き、「パーフェクト」の用法が最も習得されにくいことが明らかになった。このように、同じ「活動動詞」と「到達動詞」でも「テイル」との結び付きにより表される意味の違いで、学習者の「テイル形」の習得状況に影響していることが観察された。従来、動詞の語彙的アスペクトの側面から「動作の持続」と「結果の状態」の習得難易度を論じた研究（黒野1995；Shirai & Kurono 1998；三村1999a；小山2004）では、「動作の持続」は主に「限界性」を持たない「活動動詞」に、「結果の状態」は「限界性」を持つ「到達動詞」に「テイル」がついたものであることから、「動作の持続」の習得が「結果の状態」の用法に先行するのは、「テイル」と結びつく動詞の語彙的アスペクトの影

響を受けていると結論づけている。これに従えば、学習者の「テイル形」の使用では「活動動詞」と「到達動詞」の正用率に明確な差異が見られるはずである。しかし、本研究における分析の結果を見ると、「活動動詞」と「到達動詞」の正用率に明確な差異はなく、この2つの動詞タイプは「テイル」との結び付きにより表される意味の違いによって正用率に影響が出るという先行研究の指摘とは逆の現象が見られた。このことから、台湾人日本語学習者にとって、「テイル形」は「結果の状態」の用法での習得よりも「動作の持続」の用法での習得の方が容易なのは、「活動動詞」と「到達動詞」に内在する語彙的アスペクト以外の影響を受けていることが示唆される。この原因として、1つの可能性に第6章で指摘した日中両言語のアスペクト表現の異同による母語干渉が考えられる。換言すれば、「動作の持続」の「テイル」は中国語の非完成相「(正)在」とほぼ一対一の対応関係を持つため、学習者が「テイル形」を習得する際に、母語からの正の転移を受け「動作の持続」の習得が促進されたと思われる。

また、分類木分析の結果では「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では、加えて、学習者の「日本語学習期間」の違いが影響していた。この場合、4つの調査時点は「一回目、二回目」(二年生、図8-12のノード10、正用率83.7%)と「三回目、四回目」(三年生、図8-12のノード11、正用率98.2%)の2つに分岐し、学習者の学年が上がるとともにこの2つの用法の習得が進んでいることが観察された。ただし、二年生でもすでに83.7%という高い正用率で「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプに「テイル形」を結びつけ、「動作の持続」と「単なる状態」の意味を表現することができており、かなり習得できていると言える。

一方、「テイタ形」の場合には「テイルの用法」の違いによる影響のみが認められた。つまり、「動詞タイプ」と「日本語学習者期間」の違いは学習者の「テイタ形」の習得に影響しないことがわかった。

8.5. まとめ

本章では、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによって、台湾人日本語学習者の①「テイル」の用法別の習得状況、②動詞タイプ別の「テイル」の習得状況、③「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況にいかなる差異があるのかについて考察した。結果は以下の3点に集約される。

1. 学習者の「テイル形」と「テイタ形」の用法別の習得状況について、いずれの時制形式においても「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の習得が各用法の中で比較的容易であるのに対し、「パーフェクト」の習得は各用法の中で比較的難しい、という共通した習得状況が観察された。一方、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法では、時制形式の違いによって習得難易度が変わり、「テイタ形」の使用では他の用法に比べて正用率はより顕著に下がっていた。
2. 学習者の動詞タイプ別の「テイル形」と「テイタ形」の習得状況について、「テイル形」の習得に関しては、4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の2つは「達成動詞」と「状態動詞」の2つよりも正用率が高かった。一方、「テイタ形」の習得に関しては4つの動詞タイプの正用率で明確な差異はなかった。このように、「テイル形」の習得でも「テイタ形」の習得でも「活動動詞」と「到達動詞」の正用率に有意差はないという共通した使用状況が観察された。
3. 時制形式による「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響について、「テイル形」の習得では「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因の影響が見られた。このうち、学習者の「テイル形」の使用に最も強く影響していた要因は「動詞タイプ」の違いであった。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプは「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイ

プより正用率が高かった。また、「活動動詞」と「到達動詞」の使用では、加えて「テイルの用法」の影響が見られ、5つの用法のうち「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の正用率が最も高く、次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法、最後に「パーフェクト」の用法となった。一方、「テイル形」の習得では「テイルの用法」の違いによる影響しか見られなかった。

以上、本研究では台湾人日本語学習者の「テイル」の習得について、①「テイル」の習得に影響する要因、および②「日本語学習期間」、③「構文的な位置」、④「時制形式」による「テイル」の習得状況という4つの調査を踏まえて考察した。

第9章 結論

9.1 はじめに

本論文では、日本語学習者の「テイル」の習得について考察してきた。第2章で述べたように、これまでの「テイル」の習得研究には、大別して「アスペクト仮説の検証に関する研究」と「テイルの用法の習得に関する研究」の2つがある。このうち、前者は、動詞を「限界性(telicity)」、「瞬間性(punctuality)」といった動詞(句)に内在する語彙的アスペクトによって「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」などといった動詞タイプに分類し、「テイル」の使用される動詞タイプの使用状況について考察している。その結果、殆どの研究では「テイル」の習得は「活動動詞」が「到達動詞」に先行する、という「アスペクト仮説」を支持する結果が出ている(Shirai 1995、2002b ; Shirai & Kurono 1998 ; shibata 1999 ; 三村 1999ab ; 小山 2004 ; 塩川 2007 ; 簡・中村 2009 ; 孫ほか 2010 ; 簡 2012)。

一方、後者は、動詞と「テイル」との結び付きで表す多様な意味を「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」などの用法に分類し、各用法の習得難易度について考察している。その結果、概ね「動作の持続」は「結果の状態」よりも習得されやすく、「パーフェクト」の習得は各用法の中で最も困難であるという結果が得られている(黒野 1995、1998 ; 許 1997、2000、2002、2009 ; Shirai & Kurono 1998 ; 魚住 1998 ; 菅谷 2002、2003、2004ab ; 小山 2004 ; Sugaya & Shirai 2007 ; 崔 2009、2011)。

しかし、これらの研究には下記の5つの問題点がある。

1. 動詞の語彙的アスペクト、或いは「テイル」の用法の習得難易度のいずれかの側面からのみ分析が行われており、両者間の関連性について論じられていない。

2. 同じレベルの学習者を対象に習得環境と母語などの影響を考察したものは多いが、異なるレベルの学習者を比較し、「テイル」の習得における学習者の日本語レベルによる影響について考察したものはまだ少ない。
3. 主に文末の習得状況に焦点が置かれており、文末と連体修飾節の違いについては殆ど議論されていない。
4. 主に現在時制の「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて考察したものがまだ少ない。
5. 「テイル」の習得に関わる複数の要因による影響の度合いと、それらの相互作用についての考察が欠如している。

そこで、本論文では日本語学習者の「テイル」の習得に影響する要因を考察するために、「テイル」の習得に関わる要因として、①「テイルの用法」（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）、②「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）、③「時制形式」（テイル形とテイタ形）、④「構文的位置」（文末と連体修飾節）、⑤「日本語学習期間」（4つの調査時点：一回目（1年）、二回目（1年半）、三回目（2年）、四回目（2年半））の5つの要因を取り上げ、次の5つの研究課題について考察した。

研究課題1：「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率について日本語母語話者と日本語学習者の異同点を明らかにする。（第3章及び第6～8章）

研究課題2：「テイル」の習得における5つの要因（「テイル」の用法、動詞タイプ、時制形式、構文的位置、日本語学習期間）の影響の強さを明らかにする。
（第5章）

研究課題3：「日本語学習期間」の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。（第6章）

研究課題4：「構文的位置」の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。(第7章)

研究課題5：「時制形式」の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。(第8章)

本章では、上記5つの研究課題に沿って、各章の調査結果で明らかになったことをまとめ、残された課題を提示する。

9.2 研究結果のまとめ

9.2.1 日本語母語話者と日本語学習者の「テイル」の使用の比較(課題1)

本研究では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」と「台湾人日本語学習者コーパス(CTLJ)」を利用して、日本語母語話者(以下、「母語話者」と称する)と日本語学習者(以下、「学習者」と称する)の「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率¹について調査し²、その結果を次の表9-1～表9-3のようにまとめた。以下、「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率について母語話者と学習者の共通点と相違点を見るため、①「テイル」の用法別の使用率(表9-1)、②動詞タイプ別の「テイル」の使用率(表9-2)、③「テイル」の用法と動詞タイプの対応関係(表9-3)の順に説明していく。

① 「テイル」の用法別の使用率：

これまでの「テイル」に関する習得研究で、母語話者の「テイル」の用法別の使用率について論じたものには西・白井(2004)があるが、学習者の「テイル」の用法別

¹ 学習者の使用率は「テイル」が使用された箇所、つまり正用、過剰使用、テンスの誤りの3つの頻度の合計から計算したものである。以下同様。

² 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の詳細について第3章を、「台湾人日本語学習者コーパス」の詳細について第4章を参照。

の使用率については論じられていない。これに対し、本研究では「台湾人日本語学習者コーパス (CTLJ)」を用いて学習者の「テイル」の用法別の使用率を調べた。表 9-1 は母語話者と学習者それぞれが、「テイル」の5つの用法のうちどれをよく使うかについて使用率の高い順に示したものである。このうち、表の2行目と3行目は構文的位置や時制形式の違いを区別せずに集計したものである。次の4行は母語話者・学習者それぞれ文末と連体修飾節を分けて示したものであり、最後の4行は同様に時制形式の違いによって分けて示してある。

表 9-1 日本語母語話者と日本語学習者における「テイル」の用法別の使用率の順位

調査対象者	構文的位置と時制形式	使用率の順位
母語話者	-	①結 (39.9%)、②動 (28.2%)、③パ (13.5%)、④単 (12.5%)、⑤繰 (6.8%)
学習者	-	①動 (57.9%)、②結 (22.2%)、③繰 (10.7%)、④単 (6.3%)、⑤パ (3.0%)
母語話者	文末	①結 (39.6%)、②動 (27.8%)、③パ (13.5%)、④単 (13.2%)、⑤繰 (6.0%)
	連体節	①結 (37.8%)、②動 (29.0%)、③パ (13.6%)、④単 (11.2%)、⑤繰 (8.5%)
学習者	文末	①動 (56.4%)、②結 (21.9%)、③繰 (13.4%)、④単 (5.4%)、⑤パ (2.8%)
	連体節	①動 (61.4%)、②結 (22.8%)、③単 (8.3%)、④繰 (4.1%)、⑤パ (3.4%)
母語話者	テイル形	①結 (36.4%)、②動 (27.0%)、③単 (16.2%)、④パ (12.8%)、⑤繰 (7.6%)
	テイタ形	①結 (41.6%)、②動 (29.4%)、③パ (14.2%)、④単 (8.8%)、⑤繰 (6.0%)
学習者	テイル形	①動 (54.4%)、②結 (22.3%)、③繰 (12.4%)、④単 (8.0%)、⑤パ (3.0%)
	テイタ形	①動 (67.4%)、②結 (22.0%)、③繰 (6.1%)、④パ (3.0%)、⑤単 (1.5%)

注1：表中で「動」は「動作の持続」を、「結」は「結果の状態」を、「パ」は「パーフェクト」を、「繰」は「繰り返し」を、「単」は「単なる状態」を表すものである。

注2：表中の「-」は構文的位置や時制形式を区別しないことを示す。

表 9-1 を見ると、母語話者の場合は、構文的位置や時制形式に関係なく、5つの用法のうち「結果の状態」の使用率が最も高く、次いで「動作の持続」、次に「パーフェクト」或いは「単なる状態」となり、「繰り返し」の使用率が最も低いことがわかった。これに関しては、西・白井 (2004) では『主婦の一週間の談話資料』を用いて日本語母語話者の会話における「テイル」の使用例 (合計 518 例) を分析した結果、母語話者の「テイル」の使用については「動作の持続」(155 例で 29.9%) よりも「結果の状

態」(198例で38.2%)の使用率が高かった、という同じ使用傾向が提示されている³。一方、学習者の場合は、母語話者とは逆に、構文的位置と時制形式の違いに関係なく「結果の状態」よりも「動作の持続」のほうが多く用いられていることがわかった。さらに、母語話者の1位である「結果の状態」と学習者の1位である「動作の持続」を比較すると、母語話者の1位である「結果の状態」の使用率が40%前後であるのに対し、学習者の1位である「動作の持続」の使用率が60%前後となっている。このことから、学習者が「テイル」を使用する場合、母語話者に比べて「動作の持続」の用法への集中度が高いことがわかる。このように、使用率の観点から見ると、母語話者の場合は「結果の状態」、「動作の持続」という順番で使用されているのに対し、学習者の場合は「動作の持続」、「結果の状態」という順番で使用されていることがわかった。さらに、この順番は構文的位置や時制形式の違いに関係なく変わらないことが観察された。しかし、正用率の観点から見ると、構文的位置や時制形式によって、「動作の持続」と「結果の状態」の習得難易度が違うことが観察された。この点については9.2.4節と9.2.5節で述べる。

② 動詞タイプ別の「テイル」の使用率：

次に、動詞タイプ別の「テイル」の使用率について説明する。表9-2は母語話者と学習者それぞれが、4つの動詞タイプのうちどれに「テイル」をよく使うかについて使用率の高い順に示したものである。このうち、表の2行目と3行目は構文的位置や時制形式の違いを区別せずに集計したものである。次の4行は母語話者・学習者それぞれ文末と連体修飾節を分けて示したものであり、最後の4行は同様に時制形式の違いによって分けて示してある。

³ 西・白井(2004)では用例数しか明示されていないため、ここで示した比率は筆者が計算して加えたものである。

表9-2 日本語母語話者と日本語学習者における動詞タイプ別の「テイル」の使用率の順位

調査対象者	構文的位置と時制形式	使用率の順位
母語話者	-	①到達 (36.3%)、②活動 (31.4%)、③達成 (22.2%)、④状態 (10.1%)
学習者	-	①活動 (51.4%)、②到達 (25.8%)、③状態 (16.5%)、④達成 (6.3%)
母語話者	文末	①到達 (37.2%)、②活動 (30.9%)、③達成 (20.2%)、④状態 (11.7%)
	連体節	①到達 (34.4%)、②活動 (32.3%)、③達成 (26.3%)、④状態 (6.9%)
学習者	文末	①活動 (49.3%)、②到達 (25.4%)、③状態 (20.2%)、④達成 (5.1%)
	連体節	①活動 (56.6%)、②到達 (26.9%)、③達成 (9.0%)、④状態 (7.6%)
母語話者	テイル形	①到達 (35.0%)、②活動 (32.2%)、③達成 (23.6%)、④状態 (9.2%)
	テイタ形	①到達 (37.6%)、②活動 (30.6%)、③達成 (20.8%)、④状態 (11.0%)
学習者	テイル形	①活動 (47.8%)、②到達 (26.6%)、③状態 (18.4%)、④達成 (7.1%)
	テイタ形	①活動 (61.4%)、②到達 (23.5%)、③状態 (11.4%)、④達成 (3.8%)

注：表中の「-」は構文的位置や時制形式を区別しないことを示す。

表 9-2 に示されるとおり、母語話者の場合は、構文的位置や時制形式に関係なく、「到達動詞」、「活動動詞」、「達成動詞」、「状態動詞」の順であった。一方、学習者の場合は、構文的位置や時制形式の違いに関係なく、「活動動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」或いは「達成動詞」の順となった。このように、母語話者の場合には「活動動詞」より「到達動詞」のほうが多く用いられるが、学習者の場合には、母語話者とは逆に「到達動詞」より「活動動詞」のほうが多く用いられることがわかった。母語話者の場合には「テイル」の5つの用法のうち「結果の状態」が最も多く使用されているため、それに連動して「到達動詞」の使用率が高くなっていると考えられる。一方、学習者の場合には「結果の状態」より「動作の持続」のほうが多く用いられているため、「到達動詞」より「活動動詞」の使用率が高いことが観察された。さらに、この順番は構文的位置や時制形式の違いに関係なく、共通して見られる使用傾向であった。ただし、構文的位置や時制形式の違いは学習者の「活動動詞」と「到達動詞」の使用率の順位には影響しないが、この2つの正用率には強く影響していることが観察された。後の9.2.4節と9.2.5節で述べる。

③ 「テイル」の用法と動詞タイプの対応関係：

最後に、日本語母語話者と日本語学習者の「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率を見る。表 9-3 は「動作の持続」などの各用法において母語話者と学習者それぞれが、4 つの動詞タイプのうちどれに「テイル」をよく使っているかについて、使用率の高い順に示したものである。

表 9-3 「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率の順位

用法	調査対象者	使用率の順位
動作の持続	母語話者	①活動 (64.9%)、②状態 (18.1%)、③達成 (15.2%)、④到達 (1.8%)
	学習者	①活動 (72.5%)、②状態 (23.3%)、③達成 (3.5%)、④到達 (0.7%)
結果の状態	母語話者	①到達 (79.0%)、②達成 (21.0%)、活動と状態はなし
	学習者	①到達 (95.5%)、②達成 (4.5%)、活動と状態はなし
パーフェクト	母語話者	①活動 (48.1%)、②達成 (43.7%)、③到達 (8.1%)、状態はなし
	学習者	①活動 (40.0%) と 達成 (40.0%)、②到達 (13.3%)、③状態 (6.7%)
繰り返し	母語話者	①活動 (55.9%)、②達成 (23.5%)、③到達 (10.3%) と 状態 (10.3%)
	学習者	①活動 (69.8%)、②状態 (11.3%)、③達成 (9.4%) と 到達 (9.4%)
単なる状態	母語話者	①状態 (34.4%)、②到達 (25.6%)、③活動 (22.4%)、④達成 (17.6%)
	学習者	①到達 (45.2%)、②状態 (25.8%)、③達成 (16.1%)、④活動 (12.9%)

以下、表 9-3 に従って、「テイル」の 5 つの用法を順番に説明していく。

「動作の持続」の用法では、母語話者の場合と学習者の場合はともに、「活動動詞」、「状態動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の順であった。「テイル」は「活動動詞」に結び付くと、主に「動作の持続」を表すため、母語話者の場合でも学習者の場合でも 4 つの動詞タイプの中で「活動動詞」の使用率が最も高くなったと考えられる。

「結果の状態」の用法では、母語話者の場合と学習者の場合はともに、「到達動詞」、「達成動詞」の順で「活動動詞」と「状態動詞」が出現していない。「結果の状態」は「限界性」を持つ動詞のみで表されるため、非限界動詞である「活動動詞」と「状態動詞」が出現していない。また、「到達動詞」は「テイル」と結び付くと、「結果の状態」を表す場合が多いため、「達成動詞」より「到達動詞」の使用率が高かったと考え

られる。

「パーフェクト」の用法では、母語話者の場合、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の順で、「状態動詞」が出現していない。このうち、「活動動詞」と「達成動詞」の使用率には大きな差は見られなかった。一方、学習者の場合、「活動動詞」および「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の順であった。このように、母語話者の場合にも学習者の場合にも「テイル」の使用は「活動動詞」と「達成動詞」に集中しており、「状態動詞」の使用率が最も低いことから、「動的」の意味要素を持たない「状態動詞」が「パーフェクト」の用法を表すのは最も困難であるということがわかる。

「繰り返し」の用法では、母語話者の場合は、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」および「状態動詞」の順であった。一方、学習者の場合は、「活動動詞」、「状態動詞」、「達成動詞」および「到達動詞」の順であった。このように、「繰り返し」の用法では学習者の「テイル」の使用は母語話者と同様に、「活動動詞」に最も多く用いられていることがわかった。「繰り返し」は「毎日コーヒーを飲んでいる」のように個々の出来事が幾つか集まったものの全体を1つの出来事の進行過程として捉えるものである。出来事の進行過程を表す点で「動作の持続」の用法と共通するため、「繰り返し」の用法では「動作の持続」と同様に4つの動詞タイプのうち「活動動詞」のほうがこの意味を取りやすいと考えられる。

最後に、「単なる状態」の用法では、母語話者の場合は、「状態動詞」、「到達動詞」、「活動動詞」、「達成動詞」の順であった。一方、学習者の場合は、「到達動詞」、「状態動詞」、「達成動詞」、「活動動詞」の順であり、母語話者と異なる使用傾向が見られた。

以上、母語話者と学習者の「テイル」の使用について、①「テイル」の用法別の使用率、②動詞タイプ別の「テイル」の使用率、③「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率の3つの側面から見てきた。その結果、学習者の「テイル」の用法別、および動詞タイプ別の使用率に母語話者と異なる使用傾向が見られた。母語話者の場合には、5つの用法のうち「結果の状態」が最も多く用いられており、連動して4

つの動詞タイプのうち「到達動詞」の使用率が最も高かった。一方、学習者の場合は母語話者とは逆に、「動作の持続」が最も多く使用されるために、「活動動詞」と「テイル」との強い結び付きが見られた。また、「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率を調べた結果、「単なる状態」の用法を除く他の4つの用法では、学習者の動詞タイプ別の「テイル」の使用傾向が母語話者に似通っていることが明らかになった。このうち、「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法は「活動動詞」との結び付きが強く、「結果の状態」の用法は「到達動詞」との結び付きが強いことが判明した。そして、「パーフェクト」の使用は主に「活動動詞」と「達成動詞」の2つに集中していた。このように、「動作の持続」、「繰り返し」、「パーフェクト」の3つの用法では「テイル」が「活動動詞」に使用されている場合が最も多いことがわかった。ただし、同じ「活動動詞」でも、「動作の持続」での正用率が最も高く、次いで「繰り返し」、「パーフェクト」での正用率が最も低い、という用法の違いによる正用率の差異が見られた。この点については9.2.3節で述べる。

9.2.2 「テイル」の習得における5つの要因の影響の強さ（課題2）

第5章では、学習者の「テイル」の習得過程で①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因がどのように絡み合って相互に影響し合っているのかを検証するため、これら5つの要因で学習者の「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、5つの要因のうち、学習者の「テイル」の習得に最も強く影響している要因は「テイルの用法」であり、次いで「動詞タイプ」と「時制形式」の2つの要因が同程度で続き、次に「構文的位置」、次に「日本語学習期間」の順となることがわかった。以下、「テイル」の習得における5つの要因の影響の強さに従って、各要因間の関係を見る。

まず、「テイルの用法」の影響は5つの要因の中で最も強かった。5つの用法のうち、最も習得されやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」の2つであり、次いで「結

果の状態」と「繰り返し」の2つ、最も習得されにくいのは「パーフェクト」の用法である、という習得難易度が明らかになった。台湾人日本語学習者の「テイル」の用法の習得にこのような差異が現れるのは、日中両言語のアスペクト表現の異同による母語の影響を受けている可能性が考えられる。中国語では非完成相の“(正)在”は「動作の持続」との対応関係がほぼ一致しているのに対し、「結果の状態」に対応する中国語のアスペクト表現には非完成相の“著”と、完成相の“了”の2つの表現がある。本研究で取り上げた132例の「結果の状態」の正誤用を見ると、“了”に対応するものの正用率はわずか44.4%と低く、「著」に対応するもの（正用率80.6%）に比べて習得がかなり遅れている。このことから、「動作の持続」の習得は「結果の状態」の用法よりも容易であるのは、「動作の持続」の「テイル」と“(正)在”のほうがより完全的な対応関係を持つことに起因すると推察できる。さらに、このような対応関係から、殆ど完成相の“了”のみに対応する「パーフェクト」の習得が各用法の中で最も困難である原因も窺える。ただし、分析の結果では「テイル」に対応する中国語のアスペクト表現のない「繰り返し」と「単なる状態」の2つの用法とも「パーフェクト」より習得されやすく、さらに、「単なる状態」の習得難易度は「動作の持続」、「繰り返し」の習得難易度は「結果の状態」と同程度であることが示されている。このことから、台湾人日本語学習者にとって「テイル」の表す多様な意味の中で、対応表現のないものよりも中国語のアスペクト表現「了」と対応するもののほうがより習得されにくいと推察できる。また、習得難易度で分けられた「動作の持続」と「単なる状態」、「結果の状態」と「繰り返し」、「パーフェクト」の3つのグループによって「テイル」の習得に次に影響する要因はそれぞれ異なっていた。

次に、「動詞タイプ」の影響が第2の影響要因として、学習者の「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法のみで認められた。この2つの用法では、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプの間では正用率の差異が見られなかったが、これらの正用率は「状態動詞」よりも高かった。「ア

スペクト仮説」によると、「テイル」の習得は「活動動詞」が「達成動詞」と「到達動詞」に先行するとされている (Shirai 1993, 2002a)。完成相過去形「タ」が語彙的アスペクトに「限界性」を持つ「達成動詞」と「到達動詞」に結び付きやすく、非完成相形式「テイル」が語彙的アスペクトに「限界性」を持たない「活動動詞」に結び付きやすいためである。しかし、「アスペクト仮説」では、「テイル」の用法別による各動詞タイプの「テイル」の習得について論じられていないため、「テイル」の用法の違いによって動詞タイプ別の「テイル」の習得状況にどのような差異があるかは判断できない。実際に、本研究では「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の正用率を分析した結果、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法では「アスペクト仮説」の予測と異なる使用状況が見られた。この2つの用法では「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプの使用状況に、動詞に内在する「限界性」の有無による影響が見られず、いずれも同程度の高い正用率で用いられていた。このことから、学習者の「テイル」の使用に対する動詞に内在する「限界性」の有無による影響力が、用法によって変わることを明らかにした。換言すれば、同じ動詞タイプであっても「テイル」の用法の違いによって正用率が変わることを示された。

「時制形式」の違いによる影響が、「動作の持続」と「単なる状態」における「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプの使用、および「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法で見られた。いずれの用法においても「テイタ形」の習得は「テイル形」の習得よりも遅れていることがわかった。しかし、「動作の持続」と「単なる状態」における「テイタ形」の使用（正用率 76.6%）に比べて、「結果の状態」と「繰り返し」における「テイタ形」の正用率はわずか 51.0%とかなり低く、あまり習得できていないと言える。このように、「テイル」の用法別によって「テイタ形」の習得に明確な差異が現れる。さらに、この2つの用法では学習者の「日本語学習期間」の違いによる使用状況の差異が見られなかったことから、2年半の日本語学習経験を持つ学習者（3年生後期）でも「テイタ形」における「結果の状態」と「繰り返し」

の用法を正確に使いこなせていないことがわかった。

「構文的位置」の違いによる影響は、第3の影響要因として、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法における「テイル形」の使用のみで認められた。この2つの用法では、連体修飾節における「テイル形」の習得は文末におけるものよりも進んでいた。連体修飾節におけるテンス・アスペクト形式の振舞いは文末の場合と異なる。文末の場合、「テイル形」のみが容認されるが、連体修飾節の場合「繰り返し」では「テイル形」は「ル形」に、「結果の状態」では「テイル形」を「タ形」に入れ替えることが可能である。そのため、「テイル形」における「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法において、文末よりも連体修飾節では非使用率が低くなり、正用率が上がっていることが観察された。

最後に、「日本語学習期間」の違いによる影響は学習者の「テイル」の習得に影響する諸要因の中で最も弱く、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法における「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の「テイル形」の使用のみで見られ、学習者の学年（二年生、三年生）による習得状況に明確な差が現れた。

以上から、5つの要因のうち、学習者の「テイル」の習得に最も強く影響する要因は「テイルの用法」であり、次いで「動詞タイプ」と「時制形式」の2つの要因が同程度で続き、次に「構文的位置」、そして「日本語学習期間」の違いによる影響は諸要因の中で最も弱いことがわかった。こうして学習者の「テイル」の習得は、「テイル」の用法別に動詞自体の語彙的アスペクトと時制形式の違いなどの要因が複雑に影響しながら進んでいることが明らかになった。

9.2.3 「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の習得状況（課題3）

第6章では「日本語学習期間」の違いによる「テイル」の習得状況について、①「テイル」の用法別の習得状況、②動詞タイプ別の「テイル」の習得状況、③「テイル」の用法と動詞タイプの両者を合わせた使用状況の3つの段階で分析を行った。その結

果を次の表9-4～表9-6に示す。以下、各段階で得られた結果を順に説明していく。

まず、日本語学習期間の違いによる「テイル」の用法別の習得状況を見たい。表9-4は各調査時点における「テイル」の用法別の正誤用の頻度を示したものである。

表9-4 各調査時点における「テイル」の用法別の正誤用の頻度 (表6-3の再掲)

調査時点	用法	正用			誤用		
		延べ語数	異なり語数	正用率	延べ語数	異なり語数	誤用率
一回目	動作の持続	55	31	0.688	25	20	0.313
	結果の状態	17	11	0.586	12	10	0.414
	パーフェクト	3	3	0.375	5	5	0.625
	繰り返す	11	8	0.647	6	5	0.353
	単なる状態	2	2	0.667	1	1	0.333
	合計	88	51	0.642	49	40	0.358
二回目	動作の持続	115	48	0.804	28	18	0.196
	結果の状態	23	11	0.575	17	13	0.425
	パーフェクト	0	0	0	1	1	1.000
	繰り返す	1	1	1.000	0	0	0
	単なる状態	9	9	0.818	2	2	0.182
	合計	148	69	0.755	48	33	0.245
三回目	動作の持続	27	19	0.794	7	3	0.206
	結果の状態	23	12	0.767	7	7	0.233
	パーフェクト	4	3	0.571	3	3	0.429
	繰り返す	17	13	0.708	7	6	0.292
	単なる状態	8	6	0.800	2	2	0.200
	合計	79	48	0.752	26	20	0.248
四回目	動作の持続	52	36	0.912	5	3	0.088
	結果の状態	27	15	0.818	6	6	0.182
	パーフェクト	4	4	0.400	6	6	0.600
	繰り返す	21	19	0.808	5	5	0.192
	単なる状態	12	9	0.923	1	1	0.077
	合計	116	75	0.835	23	21	0.165

注：ここで示した各指標の比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

以下、表9-4に従って、5つの用法の習得状況を順番に述べていく。

①「動作の持続」(正用率:一回目 68.8%、二回目 80.4%、三回目 79.4%、四回目 91.2%) :

「一回目」の正用率は68.8%とあまり高くないが、「二回目」、「三回目」は80%程度と高くなり、「四回目」はさらに91.2%までに上がっており、かなり習得できている。

②「結果の状態」(正用率:一回目 58.6%、二回目 57.5%、三回目 76.7%、四回目 81.8%) :

「一回目」、「二回目」の正用率はいずれも60%弱と低いが、「三回目」は76.7%と高くなり、「四回目」は81.8%とあまり変わらなかった。この変化は「動作の持

続」に比べて伸びが遅れていることを示している。

③「パーフェクト」(正用率:一回目 37.5%、二回目 0%、三回目 57.1%、四回目 40.0%) :

「一回目」の正用率は37.5%とかなり低く、それ以降、調査時期を通じて6割にさえも届いておらず、あまり習得できていない。

④「繰り返し」(正用率:一回目 64.7%、二回目 100%、三回目 70.8%、四回目 80.8%) :

「一回目」と「二回目」の間で正用率は大きく上がっているが、「二回目」の使用はわずか1例しかなかった。「三回目」の正用率は70%、「四回目」は80.0%と高くなっている。

⑤「単なる状態」(正用率:一回目 66.7%、二回目 81.8%、三回目 80.0%、四回目 92.3%) :

「一回目」の正用率は66.7%とあまり高くないが、「二回目」、「三回目」は80%程度と高くなり、「四回目」は92.3%とさらに高くなっている。この変化は「動作の持続」と同じ伸び方を示している。

以上のように、5つの用法のうち「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の4つの用法の習得には顕著な伸びが見られたが、「パーフェクト」の習得は日本語学習期間に関係なくあまり進まないことがわかった。前者のうち、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では「二回目」の調査時点で顕著な伸びが見られ、いずれの調査時点でも正用率は他の用法より高いことから、この2つの用法の習得が最も早く進むことが判明した。また、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法ではそれぞれ「三回目」、或いは「四回目」の調査時点で正用率の伸びが見られた。このように、「テイル」の用法の違いによって正用率が伸びる時期が異なることが判明した。以上、日本語学習期間による「テイル」の用法別の習得状況の変化について見てきた。

次に、日本語学習期間の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況を見る。表 9-5 は各調査時点における動詞タイプ別の「テイル」の正用と誤用の頻度を示したものである。

表9-5 各調査時点における動詞タイプ別の正誤用の頻度(表6-7の再掲)

調査時点	動詞タイプ	正用			誤用		
		延べ語数	異なり語数	正用率	延べ語数	異なり語数	誤用率
一回目	活動動詞	49	29	0.710	20	18	0.290
	達成動詞	2	2	0.333	4	3	0.667
	到達動詞	20	13	0.606	13	11	0.394
	状態動詞	17	7	0.586	12	8	0.414
	合計	88	51	0.642	49	40	0.358
二回目	活動動詞	104	44	0.825	22	15	0.175
	達成動詞	3	3	0.500	3	3	0.500
	到達動詞	27	15	0.628	16	12	0.372
	状態動詞	14	7	0.667	7	3	0.333
	合計	148	69	0.755	48	33	0.245
三回目	活動動詞	28	20	0.800	7	7	0.200
	達成動詞	11	10	0.733	4	3	0.267
	到達動詞	29	14	0.784	8	7	0.216
	状態動詞	11	4	0.611	7	3	0.389
	合計	79	48	0.752	26	20	0.248
四回目	活動動詞	49	39	0.891	6	6	0.109
	達成動詞	9	9	0.818	2	2	0.182
	到達動詞	34	18	0.829	7	7	0.171
	状態動詞	24	9	0.750	8	6	0.250
	合計	116	75	0.835	23	21	0.165

注：ここで示した各指標の比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

以下、表9-5に従って、各動詞タイプの「テイル」の習得状況を順番に述べていく。

①「活動動詞」(正用率:一回目 71.0%、二回目 82.5%、三回目 80.0%、四回目 89.1%) :

「一回目」の正用率は71.0%と高くないが、「二回目」と「三回目」は80.0%程度と高くなり、「四回目」は89.1%とさらに高くなっている。

②「達成動詞」(正用率:一回目 33.3%、二回目 50.0%、三回目 73.3%、四回目 81.8%) :

「一回目」の正用率は33.3%とかなり低いが、その後、日本語学習期間が長くなるにつれて正用率が上がり、「四回目」は81.8%となっている。

③「到達動詞」(正用率:一回目 60.6%、二回目 62.8%、三回目 78.4%、四回目 82.9%) :

「一回目」、「二回目」の正用率は60%程度と低いが、「三回目」は78.4%と高くなり、「四回目」は82.9%とあまり変わらなかった。この変化は「活動動詞」に比べて伸びが遅れていることを示している。

④「状態動詞」(正用率:一回目 58.6%、二回目 66.7%、三回目 61.1%、四回目 75.0%) :

「一回目」の正用率は 58.6%と低いが、「二回目」は 66.7%と高くなり、「三回目」は 61.1%とあまり変わらず、「四回目」は 75.0%と再び高くなっている。ここでは「活動動詞」と同じ伸び方が見られたが、正用率は「活動動詞」に比べて低かった。

以上のように、4つの動詞タイプとも日本語学習期間が長くなるにつれて正用率が上がる傾向が見られた。しかし、このうち、「到達動詞」の正用率の伸びは他の動詞タイプに比べて遅れていることが判明した。さらに、いずれの調査時点においても4つの動詞タイプの中で「活動動詞」の正用率が最も高かった。これらのことから、「テイル」の習得は「活動動詞」が「達成動詞」と「到達動詞」に先行することが判明し、「アスペクト仮説」を支持する結果が得られた。ただし、「アスペクト仮説」では「状態動詞」の「テイル」の習得について論じられていない。本研究の分析結果では、「状態動詞」の使用では「活動動詞」と共通した伸び方が見られたが、「一回目」から「三回目」までの伸び率は他の動詞タイプに比べて低く、調査時期を通じて正用率が8割に届いていないことから、「状態動詞」の「テイル」の習得は他動詞タイプより遅れていることが判明した。以上、動詞タイプ別に日本語学習期間による正用率の変化を見てきた。

最後に、上で見た表 9-4 の「テイル」の用法と表 9-5 の動詞タイプの両者を合わせた使用状況を見たい。表 9-6 は各調査時点における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の正用と誤用の頻度および比率を示したものである。

表9-6 「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の正誤用の頻度および正用率 (n=40)

用法	動詞タイプ	一回目			二回目			三回目			四回目			合計		
		正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率
動作の持続	活動	37	14	72.5%	102	22	82.3%	14	1	93.3%	33	0	100%	186	37	83%
	達成	2	1	66.7%	1	1	50.0%	4	0	100%	1	0	100%	8	2	80%
	到達	1	0	100%	0	0	-	1	0	100%	0	0	-	2	0	-
	状態	15	10	60.0%	12	5	70.6%	8	6	57.1%	18	5	78.3%	53	26	67.1%
	合計	55	25	68.8%	115	28	80.4%	27	7	79.4%	52	5	91.2%	249	65	79.3%
結果の状態	達成	0	0	-	0	2	0%	2	0	100%	1	0	100%	3	2	60%
	到達	17	12	58.6%	23	15	60.5%	21	7	75.0%	26	6	81.3%	87	40	68.5%
	合計	17	12	58.6%	23	17	57.5%	23	7	76.7%	27	6	81.8%	90	42	68.2%
パーフェクト	活動	2	3	40.0%	0	0	-	2	1	66.7%	0	3	0%	4	7	36%
	達成	0	1	0%	0	0	-	2	1	66.7%	3	1	75.0%	5	3	62.5%
	到達	1	1	50.0%	0	0	-	0	1	0%	1	0	100%	2	2	50%
	状態	0	0	-	0	1	0%	0	0	-	0	2	0%	0	3	0%
	合計	3	5	37.5%	0	1	0%	4	3	57.1%	4	6	40.0%	11	15	42.3%
繰り返し	活動	10	3	76.9%	1	0	100%	11	4	73.3%	14	3	82.4%	36	10	78.3%
	達成	0	2	0%	0	0	-	2	3	40.0%	2	1	66.7%	4	6	40.0%
	到達	0	0	-	0	0	-	3	0	100%	2	1	66.7%	5	1	83.3%
	状態	1	1	50.0%	0	0	-	1	0	100%	3	0	100%	5	1	83%
	合計	11	6	64.7%	1	0	100%	17	7	70.8%	21	5	80.8%	50	18	73.5%
単なる状態	活動	0	0	-	1	0	100%	1	1	50.0%	2	0	100%	4	1	80%
	達成	0	0	-	2	0	100%	1	0	100%	2	0	100%	5	0	100%
	到達	1	0	100%	4	1	80.0%	4	0	100%	5	0	100%	14	1	93%
	状態	1	1	50.0%	2	1	66.7%	2	1	66.7%	3	1	75.0%	8	4	66.7%
	合計	2	1	66.7%	9	2	81.8%	8	2	80.0%	12	1	92.3%	31	6	83.8%

注：ここで示した正・誤用数、および正用率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

以下、表9-6に関して、用法別に動詞タイプの使用の特徴を整理する。

① 「動作の持続」

- a. 「活動動詞」：「一回目」の正用率は72.5%と高くないが、その後正用率が日本語学習期間が長くなるにつれて上がっており、「四回目」は100%となっている。
- b. 「達成動詞」：「一回目」の正用率は66.7%、「二回目」は50.0%と低くなったが、「三回目」、「四回目」では誤用はなく、正用率はいずれも100%となっている。
- c. 「到達動詞」：「一回目」、「三回目」では誤用はなく、正用率はいずれも100%となるが、いずれの時点でも使用は1例しかなかった。
- d. 「状態動詞」：「一回目」、「二回目」の正用率はそれぞれ60.0%と70.6%となり、

「三回目」は57.1%と低くなっているが、「四回目」は78.3%と高くなっている。他の動詞タイプに比べていずれの調査時点においても正用率が低かったことから、「動作の持続」の用法では「状態動詞」と「テイル」との結びつきは、学習者にとって習得されにくいものであることがわかった。

②「結果の状態」

- a. 「活動動詞」：使用なし。
- b. 「達成動詞」：「一回目」、「二回目」では使用または正用はなく、正用率はいずれも0%となる。「三回目」、「四回目」では誤用はなく、正用率はいずれも100%となるが、この2つの時点で使用はそれぞれ2例、1例しかなかった。
- c. 「到達動詞」：「一回目」、「二回目」の正用率は60%前後と低いが、「三回目」は75.0%と高くなり、「四回目」は81.3%とさらに高くなっている。
- d. 「状態動詞」：使用なし。

③「パーフェクト」

- a. 「活動動詞」：「一回目」の正用率は40.0%とかなり低く、「二回目」で使用はなく、「三回目」は66.7%と高くなっているが、「四回目」で正用はなく正用率が0%となっている。「動作の持続」での使用に比べて正用率が低くなっていることがわかった。
- b. 「達成動詞」：「一回目」、「二回目」では正用または使用はなく、「三回目」の正用率は66.7%とあまり高くないが、「三回目」は75.0%と高くなっている。
- c. 「到達動詞」：「一回目」の正用率は50.0%と低く、「二回目」、「三回目」では正用または使用はなく、正用率はいずれも0%となり、「四回目」では誤用はなく、正用率が100%となっている。
- d. 「状態動詞」：「一回目」、「三回目」では使用はなかった。また、「二回目」と「三回目」では正用はなく、正用率はいずれも0%となるが、この2つの時

点に使用例はそれぞれ1例、2例しかない。

④「繰り返し」

- a. 「活動動詞」：「一回目」の正用率は76.9%、「二回目」では誤用はなく、正用率が100%となっているが、使用は1例しかなかった。「三回目」の正用率は73.3%と低くなっているが、「三回目」は82.4%と高くなっている。「パーフェクト」での使用に比べて正用率は高くなっているが、「動作の持続」での使用に比べて正用率は低くなることがわかった。
- b. 「達成動詞」：「一回目」、「二回目」では正用または使用はなく、正用率はいずれも0%となる。「三回目」の正用率は40.0%とかなり低いが、「四回目」66.7%と高くなっている。
- c. 「到達動詞」：「一回目」と「二回目」では正用はなく、正用率はいずれも0%となる。「三回目」では誤用はなく、正用率が100%となっているが、「四回目」は66.7%と低くなっている。
- d. 「状態動詞」：「一回目」の正用率は50.0%と低く、二回目では使用はなく、「三回目」と「四回目」では誤用はなく正用率はいずれも100%となる。

⑤「単なる状態」

- a. 「活動動詞」：「一回目」で使用はなく、「二回目」と「四回目」で誤用はなく、正用率はいずれも100%となるが、「三回目」は正用率が50.0%と低くなっている。
- b. 「達成動詞」：「一回目」で使用はなく、「二回目」、「三回目」、「四回目」の3つでは誤用はなく正用率はいずれも100%となる。
- c. 「到達動詞」：4つの調査時点のうち、「一回目」、「三回目」、「四回目」の3つでは誤用はなく、正用率はいずれも100%となる。残る「二回目」は正用率が80.0%となっている。「結果の状態」に比べて正用率が高くなっている。
- d. 「状態動詞」；「一回目」の正用率は50.0%と低いが、「二回目」、「三回目」

はいずれも 66.7%と高くなり、「四回目」は 75.0%とさらに高くなっている。

いずれの調査時点においても他の動詞タイプに比べて低かったことから、「単なる状態」の用法では「状態動詞」と「テイル」との結びつきは、学習者にとって習得されにくい。

以上、日本語学習期間による「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率の変化を見た。用法別に4つの動詞タイプの正用率を見ると、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法では「状態動詞」は他の動詞タイプよりも正用率が低いことが観察された。「状態動詞」は「動的」の意味要素を持たない点で他の動詞タイプと異なる。「動作の持続」に用いられる場合には主に「思う」、「信じる」などの心理動詞に集中していた。これらの心理動詞は「テイル」と結び付くと、「活動動詞」と同様に主に「動作の持続」の用法を表す場合が多いが、その「テイル」の使用は「活動動詞」と異なり、単に出来事の時間的局面を表すわけではなく、主語の人称制限やムードの違いなども絡み合っているので学習者にとって習得がより難しくなると考えられる。特に「思う」の使用では、発話時における自分の主観的判断を表す「スル」と、発話時を含む一定期間継続している自分の思考・認識の客観的記述を表す「テイル」との使い分けに混乱が見られた。一方、「単なる状態」の場合、その誤用例を見ると、「不足」、「充実」などの語を「不足している」「充実している」のように動詞として使用すべきところに形容詞・名詞として使用した「テイル」の非使用（例えば、「とても充実でした」）が見られた。このように、学習者の日本語の漢字語彙知識が不足していることによって、「テイル」の習得に支障をきたすことが判明した。

また、動詞タイプ別に「テイル」の5つの用法の正用率を比較すると、「活動動詞」、「到達動詞」の正用率は「テイル」の用法の違いによって異なることが観察された。「活動動詞」の場合、「動作の持続」、「パーフェクト」、「繰り返し」の3つの用法で正用率に差が見られた。このうち、「動作の持続」の正用率が最も高く、次いで「繰り返し」であり、「パーフェクト」の正用率が最も低かった。一方、「到達動詞」の場合、

「結果の状態」と「単なる状態」の2つの用法で正用率に差が見られ、「単なる状態」のほうが「結果の状態」よりも正用率が高かった。このように、学習者の「活動動詞」と「到達動詞」の使用は「テイル」の用法別の習得難易度に強く影響され、正用率に明確な差が現れることが判明した。

9.2.4 「構文的位置」の違いによる「テイル」の習得状況（課題4）

第7章では、文末と連体修飾節の違いによる「テイル」の習得状況について、①「テイル」の用法別の習得状況、②動詞タイプ別の「テイル」の習得状況、③「テイル」の用法と動詞タイプの両者を合わせた使用状況の3つの段階で分析を行った。その結果を次の表9-7～表9-9に示す。以下、各段階で得られた結果を順に説明していく。

まず、構文的位置の違いによる「テイル」の用法別の習得状況を見る。表9-7は文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の正用と誤用の頻度を示したものである。

表9-7 文末と連体修飾節における「テイル」の用法別の正誤用の頻度（表7-2の再掲）

調査時点	用法	文末				連体修飾節			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	動作の持続	43	0.652	23	0.348	12	0.857	2	0.143
	結果の状態	12	0.500	12	0.500	5	1.000	0	0
	パーフェクト	3	0.375	5	0.625	0	0	0	0
	繰り返し	11	0.647	6	0.353	0	0	0	0
	単なる状態	2	0.667	1	0.333	0	0	0	0
	合計	71	0.602	47	0.398	17	0.895	2	0.105
二回目	動作の持続	76	0.835	15	0.165	39	0.750	13	0.250
	結果の状態	10	0.476	11	0.524	13	0.684	6	0.316
	パーフェクト	0	0	0	0	0	0	1	1.000
	繰り返し	1	1.000	0	0	0	0	0	0
	単なる状態	4	1.000	0	0	5	0.714	2	0.286
	合計	91	0.778	26	0.222	57	0.722	22	0.278
三回目	動作の持続	18	0.750	6	0.250	9	0.900	1	0.100
	結果の状態	18	0.720	7	0.280	5	1.000	0	0
	パーフェクト	1	0.333	2	0.667	3	0.750	1	0.250
	繰り返し	16	0.762	5	0.238	1	0.333	2	0.667
	単なる状態	5	0.833	1	0.167	3	0.750	1	0.250
	合計	58	0.734	21	0.266	21	0.808	5	0.192
四回目	動作の持続	34	0.872	5	0.128	18	1.000	0	0
	結果の状態	21	0.778	6	0.222	6	1.000	0	0
	パーフェクト	3	0.375	5	0.625	1	0.500	1	0.500
	繰り返し	17	0.773	5	0.227	4	1.000	0	0
	単なる状態	8	0.889	1	0.111	4	1.000	0	0
	合計	83	0.790	22	0.210	33	0.971	1	0.029

注：ここで示した正誤用の頻度と比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

以下、表 9-7 に従って、5 つの用法の習得状況を順番に述べていく。

①「動作の持続」（文末：一回目 65.2%、二回目 83.5%、三回目 75.0%、四回目 87.2%；連体修飾節：一回目 85.7%、二回目 75.0%、三回目 90.0%、四回目 100%）⁴：

文末の場合は「一回目」の正用率は 65.2%とあまり高くないが、「二回目」、「三回目」は 8 割前後と高くなり、「四回目」は 87.2%とさらに高くなっている。一方、連体修飾節の場合は「一回目」の正用率は 85.7%とかなり高く、「二回目」は 75.0%と低くなったが、「三回目」は 90.0%と高くなり、「四回目」は 100%とさらに高くなっている。両位置の正用率を比較すると、「二回目」を除くいずれの調査時点でも文末より連体修飾節のほうが高かった。

②「結果の状態」（文末：一回目 50.0%、二回目 47.6%、三回目 72.0%、四回目 77.8%；連体修飾節：一回目 100%、二回目 68.4%、三回目 100%、四回目 100%）：

文末の場合は「一回目」、「二回目」の正用率は 50.0%前後と低いが、「三回目」は 72.0%と高くなり、「四回目」は 77.8%とあまり変わらなかった。一方、連体修飾節の場合は「一回目」では誤用はなく正用率が 100%となっているが、「二回目」は 68.4%と低くなり、「三回目」、「四回目」では誤用はなく正用率はいずれも 100%となる。両位置の正用率を比較すると、いずれの調査時点でも文末より連体修飾節のほうが高かった。

③「パーフェクト」（文末：一回目 37.5%、二回目 0%、三回目 33.3%、四回目 37.5%；連体修飾節：一回目 0%、二回目 0%、三回目 75.0%、四回目 50.0%）：

文末の場合、「二回目」では正用がなく正用率は 0%、残る「一回目」、「二回目」、「四回目」の正用率も 30%程度に維持されており、習得があまり進まないことがわかった。一方、連体修飾節の場合は「一回目」には使用がなく、「二回目」には正用がないため正用率はいずれも 0%、「三回目」は 75.0%と高くはないが、「四回目」では 50.0%とさらに低くなる。両位置の正用率を比較すると、「三回目」と「四回目」では文末より連

⁴ 括弧内に示した数値は文末と連体修飾節の正用率である。以下同様。

体修飾節のほうが高かった。

④「繰り返し」（文末の：一回目 64.7%、二回目 100%、三回目 76.2%、四回目 77.3%；連体修飾節：一回目 0%、二回目 0%、三回目 33.3%、四回目 100%）：

文末の場合「一回目」の正用率は 64.7%と低いが、「二回目」には誤用はなく正用率は 100%、「三回目」、「四回目」は7割程度と低くなっている。一方、連体修飾節の場合は「一回目」、「二回目」には使用はなく、「三回目」は 33.3%とかなり低いが、「四回目」には誤用がなく正用率は 100%となっている。両位置の正用率を比較すると、「四回目」を除くいずれの調査時点でも連体修飾節より文末のほうが高かった。

⑤「単なる状態」（文末：一回目 66.7%、二回目 100%、三回目 83.3%、四回目 88.9%；連体修飾節：一回目 0%、二回目 71.4%、三回目 75.0%、四回目 100%）：

文末の場合は、「一回目」の正用率は 66.7%と低いが、「二回目」では誤用はなく正用率が 100%となり、「三回目」、「四回目」は7割程度と低くなっている。一方、連体修飾節の場合は「一回目」には使用はなく、「二回目」、「三回目」は7割程度と高くないが、「四回目」には誤用はなく正用率が 100%と高くなっている。また、両位置の正用率を比較すると、「四回目」を除くいずれの調査時点でも文末のほうが高かった。

以上のように、文末の場合、5つの用法のうち「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の4つの用法の習得には顕著な伸びが見られたが、「パーフェクト」の習得は調査時期を通じて正用率が4割にさえも届いておらず、あまり進まないことがわかった。前者のうち、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法では「二回目」の調査時点で正用率の伸びが見られたのに対し、「結果の状態」の用法では「三回目」の調査時点で正用率の伸びが見られた。さらに、各調査時点におけるこの4つの用法の正用率を比較すると、いずれの調査時点においても「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの正用率は「結果の状態」よりも高いことから、文末で「結果の状態」よりも「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つのほうが習得されやすいことが明らかになった。

一方、連体修飾節の場合、「一回目」と「二回目」の調査時点で学習者の「テイル」の使用では「動作の持続」と「結果の状態」の2つ以外の用法は殆ど見られなかった。この2つの用法のうち、「結果の状態」では調査時点を通じて正用率の伸びが見られなかったが、「二回目」を除くいずれの調査時点でも100%の正用率が維持されており、かなり習得できていると言える。これに対し、「動作の持続」では「一回目」の調査時点で85.7%という高い正用率で用いられているため、「四回目」の調査時点で初めて正用率の伸びが見られた。一方、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法の使用は主に「三回目」と「四回目」の2つの調査時点に集中していた。この2つの調査時点における5つの用法の正用率を比較すると、いずれの調査時点においても「パーフェクト」の正用率が最も低かった。このことから、連体修飾節では文末と同様に、5つの用法のうち「パーフェクト」の習得が最も困難であることがわかった。さらに、用法別に文末と連体修飾節の正用率を比較すると、5つの用法のうち、「結果の状態」の用法では、いずれの調査時点においても文末よりも連体修飾節での正用率が高いことから、「結果の状態」の用法では連体修飾節での習得が文末での習得よりも容易であるとわかった。以上、構文的位置の違いによる「テイル」の用法別の習得状況を見てきた。

次に、構文的位置の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況を見る。表9-8は両位置における動詞タイプ別の「テイル」の正誤用の頻度を示したものである。

表9-8 文末と連体修飾節における動詞タイプ別の正誤用の頻度(表7-4の再掲)

調査時点	動詞タイプ	文末				連体修飾節			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	活動動詞	37	0.673	18	0.327	12	0.857	2	0.143
	達成動詞	2	0.333	4	0.667	0	0	0	0
	到達動詞	15	0.536	13	0.464	5	1.000	0	0
	状態動詞	17	0.586	12	0.414	0	0	0	0
	合計	71	0.602	47	0.398	17	0.895	2	0.105
二回目	活動動詞	69	0.852	12	0.148	35	0.778	10	0.222
	達成動詞	2	0.667	1	0.333	1	0.333	2	0.667
	到達動詞	11	0.524	10	0.476	16	0.727	6	0.273
	状態動詞	9	0.750	3	0.250	5	0.556	4	0.444
	合計	91	0.778	26	0.222	57	0.722	22	0.278
三回目	活動動詞	20	0.870	3	0.130	8	0.667	4	0.333
	達成動詞	5	0.556	4	0.444	6	1.000	0	0
	到達動詞	24	0.750	8	0.250	5	1.000	0	0
	状態動詞	9	0.600	6	0.400	2	0.667	1	0.333
	合計	58	0.734	21	0.266	21	0.808	5	0.192
四回目	活動動詞	31	0.838	6	0.162	18	1.000	0	0
	達成動詞	6	0.857	1	0.143	3	0.750	1	0
	到達動詞	24	0.774	7	0.226	10	1.000	0	0
	状態動詞	22	0.733	8	0.267	2	1.000	0	0
	合計	83	0.790	22	0.210	33	0.971	1	0.029

注：ここで示した正誤用の頻度と比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

以下、表9-8に従って、各動詞タイプの「テイル」の習得状況を順番に述べていく。

①「活動動詞」(文末：一回目 67.3%、二回目 85.2%、三回目 87.0%、四回目 83.8%；連体修飾節：一回目 85.7%、二回目 77.8%、三回目 66.7%、四回目 100%)：

文末の場合は、「一回目」の正用率は 67.3%とあまり高くないが、「二回目」、「三回目」、「四回目」は8割程度と高くなっている。一方、連体修飾節の場合は、「一回目」の正用率は 85.7%とかなり高いが、「二回目」は 77.8%と低くなる。「三回目」は 66.7%とさらに低くなるが、「四回目」で誤用はなく正用率は 100%と高くなる。両位置の正用率を比較すると、「一回目」、「四回目」を除くいずれの調査時点でも文末のほうが高かった。

②「達成動詞」(文末：一回目 33.3%、二回目 66.7%、三回目 55.6%、四回目 85.7%；連体修飾節：一回目 0%、二回目 33.3%、三回目 100%、四回目 75.0%)：

文末の場合は、「一回目」の正用率は33.3%とかなり低いが、「二回目」は66.7%と高くなり、「三回目」は55.6%と低くなったが、「四回目」は85.7%と再び高くなっている。一方、連体修飾節の場合は、「一回目」に使用はなく、「二回目」は33.3%とかなり低い。「三回目」は100%と高くなるが、「四回目」は75.0%と低くなる。両位置の正用率を比較すると、「三回目」を除くいずれの調査時点でも文末でのほうが高かった。

③「到達動詞」（文末：一回目53.6%、二回目52.4%、三回目75.0%、四回目77.4%；連体修飾節：一回目100%、二回目72.7%、三回目100%、四回目100%）：

文末の場合は、「一回目」、「二回目」の正用率は53%程度と低いが、「三回目」、「四回目」は75.0%程度と高くなっている。一方、連体修飾節の場合は、「一回目」では誤用はなく正用率が100%となっているが、「二回目」は72.7%と低くなり、「三回目」、「四回目」では誤用はなく正用率はいずれも100%となる。両位置の正用率を比較すると、いずれの調査時点でも連体修飾節のほうが高かった。

④「状態動詞」（文末：一回目58.6%、二回目75.0%、三回目60.0%、四回目73.3%；連体修飾節：一回目0%、二回目55.6%、三回目66.7%、四回目100%）：

文末の場合は、「一回目」の正用率は58.6%と低く、「二回目」は75.0%と高くなったが、「三回目」は60.0%と低くなり、「四回目」は73.3%と再び高くなる。一方、連体修飾節の場合は、「一回目」では使用はなく、「二回目」は55.6%と低いが、「三回目」は66.7%と高くなり、「四回目」では誤用はなく正用率は100%となっている。両位置の正用率を比較すると、「一回目」と「二回目」の調査時点では文末のほうが高かった。

以上のように、文末の場合、4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」、「達成動詞」、「状態動詞」の3つの動詞タイプでは「二回目」の調査時点で正用率の伸びが見られたが、「到達動詞」の正用率の伸びは「三回目」の調査時点で見られ、他の動詞タイプより遅れていた。また、4つの動詞タイプの正用率を分類木分析によって比較した結果、「活動動詞」は「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の3つよりも正用率が有意に高かった。このことから、文末において「活動動詞」と「テイル」との結びつきは

「到達動詞」よりも学習者にとって習得しやすいものであること判明し、「アスペクト仮説」を支持する結果が得られた。

一方、連体修飾節の場合、「活動動詞」、「達成動詞」、「状態動詞」の3つではそれぞれ「三回目」、「四回目」の調査時点で正用率の伸びが見られた。対して、「到達動詞」では調査時点を通じて正用率の伸びが見られなかったが、「二回目」を除くいずれの調査時点でも100%の正用率が維持されており、かなり高い習熟度が示された。また、各動詞タイプの正用率を分類木分析によって比較した結果、4つの動詞タイプ間の正用率に明確な差はなかった。このうち、「活動動詞」と「到達動詞」の間で正用率に差はないことは、「アスペクト仮説」の予測と異なる結果となった。さらに、文末と連体修飾節における「到達動詞」の正用率を比較すると、いずれの調査時点においても連体修飾節のほうが文末よりも正用率が高いことが観察された。これは、文末と連体修飾節におけるテンス・アスペクト形式の振舞の違いに起因すると考えられる。既述したように、「到達動詞」は「テイル」のとの結び付きで「結果の状態」の意味を表す場合が多い。「結果の状態」では文末の場合「テイル形」のみが容認されているが、連体修飾節の場合「テイル形」を「タ形」に入れ替えることが可能である。本研究では、実際に学習者の「テイル形」における「結果の状態」の使用を見ると、連体修飾節では非使用が1例も見られず、文末よりも正用率が高くなっていることが観察された。よって、連動して連体修飾節における「到達動詞」の正用率も高くなっていた。このように、構文的位置の違いによって、学習者の動詞タイプ別の「テイル」の習得状況に差異が現れたことが明らかになった。以上、構文的位置の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況を見てきた。

最後に、上で見た表9-7の「テイル」の用法と表9-8の動詞タイプの両者を合わせた使用状況を見る。表9-9は文末と連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の正用と誤用の頻度および比率を示したものである。

表9-9 構文的位置による「テイル」の各用法での動詞タイプ別の正誤用の頻度および正用率 (n=40)

用法	動詞タイプ	構文的位置	一回目			二回目			三回目			四回目			合計		
			正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率
動作の持続	活動	文末	25	12	67.6%	67	12	84.8%	8	0	100%	17	0	100%	117	24	83.0%
		連体節	12	2	85.7%	35	10	77.8%	6	1	85.7%	16	0	100%	69	13	84.1%
	達成	文末	2	1	66.7%	0	0	-	2	0	100%	1	0	100%	5	1	83.3%
		連体節	0	0	-	1	1	50.0%	2	0	100%	0	0	-	3	1	75.0%
	到達	文末	1	0	100%	0	0	-	1	0	100%	0	0	-	2	0	100%
		連体節	15	10	60.0%	9	3	75.0%	7	6	53.8%	16	5	76.2%	47	24	66.2%
	状態	文末	15	10	60.0%	9	3	75.0%	7	6	53.8%	16	5	76.2%	47	24	66.2%
		連体節	0	0	-	3	2	60.0%	1	0	100%	2	0	100%	6	2	75.0%
合計	-	55	25	68.8%	115	28	80.4%	27	7	79.4%	52	5	91.2%	249	65	79.3%	
結果の状態	達成	文末	0	0	-	0	1	0%	1	0	100%	1	0	100%	2	1	66.7%
		連体節	0	0	-	0	1	0%	1	0	100%	0	0	-	1	1	50.0%
	到達	文末	12	12	50.0%	10	10	50.0%	17	7	70.8%	20	6	76.9%	59	35	62.8%
		連体節	5	0	100%	13	5	72.2%	4	0	100%	6	0	100%	28	5	84.8%
	合計	-	17	12	58.6%	23	17	57.5%	23	7	76.7%	27	6	81.8%	90	42	68.2%
パーフェクト	活動	文末	2	3	40.0%	0	0	-	1	0	100%	0	3	0%	3	6	33.3%
		連体節	0	0	-	0	0	-	1	1	50.0%	0	0	-	1	1	50.0%
	達成	文末	0	1	0%	0	0	-	0	1	0%	2	0	100%	2	2	50.0%
		連体節	0	0	-	0	0	-	2	0	100%	1	1	50.0%	3	1	75.0%
	到達	文末	1	1	50.0%	0	0	-	0	1	0%	1	0	100%	2	2	50.0%
		連体節	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	2	0%	0	2	0%
	状態	文末	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	2	0%	0	2	0%
		連体節	0	0	-	0	1	0%	0	0	-	0	0	-	0	1	0%
合計	-	3	5	37.5%	0	1	0%	4	3	57.1%	4	6	40.0%	11	15	42.3%	
繰り返す	活動	文末	10	3	76.9%	1	0	100%	10	2	83.3%	12	3	80.0%	33	8	80.5%
		連体節	0	0	-	0	0	-	1	2	33.3%	2	0	100%	3	2	60.0%
	達成	文末	0	2	0%	0	0	-	2	3	40.0%	1	1	50.0%	3	6	33.3%
		連体節	0	0	-	0	0	-	0	0	-	1	0	100%	1	0	100%
	到達	文末	0	0	-	0	0	-	3	0	100%	1	1	50.0%	4	1	80.0%
		連体節	0	0	-	0	0	-	0	0	-	1	0	100%	1	0	100%
	状態	文末	1	1	50.0%	0	0	-	1	0	100%	3	0	100%	5	1	83.3%
		連体節	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	0	0%
合計	-	11	6	64.7%	1	0	100%	17	7	70.8%	21	5	80.8%	50	18	73.5%	
単なる状態	活動	文末	0	0	-	1	0	100%	1	1	50.0%	2	0	100%	4	1	80.0%
		連体節	0	0	-	2	0	100%	0	0	-	1	0	100%	3	0	100%
	達成	文末	0	0	-	0	0	-	1	0	100%	1	0	100%	2	0	100%
		連体節	1	0	100%	1	0	100%	3	0	100%	2	0	100%	7	0	100%
	到達	文末	1	0	100%	1	0	100%	3	0	100%	2	0	100%	7	0	100%
		連体節	0	0	-	3	1	75.0%	1	0	100%	3	0	100%	7	1	87.5%
	状態	文末	1	1	50.0%	0	0	-	1	1	50.0%	3	1	75.0%	5	3	62.5%
		連体節	0	0	-	2	1	66.7%	1	0	100%	0	0	-	3	1	75.0%
合計	-	2	1	66.7%	9	2	81.8%	8	2	80.0%	12	1	92.3%	31	6	83.8%	

注：ここで示した正・誤用数、および正用率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

文末と連体修飾節における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の正用率を分類木分析によって比較した結果、文末では5つの用法のうち、「動作の持続」、「繰り返す」、「単なる状態」の3つの用法では「動詞タイプ」の違いによる影響が見られた。この場合、4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」との間、および

「達成動詞」と「状態動詞」との間で正用率には明確な差異が見られなかったが、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプは「達成動詞」と「状態動詞」の2つの動詞タイプよりも正用率が高かった。対して、「結果の状態」と「パーフェクト」では、動詞タイプの違いによる影響は見られなかった。このうち、「結果の状態」の用法における「達成動詞」（正用率 66.7%）と「到達動詞」（正用率 62.8%）の2つの動詞タイプでは、4つの調査時点の正用率の平均値を見ると、いずれも正用率は6割程度であり大きな差が見られなかった。また、「パーフェクト」の用法で使用された動詞は、4つの調査時点の正用率の平均値を見ると、動詞のもつ語彙的アスペクトの特徴に関わらず、いずれも正用率が50%を超えておらず、かなり低い結果となった。以上から文末において学習者の「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法の使用では動詞タイプの違いによって正用率に明確な差が現れることが判明した。

一方、連体修飾節には「テイルの用法」と「動詞タイプ」の違いによる影響が見られなかった。つまり、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因は連体修飾節における学習者の「テイル」の正誤用に影響しないことがわかった。連体修飾節におけるテンス・アスペクト形式の使用の規則は文末の場合とは異なる。文末の場合、「テイル形」のみが容認されるが、連体修飾節の場合、「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法では「テイル形」を「ル形」に、「結果の状態」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3つの用法では「テイル形」を「タ形」に置き換えることが可能である。そのため、連体修飾節では文末よりも「テイル形」の非使用率が低くなり、正用率が上がっていることが観察された。それゆえ、連体修飾節における学習者の「テイル」の使用は文末の場合と異なり、「テイル」の用法と動詞タイプの違いから受ける影響が弱くなっているからではないかと考えられる。このように、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによって、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況が異なることが明らかになった。

9.2.5 「時制形式」の違いによる「テイル」の習得状況（課題5）

第8章では、「テイル形」と「テイタ形」の「時制形式」の違いによる「テイル」の習得状況について、①「テイル」の用法別の習得状況、②動詞タイプ別の「テイル」の習得状況、③「テイル」の用法と動詞タイプの両者を合わせた使用状況の3つの段階で分析を行った。その結果を次の表9-10～表9-12に示す。以下、各段階で得られた結果を順に説明していく。

まず、時制形式の違いによる「テイル」の用法別の習得状況を見る。表9-10は各調査時点において、「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正用と誤用の頻度を示したものである。

表9-10 「テイル形」と「テイタ形」の用法別の正誤用の頻度（表8-3の再掲）

調査時点	用法	テイル形				テイタ形			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	動作の持続	30	0.714	12	0.286	25	0.658	13	0.342
	結果の状態	13	0.650	7	0.350	4	0.444	5	0.556
	パーフェクト	1	0.167	5	0.833	2	1.000	0	0
	繰り返す	5	0.714	2	0.286	6	0.600	4	0.400
	単なる状態	2	1.000	0	0	0	0	1	1.000
	合計	51	0.662	26	0.338	37	0.617	23	0.383
二回目	動作の持続	61	0.824	13	0.176	54	0.783	15	0.217
	結果の状態	11	0.733	4	0.267	12	0.480	13	0.520
	パーフェクト	0	0	0	0	0	0	1	1.000
	繰り返す	1	1.000	0	0	0	0	0	0
	単なる状態	8	0.800	2	0.200	1	1.000	0	0
	合計	81	0.810	19	0.190	67	0.698	29	0.302
三回目	動作の持続	25	0.806	6	0.194	2	0.667	1	0.333
	結果の状態	23	0.793	6	0.207	0	0	1	1.000
	パーフェクト	4	0.667	2	0.333	0	0	1	1.000
	繰り返す	16	0.762	5	0.238	1	0.333	2	0.667
	単なる状態	8	0.800	2	0.200	0	0	0	0
	合計	76	0.784	21	0.216	3	0.375	5	0.625
四回目	動作の持続	49	0.907	5	0.093	3	1.000	0	0
	結果の状態	24	0.800	6	0.200	3	1.000	0	0
	パーフェクト	4	0.571	3	0.429	0	0	3	1.000
	繰り返す	21	0.808	5	0.192	0	0	0	0
	単なる状態	11	0.917	1	0.083	1	1.000	0	0
	合計	109	0.845	20	0.155	7	0.700	3	0.300

以下、表 9-10 に従って、5 つの用法の習得状況を順番に述べていく。

①「動作の持続」(テイル形：一回目 71.4%、二回目 82.4%、三回目 80.6%、四回目 90.7%；テイタ形：一回目 65.8%、二回目 78.3%、三回目 66.7%、四回目 100%)⁵：

「テイル形」の場合は「一回目」の正用率は 71.4%とあまり高くないが、「二回目」、「三回目」は 80%程度と高くなり、「四回目」は 90.7%とさらに高くなっている。一方、「テイタ形」の場合は「一回目」の正用率は 65.8%とかなり高くないが、「二回目」は 78.3%と高くなり、「三回目」は 66.7%と低くなったが、「四回目」では誤用はなく正用率が 100%と高くなっている。このように、「四回目」を除くいずれの調査時点でも「テイル形」の正用率が高かった。

②「結果の状態」(テイル形：一回目 65.0%、二回目 73.3%、三回目 79.3%、四回目 80.0%；テイタ形：一回目 44.4%、二回目 48.0%、三回目 0%、四回目 100%)：

「テイル形」の場合は「一回目」の正用率は 65.0%と高くないが、「二回目」は 73.3%と高くなり、「三回目」「四回目」は 80.0%前後とさらに高くなっている。一方、「テイタ形」の場合は、「一回目」、「二回目」の正用率が 4 割程度とかなり低く、「三回目」では正用はなく正用率が 0%とさらに低くなり、「四回目」では誤用はなく正用率は 100%となっている。このように、「動作の持続」と同様に、「四回目」を除くいずれの調査時点でも「テイル形」の正用率が高かった。

③「パーフェクト」(テイル形：一回目 16.7%、二回目 0%、三回目 66.7%、四回目 57.1%；テイタ形：一回目 100%、二回目 0%、三回目 0%、四回目 0%)：

「テイル形」の場合は「一回目」の正用率は 16.7%とかなり低く、「二回目」には使用がない。「三回目」は 66.7%と高くなるが、「四回目」は 57.1%と再び低くなる。一方、「テイタ形」の場合は、「一回目」では誤用はなく正用率が 100%となっているが、「二回目」、「三回目」、「四回目」では正用はなく正用率はいずれも 0%となる。

④「繰り返し」(テイル形：一回目 71.4%、二回目 100%、三回目 76.2%、四回目 80.8%；

⁵ 括弧内に示した数値は「テイル形」と「テイタ形」の正用率である。以下同様。

テイタ形：一回目 60.0%、二回目 0%、三回目 33.3%、四回目 0%）：

「テイル形」の場合は「一回目」の正用率は71.4%、「二回目」では誤用はなく正用率は100%、「三回目」、「四回目」は8割前後と下がる。一方、「テイタ形」の場合は「一回目」の正用率は60.0%と低く、「二回目」では使用はなく、「三回目」は33.3%と低くなったが、「四回目」には使用はなかった。このように、いずれの調査時点においても「テイル形」の正用率の方が高かった。

⑤「単なる状態」（テイル形：一回目 100%、二回目 80.0%、三回目 80.0%、四回目 91.7%；テイタ形：一回目 0%、二回目 100%、三回目 0%、四回目 100%）：

「テイル形」の場合は、「一回目」に誤用はなく正用率は100%、「二回目」、「三回目」は80.0%と下がるが、「四回目」は91.7%と上がる。一方、「テイタ形」の場合は、用例そのものが少ないために、正用率が0%と100%しか出ていない。

以上のように、「テイル形」の場合、5つの用法とも学習者の日本語学習期間が長くなるにつれて正用率が上がる傾向が見られたが、用法の違いによって正用率が伸びる時期が異なることが観察された。このうち、「動作の持続」と「結果の状態」の2つの用法では「二回目」の調査時点で正用率の伸びが見られ、各用法の中で正用率の伸びが最も早かった。次いで「パーフェクト」の用法であり、正用率の伸びは「三回目」の調査時点に見られた。「繰り返し」と「単なる状態」の2つの正用率の伸びが最も遅れており、「四回目」の調査時点で初めて見られた。ただし、「単なる状態」の用法では「一回目」の調査時点で正用率が100%となり、その後正用率が下がっても調査時期を通じて8割以上の正用率に維持されており、習熟度がかなり高いと言える。また、5つの用法の正用率を分類木分析で比較した結果、5つの用法のうち「動作の持続」、「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の4つの用法の間には、正用率に差が見られず、いずれも「パーフェクト」の用法よりも正用率が高かった。このことから、「テイル形」の習得では5つの用法のうち、「パーフェクト」の用法が最も習得されにくいことが明らかになった。

一方、「テイタ形」の場合、「テイル形」における5つの用法の正用率の平均値と比較すると、いずれの調査時点においても「テイル形」のほうが「テイタ形」よりも正用率が高かったことから、時制形式の違いによる学習者の「テイル」の習得状況には明確な差異が現れ、「テイタ形」の習得が「テイル形」の習得よりも困難であることが明らかになった。その理由としては、「テイタ形」の使用には過去を表すテンスの処理が必要であるため、学習者は「テイル形」に比べて「テイタ形」を学習する際に負担が大きく習得が難しいと考えられる。さらに、その誤用例を見ると、「テイタ形」を使用すべきところに「タ形」を使ってしまっている非使用例が最も多く、「テイタ形」と「タ形」の使い分けの混乱が見られた。また、表9-10のように、学習者の「テイタ形」の使用は主に「一回目」と「二回目」の2つの調査時点に集中していた。この2つの調査時点における5つの用法の正用率を見ると、「動作の持続」以外の用法では正用率の伸びはなかった。また、5つの用法の正用率を分類木分析で比較した結果、5つの用法のうち「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法は「結果の状態」、「繰り返し」、「パーフェクト」の3つの用法よりも正用率が高い、という「テイル形」の場合と異なる結果が得られた。このように、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによって学習者の「テイル」の用法別の習得状況に差異が現れていた。以上、時制形式の違いによる「テイル」の用法別の習得状況を見た。

次に、時制形式の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況を見る。表9-11は各調査時点における、「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の「テイル」の正用と誤用の頻度を示したものである。

表9-11 「テイル形」と「テイタ形」における動詞タイプ別の正誤用の頻度(表8-5の再掲)

調査時点	用法	テイル形				テイタ形			
		正用		誤用		正用		誤用	
		頻度	正用率	頻度	誤用率	頻度	正用率	頻度	誤用率
一回目	活動動詞	23	0.719	9	0.281	26	0.703	11	0.297
	達成動詞	1	0.333	2	0.667	1	0.333	2	0.667
	到達動詞	15	0.652	8	0.348	5	0.500	5	0.500
	状態動詞	12	0.632	7	0.368	5	0.500	5	0.500
	合計	51	0.662	26	0.338	37	0.617	23	0.383
二回目	活動動詞	59	0.855	10	0.145	45	0.789	12	0.211
	達成動詞	2	0.400	3	0.600	1	1.000	0	0
	到達動詞	15	0.833	3	0.167	12	0.480	13	0.520
	状態動詞	5	0.625	3	0.375	9	0.692	4	0.308
	合計	81	0.810	19	0.190	67	0.698	29	0.302
三回目	活動動詞	27	0.871	4	0.129	1	0.250	3	0.750
	達成動詞	9	0.692	4	0.308	2	1.000	0	0
	到達動詞	29	0.829	6	0.171	0	0	2	1.000
	状態動詞	11	0.611	7	0.389	0	0	0	0
	合計	76	0.784	21	0.216	3	0.375	5	0.625
四回目	活動動詞	46	0.920	4	0.080	3	0.600	2	0.400
	達成動詞	9	0.900	1	0.100	0	0	1	1.000
	到達動詞	30	0.811	7	0.189	4	1.000	0	0
	状態動詞	24	0.750	8	0.250	0	0	0	0
	合計	109	0.845	20	0.155	7	0.700	3	0.300

注：ここで示した正誤用の頻度と比率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

以下、表9-11に従って、各動詞タイプの「テイル」の習得状況を順に述べていく。

①「活動動詞」(テイル形：一回目 71.9%、二回目 85.5%、三回目 87.1%、四回目 92.0% ; テイタ形：一回目 70.3%、二回目 78.9%、三回目 25.0%、四回目 60.0%) :

「テイル形」の場合は、「一回目」の正用率は71.9%と高くないが、「二回目」、「三回目」は85.0%程度と高くなり、「四回目」は92.0%とさらに高くなっている。一方、「テイタ形」の場合は、「一回目」、「二回目」の正用率は7割程度、「三回目」は25.0%と低くなったが、「四回目」は60.0%と高くなっている。このように、いずれの調査時点においても「テイル形」の正用率が高かった。

②「達成動詞」(テイル形：一回目 33.3%、二回目 40.0%、三回目 69.2%、四回目 90.0% ; テイタ形：一回目 33.3%、二回目 100%、三回目 100%、四回目 0%) :

「テイル形」の場合は、「一回目」、「二回目」の正用率はそれぞれ33.3%、40.0%と

かなり低い、「三回目」は 69.2%と上がり、「四回目」は 90.0%とさらに高くなっている。一方、「テイタ形」の場合は、「一回目」の正用率は 33.3%とかなり低い、「二回目」、「三回目」には誤用はなく、正用率がいずれも 100%となった。しかし「四回目」には正用はなく、正用率は 0%となる。

③「到達動詞」(テイル形:一回目 65.2%、二回目 83.3%、三回目 82.9%、四回目 81.1% ; テイタ形:一回目 50.0%、二回目 48.0%、三回目 0%、四回目 100%) :

「テイル形」の場合は、「一回目」の正用率は 65.2%と高くないが、「二回目」、「三回目」、「三回目」は 8 割程度と高くなっている。一方、「テイタ形」の場合は、「一回目」、「二回目」は 50.0%、「三回目」では正用がないため正用率は 0%、「四回目」では誤用がなく正用率は 100%となる。このように、「四回目」を除くいずれの調査時点でも「テイル形」の正用率が高かった。

④「状態動詞」(テイル形:一回目 63.2%、二回目 62.5%、三回目 61.1%、四回目 75.0% ; テイタ形:一回目 50.0%、二回目 69.2%、三回目 0%、四回目 0%) :

「テイル形」の場合は、「一回目」、「二回目」、「三回目」の正用率は 63.0%程度と低い、「四回目」は 75.0%に上がる。一方、「テイタ形」の場合は、「一回目」の正用率は 50.0%と低い、「二回目」は 69.2%に上がり、「三回目」、「四回目」では使用がないため正用率はいずれも 0%である。

以上のように、「テイル形」の場合、4つの動詞タイプとも日本語学習期間が長くなるにつれて正用率が上がる傾向が見られたが、動詞タイプの違いによって伸びる時期が異なることが観察された。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの正用率の伸びが最も早く、「二回目」の調査時点で見られたが、その後正用率はあまり変わらなかった。次いで「達成動詞」、「三回目」の調査時点で正用率の伸びが見られた。そして、「状態動詞」の正用率の伸びが最も遅れており、「四回目」の調査時点で見られた。さらに、動詞タイプ別の「テイル形」の正用率を分類木分析で比較した結果、4つの動詞タイプのうち「活動動詞」と「到達動詞」の2つは「達成動詞」

と「状態動詞」の2つよりも正用率が高かった。このように、「テイル形」の習得では学習者は「達成動詞」と「状態動詞」の2つよりも「活動動詞」と「到達動詞」の2つのほうが「テイル」をより正確にられていることが明らかになった。

一方、「テイタ形」の場合、表 9-11 に示されるように、学習者の「テイタ形」の使用は主に「一回目」と「二回目」の2つの調査時点に集中していた。この2つの調査時点における4つの動詞タイプの正用率を見ると、「到達動詞」の正用率のみが伸びていないことが観察された。しかし、動詞タイプ別の「テイタ形」の正用率を分類木分析で比較した結果、4つの動詞タイプの正用率で明確な差異はないという結果が得られた。このように、「テイル形」の習得でも「テイタ形」の習得でも「活動動詞」と「到達動詞」の間で正用率に明確な差異はないという共通する使用状況が観察された。以上、時制形式の違いによる動詞タイプ別の「テイル」の習得状況を見てきた。

最後に、上で見た表 9-10 の「テイル」の用法と表 9-11 の動詞タイプの両者を合わせた使用状況を見たい。表 9-12 は「テイル形」と「テイタ形」における「テイル」の各用法で使用された動詞タイプ別の正用と誤用の頻度および比率を示したものである。

表9-12 時制形式による「テイル」の各用法での動詞タイプ別の正誤用の頻度および正用率 (n=40)

用法	動詞タイプ	時制形式	一回目			二回目			三回目			四回目			合計		
			正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率	正用数	誤用数	正用率
動作の持続	活動	テイル	18	5	78.3%	58	10	85.3%	14	0	100%	30	0	100%	120	15	88.9%
		テイタ	19	9	67.9%	44	12	78.6%	0	1	0%	3	0	100%	66	22	75.0%
	達成	テイル	1	1	50.0%	0	1	0%	2	0	100%	1	0	100%	4	2	66.7%
		テイタ	1	0	100%	1	0	100%	2	0	100%	0	0	-	4	0	100%
	到達	テイル	1	0	100%	0	0	-	1	0	100%	0	0	-	2	0	100%
	状態	テイル	10	6	62.5%	3	2	60.0%	8	6	57.1%	18	5	78.3%	39	19	67.2%
		テイタ	5	4	55.6%	9	3	75.0%	0	0	-	0	0	-	14	7	66.7%
合計	-	55	25	68.8%	115	28	80.4%	27	7	79.4%	52	5	91.2%	249	65	79.3%	
結果の状態	達成	テイル	0	0	-	0	2	0%	2	0	100%	1	0	100%	3	2	60.0%
	到達	テイル	13	7	65.0%	11	2	84.6%	21	6	77.8%	23	6	79.3%	68	21	76.4%
		テイタ	4	5	44.4%	12	13	48.0%	0	1	0%	3	0	100%	19	19	50.0%
	合計	-	17	12	58.6%	23	17	57.5%	23	7	76.7%	27	6	81.8%	90	42	68.2%
パーフェクト	活動	テイル	1	3	-	0	0	-	2	1	66.7%	0	1	0%	3	5	37.5%
		テイタ	1	0	100%	0	0	-	0	0	-	0	2	0%	1	2	33.3%
	達成	テイル	0	1	0%	0	0	-	2	1	66.7%	3	0	100%	5	2	71.4%
		テイタ	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	1	0%	0	1	0%
	到達	テイル	0	1	0%	0	0	-	0	0	-	1	0	100%	1	1	50.0%
		テイタ	1	0	100%	0	0	-	0	1	0%	0	0	-	1	1	50.0%
	状態	テイル	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	2	0%	0	2	0%
テイタ		0	0	-	0	1	0%	0	0	-	0	0	-	0	1	0%	
合計	-	3	5	37.5%	0	1	0%	4	3	57.1%	4	6	40.0%	11	15	42.3%	
繰り返し	活動	テイル	4	1	80.0%	1	0	100%	10	2	83.3%	14	3	82.4%	29	6	82.9%
		テイタ	6	2	75.0%	0	0	-	1	2	33.3%	0	0	-	7	4	63.6%
	達成	テイル	0	0	-	0	0	-	2	3	40.0%	2	1	66.7%	4	4	50.0%
		テイタ	0	2	0%	0	0	-	0	0	-	0	0	-	0	2	0%
	到達	テイル	0	0	-	0	0	-	3	0	100%	2	1	66.7%	5	1	83.3%
	状態	テイル	1	1	50.0%	0	0	-	1	0	100%	3	0	100%	5	1	83.3%
合計	-	11	6	64.7%	1	0	100%	17	7	70.8%	21	5	80.8%	50	18	73.5%	
単なる状態	活動	テイル	0	0	-	0	0	-	1	1	50.0%	2	0	100%	3	1	75.0%
		テイタ	0	0	-	1	0	100%	0	0	-	0	0	-	1	0	100%
	達成	テイル	0	0	-	2	0	100%	1	0	100%	2	0	100%	5	0	100%
	到達	テイル	1	0	100%	4	1	80.0%	4	0	100%	4	0	100%	13	1	92.9%
		テイタ	0	0	-	0	0	-	0	0	-	1	0	100%	13	1	92.9%
	状態	テイル	1	0	100%	2	1	66.7%	2	1	66.7%	3	1	75.0%	3	1	75.0%
		テイタ	0	1	0%	0	0	-	0	0	-	0	0	-	8	3	72.7%
合計	-	2	1	66.7%	9	2	81.8%	8	2	80.0%	12	1	92.3%	0	1	0%	

注：ここで示した正・誤用数、および正用率はすべて延べ語数によって計算されたものである。

「テイル形」と「テイタ形」の習得における「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響について分類木分析によって考察した結果、「テイル形」の習得では「テイルの用法」よりも「動詞タイプ」からより強い影響を受けていることがわかった。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」との間、および「達成動詞」と「状態動詞」との間で正用率には明確な差異が見られなかったが、「活動動詞」と「到達動詞」

の2つは「達成動詞」と「状態動詞」の2つよりも高い正用率で用いられていた。また、「活動動詞」と「到達動詞」の2つの動詞タイプの使用ではさらに「テイルの用法」の違いが影響していた。この場合、5つの用法のうち「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法が最も習得されやすく、「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法が同程度で続き、「パーフェクト」の用法が最も習得されにくいことが明らかになった。このように、同じ「活動動詞」と「到達動詞」でも「テイル」との結び付きにより表される意味の違いで、学習者の「テイル形」の習得状況に影響していることがわかった。

一方、「テイタ形」の習得では「テイルの用法」の違いによる影響しか見られなかった。つまり、「動詞タイプ」と「日本語学習者期間」の違いは学習者の「テイタ形」の習得に影響しないことがわかった。この場合、5つの用法のうち「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法は「結果の状態」、「繰り返し」、「パーフェクト」の3つの用法よりも正用率が高い、という「テイル形」の習得と異なる結果が得られた。このように、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによって、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況が異なることが明らかになった。

9.3 今後の課題

本研究では、「テイル」の習得過程における①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因の影響および各要因間の相互作用を明らかにした。しかし、依然、以下の研究課題が残っている。

1つ目は「状態動詞」の分類基準の妥当性である。これまでの「テイル」の習得研究では、Vendler (1957) の動詞4分類が最も広範に援用されてきた。本研究でも Vendler の動詞4分類を援用し、動詞の語彙的アスペクトに「動的」、「限界的」、「瞬間的」の3つの意味要素を有するか否かによって、動詞(句)を「状態動詞」、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の4つのタイプに分けた。しかし、このうち「状態動詞」の分類基準に問題点があると言える。Vendler の分類によれば、動詞はその指し示す出来事

が時間経過による変化、或は動作を伴うかどうかにより、「ある」「いる」などのように変化・動作が伴わない「状態動詞」と、「走る」「死ぬ」などのように動作主の変化・動作が伴う「動態動詞」に二分される。この基準に従えば、運動性が乏しい「思う、信じる」などのような心理動詞と、運動性がない「いる、ある」などのような静態動詞はいずれも「状態動詞」に分類されるはずである。しかし、「思う、信じる」などの心理動詞には時間的展開性（開始、進行、終結など）があるのでアスペクトの対立が成立するという点で、時間的展開性を持たず、常に恒常的状态を表す「いる、ある」などの静態動詞とは異なる。そのため、この2種類の動詞が同じ動詞タイプに分類されるのは不適切であると思われ、より細かい分類が必要である。

2 つ目は完成相形式「ル形・タ形」の使用状況に対する議論の欠如である。本研究では非完成相形式「テイル」の習得を中心に調査を行った。学習者の「テイル」の非使用と過剰使用を考察するにあたって「ル形・タ形」の誤用についてある程度明らかになったが、それ以外の「ル形・タ形」の使用状況について触れていない。しかし、「テイル」の5つの用法のうち、連体修飾節において、「動作の持続」と「繰り返し」の2つの用法を表す場合、例示した(1)(2)のように「テイル形」を「ル形」に入れ替えることが可能であるが⁶、「タ形」に入れ替えると過去に起こった動作・出来事を表すことになる。

- (1) a. 英語を学んでいる小学生が多い。(動作の持続)
 b. 英語を {学ぶ／#学んだ} 小学生が多い⁷。
- (2) a. 毎日コーヒーを飲んでいる人は脳卒中のリスクが低下する。(繰り返し)
 b. 毎日コーヒーを {飲む／#飲んだ} 人は脳卒中リスクが低下する。

⁶ ただし、「動作の持続」の用法では、目の前で進行中の動作・出来事を表す場合、下例のように「テイル形」しか使えない。

そこで本を {*読む／読んでいる} 人は太郎です。

⁷ 「#」は文法的には正しいが、「テイル」の置き換えとしては使えないことを表す。

一方、「結果の状態」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3つの用法を表す場合、(3) (4) (5) のように「テイル形」を「タ形」で置き換えることができるが、これらの例文を「ル形」にすると、非文法的な文になる⁸。

- (3) a. 汚れている服は水につけておきなさい。(結果の状態)
b. {*汚れる／汚れた} 服は水につけておきなさい。
- (4) a. 日本語能力試験1級に合格している人のみ応募できる。(パーフェクト)
b. 日本語能力試験1級に {*合格する／合格した} 人のみ応募できる。
- (5) a. 軽油よりもバイオ燃料の方が優れている点が多い。(単なる状態)
b. 軽油よりもバイオ燃料の方が {*優れる／優れた} 点が多い。

このように、連体修飾節中でのル形とタ形の使用の違いが、学習者の連体修飾節の習得にどのような影響を与えるかということも重要な研究課題であるため、今後の考察対象としては非完成相形式「テイル形・テイタ形」のみならず、非完成相形式「ル形・タ形」の使用状況も考慮に入れ、第二言語としての日本語のテンス・アスペクトの習得のメカニズムの解明を試みたい。

3つ目は作文テーマによる影響である。本研究は4つのテーマの作文データを用いて「テイル」の習得を縦断的に考察した。異なるトピックのデータを用いることによってより多様な動詞の使用状況を観察できるため、動詞タイプと「テイル」の用法との関連性についてより深く考察することができる利点がある。ただし、一方で学習者

⁸ ただし、「単なる状態」を表す場合、「存在する、異なる、属する、違う」のような存在や関係などの状態的な意味しか持たない動詞は、連体修飾節において若干ニュアンスが異なるが、ル形とタ形の両方とも表せる(金水1994:56)。

- (i) {異なる／異なった} 種類の問題
(ii) ひと味 {違う／違った} 味噌
(iii) {関連する／関連した} 事件

の「テイル」の使用がトピックの違いによって特定の動詞タイプ、「テイル」の用法、時制形式に偏っていることが観察された。そのため、本研究で得られた調査結果の普遍性を文法性判断テストなどの調査方法によって検証する必要がある。

4つ目は学習者が誤用を起こす原因についての考察が不十分である。本論文では「テイル」の習得における「テイルの用法」、「動詞タイプ」、「構文的位置」、「時制形式」、「日本語学習期間」の5つの要因について、「いつ」「どこ」に誤用が起きやすいかを示したが、今後は「なぜ」誤用が起きるのかについて文法的に分析していきたい。

本論文の研究成果が、台湾人日本語学習者にとって有益なものとなり、さらに「テイル」の習得に関する研究の一助となれば幸いである。

参考文献

- 井出祥子編 (1984) 『主婦の一週間の談話資料 解説・本文編』 文部省科学研究費補助金特別研究「情報化社会における言語の標準化」総括班刊行物.
- 稲垣俊史 (2011) 「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得について—アスペクト仮説からの考察—」『中国語話者のための日本語教育研究』 2, pp.15-26.
- 稲垣俊史 (2013) 「テイル形の二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』 4, pp.29-41.
- 庵功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の 捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』 4, pp.75-94.
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える—』 スリーエーネットワーク.
- 伊藤創 (2011) 「連体修飾節におけるル形、タ形についての一考察—学習者への提示のあり方について—」『国際研究論叢』 24-2, pp.193-208.
- 岩本遠億・井本亮 (2008) 『事象アスペクト論』 開拓社.
- 井島正博 (1991) 「従属節におけるテンスとアスペクト」『東洋大学日本語研究』 4, pp.13-57.
- 井上優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語—」生越直樹 (編) 『シリーズ言語科学4 対照言語学』 pp.125-159, 東京大学出版会.
- 魚住友子 (1998) 「追跡調査に見られる「～テイル」の習得状況」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成7-9年度科学研究費研究成果報告書, pp.100-111.
- 江田すみれ (2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法』 くろしお出版.
- 江田すみれ (2014) 「設定時点が未来の「効力持続」—未来まで広がる「ている」の用

- 法について一』『日本語／日本語教育研究』5, pp.47-56.
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって一金田一的段階一」『宮城教育大学国語国文』8, pp.51-63.
- 奥田靖雄 (1978a) 「アスペクトの研究をめぐって (上)」『教育国語』53, pp.33-44.
- 奥田靖雄 (1978b) 「アスペクトの研究をめぐって (下)」『教育国語』54, pp.14-27.
- 奥田靖雄 (1993) 「動詞の終止形 (その1)」『教育国語 第2期』9, pp.44-53.
- 奥田靖雄 (1988a) 「時間の表現 (1)」『教育国語』94, pp.2-17.
- 奥田靖雄 (1988b) 「時間の表現 (2)」『教育国語』95, pp.28-41.
- 奥田靖雄 (1993) 「動詞の終止形 (その1)」『教育国語 第2期』9, pp.44-53.
- 奥田靖雄 (1994) 「動詞の終止形 (その2)」『教育国語 第2期』12, pp.27-42.
- 奥田靖雄 (1994) 「動詞の終止形 (その3)」『教育国語 第2期』13, pp.34-40.
- 大津敬一郎 (2004) 「連体修飾とは何か」『日本語学』23-3, pp.6-16.
- 大関浩美 (2004) 「日本語学習者の連体修飾構造習得過程一修飾節の状態性の観点から一」『日本語教育』121, pp.36-45.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点一』ひつじ書房.
- 河先俊子 (1994) 「誤用分析による韓国人学習者のテンス・アスペクトの習得過程の考察」『平成6年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.76-79.
- 何琳 (1998) 「「～ている」に相当する中国語の表現から日本語と中国語」『中国関係論説資料』40-2 (増刊), pp.455-463.
- 木村秀樹 (1982) 「テンス・アスペクト一中国語一」『講座日本語学11一外国語との対照Ⅱ』 pp.19-39, 明治書房.
- 木村よう (1994) 「日本語のテンスとアスペクトの習得一中国語話者の場合一」『東海大学留学生センター三十周年記念論集』 pp.221-235, 東海大学出版会.
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の「～た」について」田窪行則 (編) 『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版, pp.29-65.

- 金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『時・否定と取り立て』岩波書店。
- 金春女（2007）「連体修飾節における「～タ」形と「～テイル」形について一述定性という観点から一」『言葉と文化』8, pp.157-172.
- 簡卉雯（2009）「日本語アスペクト形式「ている」の習得過程の中間言語分析一中国語母語話者を対象に一」東北大学大学院博士学位論。
- 簡卉雯・中村渉（2010）「「ている」の習得過程に関する事例研究一難易度を左右する要因を中心に一」『国際文化研究』16, pp.45-56.
- 簡卉雯（2012）「「ている」の「パーフェクト」用法の習得：非現実性を中心に」笹原健・野瀬昌彦（編）『日本語とX語の対照2一外国語の眼鏡をとおして見る日本語一対照言語学若手の会シンポジウム2011発表論文集』pp.23-33, 三恵社。
- 許夏珮（1997）「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95, pp.37-48.
- 許夏珮（2000）「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究一OPIデータの分析結果から一」『日本語教育』104, pp.20-29.
- 許夏珮（2002）「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115, pp.41-48.
- 許夏珮（2005）『日本語学習者のアスペクトの習得』くろしお出版。
- 許夏珮（2009）「連体修飾節におけるテイルの習得」『東呉日本語教育学報』32, pp.53-80.
- 工藤真由美（1982a）「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』1-2, pp.38-47.
- 工藤真由美（1982b）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4, pp.51-88.
- 工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会（編）『ことばの科学 3』pp.53-118, むぎ書房。
- 工藤真由美（1989）「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜国立大学人文

- 紀要』36, pp.1-24.
- 工藤真由美 (1992) 「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学人文紀要』39, pp.169-192.
- 工藤真由美 (1993) 「小説の地の文のテンポラリティー」言語学研究会 (編) 『ことばの科学 6』 pp.19-65, むぎ書房.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系をディスコース」言語学研究会 (編) 『ことばの科学 7』 pp.81-136, むぎ書房.
- 工藤真由美 (1997) 「反事実性の表現をめぐる」『横浜国立大学人文紀要』44, pp.51-65.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87, pp.153-164.
- 黒野敦子 (1998) 「留学生の発話に見られるテンス・アスペクトの誤用について」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成7-9年度科学研究費研究成果報告書, pp.112-124.
- 国立国語研究所 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.
- 小山悟 (2004) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性ー母語の役割と影響を中心にー」小山悟・大友可能子・野原美和子 (編) 『言語と教育: 日本語を対象として』 pp.415-436, くろしお出版.
- 小熊利江・品川直美・山下直子・米沢久美子 (1998) 「連体修飾の使用状況に関する一考察」『言語文化と日本語教育』16, pp.70-79.
- 黄淑妙 (2009) 『日本語習得の達成度分析ー「台湾人日本語学習者コーパス」(CTLJ)の構築と分析を中心にー』致良出版社.

- 佐藤響子 (2001) 「かたりにおけるテンスの交替とアスペクト : *Frog, Where are you?* をデータとして」『横浜市立大学論叢人文科学系列』 52-1 (2), pp.233-259.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク.
- 崔亜珍 (2007) 「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観」『比較社会文化研究』 22, pp.101-109.
- 崔亜珍 (2009) 「SRE理論の観点から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究—中国人日本語学習者を対象に—」『日本語教育』 142, pp.80-90.
- 崔亜珍 (2011) 「R時の認識の観点から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究—イラストを使った文完成テストを用いて—」『比較社会文化研究』 30, pp.55-65.
- 白井恭弘 (1998) 「第3章 言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子 (編) 『21世紀の民族と国家 第8巻 ボーダーレス時代の外国語教育』 pp.69-108, 未来社.
- 白井恭弘 (2002) 「動詞の意味特性と動詞形態素の習得—プロトタイプ形成と生得性—」大堀壽夫 (編) 『認知言語学Ⅱ : カテゴリー化』 pp.163-183, 東京大学出版会.
- 白井恭弘 (2004) 「非完成相『ている』の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉 (編) 『対照言語学の新展開』 pp.71-99, ひつじ書房.
- 塩川絵里子 (2007) 「日本語学習者によるアスペクト形式「テイル」の習得—文末と連体修飾節との関係を中心に—」『日本語教育』 134, pp.100-109.
- 砂川有里子 (1986) 『日本語文法セルフマスターシリーズ2 する、した、している』くろしお出版.
- 菅谷有子 (1996) 「「Vテイル」に対応する中国語アスペクト」『小出記念日本語教育研究会論文集』 5, pp.163-186.
- 菅谷有子 (1999) 「中国人学習者のテンス・アスペクトの誤用—連体修飾節を中心に—」『文学部紀要』 13-1, pp.19-39.
- 須田義治 (2000) 「限界性について—限界動詞と無限界動詞—」『山梨大学人間科学部紀要』 1-2, pp.87-94.

- 須田義治 (2000) 「アスペクト的な意味の体系性について」『千葉大学留学生センター紀要』6, pp.1-32.
- 須田義治 (2001) 「アスペクトと関わる動詞の諸タイプについて」『国文学 解釈と鑑賞』68-1, pp.48-56.
- 須田義治 (2006) 「小説の地の文の時間表現—テンポラリティーを中心に—」『国文学 解釈と鑑賞』71-1, pp.95-105.
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房.
- 須田義治 (2010) 「日本語のテンスとアスペクトの意味の体系性」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座1 語・文と文法カテゴリーの意味』 pp.91-112, ひつじ書房.
- 菅谷奈津恵 (2002) 「日本語のテンス・アスペクト習得に関する事例研究—自然習得をしてきた露・英・仏語母語話者を対象に—」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成12-13年度科学研究費研究成果報告書, pp.102-114.
- 菅谷奈津恵 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に—」『日本語教育』119, pp.65-74.
- 菅谷奈津恵 (2004a) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討—」『日本語教育』123, pp.56-65.
- 菅谷奈津恵 (2004b) 「初級日本語学習者のテイルの習得に関する縦断研究—マラティ語、テルグ語母語話者の場合—」『言語文化と日本語教育』27, pp.170-181.
- 菅谷奈津恵 (2005a) 「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育』11月増刊特集号, pp.39-66.
- 菅谷奈津恵 (2005b) 「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究—内在アスペクトと母語の役割—」お茶の水女子大学大学院博士学位論文.
- 盛文淵・吉本啓 (2010) 「中国語母語話者による日本語名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現の習得研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』5, pp.93-100.
- 副島健作 (2007) 『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.

- 孫猛・小泉政利・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2010) 「第二言語としての「テイル」の習得におけるプロトタイプの形成」『東北大学言語学論集』 14, pp.27-38.
- 高橋太郎 (1976) 「すがたともくろみ」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 pp.117-153, むぎ書房.
- 田中道治 (2010) 「連体修飾節の「テイル」と「タ」ーその教育」『日本語・日本文化研究』 16, pp.42-57.
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析ー中国語話者の母語干渉20例ー』スリーエーネットワーク.
- 玉岡賀津雄 (2012) 「統計」近藤安月子・小森和子 (編) 『研究社日本語教育事典』pp.317-336, 研究社.
- 陳建璋 (2012) 「台湾人日本語学習者によるテイル用法別の習得研究ー「台湾人日本語学習者コーパス」に基づく縦断調査ー」『台湾日本語文学報』 31, pp.127-152.
- 陳建璋 (2014) 「日本語のアスペクト形式「テイル」の習得に関する横断研究ー動詞の語彙的アスペクトによる影響についてー」『言葉と文化』 15, pp.31-47.
- 陳建璋 (2014) 「文末・連体修飾節におけるテイルの用法の習得研究」『ことばの科学』 28, pp.125-143.
- 陳建璋 (2015) 「台湾人日本語学習者によるアスペクトの習得についてー「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響に関する縦断的考察ー」『日本教科教育学会誌』 38-3, pp.77-90.
- 高梨信乃 (2013) 「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題: 動詞のテイル形を例に」『神戸大学留学生センター紀要』 19, pp.23-41.
- 高梨信乃 (2014) 「上級学習者のテイル形の使用に見られる問題点ー文法指導の隙間ー」『日本語／日本語教育研究』 5, pp.29-46.
- 寺村秀夫 (1978) 『日本語教育指導参考書5 日本語の文法 (下)』国立国語研究所.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版.

- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I - 日本語文法編 -』 くろしお出版.
- 中畠孝幸 (1994) 「連体修飾と動詞の形」『三重大学日本語学文学』 5, pp.27-36.
- 中畠孝幸 (1995) 「現代日本語の連体修飾節における動詞の形についてール形・タ形と
テイル形・テイタ形ー」『人文論叢: 三重大学人文学部文化学科研究紀要』12, pp.23-
32.
- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』 くろしお出版.
- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンスー独立文と連体節ー」『人文研究』
48-10, pp.23-60.
- 丹羽哲也 (1997) 「連体節のテンスについて」『人文研究』 49-5, pp.29-64.
- 西由美子・白井恭弘 (2001) 「アスペクト構造の語彙化における普遍性と差異ー英語と
日本語の場合ー」南雅彦・アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育 II』 pp.75-
92, くろしお出版.
- 西由美子・白井恭弘 (2004) 「会話における「ている」の意味: アスペクト二構成要素
理論による分析」南雅彦・浅野真紀子 (編) 『言語学と日本語教育3』 pp.231-249,
くろしお出版.
- 西山佑司 (2004) 「名詞句の意味と連体修飾」『日本語学』 23-3, pp.18-27.
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法3』 くろしお書房.
- 野沢素子 (1982) 「「している」に関する中国語話者の問題点」『日本語と日本語教育』
10, pp.25-42, 慶応義塾大学国際センター.
- 橋本修 (1995) 「相対基準時節の諸タイプ」『国語学』 181, pp.104-91.
- 藤井正 (1976) 「「動詞+ている」の意味」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』
pp.97-116, むぎ書房.
- 藤城浩子 (1996) 「シテイタのもう一つの機能」『日本語教育』 88, pp.1-12.
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』 アルク.
- 三原健一 (1991) 「「視点の原理」と従属節時制」『日本語学』 3月号, pp.64-77.

- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』 松柏社.
- 益岡隆志 (1991) 「第6章 物語文のテンス」『モダリティの文法』 pp.156-172, くろしお出版.
- 益岡隆志 (1994) 「名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に—」田窪行則 (編) 『日本語の名詞修飾表現』 pp.5-27, くろしお出版.
- 丸尾誠 (2007) 「中国語の持続・進行表現に関する一考察—“V着”と“在V”の比較を通して—」『動詞アスペクトの対照研究—名古屋大学国際言語文化研究科 教育研究推進プロジェクト—』 pp.117-136.
- 三村由美 (1999a) 「第2言語としての日本語のアスペクトの習得—Vendlerのヒエラルキーによる分析—」『ことばと人間』 2, pp.29-40.
- 三村由美 (1999b) 「第2言語としての日本語のパーフェクトの習得」『言語文化と日本語教育』 17, pp.48-59.
- 三國純子・小森和子 (2012) 「表記・語彙」近藤安月子・小森和子 (編) 『研究社日本語教育事典』 pp.209-229, 研究社.
- 山口薫 (2014) 「外国人留学生の作文に現れるテンス・アスペクト形式の分析」『国際教育センター紀要』 14, pp.25-39.
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 pp.155-327, むぎ書房.
- 楊凱榮 (2001) 「中国語の“了”について」『「タ」の言語学』 pp.61-95, ひつじ書房.
- 吉田妙子 (2010) 「動詞の種類と学習者のテンス・アスペクト認識—作文の誤用から—」『政大日本研究』 7, pp.129-157.
- 鷺尾龍一・三原健一 (1997) 『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』 研究社出版.
- Andersen, R. W. (1984). The One to One Principle of Interlanguage Construction. *Language learning*, 34, 77-35.
- Andersen, R. W. (1989). La adquisición de la morfología verbal [The acquisition of verb

- morphology]. *Linguística*, 1, 90-142.
- Andersen, R. W. (1990). Unpublished lecture in the seminar on the Acquisition of Tense and Aspect, Applied Linguistics, University of California, Los Angeles.
- Andersen, R. W. (1991). Developmental sequence: The emergence of aspect marking in second language acquisition. IN T. Huebner & C. A. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in Second Language Acquisition and Linguistic Theories*, Amsterdam: John Benjamins, 305-324.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press. [山田小枝訳 (1988) 『アスペクト』 むぎ書房].
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?*, NY: The Dial Press.
- Shirai, Y. (1993). Inherent aspect and the acquisition of tense-aspect morphology in Japanese. In H. Nakajima & Y. Otsu (Eds.), *Argument structure: Its syntax and acquisition*, Tokyo Kaitakusha, 185-211.
- Shirai, Y. (1995). Tense-aspect marking by L2 learners of Japanese, In D. MacLaughlin & S. McEwen (Eds.), *BUCLD 19: Proceedings of the 19th annual Boston University Conference on Language Development*, Somerville, MA: Cascadilla Press, 575-586.
- Shirai, Y. & Kurono, A. (1998). The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language learning*, 48, 245-279.
- Shirai, Y. (2002a). The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. 『第二言語としての日本語の習得研究』 5, 42-61.
- Shirai, Y. (2002b). The prototype hypothesis of tense-aspect acquisition in second language, In R. Salaberry & Y. Shirai (Eds.), *The L2 acquisition of tense-aspect morphology*, Philadelphia: John Benjamins, 455-478.
- Shibata, M. (1999). The use of Japanese tense-aspect morphology in L2 discourse narratives. 『第二言語としての日本語の習得研究』 2, 68-102.
- Sugaya, N. & Shirai, Y. (2007). The Acquisition of progressive and resultative meanings of the

imperfective aspect marker by L2 learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple Factors. *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 1-39.

Vendler, Z. (1957). Verbs and times. *The Philosophical Review*, 66, 143-160.

Vendler, Z. (1967). *Linguistics in philosophy*, Cornell University Press.